

カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究

野元美佐

博士（文学）

総合研究大学院大学
文化科学研究科
比較文化学専攻

平成 13 年度
(2001)

目次

目次	i
図・表・資料・写真リスト	iv
本論文における留意事項	vi
序章	1
はじめに	1
第1節 論文の目的とその論点	3
1 論文の目的	3
2 金銭の人類学	3
3 アフリカ都市人類学	8
第2節 調査地と調査の概要	11
1 カメルーン共和国のなりたち	11
2 政治危機と経済危機	12
3 バミレケ	14
4 バミレケのダイナミズム	16
第3節 調査概要と論文構成	17
1 調査概要	17
2 論文構成	19
第1章 バミレケ首長制社会からの移住	20
第1節 バミレケ首長制社会	20
1 バミレケ・ランドの生活	20
2 首長	22
3 尊称とリネージ	26
4 貴族	31
第2節 移住要因とその結果	34
1 移住の始まり	34
2 農民から企業家へ	37
3 バミレケ・ランドにおける商人	39
第2章 ヤウンデへの移住と都市空間	43
第1節 都市のバミレケ化	43

1	ヤウンデの都市化	43
2	個人の移住軌跡	45
3	「土着民」の悲劇	54
第2節	「よそ者」としての都市生活	56
1	エスニック・グループと居住	56
2	カルチェとは何か	57
3	ヤウンデの首都性	59
4	バミレケであることの政治性	61
第3章	商売の経験	66
第1節	独立するプロセス	66
1	商売の多様性	66
2	子どもへの商人教育	68
3	公教育と子ども時代の商売経験	72
4	賃労働の経験	75
第2節	下積み生活としての小規模自営業	77
1	デブルイエ	77
2	時間がカネを生む	82
3	上昇志向	85
第3節	成功するということ	86
1	成功者の軌跡	87
2	成功者を取り巻く妬み	93
第4節	「バミレケ」をめぐる言説	96
1	バミレケが語るバミレケ性	97
2	他のエスニック・グループが語るバミレケ性	99
第4章	金銭の意味を変える貯蓄法	102
第1節	バミレケの「伝統」としてのトンチン	102
1	トンチンとは何か	102
2	バミレケのトンチンの起源	103
第2節	同郷者組織	105
1	集会所	108
2	ケナーダ	109
3	組織の活動	112
4	トンチンの重要性	115
第3節	村の組織と都市の組織	116
1	村の組織の概要	116
2	都市の組織の概要	120

3	メンバーシップの比較	121
4	組織の活動の比較	122
5	村のタブーとトンチン	124
6	トンチンにおける金銭の意味	126
第5章 都市居住者の生み出す「故郷」		130
第1節	死者祭宴にみられる消費	130
1	死者祭宴の重要性	130
2	死者祭宴のための出費	136
3	死者祭宴の華美さ	137
第2節	都市居住者が建てる村の家	139
1	村の家とその貸し借り	139
2	埋葬の場か余生の場か	142
3	村の家の持つ意味	145
第3節	新貴族とエリート	146
1	称号授与の決まり	146
2	カネで買う貴族の称号	147
3	エリートと貴族	149
第4節	ローカリティーの生産	151
1	リネージ長会議の変化	151
2	土地の商品化	152
3	「故郷」というローカリティー	155
4	「故郷」をめぐる都市居住者内の争い	157
終章		161
第1節	まとめ	161
第2節	考察	163
謝辞		166
引用文献		167
図・表・資料・写真		178

図・表・資料・写真リスト

図

図 1	カメルーン共和国	178
図 2	カメルーン沿岸部と周辺地域	179
図 3	バミレケ・ランドの首長制社会	180
図 I-1	バミレケ・ランドの県とバングラップの位置	181
図 I-2	バングラップ略図	182
図 I-3	尊称のしくみ	183
図 II-1	ヤウンデ中心部	184
図 IV-1	ケナーダ集会の座席配置	185
図 IV-2	ンターラ集会の座席配置	186
図 IV-3	ランベン家族の会集の座席配置	187
図 V-1	死者祭宴を主催した主な親族	188
図 V-2	死者祭宴の「家」と「部屋」の配置	189

表

表 I-1	リネージと尊称一覧	190
表 II-1	ヤウンデの人口増加	191
表 II-2a	ドゥアラ人口におけるエスニック・グループの割合（1976年）	192
表 II-2b	ヤウンデ人口におけるエスニック・グループの割合（1976年）	192
表 III-1	各種事業主におけるバミレケの割合	193
表 III-2	ケネディー通り商店主のエスニック・グループ別店舗数（2000年）	194
表 V-1	ランベン地区における所有者の居住地別の家屋軒数（1998年）	195
表 V-2	ランベン地区における外壁の種類と所有者別の家屋軒数（1998年）	195
表 V-3	貸し家の所有者と借り主の親族関係	195
表 V-4	ンデ県の13人の首長のプロフィール	196

資料

資料 IV-1	トンチンの領収書	197
資料 IV-2	助け合い（保険）カードのコピー（両面）	198
資料 V-1	死者祭宴の招待状（表紙）	199

写真

写真 I-1	村の家屋と畑	200
--------	--------------	-----

写真 I-2	宮廷前広場	200
写真 I-3	宮廷の柵	201
写真 I-4	首長の描いた壁画	201
写真 I-5	首長の描いた壁画	202
写真 I-6	首長への挨拶	202
写真 I-7	パラソルを持つ臣下と首長	203
写真 II-1	ヤウンデの風景	203
写真 III-1	タバコ行商をする子ども	204
写真 III-2	古本の露店	204
写真 IV-1	バングラupp集会所	205
写真 IV-2	ケナーダ集会で演説するマンジョのメンバー	205
写真 IV-3	踊るケナーダのメンバー	206
写真 IV-4	輪になって踊るケナーダのメンバー	206
写真 IV-5	紙幣を貼りつける	207
写真 V-1	踊るンターラのメンバー	207
写真 V-2	塀が張り巡らされた家	208
写真 V-3	バミレケ・ランドの豪邸	208
写真 V-4	バミレケ・ランドの豪邸	209
写真 V-5	バミレケ・ランドの豪邸	209

本論文における留意事項

1 メジンバ語の表記について

本論文のメジンバ語表記は、カメルーン西部州ンデ県バンガンテに本部を置く、メジンバ著作製作研究委員会（CEPOM: Comité d'études et de la production des oeuvres medumba）が定めている正字法に従う。この正字法は国際音声記号に基づいて制作されている。本論文では、初出時のみカタカナ表記後の括弧内に、メジンバ語表記を入れる。

2 メジンバ語以外の言語表記について

括弧内に二つの語が並んでいる場合には、原則的に最初はフランス語、後ろは英語（フランス語 / 英語）である。

例: カメルーン (Cameroun / Cameroon)

3 登場する人の名前について

本論文では、登場する人の実名は出さずにイニシャルで表記し、敬称を略している

序章

はじめに

野生動物のいるサバンナ、鬱蒼としたジャングル、その自然のなかでエキゾチックな暮らしを営むひとびと、このようなアフリカの「未開」イメージは根強い。そのようなイメージのなかでなかなか光が当たらないが、しかし確実に膨張を続け、存在感を増しているのがアフリカ都市である。サハラ以南のアフリカ、いわゆるブラックアフリカにおける都市の人口増加は、近年めざましい。アフリカ都市人口の比率は、年々上昇している。本論で扱うカメルーン（Cameroun / Cameroon）にしても、最大の都市ドゥアラ（Douala）の人口は約140万人で、首都ヤウンデ（Yaoundé）の人口は約129万人である（1998年推定）。カメルーンで人口10万人以上の都市はドゥアラ、ヤウンデを含め13にものぼり、その総人口は約460万人になる。人口10万人未満5万人以上の都市は11あり、その人口は約78万人、人口1万人以上の23都市を合わせるとその総人口は600万人を越える¹。この数字は、カメルーン全人口の約半分にあたるが、1976年には都市人口は28.5%、1987年には37.8%であったのだから、急激な都市の人口増加といえる。このままいけば、都市人口が農村人口を上回るのは時間の問題であろう。世界の他地域に比べ、アフリカにおける都市人口の割合は高いとは言えないが、その増加率は高いのである（cf. Obudho 2001）。

一般的に、急速な人口増加はさまざまな都市問題を引き起こす。人口に見合った住宅を供給出来ない都市には、上下水道や電気設備が不十分なスクウォッター地区があちこちに形成される。また十分な仕事も供給できないため、失業問題とそれに伴う犯罪の増加が起こる。アフリカ大都市における犯罪の増加が、人口増加や経済の停滞に伴い進行しているのは事実である。ナイジェリアのラゴス、コンゴ民主共和国（旧ザイール）のキンシャサ、南アフリカのジョハネスバーグなど、「世界で最も危険な都市」と冠されるアフリカ都市の名はいくつもあがる。しかし、犯罪に手を染めるしかないような逼迫した生活を強いられる貧困層がある一方で、都市には、豪邸に住み、スーツを着て高級車で出勤する富裕層もある。植民地時代に形成されたアフリカ都市は、「西洋文明」のショーウィンドウとなってきた。都市の中心部には、高級衣料店やレストランが立ち並び、映画館やディス

¹ これらのカメルーン人口統計はすべて1998年の推定人口をもとにしている（Direction de la statistique et de la comptabilité nationale 1999）。

コなど、村には無い商業・娯楽施設が存在する。それらの施設、あるいはメディアから、アフリカ都市には世界の情報が溢れている。グローバル化の波は、アフリカ都市にも押し寄せている。

食うや食わずのひとびとと、さまざまな特権を享受できるひとびと。それはアフリカ都市の混沌を象徴しているかのようである。しかし、そのみを強調することは、アフリカを野生動物によって代表させるのと同じことである。ある在日アフリカ人は、日本の都市とアフリカの都市との違いについてこう言う。「バスや電車のなかで乗り合わせた客と読んでいる新聞を交換するのがアフリカ、しないのが日本だ」。新聞を交換する行為そのものは簡単だが、その背景には見知らぬ他者との相互行為を積極的に誘うような雰囲気がある。そのような雰囲気を形成し、維持しているのは、その社会に暮らすひとびと一人一人の意志である。乗合バスやタクシーのなかで、見知らぬ客同士で話がはずむ光景は日常的に見ることができる。日本をはじめとする多くの先進国の大都市では、個人はアトム化し、匿名性の高い社会が形成されている。その一方で、アフリカ都市の多くが希薄な人間関係に浸食されていないのは、ひとびとが村社会を持ち込んだ結果、つまり都市が「田舎化」したからではない。彼らが見知らぬ人とも積極的に関わろうとするのは、都市に暮らしているからこそ必要とされる知恵でもある。自分の生活の安定や向上に役立つ出会いは、都市のどこに転がっているかわからない。人間関係のネットワークが広がれば、それだけ多くの情報やチャンスが得られる。

しかし、人と関わろうという彼らの意志は、このような「打算」、あるいは「生存のための戦略」だけに支えられているわけではない。それだけでは説明のつかない無数の相互行為がある。道端でバナナを売っている馴染みのおばさんに、いつも一言声をかける。下校中の小学生に、「しっかり勉強しろよ」とひやかす。タクシーで乗り合わせた隣のおじさんが語る不幸な身上話を聞き、一緒に嘆いてやる。そこには、同じ都市に暮らす者どうしの連帯感がある。現地滞在中には、次のような光景を目にした。ヤウンデの急な坂道で、手動車椅子に乗った青年が通りすがりのタクシーの窓につかまり、そのまま車椅子ごと坂を引き上げてもらった。彼は一言礼を言って去ったが、運転手も青年も当然のような態度であった。身体障害者のための設備など皆無に等しいヤウンデで、当然の助け合いが生まれ、様々な場面で彼の不便さを補うのである。

本論文はこのように、人間関係が濃密なヤウンデという都市を中心に現地調査を行い集めた資料をもとにしている。次から、本論文の目的と論点について述べる。

第1節 論文の目的とその論点

1 論文の目的

本論文の目的は、アフリカ都市居住者のあいだでの金銭² (l'argent / money) の動きに着目し、その動きがどのような価値や意味を創出しているのかを明らかにすることである。都市では、農村部よりも多くの金銭が循環し、また都市生活は金銭をより多く必要とする。「生活するのは困難だ。カネ（を儲けること）は困難だ (La vie est dure, l'argent est dur !)」と、ひとびとはよく口にする。金銭をいかに稼ぎ、貯蓄、消費、投資するかは、都市居住者の大きな関心事である。つまり、金銭をめぐる活動は、都市に生きるひとびとの経験の大きな部分を占めている。都市とはそもそも所与のものではなく、個々人の日常的な経験によって成り立っている。よって、アフリカ都市居住者の金銭をめぐる動きを追うことは、彼らの都市経験を追うことにもなる。

本論文の研究の中心となるひとびとは、カメルーンにおいて商売に長けたエスニック・グループとして知られる「バミレケ (Bamileké)」である。彼らはカメルーンにおいてしばしば、「商人 (commerçants)」あるいは「商売の民 (gens de commerce)」と呼ばれる。本論文の研究は、商売を職業としないバミレケも含んでいるが、「商売の民」という言葉を題名に入れたのは、彼らが実際に商人であるかないかにかかわらず、常にそのイメージを負わされているからである。

本論文では、バミレケのなかでも主に、首都ヤウンデに暮らす都市移住民を扱う。主な調査地は首都ヤウンデであるが、移住元である彼らの故郷「バミレケ・ランド (Pays Bamileké)」の農村地域も含む。なぜなら故郷での金銭の動きは、都市での動きと深く関わっているからである。バミレケ都市居住者は、都市という地理的空間を越え、故郷である農村地域を巻き込んで金銭を動かす。彼らの金銭をめぐる活動の重要な部分を見逃さないためにも、故郷での金銭の動きにも着目することが肝要となる。

2 金銭の人類学

² 本論文では文脈によって、会話文などに出てくる場合は「カネ」を、制度的側面を強調する時には「貨幣 (monnaie)」を使用する。

この項では、金銭に関する人類学的研究の論点を整理する。

経済学における一般的な貨幣の主要機能は、(1)一般的交換手段としての機能、(2)価値尺度としての機能、(3)価値貯蔵手段としての機能の三つである（高橋・増田 1984: 604-605）。しかしこのような貨幣の機能的考察は、人類学においては論点とはならなかった。人類学においては、物々交換や贈与交換が支配的な「非貨幣経済」社会における貨幣のインパクトが注目された。

（１） 金銭のコンバージョン

アフリカにおける西洋貨幣による影響を研究したボハナンは、ナイジェリアのティブ（Tiv）社会には三つの交換領域（カテゴリー）があり、その領域の交換は２種類あるとし、一つをコンバージョン（conversions）、もう一つをコンヴェイエンス（conveyances）と呼んだ。コンヴェイエンスは一つの領域内での交換であり、コンバージョンは一つの領域と別の領域間の交換である（Bohannon 1955）。ティブ社会の例では、ヤムイモで日常品を手に入れるのはコンヴェイエンスであるが、ヤムイモで威信財である真鍮の棒を手に入れる、あるいは真鍮の棒で（婚資として）妻を手に入れるのはコンバージョンである。ヤムイモ、真鍮の棒、妻（への権利）はそれぞれ別のカテゴリーに属しているからである。「大まかに言って、ティブにとり、コンヴェイエンスは道徳的に中立であり、コンバージョンは、彼らの合理化において強い道徳的特質を持っている」（Bohannon 1955: 65）³。この２種類の交換は、西洋貨幣の導入後は金銭を介して行われているが、ボハナンはあらゆるモノを一つの基準に押し込むものとして金銭をとらえている（Bohannon 1955, 1959）。それに対しパリーとブロックは、金銭それ自体が、すべてのモノを共通の基準に押しやり、それに抵抗することを押しとどめたりするわけではないと反論する（Parry and Bloch 1989: 13）。ティブの例でも、ボハナン自身が書いているように、ひとびとは貨幣経済に直面しながらも、交換領域にもとづく基準を放棄せず、新しい現実に対処しようとしている（Bohannon 1955: 69-70）。

しかし、従来の議論においては、金銭は「伝統的」社会を引き裂くものとして考えら

³ そのため、下位交換領域のモノで上位領域のモノを得ることは道徳的に承認される（例：ヤムイモで真鍮の棒を得る）が、上位領域のモノで下位領域のモノを得ること（例：妻への権利で真鍮の棒を得る）は、軽蔑の対象となる。

れがちであった。パリーとブロックは、ジンメルとマルクスの議論を引き合いにだし、
「両者（ジンメルとマルクス）にとって、金銭は、個人主義の発達と共同体の破壊と結びつく、あるいは促進するものである」（Parry and Bloch 1989: 4）と述べている⁴。そして彼らは、このような議論が「近代的」／「伝統的」、「資本主義的」／「前資本主義的」等の二項対立的な社会の区別を前提としていること、また金銭が「近代」のインデックスと考えられていることを疑問視し、次のように述べる。「金銭を資本主義的諸関係や市場価値に結び合わせることが全くの間違いというだけでなく、金銭あるいは資本主義市場が＜モラルの混乱の世を先導する＞程度は、文化的にすこぶる可変的であり、（略）それらが直面するシステムの特性や、それらを＜服従させ＞、＜飼い慣らす＞ために発展可能なメカニズムに左右される」（Parry and Bloch 1989: 18）。パリーとブロックが編集した『金銭と交換の道徳性（morality）』における諸論文は、それらの豊富な事例であるが、ここではその一つ、カーステンの論文「クッキング・マネー（Cooking money）」をとりあげる（Carsten 1989）。マレーシア、ランカウイ（Langkawi）における漁村では、男性は漁をし、華僑などの「よそ者」相手に販売して稼いだ金銭を、市場取引に汚染されていない妻に渡し、妻はそれを、台所費用（*belanja dapur*）と呼ばれる家の維持費用に消費し、頼母子講（*kut*）に貯蓄する（これらの諸行為は、カーステンによれば「象徴的に料理する」ことである）。これによって、金銭を、共同体の維持という道徳的に承認された資源へと変える。これは、金銭のコンバート（あるいはトランスフォーム）である。つまり、共同体を破壊する危険を秘めた非社会的、非親族的な金銭の力を、女性たちが浄化し、社会化し、価値と倫理を付着させるのである。このコンバージョン（あるいはトランスフォーメーション）は、金銭に仲介されているだけでなく、金銭そのものがコンバージョンの対象となっている。ではなぜ金銭はコンバージョンの対象となりうるのだろうか。

ジンメルは、『貨幣の哲学』のなかで、「法と知性と貨幣の三つはすべて、個人的な特性にたいする無関心によって特色づけられる。（略）それらの本質よりみてどうしても内容にたいし強力に形式と方向とを指令することによって、われわれがここでとり扱っている矛盾を不可避免的に生の全体へと持ちこむ」（ジンメル 1999: 494）と述べている。そして、「貨幣はまさに特性の欠如において成り立つ特性を持つような支配力に属するが、しかしこの特性はそれにもかかわらず、生活をきわめてさまざまに色づけることができる。

⁴ 「ジンメルにとっては、金銭は、古い連帯を蝕む一方、より広く拡散するような社会的統合を促進するものでもあった」（Parry and Bloch 1989: 5）。

なぜなら貨幣の存在様式であるたんなる形式的なもの、機能的なもの、量的なものが、質的に規定された生活の内容と方向とに出会い、これらを規定して質的に新しい形式物をさらに生産させるからである」（ジンメル 1999: 530）。つまり、貨幣は「善も悪も包摂する空虚な形式であるからこそ、社会関係の秩序を構成する原動力になる」（今村 1994: 58）と言える。このように、貨幣は形式であるために、生活の内容を規定し、質的に新しい形式物を生産するなど社会関係の秩序を構成する原動力となる。そしてそこには、「貨幣→生活」という一方向だけでなく、「生活→貨幣」という逆方向の働きかけも存在している。金銭／貨幣が生活に支配力を持つことができるのも、生活からの働きかけが可能になるのも、やはり貨幣が形式だからである。金銭／貨幣のコンバージョンは、その生活からの働きかけの一形態である。

金銭／貨幣は、生活内容、とくにひとびとが創意工夫でつくる象徴的な意味をすっかり書き換えることはできず、そこに「生活」の側からの働きかけの余地が生まれる。ひとびとは、金銭／貨幣に内容を書き込み、意味を与える。つまり、金銭／貨幣のコンバージョンとは、金銭を用いる側の人間や社会が、自分たちのやり方で、金銭／貨幣に内容を書き込む（書き変える）ことである。

（２） 長期サイクルと短期サイクル

パリーとブロックは、文化ごとに金銭の意味が異なるだけでなく、同一文化内においても金銭の意味が異なり得ることを強調している（Parry and Bloch 1989: 22-23）。それは取引秩序（transactional orders）にあらわれる長期サイクル（long-term cycles）と短期サイクル（short-term cycles）である⁵。長期サイクルは、社会的秩序の再生産を志向する長期的な取引領域で、短期サイクルは、それ以外の個人的な欲求を満たすための一般的な取引領域である。このサイクルの違いは、非貨幣化社会と貨幣化社会など、文化「間」の違いと考えられてきたが、これは同じ文化「内」の違いだと彼らは述べる（Parry and Bloch 1989: 29）。

ランカウイの事例では、漁師は「二つの異なる取引秩序に巻き込まれている。外国人（華僑など）と無数の短期取引に従事し、それほど活発でなくとも、個人の競争が認めら

⁵ パリーとブロックは、「長期（短期）秩序」などの呼び方も使用しているが、指し示している内容は、ほぼ同じであると思われる。

れている漁と商業の世界、そして、家計の再生産という長期的目的を志向する世界」

(Parry and Bloch 1989: 23) である。両者は関連しており、その接合手法が、ランカウイでは金銭を料理することである。そこでは、「(略) 短期交換サイクルから引き出された道徳的にいかがわしい金銭が、単純な象徴操作によって、不変の共同体の理想的秩序を維持するような、明らかに有利な資源に転換される」(Parry and Bloch 1989: 25)。

だからといって、短期サイクルは社会の外部に追いやられているのではない。長期サイクルに従う範囲で、それぞれの社会のなかにその存在を認められている。なぜなら、「(略) 長期秩序の維持は実用的に、また概念的にも、個人の短期的取得努力に依存しているからである。実際に、短期的取得努力が包括的秩序の再生産に必要な物質の多くを供給しているだけでなく、認めるべきは、この秩序が個人の生物学的経済的諸活動をとおしてのみ自らを永続させうるからである」(Parry and Bloch 1989: 26)。

しかし、このような長期サイクルと短期サイクルの静態的ともいえる図式は、どのような場合に可能になるのであろうか。この点に関して、パリーとブロックは明確には答えていない。例えば、本論で扱うアフリカ都市居住者にとって、彼らの金銭の長期サイクルと短期サイクルは、同様の図式を描いているのだろうか。もし同じでないなら、彼らの図式とはどのようなものであろうか。この問題は本論文のなかで、都市に暮らすバミレケの金銭の動きを詳しく考察した後、明らかにできるだろう。

(3) 「金銭を回す」

以上の議論をふまえて、バミレケ都市居住者の金銭の動きを具体的に考察していくが、ここでは簡単な見取り図をつくっておきたい。

カメルーンフランス語圏地域では、日常的に「トゥルネ (tourner: 回す、回る)」というフランス語が頻繁に使用される。この「トゥルネ」という言葉には「操業する」という意味もあり、例えば「一緒に事業をしよう」という意味で、「回そう (Tournons /Let's turn)」という言い方をする⁶。彼らが回すものには事業だけではなく、金銭も含まれる。

「金銭を回す (tourner de l'argent)」とは文字通り、金銭を一カ所に止めず、ある場所からある場所へと動かすことである。例えば酒類の小さな売店を営むあるバミレケ女性は

⁶ ただし、フランスでは同じ意味でこのような言い方はしない。

次のように嘆いた。「全然儲からないよ。私はただ金銭を回しているだけ (Je tourne de l'argent, c'est tout!)」。彼女は、金銭を払って酒を仕入れ、客に売って金銭を受け取り、またその金銭を仕入れに使う。これは、彼女の商売であり、投資にも見える。しかし金銭を回すことは、「消費」や「貯蓄」、「投資」のどれとも完全にイコールではなく、またそのどれにも当てはまる行為でもある。金銭を回した結果が、消費や貯蓄、投資になるのである。いずれにせよ、彼らは無目的に金銭を回しているのではない。金銭を回す彼らの行為は、常に経済的、時には社会的利益を見据えている。彼らはその利益を得るために、いかに金銭を回すべきかを常に考える。彼らはただ貯め込んだり、使い込んだりはしないのである。

一方、金銭を使い込むこと、無駄遣いすること、つまり「非生産的」出費は、「食べる (manger)」と言われる。言ってみれば、金銭を食べる (manger de l'argent) 行為は、金銭を回す行為とは対極にある。「バミレケは、カネ持ちになっても食費を惜しむ」と他のエスニック・グループが非難するが、ここで「食べる」ことが問題にされているのは、かならずしも偶然ではないのである⁷。

都市に暮らすバミレケは金銭を、時間や空間を越えて回す。本論文で論じたいのは、その金銭の軌道と、そこにうまれる意味である。

以上この項では、金銭に関する論点をまとめ、本論文の見取り図を紹介したが、次の項では、金銭が回される舞台としての、アフリカ都市に関する人類学の論点を簡単に整理しておく。

3 アフリカ都市人類学

これまでの研究では、アフリカの諸都市は、古くに建設されてゆるやかに成長してきたもの (Aタイプ) と、急速な勢いで都市化したもの (Bタイプ) に分類されてきた

(Southall 1961)。つまりは、Aタイプは植民地時代以前に一定の社会的機能を果たしていた都市であり、Bタイプは植民地体制下に建設された都市である (日野 1983)。しかし、サウゾールや日野が述べているように、実際、アフリカにおける大部分の都市は、両

⁷ 政治を社会現象ととらえるバヤールは、ポスト・コロニアル・アフリカの政治が「腹の政治 (la politique du ventre / the politics of belly)」であるとし、そこでは「食べること」が重要な争点になっていることを論じている (Bayart 1993)。

タイプの間、あるいは混合型と言える。この点に関して地理学者オコナーは、アフリカの諸都市を土着型都市、イスラム都市、植民地都市、「ヨーロッパ」都市、複合都市、ハイブリッド都市の6つに類型化した（O'Connor 1983: 28-41）。オコナーはまた、都市化により、それぞれの都市はより混合型のハイブリッド都市に近づいていると述べている。一方、松田は、すべての都市がハイブリッド型になっていくというこの指摘が、アフリカの都市社会の共通性を示唆していると述べ、その要点は「出稼ぎ民都市化の進行」だと指摘している（松田 1996: 59）。これらの指摘は、類型化が無意味になっていくほどの急速な都市化がアフリカの各地で起こっていることに目を向けさせる。

植民地化が進行する1930年代のアフリカを対象とした人類学の主要なテーマの一つは、マリノフスキーらが提唱した「文化接触」であった（Malinowski 1938; マリノフスキー 1963）。マリノフスキーは、当時のアフリカの文化を、「古いアフリカ」、「移入されたヨーロッパ」、「新しい合成文化」の三つの領域にわけた（Malinowski 1938）。ヨーロッパ人によって建設されたBタイプの都市は、まさしく「新しい合成文化」の舞台であった。マリノフスキーは、「植民地の現実をアフリカの要素とヨーロッパの要素に分類することを戒め、むしろ第三の新たな現実」（清水 1999: 583）を考察しようとしていた⁸が、以降のアフリカ都市人類学においては、一つの文化（「部族的」文化）からもう一つの文化（西洋的文化）への変容過程に重点がおかれた。その代表的なものは、「部族社会」を離れた「部族民」が「都市」で「都市民」になっていく「脱部族化

（detribalization）」モデルであった。しかし、変容を不可逆的に理解することに対して、1950年代から批判が目立つようになる。その批判の先鋒にたったのは、マンチェスター学派の中心的人物として知られたグラックマンであった。彼は、従来人類学者が考えていたように「脱部族化」の過程はゆっくりとした長期的な過程ではなく、町へ行くために部族の境界を越えると「脱部族化」し、また部族の政治領域に戻れば再び部族化（脱都市化）するという空間的共時的見方を提示した。また彼は、都市のアフリカ人を分析する際にも、常に出発点を部族に求める従来の研究手法を批判し、「アフリカ都市民は都市民であり、鉦夫は鉦夫である」という主張をした。この主張は、以後の都市人類学の研究動向を決定づけるものであった（Gluckman 1961）。

同じくマンチェスター学派のエプスタインとミッチェルも、従来の社会変動研究を批判

⁸ マリノフスキーの文化接触研究の構想が、現代の人類学にとって、いまだ示唆に富むことは清水論文参照のこと（清水 1999）。

し、都市のアフリカ人においては、都市にいながらにして、状況に合わせて都市的行為と部族的行為を選択している「状況的選択 (situational selection)」を見て取った (Epstein 1958, 1961; Mitchell 1966; ミッチェル 1983)。具体的には、都市のアフリカ人は職場では都市的行動パターンをとり、家庭や余暇などでは部族的行動パターンをとる傾向にあるとした。

これらの研究上の流れに関して、松田は、脱部族化を含めた単線モデルを「脱モデル」と呼び、また「状況的選択モデル」を「再モデル」と呼び、どちらのモデルにしろその都市の一部族的、近代的-伝統的というそれぞれの内容を固定化した二分法には問題があると指摘している (松田 1985)。そのような二分法の背景には、当時の研究者の限界があることは確かであるが、ここで指摘したいのは、都市と村のあり方それ自体が、当時と現在とでは変わってきているという事実である。この点に関してウェーブナーは「ポストコロニアル国家において、村と都市の二分法が分析上役に立つかどうか、あるいは経験的に有効であるかどうかはますます疑わしくなっている」と述べ、もはやその二分法モデルが適応できる村 (あるいは村びと) が存在しない状況を指摘している (Werbner 1990: 163-164)。

植民地化から独立を経て数十年の間に、都市部のみならず、農村地域も同様に変化にさらされてきたのは事実である。村にも都市的要素が導入され、村びとは都市への移住を目指し、また村自体も都市的なものに価値をおくようになっていく。これは、村の「都市化」と呼べる。一方、都市の側でもまた、村的要素が席卷しているかのような現象が起こっている。ひとびとは都市の空き地を畑に変えて農業を始める (cf. Freeman 1991)。病気になれば村で採取された薬草など「伝統薬」を利用する。さらに、村を同じくするひとびとは、同郷者組織をつくり村のヒエラルキーを再構成する⁹。

このように都市と村は密接に結びついており、現在のアフリカでは両者を断絶したものとして考察することはできない。都市と村を含めた地域的文脈のなかで都市を考察することの重要性はますます増している (富川 1980; 日野 1983; 和崎 1987a)。それは同時に、表面的には都市の「村化」と村の「都市化」に見える現象の内容と意味を考察することを要求している。その現象は、「都市的 (近代的) 要素」と「村的 (伝統的) 要素」の混在ではなく、先のマリノフスキーの言葉を借りれば、「新しい合成文化」だからである。

⁹ 松田は、「アーバナイゼーション (町化) とルーラライゼーション (村化) の同時進行」がアフリカ都市の特質を表現していると述べている (松田 1996: 174)。

本論文では、商才を持つとされるバミレケの「金銭の回し方」という視点から、都市だけでなく村を視野に入れ、両者の関係と、その関係から生まれる創造的な営みを解明することになる。

次節からは具体的に、調査地と調査の概要に関して述べたい。

第2節 調査地と調査の概要

1 カメルーン共和国のなりたち

カメルーン共和国（République du Cameroun / Republic of Cameroon）は、アフリカ中部に位置し、ギニア湾に面している（図1参照）。南部の熱帯雨林気候から、北上するとサバンナ、乾燥気候に変化していくその気候や植生の多様性から、「ミニ・アフリカ」と呼ばれる。

カメルーンの面積は約47万5千平方キロメートルと日本よりやや大きいくらいで、人口は約1,430万人（1997年）、一人当たりのGNPは650ドル（1996年）である。カメルーンにはおよそ200のエスニック・グループがいると言われる。主なエスニック・グループとして、北部地域にはニジェール・コルドファン語族、ニジェール・コンゴ語派、アダマワ・イースタングループに分類されるバヤ（Gbaya）、ブーム（Mbum）、同じ語派の西アトランティックグループのフルベ（Fulbe / Fulani）などが暮らす。中南部には同じ語派のベヌエ・コンゴグループのなかでコンゴ・サブグループに分類されるドゥアラ（Duala）、エウォンド（Ewondo）などがあり、また西部のカメルーン高地には、同じくベヌエ・コンゴグループの類バントゥー（セミ・バントゥー）・サブグループのバミレケなどが暮らす。カメルーン北部地域はイスラム帝国の一部に組み込まれてきた歴史を持つためイスラム教徒が多く、南部は海岸部から開始された植民地化により、キリスト教徒が多い。現在、カメルーンは10の州に分かれている（図1参照）。

カメルーンという国名は、15世紀にこの地に到来していたポルトガル人が、ギニア湾周辺でとれるエビにちなみ、エビの川（rio dos Camarões）と名付けたことに由来する。この頃から、沿岸部の都市ドゥアラを中心にヨーロッパ人が進出し、奴隷貿易や商業活動などが始まった。1884年、ドイツがカメルーンを保護領としたが、内陸部まで支配が及んだのは1911年頃になる。ドイツは南部地域を中心に、ゴム、アブラヤシ、カカオ、バナナな

どのプランテーションを開発し、道路や鉄道など交通網を整備した。しかし第一次大戦でドイツ軍は敗退し、1922年、ベルサイユ条約の取り決めに従い、カメルーン西部「西カメルーン」はイギリス委任統治領、残る地域「東カメルーン」はフランス委任統治領となった。1946年、カメルーンは信託統治領となり、フランス領では、フランス本国の国民議会へ、代表と政府への閣僚を送ることが可能になった。その後、1957年には自治を承認され、1960年に独立した。西カメルーンは、北部地域と南部地域に分けて住民投票を実施し、北部は隣国ナイジェリアと合併、南部（現北西部州と南西部州）は1961年10月に独立し、カメルーン連邦共和国の一部となった。これによりカメルーンは、英語とフランス語を公用語とする国家となった。

初代大統領アヒジョ（Ahmadou Ahidjo）はカメルーン北部出身であり、1966年に他の諸政党を一つにまとめ「カメルーン民族同盟（UNC: Union Nationale Camerounaise）」を結成し、一党支配体制を確立する。1972年には、英語圏地域の西カメルーンの反発を受けながらも連邦制を廃止し、国名は「カメルーン連合共和国」となった。一党支配体制が強権政治となっていたなか、アヒジョは1980年に5選されたが、1982年に健康状態を理由に辞任を表明、南部出身のビヤ（Paul Biya）首相を二代目の大統領に指名した。

2 政治危機と経済危機

アヒジョからビヤへの政権交代は、当時のアフリカでは珍しく、武力を用いないものであった。しかし、アヒジョの政策を引き継ぐと思われたビヤは、アヒジョの権力中枢にいた北部出身者を排除し始めた。そして、1983年のクーデター未遂事件に参画したとして、1984年アヒジョを裁判にかけ有罪とし、事実上国外追放とした。ビヤは1984年の大統領選で再選され、国名を「カメルーン共和国」に変更、また、1985年「カメルーン民族同盟」を「カメルーン人民民主連合（RDPC: Rassemblement Démocratique des Peuples Camerounais）」に改称した。

独立後の1960年代、カメルーンの経済は、カカオ、コーヒー、バナナなど農産物の輸出で順調に成長を遂げていた。しかし、石油の採掘が1970年代後半に始まると、1980年までに石油が国家の主要な商品となった。ところが、1970年代後半から始まった農産物の世界市場価格の低下、1986年の石油価格の低下により、カメルーン経済は低迷し始める。それ以降、カメルーンは経済危機にあると言われている。1989-90年には世界銀行、アフリカ

開発銀行、フランスなどからの借款を得て、カメルーンは経済再構築5年計画に着手する。

この構造調整政策では、国家の組織改革も同時に押し進められた。同時に政治改革への圧力も高まり、カメルーンは1990年に複数政党制に移行した。1992年に行われた大統領選挙では、ビヤと英語圏地域のバメンダに本拠地をおく野党の社会民主戦線（SDF: Social Democratic Front）のフル・ンディ（John Fru Ndi）が有力候補となったが、結果はビヤの勝利であった。フル・ンディは選挙の不正を訴え、特に北西部州やドゥアラにおいては抗議行動が盛んに行われたが、ビヤはそれを弾圧した。1997年10月に行われた大統領選挙では、社会民主戦線をはじめ、主要な野党はボイコットし、ビヤが5選を果たした。1982年以来のビヤの長期政権、「民主化」移行後も続く事実上の一党支配は、官僚や政治家の腐敗を深化させている。

カメルーンをはじめ、中央アフリカ、コンゴ、ガボン、赤道ギニア、チャドの旧仏領中央アフリカ諸国では、フランス・フランと交換レートが固定化された「セーファー・フラン」¹⁰（Fcf: Franc de la Coopération Financière en Afrique Centrale）と呼ばれる通貨が使用されている¹¹。フランス・フランと固定されているため、物価のインフレーションはそれほど激しくない。しかし、1994年の1月には、それまでの1フランス・フラン対50セーファー・フランであったものが100セーファー・フランに引き下げられた¹²。この通貨引き下げにより海外輸出が有利になったはずだが、国外への負債も増大し、想定されていたほど経済は回復していない。カメルーン経済は、依然混沌とした状態にあると言える。

カメルーンの物価の目安として、以下の物品とその値段を上げておく（1998年現在、単位セーファー・フラン¹³）。

- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| ・ 乗合タクシー: 140 | ・ 角砂糖 1 ケース: 600～650 |
| ・ ヤウンデ＝ドゥアラ間交通費: 2,000～2,500 | ・ 料理油 1 リットル: 800～900 |
| ・ ヤウンデ＝バフサム間交通費: 2,500～3,000 | ・ 米 1 キロ: 300-350 |

¹⁰ 以下、単にフランと記す場合は、セーファー・フランを指す。

¹¹ 旧仏領西アフリカ諸国（ベニン、ブルキナファソ、コートジボワール、マリ、ニジェール、セネガル、トーゴ）でもセーファー・フランを使用している。ただし、正式名称は、Franc de la Communauté financière africaineである。

¹² セーファー・フラン引き下げ前の1993年の物価指数を100とすると、98年の物価指数は162.4となっている。1年の物価上昇率はカメルーン全体では3%、ヤウンデやドゥアラでは2%となっている（Annuaire statistique du Cameroun 1998: 133）。

¹³ 1998年当時、10セーファー・フランは1.5円から2円程度。

- ・ガソリン1リットル: 295 (高級ガソリン: 376)
- ・タバコ1本: 15
- ・マッチ1箱: 35
- ・ノート (192頁): 376
- ・洗濯炊事用石鹼1個 (400g): 200~300
- ・電気 (1キロワット): 63
- ・水道 (立方メートル): 367
- ・フランスパン1本: 100~150
- ・ビール1本: 350前後
- ・薫製魚 (1キロ): 1,200~1,500
- ・骨付き牛肉 (1キロ): 1,200~1,300
- ・塩 (1キロ): 163
- ・新聞: 250~300
- ・学費 (大学1年間): 50,000

公務員の初任給 (1997年改正)

- ・初等教育修了 (小卒): 34,000
- ・中等教育前期修了 (中卒): 61,200
- ・中等教育後期修了: 91,800
- ・大学入学資格取得者: 98,600
- ・2年間の専門課程修了: 111,375
- ・大学卒: 118,250

3 バミレケ¹⁴

多くのエスニック・グループがそうであるように、バミレケというエスニック・グループの枠組みは曖昧である。もともと、「バミレケ」とは自称ではなく、ヨーロッパ人によって名付けられたものである。その由来に関しては諸説あるが、バリ (Bali) の人が「ンバ レケオ (Mba Lekeo)」と言ったのを聞いたヨーロッパ人が、「バミレケ」 (Bamiléké) と誤って表記したと言われる。この語は、バリ語で「下 (あるいは谷) のひとびと」という意味であるが、バミレケのチャン (Dschang) という地域のひとびとを指す言葉であり、現在のバミレケ・ランドのひとびと全体を指すものではなかった。1934年に、当時のフランス人行政官は「バミレケ」について次のように書いている。「バミレケという語は、土着民、あるいは土着人種のいかなる呼称とも一致しない。それは、＜グラスフィールドズ (Grassfields)＞という語がそうであったのと全く同じように、当事者たちのほとんどに未知である」 (Delaroziere 1949: 8)¹⁵。つまり、彼らは外から「バミレケ」として発見されたのである。

バミレケが暮らすバミレケ・ランドはカメルーン西部州の西側に位置する。そこは100

¹⁴ この項に出てくるバミレケ・ランド外の地名については、図2を参照のこと。

¹⁵ Raynaud (1934)からの引用。

を越える首長制社会（Chefferie/ Chieftdom）にわかれている（図3参照）。それぞれの首長制社会はヒエラルキー化した一つの「国」を形成しており、首長制社会ごとのひとびとのアイデンティティーは依然強い。植民地化される以前は、バミレケのひとびとのあいだには、それぞれの国に対する帰属意識はあっても、「バミレケ」というアイデンティティーは明確ではなかったと考えられる。同じく首長制社会を形成している現北西部州（英語圏地域）の住民とバミレケとの区別は、ドイツ植民地下ではそれほどはっきりしたものではなく、1916年にフランス領とイギリス領に分割されていなければ、おそらく北西部州の住人も「バミレケ」になっていたであろうと言われる（Warnier 1993: 66-67）。また、東隣のバムン（Bamoun）王国は、18世紀頃からドイツに植民地化された頃まで、バミレケ・ランドを王国の領土にしようと何度も征服を試みている。それが成功していれば、同地域はバムンに吸収されていた可能性もある。バミレケとは、まとまりの無かった諸集団を一つにまとめ、歴史的経過によっては一つになったかもしれない集団を分離し、固定化した名称だと言える。

現在、自らを「バミレケ」と名のる彼らは、都市に多く移住し、カメルーン経済を握る。彼らの活躍の場は、銀行、ホテル、映画館などの大規模な事業から露店のような小規模な事業までさまざまである。

カメルーン有数の企業家であるフォッツォ（Fotso）氏は、ホテル業、不動産業、製造業（マッチ、乾電池など）などさまざまな事業を手がけている。彼の事業は国内だけでなく、他のアフリカ諸国やフランスにも展開されている。しかし、彼のキャリアの出発点は露店である。現在70歳を過ぎた彼の半生は、バミレケの典型的な成功物語を映し出している。1994年に出版された彼の自伝『ヒアラへの道』によれば、彼はフランス植民地時代の1926年頃バミレケ・ランドのバンジュン（Bandjoun）村で生まれ、幼年期から父親を手伝い、市で物を売ること覚えた。カトリックの学校に少し通ったのち、仕立屋のオジのもとで徒弟になり、次に白人のプランテーションで働いた。その後、現在の南部州に位置するンバルマヨ（Mbalmayo）という小都市に移り、「マーケットボーイ」となり露店でマッチを売っていた。露天商のまま一生を終える人も多いが、彼は着実に事業を拡大していく。ドゥアラの港から商品を買付け、「トンチン（tontine: 頼母子講）」を利用して資金を蓄積し、自分の家をンバルマヨに建て、後に外国人に賃貸するための豪邸を建設した。そのような事業で多くの収入を得た後、ヤウンデに土地を買ひ、ドゥアラやヤウンデにビジネスを展開した（Fotso 1994）。

フォッツオ氏のように、村からプランテーション地域を経て、都市へと移住するのは、植民地時代を生きたバミレケの典型的移住パターンである。植民地時代、バミレケは労働者として、鉄道や道路の建設、プランテーションなどで働いてきた。バミレケが最も多く働いていたのが、バミレケ・ランドと隣接したムンゴ（Moungo）地域（現在の沿岸部州北部）のプランテーションである。この地域の中心都市ンコンサンバ（Nkongsamba）でのバミレケ人口比は85.6%（1976年）であり、彼らが「土着民」でないことを考えれば極めて高い。また一方で多くの人々が、ンコンサンバなどのプランテーション地域を経て、ヤウンデやドゥアラへと向かった。このように、バミレケは植民地時代から移住を活発に行い、カメルーンの都市経済、社会の大きな部分を作り上げてきたのである。

4 バミレケのダイナミズム

バミレケの移住や経済力は、「バミレケのダイナミズム」（Dynamisme Bamiléké）と呼ばれ、近年研究者の注目を集めている。

バミレケに関する最初のまとまった人類学的研究は、フランス人タルディの研究であろう（Tardits 1960）。彼の研究は主にバミレケの伝統社会を扱ったものであるが、それ以外にも商業活動や都市への（村外）移住について言及されている。その2年後にも、同じくバミレケ・ランドの社会を扱ったユロの研究が出ている（Hurault 1962）。この後、研究者の関心が、バミレケのダイナミズムそのものへ移行するにつれて、研究対象は農村地域にとどまらず、彼らの移住を後追いするように、移住先でのバミレケや、あるいは彼らの移住そのものへと広がっていく。バミレケの全体像を提示するためには、農村社会の研究だけでは不十分となったのである。地理学者であり、自らもバミレケであるドンモは、『バミレケのダイナミズム』と題した著書を、「農地空間（バミレケ地域とプランテーション地域）」と「都市空間（ドゥアラ、ヤウンデ、ンコンサンバ）」の二分冊で出版した（Dongmo 1981）。また地理学者のバルビエは、ヤバシ（Yabassi）¹⁶地域への移住を扱う研究（Barbier 1971）を行い、また地理学者シャンボらと共に、ムンゴ地域への移住とその展開に関する研究（Barbier, Champaud and Gendreau 1983）を行った。シャンボはバルビエらとの研究の他に、バミレケ地域から英語圏地域までを含んだ移住・都市研究を

¹⁶ 図2 参照のこと。

行っている（Champaud 1983）。人類学的研究では、タバプシがムンゴ地域のバミレケの移住研究（Tabapssi 1999）を行い、またワルニエは地域を限定せず、バミレケとその周辺の企業家に関する研究を展開している（Warnier 1993, 1994, 1995a, 1995b）。

バミレケのダイナミズム戦略についてドンモは次の6つあげている（Dongmo 1981: vol.2, 263-265）。

- （1）全国的に展開したバミレケの移住
- （2）貯蓄への志向
- （3）助け合うという連帯志向
- （4）貯蓄、貸し付け、相互扶助などを行う組織
- （5）たゆまぬ努力
- （6）複数の経済活動を行うこと

ドンモは、他のひとびともバミレケのこれらの戦略に倣えば、カメルーンが低開発状態からより早く抜け出せるだろうと述べている（Dongmo 1981: vol.2, 263）。つまりドンモは、バミレケのダイナミズムを開発のモデルケースととらえているのである。

上記の6つの要因は、他の研究においても形を変えながら、言及される。要因の（1）を除けば、その他は彼らの「伝統」にダイナミズムの背景が求められている。都市やプランテーション地域にその「伝統」が持ち込まれ、あるいは近代化に適応する形で存在し、彼らを動かしているという考察である。バミレケのひとびとが何らかの「伝統」を携えて移住したのは事実である。この点において、ドンモの指摘は適切である。しかし、先にも述べたように、「バミレケ」というエスニック・グループのまともりは植民地支配に起源を持つのであり、「バミレケの伝統」と言った場合にも、その内容が何であるのかは十分に検討しなくてはならない。それに加え、都市においても彼らを動かす「伝統」は、いつ形成されたのか、それは都市においてか村においてか、さらに今日においても、実際にどのような力を持ち続けているのかという点も検討しなくてはならないだろう。

第3節 調査概要と論文構成

1 調査概要

本論文に使用する資料は、1993年以来、4度にわたる現地調査で得たものである。時期は以下の通りである¹⁷。

- (1) 1993年 8月から 9月
- (2) 1994年 8月から1995年 2月
- (3) 1996年 7月から1998年10月
- (4) 2000年 3月

(1)の調査は、カメルーン共和国の首都ヤウンデにおける予備調査の役割を果たした。日本を出発した時点ではナイジェリアでの調査を予定していたが、ナイジェリアの情勢変化により調査環境の悪化が予想され、急遽カメルーンに調査地を変更した。この調査ではバミレケの一般家庭に住まわせてもらいながら、ヤウンデの都市生活についての一般的な情報を入手した。(2)の調査においては、主にバミレケのトンチン（頼母子講）に関する調査を行った。この時も、上記の家庭にお世話になった。(3)は、2年以上にわたる調査であり、ヤウンデにおけるバミレケ・コミュニティの調査（バングラップ同郷者組織の参与観察、同郷者組織主催の葬礼、イベントの参加、メンバーへの聞き取りなど）とともに、バミレケ・ランドの村でも調査（村の組織の調査、村の社会組織に関する聞き取りなど）を行った。村での調査期間は、合計2カ月ほどである。またヤウンデにおいては、小規模自営業の事業主から大企業家まで120人を越えるひとびとから聞き取りを行った。(4)は、村での社会変化に関する調査と、ヤウンデにおける過去の資料の確認作業を行った。

調査言語は、ヤウンデにおいてはフランス語を用いた。それほど多くの機会はなかったが、フランス語を使用しない人との聞き取りには、それに応じた言語で通訳を介して行った。バングラップ村においては、フランス語とメジンバ語¹⁸を用いたが、筆者のメジンバ語の能力が不十分であるため、通訳を介して調査を行った。

¹⁷ 調査(1)(2)は、文部省科学研究費補助金国際学術研究「アフリカにおける伝統都市の社会変化の比較調査」プロジェクト（課題番号: 05041007、研究代表者: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所〈当時〉日野舜也教授）のメンバーとしてのものである。(3)は、講談社「野間アジア・アフリカ奨学金留学生」としての現地留学、調査である。(4)は、文部省科学研究費補助金国際学術研究「アフリカにおける伝統王国の社会変化の比較研究: 特に国民社会形成とのかかわり」プロジェクト（課題番号: 10041017、研究代表者: 静岡大学〈当時〉嶋田義仁教授）のメンバーとしてのものである。

¹⁸ メジンバ語は、バミレケの一部が話す言語である。第1章で詳述する。

2 論文構成

本論文の構成は以下の通りである。

まず第1章、第2章では、バミレケ都市居住者の背景を記述する。第1章では、バミレケの故郷であるバミレケ・ランドの社会構成を記述し、そこから多くのひとびとが村外へ移住した要因を分析する。また、その移住が「企業家」としてのバミレケに、どのような意味があるのかを検討する。

第2章では、植民地時代からの首都ヤウンデの都市化の過程と、個人の移住の軌跡を追う。そして、彼らの移住がヤウンデという都市をどのように変化させ、また彼らが都市でどのような立場にあるのかを考察する。

第3章以下が、本論文の中心であり、バミレケの金銭の回し方に焦点をあてた部分である。第3章では、都市での商業（短期サイクル）での金銭の回し方を論じる。彼らの商売手法習得の過程に焦点を絞り、その過程で獲得される彼らの金銭への態度や価値観について議論する。また、彼らが事業を通じて金銭を回すことにより、金銭の量の変化、増加を目的としていることを明らかにする。

第4章では、バミレケの「伝統的」貯蓄システムであるトンチンが、彼らが企業家として蓄積を行ううえでどのような役割を果たしているのか、都市と村のトンチンを比較し、その实际的、象徴的意味をさぐる。ここでは、トンチンを通して金銭を回すことにより、金銭の意味にどのような変化が起こっているのかを論じる。

第5章では、葬礼や故郷の家の建設など、金銭の村への投資に焦点を当てる。つまりここで扱うのは、都市で稼いだ金銭（短期サイクルの金銭）を村の秩序（長期サイクル）に回す事例であり、この投資が村と都市双方にどのような影響を与え、彼らにとってどのような意味があるのかを考察する。

終章では、バミレケによる金銭循環の全体像をまとめ、彼らがなぜ短期サイクルと長期サイクルの両方で金銭を回すのかを考察する。

第1章 バミレケ首長制社会からの移住

本章ではバミレケの移住 (*émigration / emigration*) の背景を論じる。第1節ではバミレケ首長制社会の構成について論じ、第2節では、移住の歴史的経緯、要因を分析し、バミレケが「企業家」となるにあたって、移住がどのような役割を持つのかを明らかにする。

バミレケは今世紀初頭から、プランテーション地域や都市部へ移住してきた。バミレケ・ランドの流出人口は1930年代から増加し、1949年時点で3万人、1954年時点で10万人 (Joseph 1977) にのぼった。1976年から1987年の11年間には、約18万人から約36万人へと倍増し (Fark-Grüniger 1995)、現在では50万人以上と見積もられている。現在も、バミレケの村外移住は増加傾向にあるが、その大半は若者によって占められている。

第1節 バミレケ首長制社会

1 バミレケ・ランドの生活

彼らの故郷であるバミレケ・ランドは、カメルーン南西部のグラスフィールドと呼ばれる起伏に富んだ高原地帯に位置する。バミレケ・ランドの標高は1,200~1,600メートルあり、高いところでは2,000メートルを越える。バミレケ・ランドは北緯5度と赤道近くにあり、本来ならば熱帯雨林の広がる地域であるが、このような高原のため、植生はむしろ草原に近く、よく耕された畑が広がる。季節は乾期と雨期があり、乾期は11月半ばから3月半ばである。バミレケ・ランドは、行政的には西部州 (Province de l'Ouest) に属し、その西側に位置する。東側はバムン王国のあるバムン地域である。西部州はカメルーンで最小の州であり、その西半分を占めるバミレケ・ランドの面積は6,200平方キロメートルではない。しかし人口は約140万人であり、人口密度は平方キロメートルあたり約226人と国内で最も高い (1997年¹⁾)。この人口密度の高さは、バミレケがバミレケ・ランドの外に移住をすすめた要因の一つと言われる。また、序章でも述べたが、バミレケ・ランドの特徴は、この小さな面積にもかかわらず、大小100以上の首長制社会が分布していることである。ここでは、そのなかの一つ、バングラップ首長制社会 (Chefferie Bangoulap・

¹ (Direction de la statistique et de la comptabilité nationale 1998)

ngòn ngulabə) を事例にとる²。

バングラップ首長制社会は、西部州のンデ県 (Département du Ndé)³バンガンテ郡 (Arrondissement de Bangangté) に位置し、県庁・郡庁所在地でもある地方都市バンガンテ (Bangangté) の西側に隣接している (図I-1)。バングラップの面積は54平方キロメートル、人口は5,831人 (1995年) であり、標高は1,200メートルを越える。言葉は、メジンバ語 (mədumbə) ⁴である。

バングラップの村内には、人が通れるだけのいくつもの細い道が張り巡らされている。近年では、車両がすれ違うことができる幅の道が通り、多くの家屋がその道の両側に建っている。このような幅広い道が建設されたのは、カメルーン独立前の1955年、反フランス独立闘争がゲリラ戦と化し、バミレケ・ランドー帯がその舞台となったからである。それまで広い道はなく、ひとびとは世帯毎に丘陵の斜面に距離をおいて住んでいたが、ゲリラ戦を契機に、安全のために広い道をつくり、その沿線に多くの村びとが家移してかたまって住むようになったという。

バミレケの伝統的家屋は正方形で、壁は竹で編まれ、屋根は草葺きである。しかし、現在そのような家を見ることは稀で、土の日干しレンガの壁、あるいはコンクリートの壁の上にトタン屋根をのせた長方形家屋が多い (写真I-1参照)。

村のひとびとの生業は主に農業で、ヤムイモ、タロイモ、マカボ (ココヤム)、キャッサバ、トウモロコシ、プランテン・バナナ (料理用バナナ)、ラッカセイなどを栽培している。畑仕事は主に女性の仕事である。村の生活は、グラスフィールドで広くみられる8日間周期の伝統週を基本にしているが、そのうち2日間は休日であり、畑仕事は休みとなる。種まきや収穫期には、ブナ (bu nə : 畑の手) と呼ばれる労働交換が行われる。女

² バミレケ首長制社会の構成は、互いに似通っているが、異なる部分もある。ここでは、現地語表記も含め、バングラップ首長制社会の事例を扱う。ngòn ngulabəはバングラップ国と訳することができる。

³ 西部州バミレケ・ランドは、ンデ県以外に次の6つの県に分かれている (図I-1)。バンブトス (Bamboutos)、メヌア (Ménoua)、ミフィ (Mifi)、オーンカム (Haut-Nkam)、クンキ (Koung-Khi)、オーブラトー (Hauts-Plateaux) である。それぞれ、ブダ (Mbouda)、チャン (Dschang)、バフサム (Bafoussam)、バファン (Bafang)、バンジュン (Bandjoun)、バハム (Baham) が県庁所在地である。バフサムは西部州の州都で、人口は推定25万人、カメルーン全国でも、ドゥアラ、ヤウンデ、ガルア (Garoua) に続いて4番目に人口の多い都市である (1998年)。

⁴ メジンバ語は、近隣の首長制社会バンガンテ、バオック (Bahouoc)、バコン (Bakong) などでも話される。ンデ県では他に、ンダダ (Nda'nda')、クワ (Kwa') と呼ばれる言葉も話されている。バミレケ・ランド全体では他に10以上の言葉が話されており、多くの方言もある。この周辺地域は「極端に言語学的に分節している地域」と言われる (Dieu & Renaud 1983: 75)。これらの言葉はすべて、ニジェール・コルドファン語族、ニジェール・コンゴ語派、ベヌエ・コンゴグループの類バントゥー (セミ・バントゥー) サブグループに分類される。

性たちは、これらの作物の一部を、4～5キロ離れた隣町バンガンテで水曜日と土曜日に開かれる市に売りに行き、現金収入を得る。メジンバ語で貨幣はンカブ（nkab）であるが、ピジン・イングリッシュの「モニ（money）」もよく使われる。換金作物はコーヒー（アラビカ種が主）とカカオで、主に男性がその栽培に従事している。その他キャベツなど、村であまり食べる習慣のない作物を栽培し、販売する男性も増えてきている。また男性はヤシ酒（ndâs nška）をつくり、その一部を販売し現金収入としている。家畜はヤギが多く、その他ブタ、犬などがある。ブタは自家消費ではなく、販売目的で飼育されることが多い。農作物や家畜を売って得た現金は、ランプの灯油、料理油、石鹸などの日用品の購買にあてられる。

宗教は、キリスト教の信者が多い。バングラップにおいては1911年ドイツ系プロテスタントの教会が設立されているため、プロテスタントの割合が高い。現在バングラップにはカトリック教会が二つ、プロテスタント教会が三つある。

2 首長⁵

バミレケ首長制社会のヒエラルキーは、首長（mfèn）を頂点として、さまざまな位の貴族⁶（nkamə）、自由民⁷から成り立つ。バミレケの諸首長制社会は、類似した首長の始祖伝承を持っている。以下はいくつかの例である。

（事例1）バングラップ： 初代首長はンジュムグ（Ndjoumgou）という国から来た狩人であった。彼は双子であり、もう一人は、バメナ（Bamena）という国をつくった。彼らの兄はバズー（Bazou）という国を作った

（事例2）バチエ（Batié）： 初代首長は狩人で、チャン（Dschang）にあるバガム（Bagam）という国から来た。彼は双子で、もう一人の兄（弟）は、バハム（Baham）という隣の国の創設者となった（Hurault 1962: 88）

⁵ この項に出てくるバミレケ・ランド社会の地名については、図3参照のこと。ただし、ンジュムグとムバブオントの位置は把握できていないため、載っていない。

⁶ 貴族という日本語が最も適しているかどうかは、今後検討する課題としたい。

⁷ 自由民、つまり「貴族以外のひとびと」に関しては、特別な名称はない。ここで自由民としたのは、奴隷（nkuon）の存在があるからである。諸首長制社会間で戦闘があった時代（今世紀初頭まで）、戦争捕虜は奴隷として、勝利した側の社会に組み込まれた。戦闘が終わって久しい現在、その奴隷身分はほとんど消え去り、誰が奴隷の子孫であるかということはあまり意識されない。

(事例3) バンジュン (Bandjoun) : 初代首長は、バレン (Baleng) 国の初代首長の息子であった。彼はバレンに自分の国をつくったが、息子の2代目首長は今のバンジュンにその国を移した。彼は象を狩り、その象牙を売って、奴隷を買い人口を増やした (Hurault 1962: 93)

(事例4) バングワ (Bangoua) : 初代首長はバンドルファム (Bandrefam) の首長の息子で狩人であった。兄弟との首長継承権をめぐる争いのため国を離れ、今のバングワへ来た。彼には双子の兄弟がおり、その人物はムバプオント (Mbapouonto) 国を形成した (Pradelles de Latour 1991: 147-149)

(事例5) バカッサ (Bakassa) ・バンドウムカッサ (Bamdoumkassa) ・バナ (Bana) : バメンドゥ (Bamendou) 首長の二人の息子ともう一人を合わせた三人の狩人のグループがいた。その三人目が、その首長の息子のうちの一人の娘と結婚した。彼らの三人の息子はそれぞれバカッサ、バンドウムカッサ、バナの初代首長となった (Barbier 1981: 337)

これらの伝承においては、まず、初代首長は他の国からやってきた「よそ者」であるが、首長の家系出身で、由緒正しいことが強調されている。また、双子 (bônflag)、狩人 (nketo'o) という要素も注目される。バミレケ社会では一般に、双子は尊重され、双子の母親 (mâ) は「マアニ (mânyî)」、父親 (tâ) は「タアニ (tânyî)」という尊称 (ndab) で呼ばれる。また、優れた狩人となるには、超人的な力が必要だとバミレケのひとびとは考えている。首長の始祖伝承が、狩人伝承、双子伝承と結びついていることは、バミレケの首長が政治的長であるのみならず、宗教的・呪術的力を持つとされていることと関係すると思われる。つまり、こうした伝承によって、首長はたんなる世俗的な政治的首長であるのみならず、宗教的権威をも有した存在であることが強調されるのである。

首長の地位は父系による世襲であり、新首長は首長の息子たちのなかから、出生順ではなくその資質で選択される。バングラップでは、相続は一般の家族においても同じで、明白で客観的な規則 (長男であることなど) はない⁸。しかし、新首長の選択には、いくつ

⁸ バミレケの相続は、故人の財を分割することなく、すべてが一人の息子に渡る。相続人の正統性をめぐり、親族の争いに発展することは多い。特に富裕な者の相続には、必ず問題が生じるという。問題を避けるため、現在では遺言を残すという手法が広まっている。遺言は、生前、誰にも見られないよう部屋のどこかに隠されている。死の直後、遺言が盗まれたり書き換えられたりしないよう、故人の部屋は即座に封鎖され、遺言の搜索と公表は、親族立ち会いの元で行われるという。

かの決まりがある。例えば、父が首長の就任前に生まれた子どもは除かれる。また新首長を選ぶ際、その母が当該国出身者以外であることが望まれる。婚姻は、首長制社会間で同盟関係を結ぶための重要な手段であり、その「外交」が新首長の選択にも影響する。一つの事例としては、バンガンテの現首長の母親は隣国のバムン王国出身であり、バミレケではない。バミレケ以外であっても、その社会との関係が重要であればそこから妻を娶り、その妻から生まれた子が首長に任命されるのである。

バングラップの現首長は初代首長から数えて23代目と言われている⁹。彼は1917年頃生まれ、1931年の13歳の時に父親の死亡によって首長に就任した。しかしその2年半後の1934年、プロテスタント教会と対立し植民地行政から迫害され、隣のミフィ県のバムングン（Bamougoum）に17年間亡命した。その間彼の兄が執政していたが、1950年7月にバングラップ首長に戻った。しかし独立後の1964年になると、政府から、反フランス独立闘争のゲリラ戦に関与した疑いをかけられ、バングラップからの15年間の追放と20年の強制労働の罰を受け、投獄された¹⁰。しかし1968年には減刑が認められ、1987年には無罪判決を受け市民権を回復した。その後バングラップに戻り、1992年1月には再就任式が行われ、名実ともにバングラップの首長の座に戻った。バングラップ社会は、このように長期間にわたって首長の不在という経験を経てきている。

バングラップ首長は、宮廷（ncwɛd）に居住している。宮廷は、バングラップの北部バンガンテとの境に近い場所に位置している（図I-2）。他のバミレケの宮廷同様、面した道路から宮廷の奥に向かうにつれて、低くなっている場所に作られている。宮廷のアーチ状になった門（入り口）の前と、道路を挟んで向こう側は広場（nsem）になっており、村をあげての集会、葬礼などを行う時に使用される（写真I-2参照）。広場には、門に向かって右手に太鼓を設置しておく小屋（tamntoge）がある。小屋の壁にはライオンや幾何学模様が描かれている。太鼓小屋やアーチ状門の上には、四角錐のトタン屋根が架かっている。これらの建造物は、かつては壁部分が竹で屋根は草葺きであったが、現在はセメントの壁とトタン屋根に変わってきている。宮廷の領域は、道路に面したところは、ヤックラア（yà'kəla'a）と呼ばれる木で囲われている（写真I-3参照）。この木で柵を作る

⁹ 実際にはもっと多く、38代目という説もある。

¹⁰ この一連の首長の受難は、執政をしていた彼の兄による陰謀であったと考える人もおり、首長もそう考えている。幼くして首長になった彼は、植民地行政府や有力貴族と結託した兄により、首長の座から追い立てられたという。

ことが許されているのは、首長を初めとする有力な貴族のみである。広場から門までは70メートルほどの緩やかな下りの道 (mbũ'ncwəd) になっている。門に向かって左手は、首長の妻 (nzwĩmfèn) のなかでも第一夫人 (mâbwengùb) が統括する妻たちの小屋がある地区で、右手は第二婦人 (nzwĩkamə) が統括する地区となっている。宮廷の門を入るとすぐ小さな広場 (nètα) で、首長の四輪駆動車が目に入る。首長が出かける時は、臣下などに運転させてこの車を使う。右手に通過小屋 (bã'ghàn) と呼ばれる待合所にもなる小屋がある。そこを通過すると、15メートル四方ほどの屋根付きの空間に出る。その周囲の壁には、首長自身がペンキでカラフルな絵を描いている (写真I-4、I-5参照)。その隣に位置するのが、首長が客人に対応する応接室である。広い応接間にはぐると椅子が並び、その奥に首長が座る椅子とテーブルがある。客人がなくても、首長はビールを飲みながらテレビを見て過ごしていることも多いという。この奥に、首長の寝起きする家がある。また、首長の妻たちが耕す畑、聖なる森もこの奥に広がる。首長に面会に来たひとびとの挨拶¹¹の仕方は、少し身を屈め、両手を口元に近づけ1、2回打って合わせ、その合わせた手に「ふっ、ふっ」と息を吹きかける。首長は「フン」、と答える (写真I-6参照)。

首長は、西洋の背広などは身につけず、ブーブーと呼ばれるゆったりとした衣装を着、衣装に合わせて伝統的な帽子やターバンなど、常に被り物を身につけている。宮廷前の広場でセレモニーがある時は、臣下 (cu'mfèn) がパラソルを首長にかざし、もう一人の臣下が、彫刻を施された腰掛けを持ち運び、首長はそこに座る (写真I-7参照)。

バングラップに限らず、バミレケの首長は一夫多妻である。首長が死亡すると、新首長は、自分の母親を除く先代首長の妻をすべて娶らねばならず、そればかりか自らも妻を多く娶る義務がある。かつては、首長が、100人を越える妻を抱えることも珍しくなかった。現在でも、数十人の妻を抱える首長は多い。バングラップ首長の場合、本人いわく、現在「10人くらい」の妻がいる。バミレケ社会においては、数えることが避けられるものがいくつかある。例えば、子どもの数をたずねても、答えをはぐらかす人は多い。妻の数も同じである。しかし「10人くらい」という首長の答えは、別の理由もある。それは、首長の妻の数が頻繁に増減するからである。数年前、80歳を越えるこの首長に、18歳の少女が嫁いだ。首長は彼女をかわいがり、あちこち連れ回していたが、彼女はまもなく逃げてしまった。このような事は、頻繁に起こる。バンガンテ先代首長の妻であったフランス人

¹¹ 首長への挨拶は、「首長への感謝 (nè lăb mfèn)」と呼ばれる。

女性は、夫の妻の数に関して次のように書いている。「私は知らない。25人くらいだろうか。私たちは数えない。人生すべてを宮廷で過ごす者もいるし、数カ月、あるいは数年後に去っていく者もいる。本当に、私は、私たち（妻）が何人いたのか知らないのだ」

(Njiké-Bergeret 1997: 13)。首長の妻は多いことが望まれるが、「数えない」という習慣と、首長の妻という地位の出入りが激しいために、妻の人数については誰も、首長でさえも正確に「知らない」のである。

3 尊称とリネージ

バミレケ首長制諸社会の政治、社会組織はそれぞれ似通っているが、異なる部分もある。その一例が、尊称 (ndab) である。尊称には、大きく分けて2種類ある。一つは、首長制のヒエラルキーにおける社会的地位（首長、貴族など）により決定されるものであり、もう一つは、所属するリネージ¹²により決定されるものである。前者は、バミレケの首長制社会に広くみられるが、後者は、特にバングラップを含むンデ県バンガンテ周辺で使用される。

バンガンテ周辺の社会において、尊称は名前 (len) よりも頻繁に使用される。村で見知らぬ人に出会えば、まず名前ではなく「あなたの尊称は何か (ndab mu bæá kə)」とたずねる。その質問で、その人物がどこのリネージの者かを明らかにできる。既知の者同士でも、互いに尊称で呼び合う。家族内でも、親が子に、あるいは子から親に尊称で呼びかけることは珍しくない。そこには、本来の名前を呼ぶことは一種無礼なことであるという習いと、お互いに尊敬を示すという習慣がみられる¹³。

バミレケの首長制社会は、首長のリネージと、それ以外の複数のリネージで構成されている。各リネージには、それぞれリネージ長がいる（首長のリネージにおいては、首長自身がリネージ長である）。リネージ長は、そのリネージの始祖（の末裔）である。よってひとびとは、自分の属するリネージ長が自分より年下であろうとも、彼のことを「父」として敬う。首長を含むリネージ長たちは、首長制社会内の土地を分割し、専有している。

¹² この集団をリネージという用語で説明するの最も相応しいかどうかは、今後検討する余地が残されている。バングラップのひとびとは、リネージのことを単に「家族 (tũnda)」としか表現しない。

¹³ ただし、社会的地位により決定する尊称は、このリネージの尊称よりも優先する。例えば、首長に対して、リネージの尊称で呼びかけることは、尊敬を表すどころか、無礼なこととなる。社会的地位により決定される尊称については、本論文では扱わないことにする。

首長制社会全土を治めているのは首長であるが、リネージの土地に関しては、各リネージ長が土地の分配などを行っている。

リネージにより決定される尊称は、性質上2種類にわけることができる。「母の尊称 (ndab mâ)」と「子の尊称 (ndab men)」である¹⁴。表I-1は、先の首長のリネージも含め、すべてのバングラップのリネージ長と、それぞれのリネージの地区名（図I-2参照）、母の尊称、子の尊称の一覧である¹⁵。母の尊称は父のリネージによって決定し、女性しか持たない。母の尊称を持つ女性の子は、自動的に子の尊称を持つ。子の尊称には、息子 (nshùm) への尊称と、娘 (ngòn) への尊称の二つがある。息子は母の尊称を持たず、子の尊称のみを持ち、娘は母からの子の尊称、父リネージからの母の尊称というように、同時に2種類の尊称を持つ。

具体的に考察してみる。図I-3であるが、まず、バングラップ首長リネージの男性A1の娘B1は、トントアン・ンゴラント (toŋntaŋe ngòlanto) という母の尊称を持つ。これは、首長リネージの男性を父に持つ娘たちすべてに共通の尊称である。トントアン・ンゴラントという尊称を持つB1の子どもは、娘 (C1) であればンテシュン (nteshune)、息子 (C2) であればタァマンチョ (tâma'ncò) という子の尊称を持つ。そして、B1の夫B2のリネージはンジャ・ンバニャ (ŋjâ mbă'nyà) なので、娘 (C1) は、ンテシュンという子の尊称を持つと同時に、トントアン・ンゴンジャ (toŋntaŋe ngõnja) という母の尊称を持つことになる。C1の持つトントアン・ンゴンジャは、その娘D1と息子D2にそれぞれ、ヨンバ (yo'mbà) とンジャ・ンバニャという子の尊称を与えることになる。D1は、父C3のリネージから母の尊称を受け、次世代へと子の尊称をつなぐ。このように、尊称は再生産されていくが、子の尊称は次世代へ続かないため、男性は尊称を伝えることができないことになる。尊称は「娘」を通して伝えられていくのである。

同じ尊称を持つ者同士の関係は、実際の家族関係や年齢にかかわらず、擬似的な「兄弟」であり、「姉妹」である。ンテシュンとタァマンチョのように男女で対になったもの同士は、「兄妹」あるいは「姉弟」である。また、タァマンチョやンテシュンから見てトントアン・ンゴラントは「母」であり、トントアン・ンゴラントから見て、彼らは「息子」であり「娘」である。都市でも村でも、初めて出会った者同士は尊称を教え合い、同じリ

¹⁴ このような「母の尊称」、「子の尊称」という区別を認識していない人も多い。

¹⁵ 表I-1は、さまざまな人から確認をとって作成したものであるが、実際、これらの尊称の種類や数をすぐに答えられる人はほとんどいなかった。首長も例外ではない。

ネージの尊称であれば、「あなたは私の母だ」、「あなたは私の兄だ」、などと言って喜び、抱き合う。そして普通は、これら対になった尊称を持つ者同士の婚姻は許されない¹⁶。また、子の尊称を持つ者は、母のリネージにとって「子ども (men)」ではなく、「孫 (mekad / mekalə)」とされる。母親はそのリネージの「娘」であるから、母親のリネージにとって、彼女の子どもたちは「孫」なのである¹⁷。

では表I-1に戻り、尊称の個別の意味について検討する。

まず、母の尊称を見ると、ンブン・ロンズとンジャ・バメンの二つのリネージを除き、すべてトンタンという名がはじめにくる。トンタンとは、ト (ton) は「掘る」、ンタン (ntane) は「市」で、「市を掘る」という意味になる。ンデ県の尊称に関する数少ない報告の一つを記した言語学者のポールフーヴは、「＜市を掘る＞、つまり＜市によって暮らす＞、それは決して耕作をせず、市に持ち込まれる商品に対する一種の通行税で暮らしていたバズーとバングラップの宮廷の娘たちに当てはめられる」と述べている

(Voorhoeve 1964)。バングラップで聞かれたその他の解釈は、「市で売春や詐欺をする」というものである。いずれにせよトンタンという尊称からは、耕作を日課とする一般女性とは異なり、特権的地位にある女性がイメージされる。ではなぜ、首長リネージ以外に、トンタンという尊称を持つリネージが多いのだろうか。

バミレケの首長制社会の多くは、バングラップのように、いくつかのリネージにわかれている。100以上も存在しているバミレケ諸首長制社会の形成は、前項で見たように、たいていの場合、その土地に移住をしてきた「よそ者」によって成し遂げられている。バングラップ初代首長は、他の首長制社会からやって来た「ンズアミ」という名の狩人であった。この狩人は双子であり、ンズアミがバングラップを、もう一人の兄弟「ウアミ」はバメナを形成した。そして彼らの兄は、バズー首長制社会を形成した。バメナもバズーもンデ県に属する尊称文化圏である。バズーにも、同じくトンタンという母の尊称があり、首長のリネージはじめいくつかのリネージがトンタンという尊称を持っている。このことから、トンタンという尊称は、もともと首長のリネージだけが所有しており、初代首長が首

¹⁶ しかし、現在は、夫側、妻側がそれぞれの親族の記憶をたどり、親族関係が明らかでなければ、結婚が社会的に認められるようになっている。バングラップ首長は、一つ一つのリネージ人口が増加する中でリネージ内婚が不可能となると、村外婚が増え、バングラップ人口が減少するのでは、という危機を持っており、リネージ内婚を承認している。リネージ内婚の増加は、他のバミレケ社会でも起こっている。

¹⁷ 子の尊称は、「孫の尊称」と呼ばれることもある。

長に就任した際、「土着民」リネージに分け与えたのではないかと考えられている¹⁸。

バングラップにおいてトンタンという尊称をもたない二つのリネージは、「本当の」バングラップではなく、「移民、よそ者 (dibà)」であると言われる。この「移民」とは、ンズアミという狩人がバングラップ初代首長になった時点で、まだそこにいなかったリネージのひとつを指す。リネージ長ンジャ・バメン (njâ bàmén) は、ンズアミの後からバングラップに移住したことを認めている。しかし、リネージ長ンブン・ロンズ (mfɛn lǒnzè)¹⁹によれば、ンズアミが来る前から彼らはそこにすでにいたが、その時点でのバングラップの領域は彼らの土地であるンズィンジョン (nzwinjon) まで含んでおらず、後にバングラップに征服されたと言う。トンタンという尊称はおそらく、ンズアミが首長になった時点で諸リネージに授与され、それより遅れてバングラップになった者たちは「移民」とされ、トンタンは与えられなかったと考えることもできる²⁰。

次に、5つのトンタンについて考察する。これらのトンタンを区別するため、その後にそれぞれ違う名が続いている。それは、そのリネージやリネージ領域の特徴を表している。表I-1の上から見ていく。まず、首長のリネージは、ンゴラント（欲張りな娘）となっている。その意味について、「彼女たちは男が大好きだからだ」、「すぐに男の後をついていくからだ」などと説明される。トンタンの後に娘の気質を表す言葉が続く首長リネージのトンタンは、他のリネージのものと比べると異色である。バミレケ社会は一般的に、性的な行為に対して厳格であり、かつては「不倫」や「婚前交渉」といった行為には厳しい制裁が加えられた。しかし「男好きな娘」とうたわれる「首長の娘」たちには、その適用が緩やかであったことを示している。一方他のリネージ、例えばンジャ・ンバニャのリネージ、ンジャ・ンガアのリネージ、ンブン・ゴンジのリネージでは、それぞれ音楽活動、鍛冶活動、工芸活動（かつてカバの歯を加工する職人がいた）といったそのリネージ特有の活動が名前になっている。ンブン・ンゾ、ンブン・タェンコのリネージは、その土地を

¹⁸ しかし、バメナには「トンタン」はない。ひとつとはそれに対して、バメナ首長のリネージがもつ「ンゴンシュア (ngòn shua)」という尊称は、「トンタン」と同じだと説明する。一方、バングラップ首長制社会に含まれるマンコ (Manko) 地区には、「トンタン」という尊称が存在する。バングラップのひとつとは、その「トンタン」はバングラップのものと違うと言い、マンコのひとつとに確認しても、やはりバングラップの「トンタン」とは関係がないということであった。

¹⁹ 彼の名「ンブン・ロンズ」は「道ばたにいた首長」という意味がある。

²⁰ 表I-1にもあるように、ンズィンジョンのリネージは一つの尊称しか持たないが、実は二つのリネージから構成され、二人のリネージ長がいる。しかし、バングラップの他のひとつとは、このことをあまり重視しておらず、彼ら二人のリネージ長は兄弟であると考えている。しかし、このリネージ長二人の間には親族関係はなく、彼らのあいだでは二つに区別され、婚姻も可能である。つまり彼らは後から「発見」され、一つのリネージとしてまとめられ、一つの尊称しかもらえなかったと考えられる。

流れる水路名を示している。また、トンタンではない残りの二つは、それぞれヤシやシロアリ²¹といった、その土地の特性が名前になっている。母の尊称は、それぞれのリネージや地区の特徴を記録しているのである。

子の尊称の意味は、トンタンという母の尊称に比べて曖昧である。特に、女子のものはそうである。なぜ、表中に示したような意味を持つのか、はっきりと説明できる人はいない。人名がついている場合は、そのリネージの貴族である場合が多い。興味深いのは男子の尊称で、戦争にまつわるものが三つ見られる点である。まず、首長リネージの男子の尊称「タァマンチョ」は「戦争をなす父（男性）」という意味で、つまりは「戦士」のことである。また、ンジャ・ンガアという、鍛冶の伝統を持つリネージの男子の尊称は「タァンコンガン」で、「銃弾をつくる父（男性）」という意味である。かつては戦争の際、彼らがつくった銃弾が利用されていた。また、ンジャ・バメンのリネージの男子の尊称は「ンカンチョ」であり、このリネージの男子が戦争を知らせる役目をしていたことを示している。首長制社会間の戦争がなくなった今、これらの尊称は先祖の役職や偉業などを子孫に伝えている。

先祖の偉業を伝えるという尊称の役目は、一つの尊称にいくつもの別称があることを考えれば、一層明らかになる。表I-1にあげた尊称は、最も頻繁に使用される代表的なものを一つあげただけであり、一つの尊称には他にいくつもの呼び方がある。ンジャ・ンガアのリネージの男子が持つ子の尊称「タァンコンガン」を例にとる。彼らは「タァンコ」と呼ばれることが多いが、他にもさまざまな呼びかけがある。彼らに対してそのリネージ長の名前、「ンジャ・ンガア」と呼びかけてもよく²²、そのリネージの有力な貴族の名で呼んでもよい。そのレパートリーは10を超える。つまり「タァンコンガン」という尊称は、このリネージの偉大な祖先たちの名を記憶し再生させるためのものとも言えるだろう。このように、表I-1にあげた尊称の一つ一つが、独自の尊称のレパートリーを持っているのである。このような尊称レパートリーの記憶者は主に女性である。この理由についてある老女は、「女たちが子育てをするからだ」と答えた。女たちは尊称に通じており、泣いている赤ん坊にこのレパートリーを歌にしてあやすことを習慣としてきた。尊称は女性が中心となって伝えてきたのである。

²¹ シロアリには、食用として好まれている種がある。

²² 「タァンコンガン」に「ンジャ・ンガア」と呼びかけても、実際のリネージ長（ンジャ・ンガア）と間違われることはない。リネージ長本人に対してそう呼びかけるのは無礼であり、ひとびとは彼に「シュアベン（cùabèn）」という彼の貴族の地位に対応した尊称で呼びかけるからである。

このようにバングラップにおける尊称は、自分がどのリネージに所属するのかをひとびとに認知させ、またそのリネージの特徴、祖先の偉業や名を、記憶にとどめる役割を果たしている。尊称は村だけでなく、都市移住者のあいだでも使用される。本当の名前より尊称を知ることの方が重要なのは、都市でも同じである。

4 貴族

バミレケの諸首長制社会の多くの初代首長は、武力で支配したのではなく、ひとびとに請われる形で平和的に首長に就任したと語られる²³。初代首長が現れるまで、その地のひとびとは「貴族」によって統括されていたとされる。この貴族とは、先にみたりネージ長である。初代首長を就任させた「土着民」リネージ長であったこれらの貴族たちは、首長制社会となった後も、首長の次に有力な地位を占めることとなった。例えばバングラップにおいては、彼らは「9 貴族 (nkam bwè'ə)」と呼ばれ、その他の貴族とは区別される。9 という数字はバミレケ社会では神秘的な数字と考えられ、9 貴族といっても必ずしも9 人いるという意味ではない。バングラップでは、表I-1にある首長を除くりネージ長8人と、首長が特別にその地位を与えた人物一人のあわせて9 人が9 貴族であるとされる。

彼らは、首長の暮らす宮廷で、伝統週の8日に一度、ンシア (nsigha) の日に「クム・ンシア (kùm nsigha)」と呼ばれる9 貴族の会議を開く。ここでは「クム・ンシア」のことを、「リネージ長会議」としておく。クム (kùm) とは、集会、組織と訳すことができるが、集会、組織を指す言葉には、他にンツァタ (ntsə'tə) がある。クムはンツァタと比較すると、メンバーがより限定され、メンバーとなるにはイニシエーションが必要とされるような秘密結社の集会、組織である。宮廷で行われる集会すべてはクムと呼ばれる。かつて、ンシアの日には一般のひとびとは出歩くことも許されなかった。また本来、このリネージ長会議のメンバーは「秘密」であり、うっかり家を出て集会に向かうメンバーを目撃すると、家を焼かれ村を追い払われたという。現在でも、クム・ンシアに行く途中の9 貴族にひとびとは声をかけず、またメンバーの側もたとえ声をかけられても声を出して応じることはない。

9 貴族たちは、リネージ長会議であるクム・ンシアにおいて社会内部の問題を解決し、

²³ 例外もある。武力によって形成された首長制社会の例として、バンジュンやバナがあげられる。(Barbier 1981: 336)。

方針を決定するなど、行政や司法を司っており次の首長選択にも大きな影響力を持っていた。これらの権力は、現在形骸化している部分が多いが、かつては彼らこそが実質的に社会を統制していた。9 貴族たちは首長と対等に話ができ、また首長にはない力を持つとされる。これは、彼らがバングラップの「本当の」土地の主「土着民」であることに由来する。村内で呪術の蔓延など深刻な事態になると、「よそ者」の首長ではなく、「土着民」の9 貴族が解決にあたることも、そのような事例の一つと言えるだろう。

9 貴族は首長と対等なほど地位が高いため、首長とは距離を保っているが、これとは反対に、首長の身近に接する貴族もいる。この貴族には男性と女性があり、男性の方は「ンクエボンブン (nkwebô mfên: 首長補佐)」、「タンブン (tâ mfên: 首長の父)」という貴族である。彼らは宮廷において、首長に次ぐナンバー 2、3 という地位を得ている。女性の方は、「マンブン (mâ mfên: 首長の母)」と呼ばれる貴族である。

「ンクエボンブン (首長補佐)」、「タンブン (首長の父)」は、新首長が就任するのと同時に、新たに就任する。「タンブン (首長の父)」は、新首長と母を同じくする兄弟のなかから選ばれ、「ンクエボンブン (首長補佐)」は異母兄弟のなかから選ばれる。

「マンブン (首長の母)」は、新首長の生母が自動的になる。

新首長就任時には、宮廷内のラックワ (lâ'kwa) と呼ばれる場所で9 週間にわたり、新首長のイニシエーションが行われるが、この新しい「ンクエボンブン (首長補佐)」と「タンブン (首長の父)」もそれに参加する。しかし、このイニシエーションの期間、「ンクエボンブン (首長補佐)」は、「タンブン (首長の父)」やその他の貴族と共謀して、新首長にとって代わることができる²⁴。つまり、クーデター権を持つ「ンクエボンブン (首長補佐)」は、首長とは潜在的なライバル関係にある。このクーデターを未然に防ぐため、イニシエーション中は、保護者役である「タンブン (首長の父)」は便所にまで新首長に付きそうという。新首長は、ラックワから出る時に初めて、本当に首長となれるのである。「ンクエボンブン (首長補佐)」によるクーデターがその後も続くこと防ぐため、彼は公衆の面前で首長に近づくことは許されず、またリネージ長会議 (クム・ンシア) にも参加できない²⁵。しかし現在、彼らの権力はもはや形骸化している。例えば本来

²⁴ 例えば、バンガンテでは、1943年に首長が死亡した後、最初の新首長は、ラックワに入って7日後に殺され、次に選ばれた首長は12日後に殺され、3番目は逃げ出した。結局4番目の人物が無事に新首長に就任できたという。

²⁵ 同じく潜在的対立関係にある9 貴族の集会に「ンクエボンブン (首長補佐)」が出ることは、首長にとって危険だからである。

の「ンクエボンブン（首長補佐）」の役割は軍事の長であるが、戦争がない今その役割は消滅している。

この他に、同じく首長に近しく接する貴族としてワラ（ɲwa'la'）がいる。ワラは臣下である。臣下たちの家系は奴隷出自とされる。彼らは首長に直接に仕え、非公式な権力を持っている。彼らのみが首長の身体を直接触れることができ、首長の埋葬も彼らの仕事である。彼らは「ボオワラ（bô ɲwa'la' : ワラの子どもたち）」という名前のクム（集会）を、ンガ（nga）の日に宮廷で行っている。

その他にバングラップ首長制社会には4つのクムがある。これらは、①「クア（kwà' : 腕輪²⁶）」という首長の息子たちが行うクム、②同じく首長の息子たちが行う「バトゥグップ（badngùb: 豹の皮²⁷を背負う者）」というクム、③「ババ（baba: 真紅²⁸）」という首長の息子たちと有力な臣下とで行われるクム、④「ブォンドゥン（bù'ondun: 首長の墓）」という、臣下たちが行うクムがある。これら4つのクムは、旧宮廷（fam ncwəd）で行われている。これら4つのクムが旧宮廷で行われるのは、ひとが集まりやすいとからだという。現宮廷は、村の端にあり、旧宮廷は村の中心近くにある（図I-2）。例えば、現宮廷の反対側の端にあるランベン地区から宮廷に行くには、登り下りのある7キロの道のりを行かなくてはならない。しかし、村の中心にある旧宮廷までなら、半分以下の3キロですむ。

クムに参加できる条件は「息子たち」や「子どもたち」であるとされるが、実際は言葉通りではない。例えば首長の息子たちと言った場合、現首長の直接の息子という意味ではなく、首長の家系出身者でかつ貴族の称号を持つ者に限られる。マンブンは女性であるが、例外的に参加できる。彼女には男性の地位が与えられているからである。また、首長によれば、すべてのクムの参加は、首長によって任命されなくてはならない。

これら4つのクムは伝統週のンシオック（nsighòg）という日に行われるが、現在ではまとめて一つのクムになっている。その理由は、それぞれのクム参加者が少なすぎるというものである。また、かつては親子関係にあるものが同じクムに参加することはできなかったが、現在は父と息子が一緒に参加している²⁹。集会日がンシオックの日になっているのは、その日がサーニャという地区の市日であり、午前中にクムをすませ、そのあと市

²⁶ この腕輪（kwa）は、首長や下位首長、高位の貴族だけが持てる腕輪（kwabà）のことである。

²⁷ 豹の皮は、権力の象徴であり、首長や高位の貴族だけが持てる。

²⁸ 赤は、権力の象徴である。

²⁹ これについて、首長は不満をもらしている。

に行くことができるからだという。リネージ長会議（クム・ンシア）以外で、現宮廷で行われるクムは、メンバーの多くが現宮廷付近に居住している「ボオワラ」のみである。

以上、見てきたように、バミレケ首長制社会においては、貴族とそうでない者のあいだの線引き、貴族間のヒエラルキーがはっきりしている。現在でも、首長はもちろんのこと、貴族とそうでない者は、例えば村の集会の座席、発言権などに大きな違いがある。集会の代表者も、貴族以外の者が努めることはまずない。しかしかつては、彼らの権威はより大きなものであった。首長は、村の娘なら意のままに自分の妻にできた。娘の家族は首長に逆らえないため、首長が来ると娘は慌てて隠されたという。また自由民は、屋根裏に保存してある作物や畑の作物を貴族に盗まれても文句を言えなかったという。たとえ宮廷での裁判に訴えても、判決を下すのは首長と貴族たちである。バングラップの宮廷裁判では、現在も4人の判事はすべて貴族である。首長がこの4人の判事を任命し、首長自身も判決に加わる。現在では、ここでの判決に不満があれば、郡都、県都であるバンガンテの裁判所に訴えることができる。それにもかかわらず、首長や貴族にはいまだに大きな発言権や決定権があることは否めない。

第2節 移住要因とその結果

この節からは、これまでみたように、高度にヒエラルキー化しているバミレケ首長制社会から、ひとびとが村外へと移住する歴史的経緯と社会的要因を考察する。

1 移住の始まり³⁰

バミレケの移住と経済力は早くから注目されていた。フランス統治下の1949年に出版された「南部カメルーンの民族細目調査」において、バミレケの移住は次のように書かれている。

「バミレケの移住に関しての項をここに書くことは必要なことである。なぜなら、

³⁰ この項に出てくる地名については、図2を参照のこと。

それは、我々の目の前で繰り広げられている移住そのものであり、そしてその経済的重要性は見逃されることはないからだ。バミレケは実際、積極的で、賢く、また働き者である。彼らのダイナミズムは少しずつあちこちに潜り込んでおり、実際に我々は彼らに、領土のあちこちで出会う。彼らは全く、あるいはあまり開発されていない肥沃な土地を活用するため、あるいは商人として中心地区に定住するためにそこにいる。彼らは交渉の技術に長けており、ギリシャ人やシリア人³¹とそこで競い合っている」(Dugast 1949: 118)。

1884年、カメルーンはドイツの統治下に入った。ドイツは1889年に現在の英語圏地域のバリ首長制社会やバムン王国の王都フンバン(Foumban)にまで遠征を行っていたが、バミレケ・ランドは迂回されていた。しかし、1900年にはバミレケ・ランドのチャンに軍事基地がおかれ、また1909年にはバナにもおかれた。バミレケの移住が本格的に始まったのはこの時期、20世紀初頭以降である。この時代から、カカオ、バナナ、ゴム、タバコなどのプランテーションや、鉄道、道路の建設が着手された。ドイツのプランテーションの多くは、沿岸部のカメルーン山(Mont Cameroun)周辺のブエア(Buéa)、ビクトリア(Victoria/Limbé)、ティコ(Tico)³²に建設され、大量の労働力を必要としていたが、地元民ではまかないきれなかった。そこでドイツは、バリ首長の協力を得て、労働力の補給をはかった³³。しかし、自国内では十分な労働者を確保できなかったバリ首長は、バミレケ・ランド各地に襲撃を企て、捕獲者を鉄道建設現場やプランテーションに送り込んだ。以後、バミレケ・ランドからは多くの労働者が本格的に送り込まれ、強制的に働かされるようになった(Kaptue 1986: 22-23)。しかし、最も効率的に労働力を集める手法は税金の導入であった。税金導入以降、バミレケによるプランテーションへの「自発的」移住が本格化したからである。

プランテーションでの労働条件は悪く、特にバミレケ・ランドのような高地から来た

³¹ 当時の商業活動の上層部はフランス人が握り、中間層はギリシャ人やレバノン、シリア人が握っていた。その中でバミレケの商業活動への進出は進んでいたが、それにつれて、ギリシャ、レバノン人などを含むヨーロッパ人との競合が顕著になった。それが後に、バミレケを反政府運動へと駆り立てた一つの要因だという分析もある(Joseph 1977: 117)。

³² これらの地域の(後にイギリス領となった)プランテーションは、「戦時中にイギリスによって没収されたが、一九二四年以降ドイツ移民によるその買いもどしが認められるようになり、ふたたびプランテーション農業は活況を呈しはじめた」という(小田 1986: 75)。

³³ ドイツの探検家ツィントグラフ(Zintgraff)は、ドイツ政府からカメルーン内陸部の調査を命じられ、1889年にバリ首長ガレガ(Garega)に接見し、関係を築いてきた(van Slageren 1972: 79-85)。

ひとびとにとって、森林部の蒸し暑い気候のなかでの労働は過酷であった。この状況下で逃亡者を出さないため、ドイツは毎月賃金の半分のみを支払い、残りは契約終了時にまとめて支払った。この支払い据え置きシステムは、労働者がまとまった金額を手にすることを可能にした。ドイツのバミレケ・ランドへの利害は、このような労働力の確保に重点がおかれていた。当時のドイツのプランテーションは12万ヘクタールに及び、1913年までに設立されていた58のプランテーションの多くはドイツ系企業のものであった。そこでは17,867人のカメルーン人労働者と、109人のドイツ人管理者や技術者が働いていたという（Fark-Grüniger 1995; Mbuagbaw, Brain and Palmer 1990）。

第一次大戦後、支配者がドイツからフランス植民地政府に代わっても、人口の多いバミレケ・ランドは労働力供給に有用であった。フランスは沿岸部だけでなく、そこから北へ続く肥沃な土地、特にムンゴ地域でのプランテーション開発に力を入れ、1930年代には、コーヒーやバナナを導入した。ドイツ時代の1911年には港湾都市ドゥアラからムンゴ地域に至る鉄道が建設され、そこからバミレケ・ランドの小都市、バナ、バンガンテまでは道路で結ばれるようになった。フランス政府はバミレケの首長たちと共謀し、この地に多くのバミレケ労働者を集めることができた。この強制労働は、1945年までフランス植民地政策として維持された。1910年から30年のあいだに、ムンゴ南部地域のカカオ、ヤシのプランテーションに農業労働者としてやって来たバミレケは、ヨーロッパ経営のプランテーションだけでなく、地元民の個人経営プランテーションでも雇用されていた。1928-32年の世界経済危機では、カカオなどの価格が暴落し、バミレケ労働者に賃金を支払えず、その代償として彼らに土地を分け与える農園主が増えた。こうして徐々に、バミレケのなかからも農園主になる者は増加していった。これ以降、新たにやって来るバミレケ農業労働者たちにとって、労働者になることは、農園主になるためのステップとなった。プランテーションが盛んになるにつれバミレケの移住者は一層増え、人数の面でもその働きの面でも他のエスニック・グループをしのぐようになった。フランス植民地政府は、バミレケを他のエスニック・グループと比較してより勤勉であると認識し、バミレケの移住を歓迎していた（Joseph 1977: 8-11; Barbier, Champaud and Gendreau 1983: 93）。

バミレケは初期の頃から、農業のみならず商業にも携わっている。ムンゴ地域のプランテーション集積地として発展してきた都市ンコンサンバでは、1911年以降から1930年までの間に、商売を始めて定着するバミレケが出てきたという（Barbier, Champaud and Gendreau 1983: 125-126）。バルビエらは、これらのバミレケ移住民が定着していくプロ

セスは、場所や時代、地元民との関係によって異なるとしながらも、彼らの特徴は、複数の活動を行いながら、社会的、経済的に昇進していくことだとしている。彼らは、カカオやコーヒーのプランテーションで一定の収入を確保し、残ったわずかな土地に妻³⁴など家族の助けで自家消費用の食糧作物を栽培し、余剰物を販売した。また、プランテーション労働の合間に商業活動を始め、それで得た資金で、自転車、荷車、トラックなどの輸送手段を購入し、自ら周辺の市に収穫物を運んで販売し商売網を広げた。さらに農業に費やす以外の時間を、建設現場の仕事や美容院、車修理工など他の仕事に費やした（Barbier, Champaud and Gendreau 1983: 128-133）。

もちろん、ドゥアラやヤウンデといった都市への移住も早くから始まっている。1937年の行政官レポートには、次のように書かれている。

「グラスフィールズ（人）の強力な移住は、ドゥアラにおいてははっきりと現れている。商人で、働き者で、節約家で、しかしまた極めて不正直でもあるバミレケ、あるいはグラスフィールズ（人）は、ウリ地域³⁵土着の商業ほとんどすべてを占領してしまい、それは、ハウサ³⁶を排除してしまうほどである。最もみすばらしい仕事で、貧弱な給料で働くことを受け入れつつ、グラスフィールズの移住民は、かつてはほとんどドゥアラ人によって握られていた職をすべて奪い取っている」（Gouellain 1975: 251）³⁷。

このように1930年代にはすでに、プランテーション地域の都市やドゥアラなどへのバミレケの移住は活発であった³⁸。

2 農民から企業家へ

バミレケの移住がなぜ起こったのか、強制労働やプランテーション労働といった移住の

³⁴ 彼らは、プランテーションで働き、婚資を貯め、村から妻を呼び寄せていた（van Slageren 1972: 244）。

³⁵ ウリ地域（Région du Wouri）は現在の沿岸部州の一地域である。

³⁶ ハウサ（Hausa）はアフリカ西部から中央部にかけて広く居住し、古くから商人として長距離交易に携わってきたひとびととして知られる。

³⁷ Région du Wouri. Rapport annuel 1937 からの引用。

³⁸ ドゥアラのバミレケ人口は1933年には1,432人、1945年には4,167人という記録がある（Dugast 1949）。

ブル要因とは逆に、バミレケ・ランド側からのプッシュ要因も考えてみなくてはならない。前節で見たように、バミレケ・ランドからの移住要因の一つとしてあげられるのが、人口密度の高さである。ドンモは、植民地期にバミレケ・ランドに導入されたコーヒー栽培が肥沃な土地を多く必要としたため、地元で消費する食糧用農地が不足したことを指摘している（Dongmo 1981 vol.I: 204）。一方ワルニエは、バミレケ・ランドと北西部州を含んだグラスフィールドズの移住について分析し、人口流出の激しさは必ずしも人口密度と対応しないが、過剰人口が移住の主要原因となった地域があると述べている（Warnier 1993: 41-68）。彼はまた、人口密度以外に、首長制社会内部の軋轢も要因としてあげている。例えば、北西部州はバミレケ・ランドよりも村外移住率は低いが、その理由として、バミレケ・ランドの首長制社会は北西部州の首長制社会より、首長を含むヒエラルキー上層部と若者が代表する低層部のあいだの軋轢が大きかったためと推測している。またバミレケ・ランドで移住率が最高のンデ県を含む南東部では、19世紀前半、首長の自由裁量権が他の地域よりも増大していたという（Warnier 1993: 202-203）。つまりワルニエに従うならば、移住は「持てる者」と「持てない者」との軋轢の強度に関わっていたと考えられる。

この軋轢を表面化させたのは、植民地化である。植民地化によってバミレケ首長制社会の混乱は深まったが、この時自由民、特に若者たちはより直接的に影響を受けた。ドイツ植民地時代には、若者たちはドイツによってこの地域に導入された武器を入手し、無法者となり強盗などを繰り返した。これらの無法者を統制するため、教会ミッションや行政府は手を焼いていた。若い無法者たちは植民地権威だけでなく、首長や貴族というヒエラルキー秩序にも反抗していた（Warnier 1993: 206）。

ミッションと首長らとの関係も良好だったわけではない。グラスフィールドズにミッションの拠点が建設され始めた1900年代初頭、教会は植民地権威を我がものにしていた首長らに歓迎された。しかし、次第に教会の存在は、首長や貴族らに敬遠されはじめる。その原因は、一夫多妻制度などをめぐる両者の価値観の衝突である。首長や貴族たちは、新しい価値観を教え込む教会や、ミッションが経営する学校に自分の子どもをやらなかったため、もっぱらヒエラルキー下層の子どもがそこに通うことになった。このようにして教会がもたらしたキリスト教の価値観や、学校教育を受けた者たちの出現は、首長制社会の秩序を乱すこととなる。その結果、首長や貴族によるミッションへの反発は、時に教会を焼き払うという行為にまで及んだ。しかしその一方で、首長は植民地行政府に協力し、強制労働者を供給し、税金を徴収するなどの役目を負っていた。首長に付与されたこ

のような新しい行政権威は、ひとびとの反発を招いた（van Slageren 1972: 246）。「行政のリクルートとその乱暴なやり方、伝統的首長の権力の乱用が、それに耐えかねた者たち、特に若者たちを外へと押しやるに至った」（Kaptue 1986: 97）のである。

このような混乱のなか、プランテーションや都市への逃亡という選択肢があらわれた。この選択肢を選んだ者の多くは、多少なりとも教育を受け、新しい価値観を身につけた若者たちであった。また彼らの多くは村で父親の財の相続が期待できないために、不満と嫉妬を抱く若者たちでもあった（van Slageren 1972: 244）。先にも述べたが、バミレケの相続は、一人の息子が父の持つすべて（妻、畑、土地、家屋、称号、社会的役割など）を受け継ぎ、他の息子には何も分配されない。そのため、相続できなかった者たちの移住の目的は「出稼ぎ」ではなく、村に戻らず移住先で生計をたてることであった。つまり、初期のバミレケ移住民はすでに、たんなる避難民や出稼ぎ民としてではなく³⁹、ある種の「企（起）業家」として移住先に向かったのである。この点についてバルビエらは、次のように考察している。「（バミレケ）移住民たちは、ただ土地を探していたのではなく、最も儲かる経済活動に参加できる領域を探していたのである。まさしくここで、資本主義とバミレケの移住が出会ったのである」（Barbier, Champaud and Gendreau 1983: 119）。バミレケ・ランドからの移住は、ヤウンデ、ドゥアラ、ンコンサンバといった場所への地理的移動にはとどまらなかった。その移動は多くの場合、職業移動、つまり社会移動を伴っていたからである。移住したひとびとの多くは、故郷の村では自家消費を目的とした農作業を行う農民であった。しかし彼らは地理的移動を通して、プランテーション労働者、露天商、職人などに転身した。バミレケの村からの脱出は「農民」からの脱出であり、バミレケが「企業家」となるための要件だったのである。

3 バミレケ・ランドにおける商人⁴⁰

しかし、バミレケ・ランドに暮らしていたのは、ただの「農民」ではない。バミレケ・ランドが世界市場に巻き込まれてきた歴史は、植民地化よりも古い。バミレケ・ランドを含むグラスフィールド内部の交易は当然としても、その他に長距離交易も行っていた。

³⁹ 松田は、都市への出稼ぎの形態を定着型と循環型に分け、「出稼ぎ民」の範囲を広くとっている。この解釈では、バミレケ移住民は「定着型出稼ぎ民」とも言える（松田 1996: 61-62）。

⁴⁰ この項に出てくるバミレケ・ランド社会の地名については、図3を参照のこと。

北のサバンナ地域と南への森林部・沿岸部との中間に位置するこの地域は、南北両地域間の交易における仲介役を果たしてきた。東のバムン地域を介しての北部地域との交易では、コーラの実、鉄砲、硫黄粉、塩などを北部地域に送り、そこからは奴隷、綿の布などを手に入れていた。森林、沿岸地域との交易では、ヤギ、トウモロコシ、ラッカセイ、象牙、奴隷などを送り、そこからヤシ油、塩、ヨーロッパから持ち込まれた商品（銃、硫黄粉、布など）を受け取っていた（Champaud 1983: 31-42; Wilhelm 1981）。

1800年以前、すでに階層化していたグラスフィールドズでは、首長や貴族が市場交換を目的とした商品を生産し、それを長距離交易のルートにのせ、妻、臣下、土地、権威の象徴となる商品（ヨーロッパ製の商品、北部からの布、衣服など）を蓄積した⁴¹。この首長や貴族による交易の支配は、植民地化されるまで続いたようである（Warnier 1993: 200-211）⁴²。自由民は、周辺の市を回り、農作物などを商いすることはできたが、この地域の商業活動は「19世紀の半ば、人口が増大し家族長らが農業以外の資源を求めることを強いられた時に、ようやく広まりを見せた」（Pradelles de Latour 1981: 398）という。

バミレケが長距離交易を行っていたのは事実であるが、遠くの首長制社会や、森林部、沿岸部、北部へと商人自身が足を運んだわけではない。つまり、上で述べたような広範囲の交易は、間接的に行われていた。例えばバムン王国では、商人はほとんどその王国の境界を越えず、もっぱら国境の市に通い、商いをしていたという（Champaud 1983: 42）。またバミレケも、植民地化以前は隣接している首長制社会とのみ直接交易を行っていたという。この地域の商人が長い距離を移動しなかったのは、自分の社会から離れることが危険だったからである。その危険を冒せば、捕えられ、奴隷として売られる可能性があった。ドイツ、続いてフランスがこの地域を平定した後に、彼らはようやく長距離交易に自ら参画できたという（Pradelles de Latour 1981: 399）。このように、グラスフィールドズは、その地の利をいかして長距離交易を行っていたが、商品が長距離を移動するのに対し、ひと（商人）自体はさほど長距離を移動しなかった。しかし、彼らが近隣の社会と密接な交易網を築き、そこに参画していた事実は重要である。バミレケ・ランドの諸首長制社会では、それぞれの村に定期市がある。その市日は伝統週の8日周期でずれており、売り手も買い

⁴¹ 中央、東アフリカにおける植民地化以前の長距離交易でも、重要な取引商品は、入手が困難な嗜好品や贅沢品など威信財であったという（Gray and Birmingham 1970）。

⁴² 例えば、隣国バムン王国でも、「バムンにおける最大の商人は王であり」、「王子（Nji）」たちが通商を統御していたという（和崎 1987b）。

手も近隣の市を巡回することが可能なシステムになっている⁴³。

このような近隣市の巡回について、バングラップの北西に位置するバングワ（Bangwa）首長制社会の事例をあげる。植民地化以前、バングワの商人は、バングワの南に位置するバレング（Balengou）やバズーの市でヤシ油などを買い、北にあるバンジュン、北西にあるパチエの市では、北西から来るラッカセイ、トウモロコシ、タバコなどを購入し、北に位置するバンガンフォカム（Bangang Fokam）、バンガンフォンジ（Bangang Fondji）では、北から来る綿布、真鍮の腕輪など⁴⁴を購入していたという（Pradelles de Latour 1981: 398）。

ドイツ植民地時代の市については、バングラップの老人Mが語ってくれた⁴⁵。バングラップの南に位置するバッサンバ（Bassamba）の市では、プランテン・バナナ、トウモロコシなどが、子安貝、あるいは貨幣（コイン）を使って取引されていたという。そこでは、近隣の首長制社会（バングラップ、バレングなど）の者が買い手であった。バッサンバの市の翌日、バングラップ、バレングの市で再販するための買い付け人もいた。先にみたバングワの市は、当時ンデ県内で最大の市の一つであった。この地域では、バングワの市ではじめて、ベニエと呼ばれる揚げ菓子や牛肉がハウサ商人の手で販売されたという。バングラップのひとびとは、バングワの市で、サトウキビやラッカセイを販売した。バングラップの南西に位置するバズーの市では、ヤシ油などが主要な取引商品であった。

当時これらの市を巡回し、商売をしていた老人Mは、その商売の目的は婚資のためだったと語る。しかし、その目的がなんであれ、彼のように定期市を巡回していたひとびとは、どの市で何を購入し、どの市で再販すればいいかを知り尽くしていた。ここで養われるのは、効率よく金銭と商品を「回して」利益を得る手腕である。商人自らの移動距離はせいぜい30キロ四方であるが、自分の社会周辺を頻繁に移動し、モノとカネを回すことで利益を得るバミレケ・ランドでの商売手法は、都市の「モダンな」企業家になるためにも有効であった。都市では、婚資のためだけでなく、資本蓄積と事業への投資という新たな目的

⁴³ 現在でも、多くの定期市は8日周期で開かれているが、バンガンテの定期市のように7日周期もある。植民地期に確立したこのバンガンテの市は、ひとびとに「国家の市（ntane gopna）」と呼ばれている。

⁴⁴ 北から来る商品はバムン王国経由であり、バムン王国がハウサ商人を介してアダマワのフルベ首長国から輸入していたものである（和崎 1987b: 164）

⁴⁵ Mは、1998年の時点で自称82歳ではあるが、隣の首長国バンガンテとの戦争に行った経験を持つ。記録に残っている20世紀初頭のバングラップ＝バンガンテ間戦争は、1904年である（Chilver 1981: 473）。10代のはじめに戦争に行っていたとしても、100歳近い年齢が推定できる。聞き取り：1998年7月6日・バングラップ。

が生まれてくる。このような自由な商業空間は、首長や貴族が中心的に、妻や土地を蓄積していたヒエラルキー社会においては存在しなかったのである。彼らは村外移住という地理的移動により都市という新しい空間を得て、「農民」から「企業家」へと社会的移動を果たしていったのである。

第2章 ヤウンデへの移住と都市空間

第1章ではバミレケの村外移住 (émigration) を考察したが、本章では首都ヤウンデへの移住 (immigration) と定着の過程を考察する。第1節では、バミレケがヤウンデを自分たちのものにしていく、都市の「バミレケ化」と呼びうるような側面に焦点をあて、第2節ではその逆にバミレケがヤウンデにおいて「よそ者」にされる側面に焦点をあて、バミレケ都市居住者のヤウンデにおける両義性を明らかにする。

第1節 都市のバミレケ化

1 ヤウンデの都市化¹

カメルーンには、ヤウンデ以外にドゥアラという大都市があることはすでに述べた。他の多くのアフリカ諸国では、首位都市 (Primate City) のみが突出して巨大化する現象が起きているので、ヤウンデとドゥアラという二つの大都市を抱えるカメルーンは例外的な国といえる。港に面したドゥアラは経済首都、ヤウンデは政治首都と言われ、両都市の機能には違いがある。ここでは、ドゥアラと比較しながらヤウンデの都市化を考察する。

ドゥアラは植民地期に拡大したが、それ以前から都市としての機能を果たしてきた。しかしドゥアラは、序章で述べたAタイプの都市ではなく、ヨーロッパとの交易を通じて都市形成がなされてきた。ドゥアラは沿岸部にあり、14世紀のはじめ頃から人口が密集しはじめ、15世紀頃からポルトガル、オランダ、イギリス、フランスなどヨーロッパ諸国と交易を行ってきた。この時期ヨーロッパ人が「カメルーン」と呼んだ地域は、このドゥアラ周辺部を指し、町は「カメルーン・タウン」と呼ばれていた。ドイツによる植民地化以降の1901年、ヨーロッパとの取引を支配していた先住民ドゥアラ (Duala) にちなみ、

「ドゥアラ」と名称が変更された。植民地化の際、ドゥアラにあったドイツやイギリスの商館は、その拠点となった。ドイツは1902年にブエアに首都機能に移転させたが、経済中心地としての機能はそれ以降もドゥアラが保ち続けた (Mainet 1985: 19-24, 53-75)。1909年には、その100キロ北にあるプランテーションの中心地ンコンサンバまで、1914年には

¹ この項の地名については、図2を参照のこと。

同じくプランテーション地域のエゼカ (Eseka) までが鉄道で結ばれ、ドゥアラの経済的
重要性はますます高まった。

一方ヤウンデは、ドイツによる保護領化 (1884年) の5年後、ドイツ軍の「ヤウンデ駐
屯地 (Yaoundé-Station)」として建設されたのがはじまりである。このあたりは、エウォ
ンドというエスニック・グループの居住地域であった。「ヤウンデ」の名称の由来は、
「エウォンド」であると言われる²。当時は、沿岸部からヤウンデまで徒歩で11日から14
日もかかり、ヤウンデまで自動車道路がようやく開通したのは、1913年になってからで
あった。ドイツによるヤウンデの建設の目的は、軍事的なものと同時に、そこを北部や東
部への交通や商取引の拠点にするためでもあった。それをあらわすように、すでに1895年
にはヤウンデにドイツの在外商館がおかれていた。1920年にはこの地域にカカオが導入さ
れたが、大規模なプランテーションは建設されなかった。ヤウンデはその当時ドゥアラの
西南にある沿岸都市クリビ (Kribi) と道路で結ばれていたが、1927年に鉄道がひかれ
ドゥアラと結ばれてから、本格的に商業が活発化した (Franqueville 1984: 7-9)。

ドイツは1901年にドゥアラからブエアに首都を移転させたが、1909年にブエアで地震が
起き、再びドゥアラに首都を戻した。第一次大戦後、ドイツにとってかわったフランスは、
ドイツが再び攻めてくることを想定し、海岸都市ドゥアラから内陸のヤウンデに本拠地を
おくようになり、1921年正式にヤウンデを首都に定めた。ヤウンデは海拔750メートルの
高地にあり、ドゥアラなどの海岸部に比べると、湿気や暑さの点でもヨーロッパ人にとっ
て快適であった (Franqueville 1984: 10)。

このように、ヤウンデもドゥアラも植民地期にそれぞれ政治的、経済的役割を担ってき
た実績があり、独立後もそれぞれ人口を増加させている。しかし、両都市が圧倒的な人口
を持つようになるのは近年のことである。例えばヤウンデの人口は、表II-1のとおり急速
に増えている。この急激な人口増加は自然増加ではなく、各地からの流入が第一の要因で
あることは明らかである。ヤウンデ生まれの者でもせいぜいが3世代目で、彼らのほとん
どはまだ年若い。

ドゥアラにおいてもヤウンデにおいても、人口の第1位を占めるのはバミレケである
(表II-2a、表II-2b参照)。ドゥアラで第4位の位置を占めている「ベティ (Beti)」は、

² 現在も、ヤウンデの地区名称にはエウォンドの言葉が多く用いられている (Mvog-Ada, Nkom-Kana, Nkol-Bikok, Nko-Ndongoなど)。例えば、ヤウンデ南部の地区名「ンボガダ (Mvog-Ada)」は、エ
ウォンドの言葉で「アダー族」という意味である。

ヤウンデやその周辺のエスニック・グループであるエウォンド、エトン（Eton）などのグループを総称するカテゴリーである（表II-2a参照）。ヤウンデの場合も同様にエウォンド、エトンと合わせてベティというカテゴリーで見ると合わせて35%を越え、バミレケは第2位になる（表II-2b参照）。しかし、バミレケの人口増加率は他のエスニック・グループよりも高く、1976年以来エスニック・グループごとの人口統計が行われていないため不明であるが³、バミレケの占める人口比が現在より一層高くなっていることが推測できる。

ドゥアラを研究している地理学者メネは、「彼ら（バミレケ）が示しているダイナミズムは、ドゥアラの都市システムの主要な要素の一つを構成している」（Mainet 1985: 16）と述べている。人口の多いバミレケは、都市に多大な影響を及ぼすエスニック・グループと考えられる。しかし、彼らの都市での重要性は人口だけでなく、その活発な商業活動にある。

では次に、どのような経験を経てひとびとがヤウンデに移住してきたのか、個人とその商業活動に焦点を絞って考察する。

2 個人の移住軌跡

カメルーンで人気のあるバミレケの歌手タラ・アンドレ=マリー（Tala André-Marie）の曲に、「ジュ・ベ・ザ・ヤウンデ（Je vais à Yaoundé: 私はヤウンデに行く）」という歌がある。

お百姓さん 学生さん 運転手さん お嬢さん
あなたは夢見ていたその幸福をいつでも追い求めることができるのです
さあ あなたの幸福を探しなさい
毎日の生活のなかで その一瞬に その毎日に
神があなたをおいたその場所で
わたしはヤウンデに行きます 首都 ヤウンデへ
わたしはヤウンデに行きます 首都 ヤウンデへ
ミフィを ンデを通して

³ 他のアフリカ諸国と同様、カメルーンではエスニック・グループごとの人口統計は政治問題化するおそれがあり、現在は行われなくなっている。

バンジュンからバフィアへ

わたしはそこで よりよい生活を探すのです

1960年代から70年代にかけてヒットしたこの曲は、カメルーン経済が安定し希望に満ちていた頃のひとびとの、首都ヤウンデへの移住とその希望を歌っている。ミフィ、ンデ、バンジュンはバミレケ・ランドの地名であり、バフィア（Bafia）⁴は、バミレケ・ランドからヤウンデへの道程にある小都市である。つまりこの曲は、バミレケのヤウンデへの移住がテーマであるが、カメルーン各地で流行したことを考えると、首都ヤウンデへのこのようなあこがれはカメルーン人全般に共有されていたとみなすことができるだろう。

カメルーンの経済悪化がすすみ、歌詞にあるように「よりよい生活を探す（chercher une vie meilleure）」ことは困難になっても、その希望が尽きたわけではない。今でも多くのひとびとは、「よりよい生活を探す」ためにヤウンデに来るのである。

ところで、バミレケ移住民といっても、それを一括りにすることは難しい。なぜなら現在も移住は継続中で、第1世代といっても、数十年前に移住をした老年層から、新参者の若者までさまざまだからである。ここでは、移住民を年齢によって分類しながら、その傾向を見てみる。

（1） 60歳以上

1960年の独立以前にヤウンデに来た世代には、前章で述べたように、プランテーション地域を経てヤウンデにやって来るパターンが多い。

（事例1）⁵

Aは、自宅で酒類の小売店を営んで暮らしている。Aは1918年、G村に生まれた。G村ではミッションが経営する学校に通ったが、9歳の時プランテーション地域の町ンコンサンバで看護士をしていた兄に呼び寄せられ、そこで学校に通った。15歳の時、「すでに成長し過ぎていて、学校から追い出された」ので、いったん故郷のG村に戻った。18歳の時、兄が貯金でンコンサンバに畑を買ったので、そこで2年間働いた。

⁴ 図2参照。

⁵ 聞き取り：1997年2月9日・ヤウンデ。

そのあとドゥアラで憲兵をしていた別の兄を頼ってドゥアラに行った。そこでは同郷の商人の元で働いた。2年後の1939年、その兄が死亡し、Aはヤウンデに移り、G村出身者の家に居候をした。ドゥアラの商人に信頼されていたAは、彼との商売を再開した。港町ドゥアラから魚をヤウンデに運んで売り、売上金をドゥアラに送った。1943年には自分の資金で家を建て、居候をやめ、結婚した。

彼のヤウンデまでの軌跡は、

G村（出身村）→ンコンサンバ→G村→ンコンサンバ→ドゥアラ→ヤウンデ（1939年）

である。Aの話で、1930年代にはすでに、バミレケがドゥアラやヤウンデで商売を活発に行っていたことが確認できる。

（事例2）⁶

P村に1930年頃に生まれたBは、現在ヤウンデのあちこちに不動産を持ち、中学校の経営もしている。1941年までP村で小学校に通っていたが、落第して学校を辞めた。村では学校に通いながら、鍛冶をして、剃刀の刃などを作り販売していた。その後、ンジョンベ（Ndjombé）というプランテーション地域で労働者として働いた。1949年からは、フランス人が経営するカカオ・コーヒー販売店で雇われ、売り子として働いた。2年後の1951年、経営者からヤウンデ支店に転勤を命じられ、ヤウンデに来た。Bは1955年までその店で働いたが、給料未払い問題で辞職し、同郷の知人の家で3年間の居候をした。1959年、自分の蓄えで商売を始めた。商売開始まで時間がかかったのは、当時「営業許可」がないと商売ができなかったためである。彼の商売は順調に成長した。

彼のヤウンデまでの軌跡は、

P村（出身村）→ンジョンベ→ヤウンデ（1951年）

である。彼もまた、ンジョンベというプランテーション地域を経由している。

独立前にヤウンデに移住した者のなかには、反フランス武装闘争から避難して来た者も

⁶ 聞き取り：1998年7月17日・ヤウンデ。

いる。バミレケ・ランドがゲリラ戦にみまわれた当時、多くのひとびとがヤウンデやドゥアラなどに避難し、そのまま残った。

(事例3)⁷

ヤウンデ最大のモコロ市場で、空き瓶商をしているCは、1936年、J村で生まれた。小学校を止めた後、村で屋台の軽食屋を始めた。16歳の時、オーンカム県の県都バファンに行った。そこで、フランス人の会社に勤務する兄を頼り、6年間を過ごした。バファンでは、「モーター・ボーイ」と呼ばれる、長距離運送トラックの助手として働いていた。1958年ゲリラ戦が激しさを増したため、Cはヤウンデに嫁いでいた妹を頼りヤウンデに来た。Cはそのままヤウンデに残り、妹の家に合計8年間下宿し、その間に貯金して自分の家を建てて独立した。そのまま、現在もヤウンデで暮らしている。

彼の軌跡は、

J村(出身村)→バファン→ヤウンデ(1958年)

である。

この三人の特徴は、プランテーションや他の町を経てヤウンデに来ていること、またヤウンデに来た当初は居候をし、生活費を浮かして貯蓄をしている点である。都市におけるバミレケの長期の居候は有名である。彼らはその居候を経て、自宅を購入して移り住む。ドゥアラのバミレケ地区として有名なニュー・ベル(New-Bell)での調査によると、バミレケは他のエスニック・グループに比べ持ち家率が最も高く57.4%であり、38.2%が居候で、借家に住む人は4.4%にすぎなかった(Diziain et Cambon 1960: 146-155)。現在、不景気なこともあり、長期居候はかつてより困難になっているが、「不経済」な家賃支払いを避けるための居候は広く見うけられる。

(2) 40～59歳

⁷ 聞き取り：1997年6月23日・ヤウンデ。

植民地から独立し、自分たちのものとなった首都ヤウンデは、ますます多くのひとびとを引きつけた。以下は、景気が概ね良く、ヤウンデが希望に満ちていた時代に移住したひとびとの事例である。

（事例4）⁸

家の建築資材の岩を砕き、販売する仕事をしているDは、1947年T村で生まれた。Dは15歳の時バファンに行き、学校に通った。しかし父親が死亡し学費が払えず、マンジョ（Manjo）というプランテーション地域で、コーヒー摘みの仕事を2年間行なった。その貯金で、バファンに戻り運転免許を取得した。二十歳の時に、オジを頼ってヤウンデに来た。免許をいかして、魚屋の運搬の仕事を見つけた。Dは、ヤウンデに来た当時のことを次のように語る。「みなヤウンデが首都だと聞いて喜んでいたし、僕もとても嬉しかった。ここには、小さな甘いお菓子とか、パンとか、村にはないようなものすべてがあった」。その後さまざまな職業を経たが、結婚して子どももでき、ヤウンデにずっと暮らしている。

彼の軌跡は、

T村（出身村）→バファン→マンジョ→バファン→ヤウンデ（1967年）

である。

（事例5）⁹

ヤウンデ北部にあるエトゥディ（Etoudi）市場で、裏地や刺繍糸を販売しているEは、1948年H村で生まれた。9歳の時、ヤウンデにいた母方オジの家に引き取られた。ヤウンデに来たのは、母親がEをヤウンデの学校に通わせたかったからで、自分の意志ではなかった。Eは19歳になるまでオジの家で暮らし、その後は学校に通いながら物売りをし、自分の生活費と学費を捻出した。その後、独立して商売をはじめ現在に至る。

彼の軌跡は、

⁸ 聞き取り：1997年6月3日・ヤウンデ。

⁹ 聞き取り：1997年11月11日・ヤウンデ。

H村（出身村）→ヤウンデ（1957）

である。彼はわずか9歳で親の意志によってヤウンデに来ている。近年、彼のように、親の希望で幼少期にヤウンデに来る者は多い。

（事例6）¹⁰

ヤウンデ南西部のムフンディ（Mfoundi）市場で買い物袋を売っているFは、1947年生まれである。G村で生まれ、初等教育を終えたが、1972年に父親が死に、ヤウンデに暮らしていた異母兄弟を頼ってやって来た。そこに7年間居候し、その間に貯金をし、自分の家を建てた。ヤウンデに来て3年間は、兄弟の薪売りを手伝っていた。その後、中国大使館で2年間夜警をし、失業すると、靴下の行商、みやげ物店経営など、いろいろな仕事をして今に至る。

彼の軌跡は、

G村（出身村）→ヤウンデ（1972年）

である。彼もその前の事例5のEも、ヤウンデに直接やって来て、そのまま暮らしている。この年代になると、直接ヤウンデにやって来る者が多くなるようである。

（3） 20～39歳

80年代に始まった経済危機以降も、ヤウンデは多くのひとびとを吸収し続けている。この世代の多くは、80年代以降にヤウンデに来た者が多い。

（事例7）¹¹

ヤウンデの西部メレン（Mélén）市場で、穀物の粉ひきをしているGは、1968年M村で生まれた。16歳まで学校に通っていたが学費が続かず、村に近い町バンブトス県の県都ブダ（Mbouda）に通い、溶接の徒弟をした。2年間徒弟をした後、自分の工房を開こうとしたが機械を購入する資金が足らず、1986年にオジを頼ってヤウンデに来た。オジの勧めでまず、荷車での運搬の仕事をして資金を稼いだ。その後、

¹⁰ 聞き取り：1997年8月6日・ヤウンデ。

¹¹ 聞き取り：1998年1月27日・ヤウンデ。

自分の事業を始める。彼は、「ヤウンデはカネを探すところ」と言い切る。

彼の軌跡は、

M村（出身村）→ヤウンデ（1986年）

である。カネを稼ぐため親族を頼りヤウンデに直接来るのが、現在多くの若者に共通する移住の軌跡だが、Gの軌跡はその典型であると言える。

（事例8）¹²

ヤウンデ東部エソスでタイヤ修理・販売業をしているHは1963年、ルム（Loum）で生まれた。ルムは、ムンゴのプランテーション地域である。Hの両親は、彼が生まれる前にルムに移住していた。両親の出身村はK村である。Hはルムで、学校に通いながら畑仕事を手伝っていたが、15歳の時ドゥアラへ移住した。そこでバーの店員として働いたが、カネを横領したとオーナーに疑われ失職。その後、行商を3年ほど続ける。ドゥアラには合計11年過ごし、1990年にヤウンデへ来た。

彼の軌跡は、

ルム（両親の移住先・彼の出身村）→ドゥアラ→ヤウンデ（1990年）

である。Hの世代ではすでに両親が村を離れ、移住先で2世として生まれた者がいることがわかる。

（事例9）¹³

ヤウンデ中心部の路上で、粗末な小屋を建てて服を販売しているIは、1976年、W村で生まれた。村では学校に通い、学校をやめた後は日給500～1,000フランの日当で農作業をし、1年半がかりで10万フランを貯めた。その資金で商売をしようと、1997年、ヤウンデに来た。ドゥアラには多くの「兄弟¹⁴」がいたが、あえて知り合いの少ないヤウンデに来た。「良いところだ」という評判を聞いていたからである。

¹² 聞き取り：1998年6月5日・ヤウンデ。

¹³ 聞き取り：1997年8月6日・ヤウンデ。

¹⁴ この事例に限らず、カメルーンにおいて「兄弟（frère）」と言う場合、イトコや同郷の友人などを含む広い範囲の交友関係を指す。「姉妹（soeur）」も同様の使われ方をする。

ヤウンデにいた異母兄弟が、長距離バスの発着所まで迎えに来てもらった。その異母兄弟の勧めで、彼の店の隣に小屋を建て、並んで商売を始めた。商売を始める資金は、村で稼いだ10万フランの半分を充てた。

彼の軌跡は

W村（出身村）→ヤウンデ（1997年）

である。Iのように、都市での開業資金を村で稼ぐ者も増えている。

（4） 10代

次に、10代の少年たちを見てみよう。この年代の子どもたちは、ヤウンデ生まれの者もかなりの割合で増えているが、ここでは村で生まれた少年の事例をあげよう。

（事例10）¹⁵

ヤウンデ中の市場を回り、買い物客や売り子が使うビニールの買い物袋を売り歩いているJ少年は、1981年にN村で生まれた。村で小学校に通っていたが、両親が学費を支払えなくなり、Jが7歳の時、ドゥアラに嫁いだ姉のところに引き取られ、そこで学校に通った。10歳になると、Jはヤウンデにいる兄のところに引き取られた。そこでは学校に行かず、2年間家の手伝いなどをしていたが、その後兄の薦めで行商を始めた。

彼の軌跡は

N村（出身村）→ドゥアラ→ヤウンデ（1991年）

である。Jは幼かったため、すべての移住は彼の意志ではなく、家族の都合で決定されている。

（5） 女性

¹⁵ 聞き取り：1997年6月11日・ヤウンデ。

最後に、女性の軌跡を見る。女性は、男性ほど、自分の意志で都市にやってくることはない。

(事例13) ¹⁶

ヤウンデの中心街で本屋を経営するQは、1954年、K村で生まれた。しかし、Qがわずか5歳の時、両親の都合で、共にヤウンデに移住した。父親は教師で、母親は商売をしていた。幼少期から母親の商売を手伝いながら、ヤウンデで育った。

彼女の軌跡は

K村（出身村）→ヤウンデ（1959年）

である。

(事例14) ¹⁷

ヤウンデの官庁街で伝統薬の樹皮を販売しているRは、1960年、O村で生まれた。幼い頃から、母親の弟で技師をしていたオジについて、ブダ、ンコンサンバ、ドゥアラ、ルムと住むところを変えて育った。そのあと、極北部州のマルアにいた時、軍人の夫と出会った。北部州のガルアで結婚をし、夫の転勤に伴い、1988年ヤウンデにやって来た。当時は、夫と共に、夫のオジの家に居候をした。

彼女の軌跡は

O村（出身村）→ブダ→ンコンサンバ→ドゥアラ→ルム→マルア→ガルア→ヤウンデ（1988年）

である。すべて、彼女の意志ではなく、母方オジと夫という二人の男性の選択によるものである。

QやRのように、家族の都合で都市にやって来る女性が多いが、次の事例のように自分の意志でやって来る者もいる。

¹⁶ 聞き取り：1998年7月20日・ヤウンデ。

¹⁷ 聞き取り：1997年6月・ヤウンデ。

(事例15)¹⁸

ヤウンデのモコロ市場でラッカセイを販売しているSは、1977年G村で生まれた。村で学校に通い、またその後は畑仕事をし、農作物を販売するなどして過ごしていたが、二十歳の時ヤウンデにやって来た（聞き取りの時点では、来てから3カ月目であった）。彼女の両親はすでにヤウンデに暮らし、家も建てており、村で彼女は姉と祖母と暮らしていた。彼女は、姉と連れだって両親のもとにやって来た。商売が上手くいく限り、村に帰らず、ヤウンデで暮らしたいと考えている。

彼女の軌跡は

G村（出身村）→ヤウンデ（1997年）

である。このSのように、両親はすでにヤウンデにいながら村で育ち、両親の後を追うように都市へ移住するパターンはしばしばある。都市に暮らす親が、自分の娘や息子が成長し、手伝いができる年頃（5、6歳）になると村の祖父母に預ける習慣が、バミレケのあいだに存在するからである。

これらの事例は、一人一人がさまざまな背景を持って、ヤウンデに移住していることを示す。ヤウンデに来る理由は現在多様化しているが、やはりその大多数は村とは違う何か、つまり「よりよい生活を探して」やって来る。しかしだからといって、ヤウンデという場所が、彼らの前に「よい生活」を差し出してくれるわけではない。あくまでも彼ら自身がそれを探さねばならない。バミレケ移住民たちが志向する「よりよい生活」の条件の一つは、事例にもあったように、自分の家をヤウンデに持つことである。次の項では、バミレケによるこうした不動産購入について考察する。

3 「土着民」の悲劇

先にも述べたように、ヤウンデにはエウォンドという「土着民（autochtone）」がいた。彼らはヤウンデ「土着民」と言われるが、ヤウンデの北約70キロを流れるサナガ（Sanaga）川を越えてやって来たと言われ、もともとはその川よりも北の地域にいた。エ

¹⁸ 聞き取り：1997年5月26日・ヤウンデ。

ウォンドがヤウンデに来る以前、そこにはバッサ (Bassa) がいた。ドイツのヤウンデ到着当時、エウォンドは北部の牧畜民フルベの攻撃により南下している最中であり、玉突きのようにバッサはヤウンデから追いたてられた。エウォンドの南下は、ドイツの植民地化により止まった。このため、バッサとエウォンドの境界は川も山もない不自然な場所に引かれている。

ヤウンデにいたエウォンドは、ヤウンデがドイツの軍事基地となり、また都市化していくなかで、土地問題に巻き込まれていった。大木や山、川などの自然環境でゆるやかな境界を維持していた彼らの領土は、都市化により一変する。さらに土地登記が要求され、行政側が要求した土地は手放さざるを得ず、彼らは次第に周辺化されてゆく。その後都市が發展するにつれ、ヨーロッパ人のみならずカメルーン各地からも移住民が増えたが、土地所有概念を発達させていたのは「土着民」エウォンドより移住民たち、特にバミレケであった。南下している最中であったエウォンドにとって、土地は無限に広がっていた。独立した息子は家族を連れ、どこに移住してもよかった。一方バミレケ社会は第1章でみたように、人口密度が高く、小さな土地にいくつもの首長制社会がひしめき、領土拡張の争いを繰り返してきた社会である。首長制社会内部においても、原則的に土地は首長や貴族のものである。一般のひとびとにとって、土地は手に入りにくい資源であり、またそれだけに価値を持っていた。それに加えて、プランテーション地域を経て来た者たちは、地主、農園主となれば、どれだけ利益があがるのかを十分心得ていた。バミレケ移住民は土地の価値を知り尽くしていたのである。そのため、彼らは積極的に不動産を購入した¹⁹。ドンモはその状況を、「すべての人 (バミレケ) がこれを実行した。勤め人も、職人も、商人も、公務員も」と描写した (Dongmo 1981 vol.II: 238)。1976年の統計によると、ヤウンデ全体で家の賃貸者は46%、家の所有者は32%であった。土地を売る者もいたが、やはり地元民エウォンドは持ち家率が高く、約50%に上った²⁰。しかし移住民であるバミレケも、エウォンドと同じく約半分が持ち家に住んでいた (Franqueville 1984: 54-55)。フランクヴィルはそこに、「バミレケの都市化への意志」を見ている。

この現象は、ドゥアラでも同じであり、地元民ドゥアラもまたバミレケに土地を売っ

¹⁹ ヤウンデでは、バミレケがいかに狡賢く、エウォンドから土地を奪ったかという話が聞かれる。例えば、「エウォンドが土地の価値を認識していないことを良いことに、バミレケは飲み物や食べ物を振る舞い、友人になりすまして土地を奪った」、「ゴムでつくった巻き尺で土地を計測した」、「買った土地に打ちこんだ境界の杭を、夜毎こっそり広げた」などである。

²⁰ この数には、土着民エウォンドだけでなく、移住民エウォンドも含まれる。

てきた。今日、ドゥアラとエウォンドには奇しくも、先祖の土地を売って暮らす「怠け者」というレッテルが張られている。彼らにとって、自分の「村」がドゥアラやヤウンデという大都市になってしまった今、故郷を守ることは簡単ではない。そのことについて、あるエウォンドの老人は次のように語った²¹。「一人の土地所有者がいて、彼の月給が5万フランだとして。誰かが彼の土地1区画に10-20万フランを提示すれば、彼は売ることをためらわないだろう。そして西部州からの人間（バミレケ）が10万から100万を支払うと、そのような金を持ったことがなかった所有者たちはおかしくなってしまう」。一人のエウォンドとして、このような土地売却の歴史をどう思うか彼にたずねると、次のように話した。「彼らはそうしなくてはならなかったように、彼らの人生を送ったのだ。売ることに抵抗しようとした者たちも、強制された。例えば、今ある問題を解決しなくてはならないとか、家を建てなくてはならないとか、そういう時は、土地を売るしかなかった。それぞれがその時代の現実を生きた。将来などわからなかった。一軒の家も建てることなく、自分の土地すべてを売る者もいた」。

バミレケの土地購入の勢いは今も衰えていない。都市の持ち家はバミレケにとって重要な関心事である。事実、それほど豊かでない人も、余裕があればまず家を建てる。それは、家賃という大きな出費を節約するという経済的な目的が第一に優先されるからである。富裕な者たちは、それを一歩進め、賃貸用の家を建て、そこから収入を得る。不動産購入は、都市で生活するうえで、彼らにとって重要な課題である。交通の便が良い郊外は、バミレケが土地を買い、家を建てていく。このような彼らの不動産への投資は、まぎれもなくヤウンデを発展させてきた一つの要因である。換言すれば、ヤウンデはバミレケによって大きく発展してきたのである。

しかし、バミレケは都市化への貢献にもかかわらず、次の節で述べるようにヤウンデ、あるいはカメルーンのなかで、中心的な立場にはいない。

第2節 「よそ者」としての都市生活

1 エスニック・グループと居住

ヤウンデの人口はカメルーン国内のさまざまなエスニック・グループに加え、チャド、

²¹ 聞き取り：1998年5月11日・ヤウンデ。

中央アフリカ、セネガル、ナイジェリアなど他のアフリカ諸国出身者、フランス人などヨーロッパ系、レバノン、シリアといったアラブ系など、多様なひとびとから構成されている。それぞれのエスニック・グループの移住背景は異なり、住み分けが起こる。大まかに言って、ヤウンデの北西地域にバミレケをはじめとするカメルーン西部地域からの移住民が、そして中心部をはさんで南側に「土着民」エウォンドや南部からの移住民が暮らすという傾向がある。しかし、カメルーンには200を超えるエスニック・グループがあるとされ、それぞれのグループが集住しているわけでない。ハウサ地区、バミレケ地区と呼ばれていても、そこには多様なエスニック・グループが隣り合って暮らしている。

特定地区と特定エスニック・グループの結びつきは、ヤウンデの人口増加に伴い弱まる傾向にある。ヤウンデは郊外に膨張し続け、立地のよい地域はどんどん開発される。そのような新興住宅地には、経済的に余裕のある層が自宅を建てて移り住む。このように、エスニック・グループより経済的階層によって居住空間が再編成される傾向は、今後続くと思われる。

2 カルチェとは何か

バミレケをはじめとする、ヤウンデのひとびとの多くが日常生活をおくるのは、「カルチェ (quartier)」という場所である。カルチェとは「カルチェ・ラタン (Quartier Latin)」で知られるように、フランス語で「地区」、「界隈」という意味がある。ヤウンデ市は多くのカルチェにわけられており、ヤウンデのどこに住んでも実質的には「カルチェ」に住んでいることになる。「どこのカルチェに住んでいるのか？」という問いかけはよく聞かれるが、このカルチェは「地区」の意味である。また、「今日は一日中カルチェにいた」という言葉には、家に閉じこもっていたわけではないが遠出はせず、近隣の知り合いや親戚の家などをぶらぶらしていたことが含意される²²。ここでのカルチェの意味は、「界隈」、「近隣」であろう。

しかし、カルチェの意味はそれだけではない。カメルーンにおいて、カルチェは「白人」が住まない「アフリカ人居住区」のことを指すことがある。カルチェと区別されている場所は、ヤウンデの中心街、あるいは高級住宅街である。この世界こそ、町 (ville) で

²² ちなみに、自分の住んでいるカルチェとは別のカルチェに出かける時は、「マダガスカルに行く」「メッサに行く」という風に、カルチェの名前を言う。

あり、そこは、雨期には泥で滑り乾期には埃が舞い上がる舗装されていない路地と、そこに肩を寄せ合うように家が連なる「カルチェ」とは異なる。筆者がこの「アフリカ人居住区」の一つであるN地区に住んでいた頃、出かけて家に帰る際、近所の人から「君は町（中心街）にいたのか？（Tu étais en ville?）」と挨拶のように尋ねられた²³。彼らはヤウンデという都市（ville）にしながら、しかし町（ville）には暮らしていない。この脈絡では、カルチェは具体的な場所を指し示すというよりも、「アフリカ人居住区」に代表される庶民の都市生活空間を指していることが理解できる。

カルチェにはもう一つの意味がある。ある市場に、知り合いの売り子を尋ねた時のことである。その青年の店が見あたらず、まわりの売り子に彼の所在をたずねると、「彼はカルチェへ帰った（Il est rentré au quartier）」、「彼は今、カルチェにいる（Il est au quartier, maintenant）」という答えが返ってきた。普通の文脈なら、そのカルチェは彼の暮らす地区を指し、彼はその日早々に店じまいをし、すでに家に帰ったという意味になる。しかしこの場合の「カルチェに帰った」、「カルチェにいる」というのは、文字どおりの意味ではない。この表現は、彼は市場での売り子をやめ、その後は何もしていないという失業状況を表していた。この場合のカルチェにいる／いないという表現は、「近隣」や、町と対立した「アフリカ人居住区」にいる／いないではなく、「就業状態」と「失業状態」を意味する²⁴。このようにカルチェとは、一つの具体的な場所でもあり、さまざまな意味を含んだ社会空間でもある。ヤウンデには、「町」にはめったに出ず、カルチェと市場だけで生活をしている人たちも少なくない。

それでは、カルチェは彼らにとって、都市の「村」のようなものであろうか。カメルーン人の社会学者エラは、そのことについて次のように分析をしている。「都市にいる者たちは、自分の村には多くを与える。彼らは、学校、中学校、道路、診療所、世俗的あるいは宗教的な行事のために、金を出す準備はある。（しかし）彼らは彼らが暮らすカルチェのためには何もしないのである。（中略）もし何かしなくてはならないことがあれば、それは自分の村の人、あるいは自分のエスニック・グループの人と共に、である。カル

²³ 「町にいたのか？」と尋ねるのは、こちらが靴を履き、鞆を持っていることを確認してのことである。ビーチサンダルに手ぶらであれば、「町にいなかった」ことは明らかだからである。

²⁴ 「市場にいる」と言えば、文脈によってはただ市場にいるということではなく、「市場で働いている」という意味になる。

チェは彼らの国ではないのである」(Ela 1983: 60-61)²⁵。エラは、彼らの厳しい生活条件が「都市民(citadin)の精神」を作ることの妨げているという。そしてエラは、「都市の現象は実存の次元として受けとめられてはいない。この意味で、我々は我々の都市においてよそ者(*des étrangers*)である²⁶」(Ela 1983: 70)と述べている。

カルチェは、都市でも村でもない空間であり、彼らはそこに愛着や思い入れを抱いていない。しかし、カルチェという空間を作り出したのは他ならぬ彼ら自身である。そこに住むのは「都市民」でもなければ「村びと」でもない。彼らはカルチェをつくと同時に「カルチェの住人」という新しい選択肢をもつくったのである。そしてエラは、そのようなカルチェの住人は、都市における「よそ者」だと見抜いたのである。

3 ヤウンデの首都性

では、カルチェとは異なる本当の「町」とは何であろうか。

ヤウンデはこれまで述べてきたように、カメルーンの首都である。ヤウンデは海拔750メートルの高地に位置し、起伏が激しい(写真II-1参照)。ヤウンデの中心部は、図II-1のとおりである。ヤウンデの都市的機能の中心は、円形のアヒジョ広場(Place Ahmadou Ahidjo)周辺である。広場とは言っても実際のところ、それは7本の大通りが放射状に交差する交通量の激しい円形ロータリーである。カメルーン初代大統領の名を冠したこの広場周辺には、中央郵便局、カテドラル、高級スーパーマーケットなどが並ぶ。この広場から東西南北に道が延びているため、近辺の勤め人だけでなく、タクシーを乗り代える人も集まってくる。そのひとびとを当て込んで、多くの露店が出る。新聞、古本、古雑誌などの書籍、ラッカセイ、オレンジ、揚げ菓子などの食べ物、歯ブラシや手鏡などの雑貨といった具合に、ここではたいいていの物が手に入る。

アヒジョ広場から西へ続く坂道を上れば、大蔵省、文部省、総務庁、厚生省など、多くの官庁が陣取る。役所近くには、にわかづくりの飲食店の小屋が立ち並び、公務員に食事を供している。大統領府もかつてはこの一角にあったが、現在はアヒジョ広場から北へ

²⁵ 筆者も、夏休みに村で清掃活動を行う若者グループが、ヤウンデの自分のカルチェのゴミ問題について関心はないようにふるまう(あるいはあっても何もしない)という現象や、一人一人の家はきちんと掃除を行き届かせているのに、ヤウンデの町やカルチェは決して清潔とはいえないことは、不思議であった。出るゴミの量が違うため一概には比較できないが、村のほうが都市よりも清潔という印象はある。

²⁶ イタリックは著者による。

6.5キロほど離れたエトゥディ（Etoudi）と呼ばれるヤウンデ郊外の地区に移っている。

このアヒジョ広場から延びるヤウンデ最大の通りが、「5月20日大通り（Boulevard du 20 Mai）」である。この大通りには、カメルーンの通信事業を担う会社の建物や外資系ホテルなどが建っている。片側3車線の広い通りだが、普段の交通量は少ない。この大通りはむしろ、独立記念日の軍事パレードなど、国家の大きな催しで使用される。その時には多くの人が集まり、大通りが大広場になる。

同じくアヒジョ広場から延びる、5月20日大通りの一本北を走る「アヒジョ大統領通り（Avenue du président el hadji Ahmadou Ahidjo）」は中央市場（Marché Central）に続く通りで、両脇に店が立ち並び、映画館、ディスコなどがある。交通量も激しく、日中は絶えず混雑している。中央市場では主に衣類や雑貨が売られているが、小売だけでなく卸売店も多い。アヒジョ大統領通りから北へ延びる「ケネディー通り（Avenue John. F. Kennedy）」は、ヤウンデの目抜き通りである。高級店が立ち並び、高所得者や欧米諸国からの者を当て込んだ喫茶店、洋服店、電気店などがある。高級車が駐車されるこの通りには、行き交う物売りや、バケツとスポンジを持った洗車業の少年たち、道に張り出した露店が、猥雑さと活気をもたらしている。ケネディー通りの先にはケネディー広場（Place John F. Kennedy）があり、その一角にあるカメルーン政府公認の土産物販売所では、北部からの革製品や、バムの彫刻や仮面などが売られている。そこから北に坂道をあがれば、ヤウンデ市役所と独立広場があり、東へ行けばサッカーの試合が行われるスポーツ競技場、西へ行けばヤウンデ大学がある。ヤウンデの北部は高級住宅地バストスで、各国大使館や外国人の邸宅が並ぶ。北西部には国際会議場があるが、会議だけでなくコンサート会場や映画館としても使われる。国際会議やシンポジウムで、海外からの客を招く時は、警察などの力を利用して露店は一掃される。

ヤウンデから南に14キロ行くと、国際便が発着するンシマレン（Nsimalen）国際空港がある。大統領が飛行機で国内、国外を移動する度に、大統領宮殿から空港までの道が閉鎖され、数十分から長い時には数時間ヤウンデの交通は分断される。また、ヤウンデの町中では、年中憲兵などによる検問が行われている。そこでは免許証、アイデンティティー・カード（これは常時携帯が義務づけられている）などの書類提示が求められる。書類が揃っていても、思わぬケチをつけられることもある。

ヤウンデの町は、首都機能を果たすために、多くの庶民より一握りの権力者を優先する場所である。政治力を持たないほとんどのひとびとは無視され、ひとたび政治的な行動を

起こすと弾圧される。1992年の初の複数政党制による大統領選挙時には、事実上、現大統領ビヤと野党「社会民主戦線」のフル・ンディの一騎打ちとなったが、ビヤが勝利を収めた。ヤウンデでは、選挙結果の正当性に疑問を持った民衆が抗議行動を行ったが、弾圧された。現在も選挙が行われると、暴動を警戒しほとんどの店は閉店し、人もほとんど出歩かない。しかし、ヤウンデに暮らすひとびとは国家権力に対し常に無力ではない。1991年には、多党制移行手続きに抵抗を示していたビヤ政権に対し、ドゥアラやヤウンデを中心に、野党主導の「死んだ町 (villes mortes)」キャンペーンという、都市居住者による抵抗運動が行われた。この運動（ストライキ、税金支払い拒否、国営の電気・水道会社への支払い拒否など）によって、ひとびとは都市機能を麻痺させ、政府は多大な損失を被り、妥協を余儀なくされた。この運動のさなか、暴徒によってバミレケの商店やガソリンスタンドで略奪が行われた。この時、一部のバミレケの富豪たちは、資産を海外へ移転させたと言われる。「バミレケビジネスに対する都市暴力の背後にあるものは、＜よそ者 (stranger)＞への敵意と、それぞれの＜部族＞は、自分たちの地域を持ち、そのメンバーはそこにとどまるべきだという信念である」(Nyamnjoh & Rowlands 1998: 326)。

このように移住民バミレケは、ヤウンデのなかで「よそ者²⁷⁾」という立場を余儀なくされている。それに対する彼らの苛立ちは、南・中部州出身者が優遇される現ビヤ政権へとぶつけられる。利害が一致し、また社会制度も似ている北西部州（英語圏地域）のひとびととともに、バミレケは反体制のエスニック・グループとして知られる²⁸⁾。彼らはまとめて「アングロ＝バミ（英語圏人＝バミレケ）²⁹⁾」と呼ばれることもある。

4 バミレケであることの政治性

バミレケの「よそ者」化は、「バミレケ問題」(Problème Bamiléké)³⁰⁾として語られる

²⁷⁾ 後にも述べるが、カメルーンで現在政治的争点となっている「よそ者」は「étranger」ではなく、「allogène」であり、これの対をなすのが「autochton (土着民)」である。

²⁸⁾ カメルーンで読まれている反政府系新聞を発行する新聞社の多くは、バミレケと英語圏地域のひとびとによって所有、運営されている。

²⁹⁾ 「アングロフォン (anglophone)」は、カメルーン英語圏地域の人を指す言い方で、ヤウンデにおいては、一つのエスニック・グループであるかのように使用される。同じようなものに、カメルーンのアダマワ県以北出身者を指す「北部人 (nordiste)」がある。「バミ (Bami)」はバミレケの略称。

³⁰⁾ 野党 (U.P.C.) の中央委員会の書記であり政治局員でもあるカメルーン人のンブイナは、バミレケ問題に関する言説を以下のように整理している (Mbuyinga 1989: 129-130)。

1) バミレケは多数派になるために子どもを多くつくり、国中に無数に広がっている。

政治的な反バミレケ主義にもつながっている。時の政権は、バミレケというエスニック・グループを政治化することで、利益を得てきた。「カメルーン経済が苦しいのは、バミレケが富を独占しているため」であり、「カメルーンの銀行に十分な預金がないのは、バミレケの金持ちが銀行に預金せず自分たちで頼母子講を行っているからだ」など、政府の責任から目をそらす言説が巷に溢れる。このような「民族の政治化」³¹は、バミレケの経済力をねたむ他のひとびとの「自然な」反発でないのは明らかである（Kago Lele 1995）。

この「バミレケ問題」の発端は、植民地時代に遡る。カメルーン人の政治運動は、フランスとドイツの争いの副産物として、第二次大戦直前に始まった。ドイツに代わって統治を開始した後もドイツに脅威を感じていたフランスは、1938年、反ドイツのプロパガンダのために³²カメルーン人エリートをフランス＝カメルーン青年団³³（JEUCAFRA : Jeunesse Camerounaise Française）に結集させ、穏健なナショナリスト運動が生まれた。その一方、急進的な独立運動が、1948年に結成されたカメルーン人民同盟（U.P.C.: Union des Populations du Cameroun）によって本格的に着手された。この運動の主な担い手は、

-
- 2) 彼らは働き者でダイナミックであるが、そのことで、彼らがあちこちで土地やその他の経済手段を、しばしば不正なやり方で奪うことが正当化されるわけではない。
 - 3) 彼らはすべて、あるいはほとんどの商業を支配し（あるいは支配しようとしながら）、勝ち誇った金儲け主義を露呈している。
 - 3) 彼らは、国の完全な支配と、他のエスニック・グループを押しつぶす目的で、外国人と結びつきつつある。
 - 5) 彼らは、経済力をすでに獲得し、次に政治的権力を獲得するため、宗教的力を奪取しようとしている。
 - 6) 彼らはエゴイストで党派的である。彼らは他の地域に進出しているが、彼らの地域に他のカメルーン人を受け入れることはない。
 - 7) 彼らの力への意志は明らかである。それは他者への完全な否定の態度であり、自分の部族への激しい肯定である。
 - 8) 彼らのエスノファシズムは、アリストテレス（国家の起源概念）とヘーゲル（権利の哲学）が導入した通常の道筋とは反対の道筋を完成させようとする。
 - 9) 彼らは歴史的（反逆）、文化的（抵抗）、経済的（ダイナミズム）などの理由により恐れを抱かせる。
 - 10) そのため、彼らは政治的決断から排除されている。
 - 11) 我々は彼らを模倣するかわりに彼らをねたむ。我々は、彼らを励ますかわりに彼らを妨害する。彼らが、その地域の土着民が自分たちで改良していく能力がないという説をかきたてても、我々は彼らが他の地域へアクセスすることを拒否する。

³¹ 民族、あるいは宗教の違いを対立や紛争の原因とする安易な図式を退け、違いがいかに政治化され、紛争へと結びつくかを論じたものに、栗本の研究がある（栗本: 1996）。

³² ドイツにとって代わったフランスであったが、カメルーンのひとびとの中には、ドイツ支持の意見があった。また、第二次大戦時には、ドイツに奉仕した多くのカメルーン人がドイツに肩入れしたという。フランス当局は、ドイツの協力者とみなしたカメルーン人を投獄するなどして徹底的に罰した（Joseph 1977: 46-47）。「ドイツが戦争に勝てれば、カメルーンは今頃もっとましな国になっていただろう」という意見は、現在も聞かれる。

³³ 1945年にはフランス＝カメルーン同盟（UNICAFRA: Union camerounaise française）に変更。

バッサとバミレケであった³⁴。彼らは、イギリス領カメルーンを含んだ独立を目指していた。バッサやバミレケ地域に限定された政党ではなく、国家的政党を目指したU.P.C.は、エスニック・グループを問わずひとびとをひきつけ、1949年までは順調に発展していた。しかしそれを危険視したフランス当局は、穏健なエスニック政党をいくつも形成し、U.P.C.の拡張を阻止しようとした。つまりフランスは、エスニック・グループ間に亀裂をつくり、それを操作することによって、民族運動（独立運動）を急進的なものと穏健なものとの間に区別したのである（Joseph 1977: 171-176）。そして、1951年までにU.P.C.は多くの基盤を失っていく。「カメルーンにおいて、当局によるこの政策遂行の成功が、U.P.C.にとって大きな苦しみの源泉であった。実際、U.P.C.は（中略）カメルーンの最も有力な政党になっていたに違いない」（Joseph 1977: 174）。

八方塞がりになったU.P.C.の運動が、1955年からゲリラ戦へと展開した時、それを鎮圧する任務を負っていたフランス人連隊長は、1960年、次のように書いている。

「カメルーンは、やっかいな小石が靴に入ったまま、独立へと進む。その小石は、エスニックマイノリティーの存在である。バミレケは、その由来も原因も明らかではない社会的混乱の虜になっている。事実、バミレケは一つの民族を形成しており（略）、黒人の一つの集団が、力と団結の多くの要因を集結させることは、中央アフリカにおいてそれほどありふれたことではない。カメルーンにおいては少なくとも、バミレケ現象は他に類がない」（Kago lele 1995: 14）³⁵。

バミレケが、カメルーンという国において政治的障害であるというフランスの考え方、また、エスニック・グループを操作し政治目的を達成する手法は、フランスと協調して独立したカメルーン政府にも引き継がれた。初代大統領のアヒジョは「地域的バランス」（エスニック・バランス）政策をとり、それは比較的成功をおさめたが、現在のビヤ大統領政権下においては、1980年代半ばからの経済危機と80年代後半からのIMFの構造調整計画の導入、1990年からの多党制への移行などさまざまな社会の変化のなかで、地域的、エスニック的緊張は高まっている、あるいは現政権が政治的目的のために高めていると言わ

³⁴ その背景として、バッサはドイツ植民地時代、ドイツの侵攻に武力で抵抗し、その反動で第二次大戦まで多くの過酷な経験を経ていた、一方でバミレケは、商業活動やプランテーションを営むなかで、白人との競合関係が顕在化していたことがあげられる（Joseph 1977）。

³⁵ Lamberton (la revue de la défense nationale française, mars 1960)からの引用。

れる (cf. Nyamnjoh 1999; Geschiere & Nyamnjoh 2001)。いずれにせよ、国家政治におけるバミレケの地位には大きな変化はなく、バミレケの商業活動は大目に見るが、政治的な活動は許容しないという政府の姿勢は一貫している。

しかし、バミレケが時の政権から完全に疎外されてきたと考えるのは誤りである。政治家とバミレケ商人のあいだには、裏でさまざまな関係があったと言われる。例えば、アヒジョ政権とバミレケの商業活動と政治の関わりについて、バヤールが次のように述べている。

「独立の最初の数年間において、アヒジョと大臣のヴィクトール・カンガ³⁶、行政機関は、政治的理由のために商業的、税務的、関税的な多くの違反に目をつむり、バミレケ商人の経済的進歩を助けていた（後略）」 (Bayart 1985: 228)。

これはバミレケのダイナミズムの語られない側面であり、現在も続くバミレケの大企業家と政治家の「政治的友好関係」の理由でもある。しかし、バミレケの大企業家が反政府的発言をすると、事業が妨害されるという事例もあり (Kago Lele 1995)、バミレケの企業家はその財力を活かして公然と政治に参入することは稀である。

このように、バミレケの政治参入に対するタブー視は、独立以前から構造化されており、バミレケのダイナミズムを支える内面的な要因の一つとして考えられる。そのような要因があるからこそ、彼らは商人として生きることを選択してきたのである。

近年では、先にも述べたように、ドゥアラやヤウンデでバミレケと「土着民」との緊張が高まっている。ヤウンデの「土着民」エウォンドと、ドゥアラの「土着民」ドゥアラは、バミレケの存在に危機感を募らせていると言われるが、これは、多党制、民主化という政治的「自由化」と連動しているという。カメルーン政治の「自由化」は、カメルーン市民ではなく「土着民 (autochton)」と「よそ者 (allogène)」を生み出し、「土着性 (autochtony)」と「所属 (belonging)」をめぐる政治が蔓延する結果を導いている (Geschiere & Nyamnjoh 1998; 2001) ³⁷。

³⁶ カンガはバミレケで、1960年法務大臣、1961年国家経済大臣を歴任。1966年に、反政府的出版物を出したことで4年間の禁固刑を宣告された。

³⁷ また、人類学者ゲシエールとニャムンジョによれば、「土着民」と「よそ者」を区別する傾向は、カメルーンやアフリカだけでなく、ヨーロッパの外国人排斥主義など、グローバル化する世界に共通の問題であると論じている (Geschiere & Nyamnjoh 2001)。

これまでみたように、バミレケは積極的に移住をし、不動産を購入し、商業を営むことによりヤウンデをバミレケのものにしてきた側面がある。それは都市のバミレケ化と呼びうる。そのため、彼らのなかに「ヤウンデをつくったのはわれわれだ」という思いがあるが、一方で「ヤウンデは自分たちの村ではない」という現実を彼らは知っている。ヤウンデのバミレケ移住民は、何十年暮らしていても「よそ者」なのである。

彼らが「よそ者」であるのは、これまでみたように歴史的、政治的な意図せざる結果とたぶんに関係している。しかしこの「よそ者」性は、彼らが商人として、あるいは企業家として生きていくうえで、必ずしもマイナスではない。なぜなら商売の利益追求において、「よそ者」であることはある種の利点だからである。例えば、「商人のジレンマ (traders' dilemma)」というパラダイムがある³⁸。商人のジレンマとは、農村社会の商人たちが、自己利益の最大化と、当該社会のモラル・エコノミーという両立しないもののあいだにとらわれるジレンマである。つまり、彼らは自分の村びとから多くの利益をあげることは許されず、村との絆をとるか、自分の儲けをとるかを迫られる。村から都市への移住は、そのジレンマ解消手段の一つである (Evers 1994)。

バミレケは、故郷を離れ、都市で「よそ者」として生きていくことを迫られている。それにはしかし、移住先のモラル・エコノミーに縛られずに、「自由に」商売ができるというメリットもあるのである。

³⁸ ドイツのビーレフェルト (Bielefeld) 大学、発展社会学研究センター (the Sociology of Development Research Centre) のメンバーにより1984年に着手された、主に東南アジアの商売に関する調査プログラムの成果として打ち出された (Evers and Schrader 1994)。

第3章 商売の経験

本章では、商人、企業家としてのバミレケに焦点をあてる。

ブルデューはアルジェリアの現地調査から、「下層プロレタリア」からは「資本主義的経済が必要とする性向」は形成されにくく、常勤労働者である「プロレタリア」の方が経済的社会的制約を受けると言うことが減り、その性向を形成する可能性が高いと論じている（ブルデュー 1993）。ブルデューは、下層プロレタリアに含まれる商人について、次のように述べている。「時間と計算にたいする商業の態度こそが、商業を、都市的世界のなかでの、前資本主義的な精神の避難所に行っているものであり、それゆえに、小商人は、小農民に、その生活様式や世界観などの多くの点で、類似しているのである」（ブルデュー 1993: 98）。しかし筆者は、バミレケの場合、資本主義的性向は都市の商業のなかでこそ形成されていると考える。ブルデューも引用しているが、ゾンバルトは「初期資本主義の時期には、企業家が資本主義をつくり、高度資本主義の時期には、資本主義が企業家をつくった」と述べている（ゾンバルト 1990: 257）。バミレケはこの意味でまさに企業家であり、彼らがカメルーンの資本主義をつくってきたと言える。もちろん、当時のヨーロッパの企業家とバミレケの企業家は異なった性質を持っているだろう。ヨーロッパの資本主義と異なり、現在のカメルーンの資本主義はヨーロッパから導入された植民地経済に端を発しているからである。ブルデューは次のように書いている。「西欧の初期の資本主義における経済的行為者とは異なり、経済的従属の状況においては、経済的行為者は、移植されたシステムに適応する他に、選択はない、と考えられるだろう。ところが、実際は、まったく異なった非西欧の文化的伝統で育った行為主体は、強制された機械的で受動的な適応によるのではなく、自ら創意、工夫することによってしか、貨幣経済にうまく適応することはできないのである」（ブルデュー 1993: 13）。つまりバミレケも経済的従属状況にあって自ら創意、工夫することによって、移植されたシステムに適応してきたと考えられる。この章では、バミレケが商売実践を通じてどのように金銭を回すのかを明らかにしながら、そこにどのような価値観、創意、工夫があるのかを考察する。

第1節 独立するプロセス

1 商売の多様性

まず、バミレケの商売における活発さを確認しておこう。表III-1は、バミレケが占める各種事業の割合を示したものである。彼らはその人口に比して、それぞれの事業でかなり大きな割合を占めていることがわかる。彼らが、カメルーン経済を握ると言われる所以である。

ヤウンデに限ってはどうか。ヤウンデ中心街の目抜き通りケネディー通りは、高所得者をターゲットにした店舗が並んでいる。約300メートルにわたるこの通りの商店経営者のエスニック・グループを調べた結果が表III-2である¹。57の店舗²のうち、21店舗（全体の37%）がバミレケであり、2位の韓国人の6店舗を大きく引き離している。韓国人は、ヤウンデの中心街を離れて店舗を構えることは少ない。一方バミレケの商店はヤウンデ中に広がっており、他地域では彼らの比率がより高いことは確実である。

同表で、バミレケの商店が扱っている商品を見ると、最も多いのが衣類で、服飾店が6店舗ある。次が電気製品店で3店舗ある。ゲームセンターとバーがそれぞれ2店舗ある他は、1店舗ずつ別の商売が行われている。それらは、眼鏡店、銀行、写真店、結婚用品店、テレブティック（Téléboutique: 電話取次店）、スーパーマーケット、コンピューター用品店、レストランである。韓国人が経営する商店では、6店舗のうち5店舗が写真店であるのとは対照的である。

このことからわかるように、バミレケの商業の特徴は多様性にあると言ってもよい。ここであがったものの他、大規模なものでは学校経営、ホテル業、映画館経営、運送会社経営などがあげられ、小規模なものに至っては車修理、タクシー運転手、古着屋、古本屋、雑貨店など、枚挙にいとまがない。ここで扱われている事業は、どれをとってもバミレケの「伝統」と結びついているものはない。例えば、牧畜民フルベが牛肉の販売網に中心的な役割を担うような、エスニック・グループの特徴を生かした商売ではない。逆に言えば、バミレケが携わるのは誰もが参入し得る商売である。

つまり、現在のバミレケの商売は、古い歴史を持たず、商売の多様性が飛躍的に増大した植民地期から独立後の数十年の間に展開してきたことがわかる。彼らはめざとく新しい商売機会を見つけ、あるいは作りだし、「バミレケの商売」としてきた。例えば古着商である。主にヨーロッパから輸入される大量の古着は、今ではカメルーン経済のなかでも

¹ 2000年3月調べ。

² ドイツのゲーテ・インスティテュートなど商店でないものも、ここでは店舗の一つとして数えている。

無視できないほどの商品となっている。これは、バチエという村出身のバミレケが始めた事業と言われる。その後、古着市場は瞬く間に新規参入者で飽和状態になったが、今でも古着商の多くはバミレケである。またテレブティックは、家に電話をひく余裕のないひとびとが多いなか、客に電話を取り次いだりかけさせたりする公衆電話のような商売であるが、これもバミレケが経営していることが多い。1997年にインターネットがカメルーンで利用可能になると、コンピューターをインターネットにつなぎ、時間単位で客に利用させるサービスが、都市を中心にあっという間に広がった。これも、バミレケが率先して行っている商売である。このように、彼らはありとあらゆる機会にビジネスチャンスを発見し、そこに投資する傾向がある。

バミレケの商売の多様性は、小規模事業では一層明らかになる。インフォーマル・セクター³という用語で研究されてきた小規模事業においても、バミレケの進出は著しい。ヤウンデの露店を調査したフォドゥオップによれば、露店4,135件のうち、2,084件（50.4%）がバミレケの店であった。第2位のエウォンドは12.9%にすぎない（Fodouop 1991: 66）。このような小規模事業の世界には、生活に関わるありとあらゆる業種が存在する。バミレケは、そのほとんどの分野に進出している。

彼らは、小規模事業の中心を担う一方で、多くの成功者たちを出している。小規模事業主と大規模事業主のあいだには、つながりがある。バミレケの成功者は一代で財をなしているが、最初から大企業経営に乗り出すわけではない。人によって異なるが、多くの場合は下積み時代がある。その下積み時代こそが、小規模自営業の時代なのである。

2 子どもへの商人教育

バミレケの企業家としての始まりは小規模自営業であるが、それは子ども時代から始まる場合が多い。統計的データはないが、都市で行商などを行っている子どもの多くがバミレ

³ インフォーマル・セクターは、フォーマル・セクターの対として、統計からこぼれ落ちる小規模事業（経済部門）を指す研究用語として1970年代から使用されてきた（cf. Hart 1973; ILO 1972; Sethuraman 1976）。インフォーマル・セクターは、貧困、スラム化などとともに社会問題として論じられ、当該政府に迫害、排除を受けることも多い。しかし現実には、このようなインフォーマル・セクターこそが、多くの途上国において、庶民の生活を支えている。インフォーマル・セクターを一つの「生き方」としてとらえる小川のような立場もある（小川 1998: 62）。また、ここで論じるバミレケの場合のように、インフォーマル・セクターとフォーマル・セクターの間には必ずしも断絶はない。フォーマル・セクターと呼びうる大企業を経営している者は、インフォーマル・セクターのような小規模事業をステップにしている。

ケであると言われる（写真III-1参照）。

筆者が聞き取りをした子どものなかには、友だちに誘われて商売を始めたという事例もあるが、多くの場合、親の命令による。重要なのは、本人が望んだかどうかは別にして、子ども時代の商売経験は、「貨幣」に対する彼らの姿勢や価値観を決定づけるということである。以下、事例を追って検討する。

（事例1） 揚げ菓子売り⁴

15歳のA少年は、砂糖をまぶした揚げ菓子の行商をしている。両親はヤウンデに住んでおり、彼はヤウンデで育った。5人兄弟の2番目である。両親と、結婚した姉を除く一家6人で暮らしている。父親は仕立屋であり、母親は家で時々小規模な商いをしている。

Aは中学校に通っており、行商するのは週末と長期休暇のあいだだけである。長期休暇中は日曜を除き、毎日行商をする。商品はいつも揚げ菓子とは限らず、母親がアボガドを買ってきた時はそれを売る。自分でチューインガムを買ってきて、それを売ることもある。

揚げ菓子の仕入れは、家の近所の菓子屋からである。Aは朝、その菓子屋に行き、揚げ菓子100個と、150フラン（約30円）を受け取る。その150フランは昼食代である。昼食は途中の市場でとる。揚げ菓子は1個20フランで売るが、Aの利益はそのうち5フランである。100個完売すれば500フランの利益となるが、売れ残ると儲けが減ることをA自身心得ている。「50個しか売れないと、僕には250フランしか入ってこない」とAは説明した。

Aは仕入れの後、朝7時から夕方6時頃まで、揚げ菓子を積み上げて並べた木製の盆を頭に載せ、ヤウンデ中の市場を回って売り歩く。しかし一日中歩いても100個完売することは少なく、たいてい20個から30個売れ残り、Aの1日の手取りは毎日だいたい300フランから400フランである。

Aは8歳の時から行商を始めたというから、商売経験はもう7年になる。商売を始めたのは自分の意志ではなく、母親の命令であった。「その時嫌だと言わなかつ

⁴ 聞き取り：1997年6月11日・ヤウンデ。

たのか？」という質問に、Aは次のように答えた。「もし僕が嫌だと言ったら、新学期が始まって、誰が僕のノートを買ってくれるんだい？僕はこうしなくてはならなかったんだ。ノートを買ってもらえるように」。彼の言っているノート1冊は、だいたい彼の1日の稼ぎに匹敵する。彼の稼ぎは家計にとって、決して小さくはないだろう。

Aは家に帰ると母親に稼ぎを渡す。母親はそのかわり、新学期にはAにノートや靴を買ってくれるという。

Aのように、学費の支払いや学用品購入といった親の負担を軽減させるため、学校に通いながら働く子どもは多い。10月の新学期が近づくと、親たちは出費を控え、なんとか学費を捻出しようとする。そのため、普段はにぎわっている酒場なども閑散とする。その負担軽減のため、Aの事例のように、親が子どもたち自身に稼がせることも多いのである。新学期を後に控えた長期休暇中は、子どもの行商人がどっと増える。彼らは、自ら稼いだ現金が、新学期にノートや靴といった具体的な形として現れるのを見て、貨幣の価値を認識するのである。

（事例2） 紙ナプキン売り⁵

O（14歳）とC（12歳）は兄弟で、焼き魚専門の大きなレストランMで客のテーブルを回り、紙ナプキンが数枚入ったパックを売っている、言わばレストラン内行商である。彼らは小学校に通いながら、放課後と週末に仕事をしている。働く時間は、15時から23時までの8時間である。紙ナプキンは彼ら自身が、中央市場で、いつも決まった卸業者から買い付ける。

彼らは9人兄弟の3番目と4番目である。彼らの両親はヤウンデ在住で、父親は木工職人、母親はプランテン・バナナなどを焼いて売っている。OとCはヤウンデ生まれのヤウンデ育ちであるが、村にある祖父母の家で暮らしたこともある。父親の木工所はあまり客が来ず、家計が苦しかったため、父親が彼らに商売をするように言った。母親から15,000フランの資金をもらい、それでチューインガムのまとめ買

⁵ 聞き取り：1997年9月4日・ヤウンデ。

いをし、売った。このチューインガムの利益で、彼らは紙ナプキン売りを始めた。Mレストランにはイトコがいて、彼がそこで売るように勧めてくれた。紙ナプキンを選んだのは弟のCだった。紙ナプキンを商品にした理由をCはこう語る。

「（チューインガムの商売をはじめたが）あとで、チューインガムが、そんなに儲からないことがわかった。（中略）ある時、一人の男に出会い、彼が紙ナプキンは儲かると言った。僕は紙ナプキンの価格を割って計算した。（紙ナプキン1パックは）650フランで、なかに10個入っている。（利益は）350だった。次の日に町に行った。二人で二つずつのパックを買って売ると、それが上手くいくことがわかった。次に2パック買ったんだ。そして次は箱で買いはじめた。」

紙ナプキンは一つ100フランから125フランで売る。紙ナプキンの10個パックは650フランだが、100個入りの箱を買うと、6,250フランで250フラン安くなる。紙ナプキンを1個100フランで売れば、1箱完売すると3,750フランの儲けになる。多い日には40から50個の紙ナプキンが売れ、1日の売り上げは4,000フランから5,000フラン（儲けは1,500から1,875フラン）になる。

これらの利益の仕組みを説明してくれたのは、12歳のCである。彼は、一度の仕入れ量が多いほど、利益も多くなることを知っている。先の揚げ菓子行商のAもそうであるが、彼らは親に言われて商売を始めたものの、ただ漫然と売り歩くのではなく、利益計算をするようになる。しかしその反面、彼らは稼いだ金銭の行方に執着していない。揚げ菓子のAも、紙ナプキン売りの兄弟も、稼ぎを母親に渡している。紙ナプキン売りのO、Cの母親もまた、彼らの稼ぎで彼らの学費を支払い、学用品を買ってくれるというが、それ以外にも彼女のトンチン（頼母子講）の支払いにも使っているという。母親にトンチンの順番が回れば、彼らに返金してくれるのかとたずねると、兄のOはこう答えた。「そんな大金をどうしたらいいのさ？そんな大金をもらっても、僕は使い方を知らない」。母親のために働いているのかと聞くと、「そう、お母さんのため。なぜなら、それが僕のものだとしても、僕はまだ14歳だ、10,000フランだって、多すぎる」と彼は答えた。しかし、10,000フランといえば、彼らの2日分の売り上げである。彼らはその「大金」を稼ぐ方法は知っ

ていても、使い方は知らないのである⁶。

このように、学校に通っている子どもたちは、自分の学費を支払い、あるいは親を助けるため、わけもわからず商売の世界に放り出されるなかで、金銭の稼ぎ方を学習する。彼らは、利益を増やすには多く販売することが必要であることを覚え、また仕入れを多くし、商品一つあたりの仕入れ値を下げる方法も知る。商品によって利益率が異なれば、より利益の高い商品に変更する。

しかし、このような商売の技法もさることながら、注目されるべきは、彼らが「より多くの金銭を稼ぐことは善である」という価値を内面化していることである。その価値観は、自分で稼いだ金銭が、学用品という目に見える形に変化することで得られるものかもしれない、また日々の商売で、売れないよりも売れる方が嬉しいという遊び感覚から生じるものなのかもしれない。いずれにせよ、「金儲けは善」という考え方が基礎にあってはじめて、商売の技法が体得されるのである。

親たちは子どもに商売をさせる際、必ずしもこのような「商人教育」を意図しているわけではないであろう。しかし、子どもに商売をさせる親の多くが、俸給生活者ではないことは注目すべきである。親自身、働けば働くほど、売れば売れるほど利益が増加することを認識しており、その認識は商売を強いることを通じ、子どもにも伝えられる。ブルデューは次のように述べている。「資本主義的システムにおいて経済行動が要求する物的技術は、よく言われるように、＜生きられた哲学＞と切り離せない。その実際的な哲学は、歴史のなかでゆっくりと形づくられて、公式の教育によってのみならず、家族集団による幼年期の教育によっても伝達される」（ブルデュー 1993: 14）。親の「生きられた哲学」は、商売実践という間接的な商人教育を通じて、子ども自身の「生きられた哲学」として再生産されていくのである。

3 公教育と子ども時代の商売経験

では、子どもたちへのこのような商人教育は、次世代商人の誕生につながるのだろうか

⁶ 親が金銭という形で駄賃をやらないのは、子どもが無駄遣いを覚えるからだと言われる。彼らが金銭の使い方を知らないのは、親がそう意図しているからでもある。モノという形で彼らの労をねぎらうのは親の戦略といえる。

か。以下では、先の事例でみた子どもたちの将来の夢を取り上げる。

まず、揚げ菓子売りAの将来の夢は、「技術者か、弁護士か、医者になること」である。つまりAは、きわめて近代的なエリートに憧れているのである。Aにとって、揚げ菓子行商は、学用品の費用を稼ぐための休暇中のアルバイトにすぎず、実際にAは商売より学校の方が好きだと言う。紙ナプキン売りの兄弟OとCは少し違っている。彼らは商人になるかもしれないが、軍人にもなりたいと言う。軍人も近代的で、カメルーンにおいては最も給与の安定した職業である。彼らには軍人のオジがおり、このオジがOとCを軍人にしてやると言っている。兄のOは言う。「(軍人になるが)化粧品店もやる。バーか、雑貨店でもいい。でも僕は経営するだけで、月に1回おカネを見回るだけ」。この発言に、弟Cも同意した。ここには「かけもち」の概念が現れている。現在、公務員になっても給料が不十分で、副業で給料を補足しようとする者が多い。安定した職を得、その給料をもらいながら商売をする方法は、現在のカメルーンで最も安全かつ「儲かる」方法である。彼らは早くも、そのかけもちのメリットを察知している。彼らには商売を通して「金銭を多く稼ぐことは善」という価値観が内面化されており、それゆえ利益を追究することに執着するが、その「稼ぎ方」には頓着しない。

これらの子どもたちは学校に通い続けている。それは軍人であれ、医者であれ、学歴や資格が必要な近代的成功者になる望みをつなぐことである。教育熱は、カメルーン全体において、とくにヤウンデなど都市部では非常に高い。親は子どもたちに出来るだけ教育を受けさせたいと願っており、それは大卒が就職難の現状でも変わらない。義務教育も有料であり、子どもを学校に行かせることは簡単なことではない。新学期は親たちが金銭のやり繰りに頭を悩ませる時期である。それでも、親が早い時期から子どもを学校に入れたがるのは、落第の多いカメルーンの教育システム⁷において、少しでも早く学校教育を開始する方が良いと考えられているからである。進級試験が近づくと、それほど裕福でない家の子どもたちも家庭教師をつけるなどして、熱心に勉強する。村へ行く長距離バスのな

⁷ カメルーンのエデュケーションシステムは、基本的にフランスのエデュケーション制度を採用しているが、英語圏地域では制度が異なる。フランス語圏地域では、初等教育は5年間、中等教育は前期(日本でいう中学にあたる)4年間、後期(高校にあたる)3年間である。義務教育は6年である。進級試験は非常に厳しく、落第する確率が高い。例えば、90/91年度から97/98年度までの8年間、中等教育前期から後期への進級資格「前期中等教育修了資格(BEPE: brevet d'études du premier cycle)」の合格率は、一度も40%を越えていない(Annuaire statistique du cameroun 1998: 52)。毎年、落第という形で多くの子どもたちが学業から離れているのである。小川は、同様の状況にあるセネガルにおいて、これらの「落ちこぼれ」たちが、インフォーマル・セクター事業主の元で見習いとなるなどして、救われている現状を報告している(小川 1998)。

かでノートを開き、試験勉強をする若者を見かけることも多くなる。

しかし現在は、学歴が就職を保証してくれる時代ではない。就職に失敗した時、軍人や医者になれなかった時、子ども時代の商売の経験や商人教育は生きてくる。そうした経験や教育によって、彼らは方向転換をすることが可能となり、自営業へと参入する柔軟性を持つことができるのである。

ヤウンデの中心街の歩道で、古本の露店を出しているG（34歳）⁸は、ヤウンデ大学に入学し、教師を目指していたが、2年生の時政府の奨学金が廃止され、卒業できずにやめてしまった⁹。しかしそれでも高学歴であることには違いない。彼は退学後、公務員の試験を何度も受けたがうまくいかなかった。すでに結婚し、子どももいた彼は、家族を養うために古本の露店を構えた。言わば、不本意ながら露天商になったわけである（写真III-2参照）。しかしそれから8年、給料がよければ別だが、とりたててどこかに職を得たいとは思っていない。

「僕は、公務員で、しかも比較的高いポストに就いている同級生よりずっと裕福だよ、彼らは僕らをうらやんでいる、嘘じゃない。生活費はどんどん高くなっている。僕らにとって、彼らが受け取る給料は全く話にならない。彼らにとってもそうさ。私立の中学で働いている僕の同級生にとってもね。月に25,000（フラン）とか30,000とかの給料でどうやって生きていくんだい？それじゃ何もできない。高等師範学校を出た同級生もいるけど、僕は彼らをうらやましいとは思わない。学校が休暇のあいだ、ここで僕と一緒に過ごしに来る同級生たち（教師）がいるよ、彼らも自分の露店を開くんだ。彼らにとって、公務員であることは、一つの保証にすぎない。もし僕が彼らのように学士号をとっていたとしても、保証を求めて師範学校に勤めていたとしても、給料は月に10万フランだよ。（彼らは）休暇中、ここで店を開いて本を売る、そして新学期が始まる時には、30万とか40万フランを持って帰れる。僕らはこうやって生きている。彼らがここに帰ってくる時、彼らと僕らのあいだには、違いはないんだ。」

⁸ 聞き取り：1997年6月16日・ヤウンデ

⁹ 1993年の大学改革によって奨学金が廃止になり、学費（年間50,000フラン）が請求されるようになった。

Gのこの発言は、いささか強がっているようにも思える。彼が言うように、古本商は新学期前は繁盛しても、全体的には決して儲かる商売ではないからである。しかし、彼がここで強調しているのは、学歴や社会的地位だけがすべてではないということである。その一方でGは、自分の子どもにも自分と同様高い教育を受けさせたいとも語っている。彼は、大学での知識は今の自分を支えていると考えているからである。

官庁街のある首都ヤウンデの主役は、給料が減ったとはいえ、やはり公務員である。ヤウンデでは一般的に、露店や市場の売り子のような商売に抵抗を持つ人は少なくない。バミレケも例外ではない。照りつける太陽のもとで、いつ来るか知れない客を待っている露天商より、給与遅配が頻繁でも、オフィスでネクタイを締めて座っているひとびとの仲間入りをしたいと多くの人は考える。小規模自営に参入する心理的ハードルは、一般に考えられているよりも高い。特に高学歴になればなるほど、その傾向は強くなる¹⁰。しかし大学まで進学したGには、子ども時代に商売をした経験があった。Gは、中学生の時から学校が終わるとオジの雑貨店を手伝い、大学に入ってから、休みの時はイトコの古本商を手伝っていた。Gが就職に失敗して方向転換することができたのは、彼が子ども時代の商売の経験があったことと無関係ではないだろう。子ども時代に商売経験を積むことは、自営業に参入する心理的なハードルを下げることができるのである。

4 賃労働の経験

カメルーンにおいてバミレケは商人だと言われるが、たとえ商人であっても、キャリアの出発点で賃労働を経験している者は多い。地理学者であるシャンポが、バミレケの商人に、彼らの職歴の出発点について尋ねたところ、直接商売に参入していたのは36人のうち4人に過ぎなかった。4人以外は、被雇用者としてキャリアを開始していた。シャンポは、彼らの賃金生活は自営を開始するまでの一時的なものにすぎないが、開業資金の一部は、賃金の節約によって蓄積されると述べている（Champaud 1983: 271-272）。

しかし賃労働の経験は、それ以外にも重要な意味を持つ。バミレケ移住史で、バミレケが商人であると同時に、活発で勤勉な労働者として評価されていたことは見逃せない。先

¹⁰ セネガルにおいても同様の傾向があり、それについて小川は「教育を受けたという自負心が邪魔をして、どんな仕事でもするというわけにはゆかないということにつながっている」（小川1998: 167）と述べている。

の章で述べたように、プランテーションで最も多く労働者として働いたのはバミレケである。また、都市に流入したバミレケの多くは、まず肉体労働者として生活をたててきた。例えば、フランス植民地時代の1947年に書かれた『ドゥアラにおける労働者に関する小研究』（Guilbot 1949）によると、肉体労働者に占めるバミレケの割合は、全体の75%に上っている（当時のドゥアラ人口に占めるバミレケの割合は15%）。これについてギルボは次のように書いている。

「実際は、バミレケの本当の職業は商業である。このすべての若者たちが、自分たちの山からドゥアラに下りてくるのは、以下の目的のためである。いつか富裕な商人になること。彼らは若くしてボナベリ（ドゥアラの港の地区名）に着くと、港の荷物運搬をし、遠い親戚の家に寝泊まりし、可能になるや否や、小さな物売り台をつくり、仲買人となり、ある日、営業許可を申請する。（略）バミレケの現在の野心は、肉体労働者になることではない。しかしながら、彼らはいつも大量に流入しているため、都市の労働者の重要な部分を構成している」（Guilbot 1949: 33-34）。

バミレケのなかには、ここに書かれているように、都市に来てまず賃労働をし、その時の賃金を元手に自営業を始めた者が多かったのである。彼らは言ってみれば、賃労働に最もよく適応したひとびとであった¹¹。彼らは、植民地経済のなかで、肉体労働者として労働力を売るという過酷な経験をした。そのなかで彼らは労働力の価値を見だし、労働力を売る側は損をし、買う側は得をすることを実感したと考えられる。人を雇用できなくとも、自分の労働力を自分で使用したいという欲望は拡大したであろう。この意味で、賃労働はバミレケにとって、商人となるための重要な経験であった。またそれが、古くから長距離交易に携わってきたエスニック・グループとは異なり、今日バミレケが「モダン」な企業家として成立している理由ではないだろうか。

現在は、植民地時代と状況が異なるが、人のもとで働くことを否定する言説は多い。彼らは被雇用者に甘んじることなく、「いつか自分のビジネスを」という思いを常に持ち続ける。賃労働と独立自営は相反することに見えるが、バミレケの経験のなかではつながっているのである。

¹¹ 公務員に登用されることが多かったエウォンドやドゥアラも賃金労働者と言えるが、プランテーションなどでの肉体労働者とは異なる。

第2節 下積み生活としての小規模自営業

さて、雇用された者たちは、そこで得た資本主義の「真理」と、商売の知識、貯金を手
に自営に乗り出す。なかにはそれまでの仕事を続けながら、副業として自営業を開始する
かけもち組もいる。そしてまた、雇用されるという経験をもたないままに自営業に乗り出
す者もいる。ともあれ彼らの自営はよほどのことがなければ、露店のような小規模な商売
から始まる。この下積み時代から抜け出せるかどうかは、彼らの能力、運、まわりの環境
次第である。下積みのまま人生を終える人も多い。「食べていけるから」、「もう歳だか
ら」という理由で現状に甘んじる人もいる。しかし、多くの場合、特に若者は、現状を下
積みと考え、成功する未来を語る。

小規模経済は研究者のあいだでは一般的に、インフォーマル・セクターと呼ばれるが、
カメルーンにおいては、あまりなじみがない。フランス語圏のカメルーンでは、小さな仕
事という意味である「プチメチエ (petit métier)」がよく使われる。そのプチメチエのな
かでも、さまざまに類別されている。例えば、「バイヤムセラム (buy'em sell'em)」と
いう言葉がある。これはカメルーンの一部の地域で商業語となっている「ピジン・イング
リッシュ」で、「買って売る人」という意味であるが、市場で食糧品を売る女性たちを指
す。自分で商品を買付け、売りさばくたくましい女性の姿がこの言葉から思い浮かぶ。
露店主や行商人などは、「ソヴトゥール (sauveteur)」と呼ばれる。これはフランス語で
あるが、本来の意味である「救助隊員、人命救助者」ではなく、「すぐ逃げ出せるように、
もぐりで」という意味の「à la sauvette」から転じており、カメルーンの文脈では「もぐ
りで、こっそりと商売している者」という意味で使われている。ヤウンデのひとびとは、
「インフォーマル・セクター」よりも気の利いた、イメージ豊かな名称を生み出している。

1 デブルイエ

小さな商売を営むひとびとは、「自分たちでなんとかやっている」あるいは「なんとか
やってきた」ことを強調する。そうした状況は、フランス語の「デブルイエ (se
débrouiller)」という言葉で表現される。セネガルでインフォーマル・セクターの調査を

行った小川は、これまで「ブリコラージュ (bricolage) ¹²」といわれてきたインフォーマル・セクターの諸活動は、むしろ「デブリイヤーージュ (débrouillage: デブリイエの名詞形)」に支えられていると考察する (小川 1998: 267-271)。「<難局をとにかく切り抜ける>、しかし、その後どういう困難が待ちうけているかまではかまっていられない。切り抜けに切り抜けを重ねて生きる他はない、それがデブリイヤーージュの本義である」 (小川 1998: 270)。それはフランス語圏カメルーンでも同様であり、ひとびとは日常的に「デブリイエ」という言葉を口にする。

- ・「15歳の時、村を離れて、バファンに行き、そこで2年間学校に通った。そのあと父親が亡くなったので学校をやめ、デブリイエする人生にはまって、今までデブリイエしている。」 (碎石業・44歳・男性) ¹³
- ・「今は、ヤウンデにいつづけたいね。日常のわずかなパンを稼ぐためにデブリイエすることを覚えたのはここぞなんだ。」 (古着商・28歳・男性) ¹⁴
- ・「(子どもの頃の商売に関して) 母親は、デブリイエすることを知っていましたから、私もしましたよ。夏休みには、ラッカセイを私に売らせましたし、こんなオレンジとか。彼女がお金をくれて、仕入れて、それぞれ子どもたちがデブリイエするんです。それで、新学期が始まった時、子どもたちそれぞれが、ノートなどを買うんです。」 (仕立屋・33歳・女性) ¹⁵

このように、「デブリイエ」とは下積み生活を生き抜く姿勢である。

職人Wはモコロ市場に作業場を構え、カメルーンの食事にはかかせないイモ類や穀類の粉ひき機を製作している。Wは、モコロ地区の若者たちとトンチンを行っている。そのメンバーの職業を尋ねると、彼は次のように答えた。

- ・「(メンバーには) 商人もいるし、職人もいる。つまり、彼らはデブリイエしている。そう、大多数はデブリイエしている。彼らはプチメチエをしているんだ」 ¹⁶。

¹² ブリコラージュに関しては、小田 (1996) 参照。

¹³ 聞き取り: 1997年6月3日・ヤウンデ。

¹⁴ 聞き取り: 1997年5月30日・ヤウンデ。

¹⁵ 聞き取り: 1997年10月23日・ヤウンデ。

¹⁶ 聞き取り: 1998年2月3日・ヤウンデ。

この言葉からわかるように、商人であれ、職人であれ、小規模自営業者であることには変わりがない。つまり、小規模自営業者全般がデブリエするひとびとなのであり、逆に被雇用者はデブリエしていないひとびとである。

デブリエすることは、何の保証もない生活を生きたことである。病気になれば、収入はゼロになる。またどれだけ働いたからといっても、収入が保証されるわけではない。客が来るか来ないか、作ったモノが売れるかどうかは、運を天にまかせるしかない。毎月決まった給料がもらえる俸給生活者とは違う世界を生きているのが彼らである。

しかし、デブリエはなんとか日々をしのぐということだけではない。それは見方を変えれば、デブリエする人生から脱却するためのデブリエでもある。小規模自営業者の多くは、「デブリエヤー (débrouillard(e): デブリエしている人)¹⁷」のまま一生を終えるつもりはないのである。

具体的に、あるデブリエヤーの生活を見てみる¹⁸。

31歳のKは、行商の新聞販売をしている。バンソアという村で生まれた。父親は三人の妻がおり、自分に全部で何人の兄弟がいるか、はっきり知らない。Kの母親には5人の子どもがおり、Kはその第一子として生まれた。両親は農民で、貧しい一家だった。村で中等教育を終え、州都バフサムに移り、バカロレア（大学入学資格）を取得した。1989年にヤウンデに来て、ヤウンデ大学の学生となった。妻とは大学で知り合った。彼女もバミレケだが、バメンジュという別の村の出身である。彼女とのあいだに、生後半年の子どもがいる。両親は村で暮らしていたが、父親が病気になり、ヤウンデで治療を受けるため、現在Kが面倒を見ている。母親は村に残っている。ヤウンデのKの家は借家で、毎月10,000フランの家賃を支払っている。

ヤウンデに来た当初は、父方のオジの家に世話になった。しかしオジは難しい性格だったので、3カ月後にはそこを出た。カネがなかったので、友人の家を渡り歩いた。大学2年生からは奨学金がもらえたので、自分の部屋を借りることができた。大学は2年で中退した（1993年度から大学生への奨学金制度が廃止されたため）。

¹⁷ フランスでは、デブリエヤーは機敏な（人）、抜け目のない（人）を意味し、カメルーンにおける用法とは意味がずれる。

¹⁸ 調査：1997年11月21日・ヤウンデ。

新聞売りの仕事は、オバの紹介で学生時代から始めていた。そのころは、夏休みや週末だけ新聞を売っていた。大学をやめてから、本格的にこの仕事を始め、すでに6年がたつ。始めた時は一時しのぎと考えていたが、他に職もなかったので現在まで続けている。

新聞を売り歩くのは、ケネディー通りなどヤウンデの中心街である。Kの住んでいるところからは遠いが、客はこのあたりに集中しているから仕方ない。新聞が発行される月曜日から金曜日まで、毎朝7時前には家を出る。歩くと30分かかるが、節約のため乗合タクシーには乗らない。7時半までには中央郵便局前に着かねばならない。そこで新聞が配布され、配布人の名前と受け取った新聞の部数が記録される。新聞配達の手が7時半になっても郵便局前に到着しなければ、歩いて10分ほどの距離にある販売店まで取りにいくこともあるが、そのまま待っていることもある。新聞を受け取るとまず、定期購読の客に配達に行く。彼らはほとんどが公務員である。中心街に彼らのオフィスがある。人数に変動はあるが、10人から15人といったところである。そのあとKは「借り手」のところへ行く。彼らは新聞を読んで返却する人である。このような「借り手」のほとんどは小規模自営業者、つまりデブレイヤーたちである。彼らは節約のため、新聞を買わない。夕方、Kは「借り手」たちをまわって新聞を回収する。彼らは「借り賃」をKに支払う。毎日払う人もいれば、金曜日にまとめて払う人もいる。「借り手」の数は少ない時は10人程度であるが、大事件が起これば、40人にもなる。朝、定期購読者と「借り手」に新聞を配った後は、新聞を入れた袋を肩から下げ、ぶらぶらと町を流し、客を捜す。ケネディー通りのレストランのテラスで食事をしている人には、店の外から新聞をちらつかせて合図をする。目があれば、いろいろな新聞を交代に掲げる。見せてくれと言われれば渡すが、新聞はホッチキスで止めてあり、なかは読めないようになっている。ヤウンデ中心部の大聖堂前には、タクシー待ちの客がいる。そこでも、Kは新聞を見せながら歩く。道の脇にたって、ドライバーが買ってくれるのを待つこともある。

夕方6時頃になると、「借り手」から回収した新聞と、売れ残りの新聞を持って、販売所に戻る。Kの手元には、販売量に応じた現金が手渡される。「カメルーン・トリビューン（価格：200フラン）」、「メサジェ（価格：300フラン）」などカメルーンの新聞は価格の10%、外国の新聞は8%、それがKの収入である。「借り手」

からは、一部につき一律100フランを受け取る。この100フランは、そのままKの収入となる。貸した新聞は元通りホッチキスで留め、売れ残りとして返却する。すべて合わせて、Kには毎週、15,000フラン以上の儲けがあるという。

Kの儲けは、すべて生活費に消えることはない。トンチンに預けるのである。Kは同業者の新聞の売り子たちと、仕事のない土曜日に販売店に集まり、トンチンを行っている。少額のもの（小）と、多額のもの（大）との二つがある。大では、毎週10,000フランを預ける。14人いるので、受領者は14週に一度、14万フランを受け取ることになる。小は、2,000フランを預ける。それには50人以上の参加者がいる。受取人は、毎週2～4人である。50人もいると、一回りするのに50週かかってしまうため、受領者を複数人にしている。二人だと、受取額は50,000フランである。Kは両方に参加し、毎週合計12,000フランをトンチンに支払っている。その他、故郷の村バンソアの同郷者集会に時々顔を出す。そこではトンチンはしていないため、毎週は行かない。しかし、その集会で行われている「保険」には参加する。そこで、毎年20,000フランの保険料を支払っている¹⁹。また村の出身地区の同郷者集会にも時々行く。そこでKは、毎月、地区の発展のために徴収される2,000フランを欠かさず支払う。この会では、すでにその地区に電気をひき、現在は井戸を掘っている。また、そのあとには小学校の建設を計画している。

Kは、この仕事が好きだという。この仕事のおかげで結婚もでき、家を借りていられるからである。かつては他の仕事を探したが、今はこの仕事で稼ぎ、大きな資金（fond）を貯め、大きな雑貨店か卸業をするつもりである。当面の計画は、妻に小さな雑貨店を持たせることである。

新聞の売り子は「汚くきつい」仕事であり、「バミレケしかやらない」と言われる。Kは疲れると地べたに座る。一般にカメルーンでは地べたに座ることは人に低く見られるが、Kは気にしない。またKの着ている服は、破れたTシャツとよごれたジーンズである。傍目から見れば、Kは日々の暮らして精いっぱい青年に見える。しかし、彼には、自分で事業を起こす目的があり、その第一歩として妻に雑貨店を持たせ、切り盛りさせるという具体的な計画もある。「そうなればいい」という夢物語ではない。

¹⁹ このインフォーマルな保険のシステムについては次章で詳しく述べる。

Kは多いとは言えない収入を、通勤のタクシー代を削ってまで貯蓄している。また、いかにもデブレイヤー同士の助け合いであるが、新聞を「貸す」ことで、普通に売るより多くの収入を密かに得ている。借りる側にとっても、300フランで売られる新聞なら、100フランを支払っても200フランの節約になり、それをまた回し読みする。Kのトンチン貯金は、少なくとも3カ月に一度、14万フランという大金になって返ってくる。これは大卒公務員の初任給を越えている。Kは、明確な意図にもとづいてトンチンを利用している。Kはトンチンをすることのメリットを銀行と比較して、次のように説明した。

「トンチンは、私の目標をととても早く実現させてくれる。14人が行っている。（1人10,000フランで）14万フランになって、私はそれを受け取る。それで私は何かをすることができる。でも銀行は、毎週1万フランを自分で貯金しに行かなくてはならないし、14週後に14万フランになる。しかしトンチンなら、その間（14週）に、最初に私が受け取れるよう交渉すれば、14週待たなくても14万フランを手にすることができる。わたしが得たものは貸し付けのようなものだ。14週のあいだに、わたしはすでにそのカネの利益を手に入れている。だから、最も早く何かを実現することができるのが、トンチンなんだ」。

Kは、銀行預金とトンチン預金の違いを「時間がカネを生む」というポイントから語っている。これは金銭に対する彼の哲学であり、その哲学は彼がデブレイエするなかで培われたものである。

2 時間がカネを生む

「時間がカネを生む」という哲学が、もっとも具体的にあらわれている仕事の一つは、タクシー運転手である。タクシー運転手は、バミレケが多くを占める仕事として知られる。調査期間中、筆者が調べたタクシー運転手126人中75人（約60%）はバミレケであった。バミレケのなかには、カメルーンより経済的に豊かな隣国ガボンにも出稼ぎに行き、首都リーブルビルでもタクシー運転手をしている。

タクシー運転手は「タクシーマン」と呼ばれる。タクシーマンになるには、タクシーが必要で、かなり大きな初期投資が必要となる。しかし、実際にはタクシー所有者は自ら運

転しないことが多い。彼らは運転手を雇って自分のタクシーを運転させ、売り上げから毎日決まった額を賃貸料として徴収する。

ヤウンデのタクシーは、バスが財政難で廃止になり、現在唯一の公共交通手段である。乗合が基本で料金は一律140フランである（1998年当時）。遠距離は値段交渉が必要である。客は道に立ち、手を横に出して合図をし、スピードを緩めるタクシーに行き先を叫ぶ。運転手の行き先と合致すれば乗せてくれるし、違っていればタクシーはそのまま通り過ぎる。タクシーは交通省に登録されており、3カ月ごとに営業税12,500フラン、年に一度、公道使用税20,000フランを支払うが、それぞれが自営業であることはかわりない。タクシー会社はなく、「個人タクシー」ばかりである。タクシーの車種の多くは「トヨタ」で、燃費の良さで好まれている。

では、ある雇われタクシーマンの一日を見てみよう²⁰。

タクシーマンNの朝は、7時にスタートする。学校へ行く子どもや、出勤するひとびとなどを乗せるためである。どのルートを走るか、おおよそは決めている。タクシー待ちのポイントがヤウンデにはいくつもあり、そのポイントを回る。ヤウンデ北部から南部の学生街まで走り、そこでUターンし、今度はヤウンデ市内に向かう客をひろう。この周辺には草むらがあり、トイレはそこですませる。家に戻っていると時間が無駄になるからである。ひと仕事をして8時半に、朝食をとる。自宅近くの露店レストランで、「アリコ（フランス語でインゲンマメ）・ジャズ」と呼ばれるマメの煮物とフランスパン、魚の揚げ物を食べ、甘い粥を飲む。合計200フランである。このレストランを経営しているのは、Nと出身村が近いバミレケの女性である。食事がすむとタクシーの窓を布で拭く。ヤウンデには1,000台を超えるタクシーがある。客のなかには綺麗なタクシーに乗りたがる客もいるため、車体の汚れは気になる。汚れたと思えば、客がいない時を見計らい、道路の脇にとめて車を磨く。

食事のために止まって20分もしないうちに、仕事を再開する。南部方面の客を乗せ、そこに至るまでにある官庁街に次々と客を降ろしていく。友人をみつけると無料で乗せてやる。「モコロ市場、100フラン！」などと値切る客でも、しばらく考え、

²⁰ 調査：1997年2月5日・ヤウンデ。

たいていは乗せる。13時を過ぎると、学校帰りの小学生などが乗ってくる。彼らも100フランに値切るが、学生割引のようなものと割り切って乗せてやる。喉が乾くと、一切れのパイナップル（50フラン）やオレンジ（2個50フラン）を買って食べる。甘くて疲れもとれるので、この日はパイナップル4切れと、オレンジ4個を食べた。15時を過ぎるとタクシーの調子が悪くなり、車修理工場も経営しているタクシー所有者のところに帰り、修理をしてもらう。16時過ぎ、自分のカルチェに戻り、露店でご飯に魚のシチューをかけた食事（200フラン）をとる。Nはその後もしみなく運転し続け、返却期限の21時ぎりぎりまで運転し、所有者のもとに車を返した。

このように、Nはほとんど休み無く、朝7時から21時まで走り続ける。タクシーマンの仕事は、客をつかまえられるかどうかという運・不運もあるが、時間との勝負という側面もある。長時間走れば走るほど儲かり、休めば収入減に直結する。ヤウンデ市中いたるところでは、年中憲兵による検問が行われているが、なかには憲兵らが運転手から不当に金銭をせしめるために行っていることもある。タクシーマンのなかには、検問にひっかかると、500フランを憲兵に握らせる者もいる。そうすれば時間を無駄にせず、急いでいる客がそのあいだに降りてしまうのを避けることができる。500フランは30分の足止めと引き合う。ここでは「時間はカネを生む」という哲学が実践されている。

タクシーマンという職業に多くのバミレケが従事しているのは偶然ではない。例えば、身分が保証され、月給が定められている公務員は、就業時間に尋ねても理由もなく不在であることが多い。しかし、馴染みの露天商が不在であることは稀である。たとえ不在でも、代わりの者が必ずいる。彼らは決まった時間、店を開けておくことが重要と考えている。開けておいても客が来る保証はないが、それは商売をするうえでの最低限の義務である。店が開いているかどうかと客に思わせては駄目なのである。逆に、そのような考えが持てず、客が来ないからと早めに引き上げたり気まぐれに休んだりすると、その商売はうまくいかない。運転する時間が収入に直結するタクシーマンという職業は、店を開けておく時間が収入に関わる他の商売と同じく、バミレケの「時間がカネを生む」という哲学に見合うのである。

タクシーマンや商店主など自営の商売においては、客が来るかどうか、売れるかどうかは極めて不確実である。しかし、彼らが家族を養い、またトンチンに参加できるのは、その不確実性のなかにも経験的に引き出される確実性が存在するからである。地べたに商

品を並べただけの露天商でも、「他に仕事があれば今の商売をやめるのか」とたずねると、多くの人は「やめない」、あるいは「人にやらせる」と答える。それは、彼らの商売に金銭が回っている証拠なのである。

3 上昇志向

露店での商売の利益が以外に多いとしても、露天商が現状に満足しているわけではない。これまで見たように、多くの場合、彼らはデブレイヤーからの脱出を望んでいる。そうした現状からの脱出を考えるために、先のタクシーマンNの収支を見てみよう。

筆者が同行した日の乗客は145人であったが、筆者が乗っていた座席分を合わせて計算すると185人近くを乗せ、26,000フランほどの売り上げがあったことになる。車の所有者にはそのうち9,000フランを渡さなくてはならない。この日は修理代の1,000フランもひかれた。ガソリン代は1日で10,950フランであった。Nの食事代はあわせて700フランであった。これらの経費を引くと、4,350フランがNの手元に残る。この1日の収入から月收入を計算すると、約13万フランになるが、これは大卒公務員の初任給を少し越える金額である²¹。しかしNの場合、このタクシー1台にもう一人別の運転手がいるため、交代制で、週に3日しか働けない。1カ月で計算すると、彼の収入は約5万フランとなり、一人暮らしならともかく、家族を養うのはかなり苦しい。

これをタクシー所有者の側から考えてみる。所有者には自動的に日々9,000フランが入ってくる。月30日とすれば、1カ月で27万フランの収入である。これは、大卒公務員の初任給の2倍以上である。ある程度の資金を持つ人が、タクシーに投資するのも理解できる。

ただし、タクシー所有者は、雇われ運転手にはないリスクを負う。40才のタクシーマンB²²は自分のタクシーを運転している。失業した時に、働いていた時の貯金と同郷者組織からの借金を合わせて、1990年に100万フラン（約20万円、当時のレートでは40万円）で中古車を買ってタクシーマンをはじめた。組織への借金は毎月少しずつ返済した。1994年には40万フラン（約8万円）で車を買換えた。彼が自分でタクシーを運転するのは、車を壊したくないからである。人を雇いたくとも車を持ち逃げせず、道路のあちこちに穴が

²¹ これ以外に、車の所有者が月給として、20,000から30,000フラン程度を運転手に支払うこともある。

²² 聞き取り：1998年1月7日・ヤウンデ。

空くヤウンデの道を丁寧に運転する者を捜すのは容易でない。それ以外のリスクもある。Bはタクシーマンで得られる利益すべてを使い切ることにはできないと言う。「君が車を一台買ったとして、まず想像することは、この車は壊れるだろうということだ。さて、壊れたとしよう。君は他の車と取り代えなくてはならない。で、君は何と取り代えるっていうんだ？」。

Bは減価償却について語っている。今の車が壊れても次の車を買えるように、彼は毎月貯蓄をしているという。タクシー所有者は、車の修理、維持費用と、廃車時の買い換え資金を常に準備しておかなくてはならないのである。

しかしそれでもなお、所有者が雇われ運転手より恵まれているのは確かである。雇われ運転手Nのタクシー所有者は、そのタクシー1台から月々27万フランを得る。新しく100万フランの中古車を買うとしても、約4カ月で元が取れる。購入するタクシーは、例外なく中古車であるため、4カ月以内に廃車になる可能性もないことはない。しかし一般的に、タクシー所有者はよほど運が悪くなければその元が取れ、それを補って余りある蓄積ができると言えるだろう。当然、雇われ運転手の多くは貯蓄し、タクシーを購入したいと考えている。彼らは身をもって、タクシーを所有することのうまみを知っているからである。このように、自分より多くの利益を得る者の立場に立とうとする傾向は、他の商売でも同様に見られる。例えば金物を販売するある露天商は、いつかは店舗を持ち、自分が商品を卸している大規模金物店のような大きな店にしたいと夢を語った。薬品販売の露天商は、いつか薬局のオーナーになりたいと語り、古着販売の若者は、いつか卸業者になり、ゆくゆくは古着の輸入業者になりたいと語った。彼らはまず、身近に接している卸業者になりたいと考え、次に卸業者から、輸入品であれば自らが買い付けに行けるまでになりたいと考える。この行き着く先は、製造業である。もちろん、このステップには大きな資金が必要となる。その点で、製造業と露天商のあいだには、絶望的な格差がある。しかし、そのあいだを埋めていくのが下積み生活であり、彼らは行けるところまで上を目指していくのである。実際、露天商や卸売業者から製造業に乗りだしているバミレケ企業家はすでに現れている。

彼らは、金銭が最も多く回っているのはどこかを知り、そこへ到達できるように自分たちの金銭を回していく。

第3節 成功すること

では次に、下積み生活から抜け出たひとびとを見ていこう。彼らのような成功者がいるからこそ、下積み生活のデブレイヤーたちは、上を目指そうという希望を持つのである。

1 成功者の軌跡

（事例1） ホテル経営者²³

Mは1990年にMホテル（Mは自分の名前）を創業した。MはMグループ（他パン工場など）という企業グループをつくっており、グループ全体の資本金は5,000万フランであり、年商は1億4,400万フランに上る。Mホテルは5階建てで、客室は100ほどあり、外国人の客も多い。ホテルの従業員は35人、うち管理職は二人（一人は支配人、もう一人は会計士）である。Mは「兄弟（自分の親戚や同郷者など）」は雇っていない²⁴。ビジネスと家族は分けているからである。Mの下積み生活を見てみよう。

Mは1946年に、パデンコップ村で生まれた。村では学校に通っていたが、商売もしていた。父親はMを市場に連れて行き、あめ玉などを買い与えた。Mはそれを学校に持っていき、友だちに売った。その利益で、彼は自分に必要なものを買った。貯金もしていたという。

初等教育を村で終え、13才の時に村を出、ドゥアラで2年間技術学校に通った。その後、ンコンサンバへ行き、「ムンゴ・パン業組合」で店の売り子として働いた。そのあいだに運転免許をとらせてもらった。クンバ（南西部州・英語圏地域）支店長に抜擢されて転勤し、雇用主の許可をもらい、それまで捨てられていた小麦粉の空き袋をクンバで売り、クンバで安価な油をンコンサンバで販売するサイドビジネスを開始した。その商売はうまくいき、1968年には30万フランの貯蓄ができていた。そこでMは仕事をやめようとしたが、雇用主に気に入られており反対された。仕方なく「ヤウンデで軍隊の試験を受ける、だめなら帰ってくる」と嘘をついてヤウンデに来た。ドゥアラは暑いので、気候の良いヤウンデを選んだ。ヤウンデでは、ま

²³ 聞き取り：1998年6月19日・ヤウンデ。

²⁴ しかし、ほとんどの従業員と、管理職の二人はバミレケである。

ず同郷者の友人の家に居候し、その友人の仕事（タクシーマン）を「観察した」。Mは、彼の稼ぎに驚き、自分もタクシーマンになろうと思った。金持ちの同郷者に話を持ちかけ、20万フランを借り、自分の貯金も合わせて、39万フランで新車「ルノー8」を買った。そのころ「トヨタ」の中古はまだなかった。タクシー運転手をはじめて2年、Mは寝る間も惜しんで働いた。もう1台、別のタクシーを買うことができ、借金をしていた同郷者に、20万フランに加え、利子として1台目のタクシーもつけて返却した。

Mの軌跡を見ると、まず彼が子ども時代に商人教育を受けていることが注目される。彼は、ここで商売の基礎である「金銭を稼ぐことは善」という価値観を得たと考えられる。Mのように、子どもが学校に通うついでに同級生相手に商売することは珍しくない。またMは、最初から自分で商売を始めたのではなく、被雇用者としてキャリアを開始している。Mは、当時としては十分な学校教育を受けている。読み書きもでき、機転もきくMは、雇用者から重宝がられたであろう。そして、被雇用者という立場で、Mは目敏くビジネスチャンスを見いだし、給与以外の収入を得る。Mは、そのサイドビジネスで資金を貯めると同時に、自分のためだけに働くこと、つまり独立への意志を形成していく。ヤウンデで出会ったタクシーマンを足がかりに、Mは自分の資金と人脈を稼働し、事業を拡大していく。

Mのイトコの友人に、フランス系ガソリンスタンド「トータル」のマネージャーがおり、彼がドゥアラに転勤する際、Mはその仕事を引き継がせて欲しいと頼んだ。その仕事を得たMは、自分で所有するタクシーには運転手を雇った。「トータル」スタンドのマネージャーになるには、170万フランの保証金が必要であった。Mはタクシーで得た利益を貯蓄していたので、それを支払うことができた。当時（1973年）、ヤウンデのガソリンスタンドの数は少なく、しかもM自身よく働き、またタクシー運転手の友人たちもすすんで利用してくれたので、Mのスタンドはヤウンデで一番の売り上げを誇っていた。

次にMは、パン工場をつくろうと思いたち、銀行に貸し付けを申し出た。ACB銀行（現在のクレディ・リオネ）は、パン焼きかまどの購入資金200万フランを貸してくれた。足りなかった200万は自分で出した。トンチンでも30万の資金をつくった。

パン工場は完成し、操業をはじめた。ガソリンスタンドの仕事も続けていたが、パン工場の方がMにとって大事だった。なぜなら、自分のものではないガソリンスタンドとは異なり、パン工場はM個人のビジネスだったからだ。1978年に、トータルの上司ともめ、スタンドはやめた。その後Mの腕を見込んで、「シェル」から誘いがきたので3カ月ほどやってみたが、儲かりそうになかったのでやめた。「トータル」スタンドのマネージャーをしている5年間に、Mはトラックを1台購入し、ヤウンデと村に自分の家も建てた。ヤウンデには自宅の他に、高級住宅地バストスに賃貸用の豪邸を建てた。Mが当時参加していたトンチンは、それらの資金づくりに役だった。パン工場も順調に売れ行きを伸ばした。当時、パン工場はヤウンデに三つしかなく、小麦粉も安かったからである。

このように、Mは次々と新しい仕事に手を伸ばしていく。これは、バミレケに共通する経営の神髄である。バミレケのことわざにあるように、「一つのカゴにすべての卵を入れてはいけない」のである。リスクを分散させるように、複数の事業を起こすバミレケの企業家は多く、Mはその典型と言えるであろう。彼は、タクシーで得た利益をガソリンスタンド経営に回し、そして次に、家やパン工場、トラックへと手を広げていく。自分用の家はともかく²⁵、それ以外の高級住宅地の邸宅、パン工場、トラックは、次のカネを生み出す投資である。

またここで、彼は銀行から金銭を借りるまでになっていることは注目される。彼のビジネスが大きくなってきた証拠である。

では、Mはなぜパン工場というビジネスを、彼の初めての大きなビジネスに選んだのであろうか。彼にとって、被雇用者としてのパン販売の仕事が、キャリアの出発点であった。前節で書いたように、彼は働きながら、パンビジネスについての知識を得ており、なおかつパンを製造すれば、どれくらい儲けがあるのかを知っていた。彼は、いつかパン工場を持ちたいという夢を抱いており、それを実現させたのである。

次に、Mの新しいビジネス、Mホテル建設までの経緯を見てみよう。

バストスの豪邸を借りたのは、イタリア大使館勤務のイタリア人であった。Mは

²⁵ 自宅を建てることも実は「投資」である。一般的に、都市の家は家賃の節約という経済的意味がある。村に建てる家については第5章で詳しく述べる。

彼と親しくなり、ビジネスの話もした。「投資として賃貸用住宅をたくさん建てようと思っている」とMが話したところ、彼はホテルをやってみればどうかと提案した。興味を持ったMは、1980年頃、現在のMホテルの土地を購入した。自分のトラックでセメントを運び、少しずつ建設を進めた。その頃、ナイジェリアから安い建材が輸入できたのは幸運だった。またそのイタリア人に、家賃無料を条件に、イタリアを案内してもらい、ホテルの内装品（タイル、ドアなど）を買い付けた。その費用はあちこちからの借金でまかなった。トンチンにも助けられた。当時、バミレケの実業家20人で、一人100万という高額のトンチンを始めた。一度に集まる金額は2億フラン、これを二人の受益者でわけた。Mは最初の受益者になり、1億フランを受け取った。これなしでは、Mホテル建設は頓挫していたことは間違いないという。なぜなら銀行は、ホテルは儲からないといって貸し付けてくれなかったからである。Mホテルは、結局10億フランもかかる大事業となった。それでも数々の幸運で、最小限に押さえた額である。Mにとって、このころが資金的に一番大変だったという。Mは、持てるものをすべてこれにつぎ込んだのである。

このあと、Mホテルは順調に客を集め、ヤウンデの中堅クラスのホテルとして評判の良いホテルの一つになっている。営業を始めて8年、すでに彼の借金は完済された。しかし彼の野心は続く。彼は新ホテルを建てようとすでに土地購入をすませている²⁶。しかし、現在のカメルーン全体の不景気と物価高のため、その計画は中断している。

Mの成功物語には、多くの「幸運」が関与している。借金の申し出、銀行の融資、トンチンの活用、アイデアをくれたイタリア人、ナイジェリアからの安い建材、競争の少なさなどである。M自身、自分が成功した理由として「神のおかげ」と人間関係に恵まれたことを挙げている。しかし彼自身が、「そこそこ」で満足せず、常に積極的に事業を展開しようとしてきたことで、はじめて「幸運」がやって来たと言える。Mは今も、事業の次の展開をうかがっている。

²⁶ 彼は、新ホテルの経営は子どもに任せたいと考えている。彼の娘は、イタリアで現在ホテル業を学んでいる。彼のような、たたき上げの成功者たちのなかには、自分の味わった苦勞を子どもにさせたくないと考え、子どもたちに高い教育を受けさせ、事業経営を手伝わせている場合がある。しかし、下積み経験がなく、学歴の高い成功者の子どもたちが、親のような優れた経営者になれるかどうかはわからない。ワルニエは、バミレケ企業家を次の三つに分類している。村で社会化され、教育水準が低く、都市で苦勞を積んだ第一世代の企業家、多少の教育を受け、役所や会社勤めから事業を起こす第二世代、そして、近年現れた高学歴の第三世代の企業家である。現在、この三つの世代は共存している（Warnier 1995a）。

（事例2） 建築資材販売業者²⁷

Dは建築資材、特にタイル製品を輸入販売する会社（D社）の社長である。D社は1985年にDが起業した会社で、資本金は1億フランである。会社は有限会社の形態をとっている。ヤウンデに本店と三つの支店、ドゥアラに一つの支店がある。15人の従業員（うち4人は管理職）と一人のアルバイトがいる。Dもまた、従業員を選ぶ際、親族だから、友人だからということでは雇わない。仕事のできる人を選ぶという。また、学歴も関係ないという。D自身が小学校しか出ておらず、学歴は仕事上、必要だとは思っていない。建材の輸入元は、主にイタリアとスペインであるが、現在ブラジルと取引する話もすすんでいる。輸出も小規模ながら行っており、中央アフリカ、チャド、赤道ギニア、ガボンなど隣国に建材などを輸出している。年商は10億フラン（約2億円）に上る。彼の下積み生活を見てみよう。

Dは1963年、バブアントゥ村で5人兄弟の4番目として生まれた。両親は貧しい農民で、父親は盲目であった。村で畑仕事を手伝いながら初等教育を終えたが、両親にそれ以上の余裕がなかったので学校をやめ、1977年14歳の時、Dは一人でヤウンデに出て来た。ヤウンデでは水道配管工のもとで徒弟をした。毎日もらえる食事代200フランのうち、100フランは貯めた。それが10,000フランに達したところで自分の露店を開き、タバコを売り始めた。これは10年間ほど続けた。露店の利益を毎日200フラン蓄え、20カ月で12万フランになった。その貯金で配管工に必要な道具を買い揃え、ヤウンデに来て2年後（1979年）に、独立して配管の事業を起し、個人で配管工事の仕事を請け負うようになった。

Dは、徒弟という形でキャリアをスタートしている。徒弟制度は、カメルーンにおいても小規模自営業、とくに職人の世界でよく見られる。徒弟は基本的に無収入であるが、親方にいくらかを支払うこともある。親方にとっては、徒弟を雇うことで労働力と収入が得られるしくみであり、徒弟にとっては技術や経営手法が学べる。Dは徒弟をしながら技術

²⁷ 聞き取り：1998年6月29日・ヤウンデ。

を身につけ、独立資金のため露店のアルバイトをし、その儲けで配管工として独立に成功したのである。現在の会社設立までを見てみよう。

配管の仕事を請け負いはじめてから、Dはトンチンに参加してきた。仕事の利益から毎週2,000フランをトンチンにまわしていた。受益者の順番が来て、Dは30万フランを受け取った。それは、初めての大きな仕事であった大学の工事を請け負うことに役だてた。その工事の儲けが、現在の会社設立の助けになった。1985年、配管工事会社として資本金90万フランでD社を設立した。最初の頃は客の信頼を得ることが難しく、仕事が増えなかったが、やがて経営は順調にいき、建築資材の輸入を手がけるまでになった。1988年にはヤウンデに自宅を建てた。現在はヤウンデの高級住宅地バストスに、6階建ての建物を建設中である。

ここではトンチンがDに資金を与えている。Dは銀行から融資を受けた経験はない。先のホテル経営者Mの時代と異なり、現在、銀行の融資は得難い。Dは、若くして成功した理由を、誰にも頼ることなく「まるで砂漠の一本の木のように」自分だけで仕事をしてきたからだという。多種類の装飾タイル、金メッキをほどこした蛇口、トイレの便器などがディスプレイされている店内には、「お客様の満足は私たちの満足」という標語が貼ってある。Dが自分しか頼れなかったのは、自分が貧しい家族のなかで育ったことと関係があるという。冷房の効いた社長室には、大きく引き延ばされたモノクロの写真が飾ってある。村での集合写真である。そのなかで一人だけ裸足の子どもがいる。その子どもが7才の時の彼である。「貧しかった頃の自分を忘れないようにと飾っている」という。また、Dも、不動産に投資をしている。新しく建てている6階建ての建物が完成すれば、それはD社の新しいビジネスの拠点となる。

この二人の事例からは、バミレケの成功者が今の成功に甘んじず、次々に金銭を回し、新たな事業を展開し続けていることがわかる。彼らの姿勢はバミレケのなかでは、決して特別なわけではない。先のタクシーマンBは次のように言った。「いいかい、バミレケの頭のなかで（事業）計画を停止させるのは死だ」。また、先にとりあげた私学の中学校経営者²⁸Bは次のように言った。「人間は満足しない。満足する奴はバカだ」。

²⁸ 第2章、第1節、2の（事例2）参照。

2 成功者を取り巻く妬み

起業し、成功した者の多くは、商売の才覚や運に恵まれ、また工夫をこらして事業を成功させてきた。成功したひとびとに、事業活動の指針を尋ねると、「誠実であること」という答えが多く返ってくる。なぜ彼らは自らの「誠実」を強調するのであろうか。

カメルーンに限らないが、成功者はまわりからの妬み (*jalousie*) にさらされる。成功者、特にバミレケの成功者たちが受ける中傷の多くは、「ファムラ (*Famla*) 」という邪術を行ったというものである。ファムラは、バミレケ・ランドの都市バフサムの一地区の名前であり、そこで始まったと言われる。ファムラは、自分が富を得るために、人の命を「売る」バミレケの邪術である。売ることのできる人間は、自分の子どもや妻、兄弟など、近い親族²⁹だけである。ファムラのやり方はいくつかの方法があるとされるが、例えば次のようなやり方が噂される。金銭を欲する者たちの秘密の集会があり、そこではメンバーが順番に「ニワトリ」を差し出す。そのニワトリは売られる人間になぞらえられており、そのニワトリを殺せば人間が死ぬ。死んだ人間は再び生き返り、プランテーションなどで働き、その利益は売った者に入ってくる。ファムラの効力は永遠ではないため、更新、つまり新たな犠牲者を差し出すことが必要となる。売る者がいないと自分の寿命の一部を売ることにもできる。自分の寿命を売った者は、死んだ後、頭部が失われているという。バミレケの成功者、特に子どもを亡くした者は、邪術を使ったのではないかと噂され、また、金持ちの妻や子どもは夫のファムラに対抗する呪術で身を守っているとも言われる。

では、彼ら成功者はこの噂や妬みにどのように対応しているのか。たずねてみると、彼らは「何もしない」と答える。ホテル経営者Mは「ほおっておくしかないよ。良い人もいるから」と話し、輸入業者Dは達観したかのように「嫉妬は自然なことだ」と言う。火彼は「花は、蜂や蝇を受け入れなくてはならないからね」と、詩的な返答をした。前述の中学校経営者Bは次のように言った。「嫉妬している奴は君に、＜俺はお前に嫉妬してるんだ！＞とは言わないだろう？彼は態度には出すかもしれないが。じっとして、やりたいようにさせておけばいい」。魚販売業をしているYは、嫉妬に対して具体的な対応策を教えてくれた³⁰。

²⁹ 両親なども近い親族だが、年老いた人間を売ることにはできないと言われる。

³⁰ 聞き取り：1998年6月11日・ヤウンデ。

「嫉妬している人間？いないわけないよ。いるいる。（中略）私は家族のことを理解しているつもりだ。だから誰かが自分を嫌っていても、自分の問題ではない。私の家に、君が来たら、＜ほら10万フランだ、がんばってみろ＞と言って君にカネを渡すよ。君が全部それを食べてしまったら、もう僕のところへ二度とは来られないだろう。私はすでに君に与えたからだ。君は一人でがんばるしかないのだ。だから問題はないよ。いつも嫉妬はあるよ。」

基本的に、バミレケの成功者は意味のない金銭を与えないという³¹。「5万フランくれ」と言われたら、「その5万フランで何をするのだ？」と聞き、納得しなければ与えない。しかしYは、うるさく言ってくる親族にはカネを渡す。それをどうやって回し、増やすかは彼ら次第である。失敗しても彼らの責任であり、Yの責任にはならない。この手法は、成功者にたかろうとする親族への対応として、バミレケによくみられるものである。

しかしそれでも、嫉妬がなくなるわけではない。彼らは一様に、嫉妬は仕方がないという構えである。邪術使いの噂が嫌で事業を拡大しない、やめるという話はほとんど聞かれない。その意味でファムラの噂は、突出した成功を避けようとする平準化の機能を果たしているとは言えない。カメルーン東部のマカというエスニック・グループを中心に、カメルーンにおける呪術の研究を行っているゲシエールは、呪術に関する言説が近年、不平等の是正（leveling）と富と権力の蓄積（accumulation）という対立するものを表明する傾向が強まっていると述べている（Geschiere 1997）。ファムラはまさに、富の蓄積に関する呪術の言説ということになる³²。バミレケ社会のみならず、成功者（富裕者、権力者など）が強い呪術力を持つと考える社会は多い。よって、成功者を告発することは危険であり、ある一定レベルを超えた成功者たちは放っておかれるという。「この点で、彼らは平準化メカニズムの範囲外なのである」（Rowlands and Warnier 1988: 123）。

³¹ 筆者の友人D（バミレケ）が、Dと同郷の有名な大企業家のところへ文化事業のために寄付を頼みに行った。その成功者はまず「それでいくら儲かるのだ？」とDに尋ねたという。Dが「カネ儲けのためではない」と答えると、その企業家は「お前は貧乏のうちに死ぬだろう」と言い、出資を断った。

³² 蓄積志向の呪術は、バミレケのファムラほど語られないが、カメルーンにいくつも出てきている。それらには、ドゥアラの「エコング（ekong）」、プランテーション地域のクペ山（Mt. Kupe）周辺が発祥と言われる「クペ（kupe）」、同じく南西部州のプランテーション地域に居住するバクウェリ（Bakweri）の「ニヨンゴ（nyongo）」などがある（Ardener 1970; Geschiere 1997: 139; Fisiy & Geschiere 1993）。これら蓄積志向の呪術が起こった地域は、早くから資本主義、植民地経営に巻き込まれた歴史を持つ。ゲシエールは、呪術のバリエーションが、ローカルな社会と近代的発展との接合パターンのバリエーションを表していると論じている（Geschiere 1997: 137-168）。

最近では、呪術とは別の噂も成功者に対してなされる。それが「フェイマン (Feyman)」である。フェイマンとは詐欺師である。名前の起源は定かでないが、「フェイ (Fey)」はフランス語のフェール (faire: 作る、するなど、意味の広い言葉)、「マン (man)」は英語のマン (man: 男、人) から来ているとの説が有力である。フェイマンという「職業」が誕生した場所はンコンサンバと言われる。ンコンサンバは先にも述べたように、プランテーション地域で早くからバミレケが大量移住した町である。フェイマンはつまり、バミレケのビジネスである。ンコンサンバはフランス語圏地域であるが、ピジン・イングリッシュも地域共通語として根付いており、フェイマンという英語ともフランス語とも言えない名前の説明がつく。

フェイマンの噂は1980年後半からの経済危機以降、カメルーン中に広がったという。フェイマンは、実際何を職業としているかわからないが羽振りがよく、高級車に乗り、手には携帯電話を持っている。また、彼は頭がよく口がまわるとされる。巧妙に人を騙し、時間をかけて金銭を奪っていく。時には海外でも活動すると噂される。

フェイマンの詐欺には様々なパターンがあるが、多いのは「贋金」が出てくるものである。以下はあるフェイマンの「噂話」である。

ある商店主Aのところに、見慣れない客Bが来た。Bは最近その近所に越してきたという。Bは、毎日のようにAの店で買い物をした。買い物の量も多く、BはAの得意客となった。AはBを好ましく思い、世間話をする仲になった。数週間たったある日、Bは買い物に来て、こっそりとAに打ち明けた。「僕が今日まで君の店で使ってきたカネは、実は贋金だ」。驚愕し、怒りをぶつけようとするAに、Bは言う。「まあ待ってくれ。君はそのカネを商品の支払いなんかに使っただろう？何か問題はあったかい？」。そうたずねられてAは考える。確かに、何も問題は起こらなかった。困惑しているAにBは続ける。「いいかい、僕がカネを持っているのは、贋金を手に入れられるからだ。君はとてもいい人だ。だからこの秘密を打ち明けた。君も儲けたいと思わないかい？僕は君のカネを倍にできる。僕にカネを預けないか？」。この誘惑に負け、Aは半信半疑だったが、Bに5万フランを渡した。Aの預けた5万フランは、数日後に10万フランになって戻ってきた。Aは、少しずつBへ渡す金額を増やしていった。2、3カ月たって、Bは言った。「もっと一度にまとめてカネを渡したらどうだ？借金のあてはあるだろう？」。その頃にはすでにBをすっか

り信頼していたAは、親族、トンチンなどから借金をし、数百万フランをBに渡した。
その日以来、Bは二度とAの前に姿を現さなかった。

この贋金詐欺が巧妙なのは、Aも言わば共犯であり、警察に届ける可能性がないことである。領収書などの物証も発生しない。被害者は泣き寝入りするしかない。贋金と言っても、本当に贋金であるかどうかは関係がない。贋金は、金銭が増える理由を相手に納得させるキーワードとして有効なのである。

現在の不況下で、羽振りのよい企業家が現れると、ひとびとは「彼はフェイマンだ」と噂する。フェイマンはファムラにかわり、特に比較的若い実業家に対する中傷として使われる。なぜなら、日々新たなフェイマンの噂を流しているのは、主に若者たちだからである。しかし彼らはフェイマンを恐れる反面、憧れてもいる。

成功者側は、ファムラにしろフェイマンにしろ、それらのレッテルを貼られるがままにしている。それらを剥がす手段は、彼らにはないからである。それらは、彼らの手にした成功の代償である。逆にいえば、彼らはその代償に見合う成功を獲得しているのである。

第4節 「バミレケ」をめぐる言説

ここまで、第1節では子ども時代の「商人教育」と、賃労働からどのような価値観を得るのか、また第2節では、独立した小規模自営業の活動でどのような価値観を得るのか、第3節では、成功者がどのような軌跡を踏み、どのようにまわりの嫉妬に対応するのかを見てきた。これらは個々人の商売のプロセスに焦点をあてたものである。では最後に、バミレケ全体の活動として、彼らの商売がどのようにバミレケというエスニック・グループに、また他のエスニック・グループに作用しているのかを考察したい。

バミレケは、その「商人」としての地位をカメルーンで確立したが、同時にカメルーン全土にバミレケの画一的なイメージができ上がっていった。「バミレケは金持ちでも、昼食をラッカセイで済ませる」という「吝嗇」イメージ、「バミレケはいつも人をだましてカネをとろうとする」といった「狡猾」イメージ、「バミレケはカネのためなら自分の子どもでも売る」という「守銭奴」イメージなど、金銭にまつわる悪評には事欠かない。カメルーンにおいて、「お前はバミレケか？」という言葉には非難がこもっている。ではバミレケは、このイメージにどのように対応するのだろうか。

1 バミレケが語るバミレケ性

バミレケに負のイメージがあることに対してバミレケが見せる反応は、大きく二つに分けられる。まず一つは、そのイメージから逃避しようとするものである。

バミレケ自身が「普通の」バミレケでないことを強調する語りは、時々耳にする。ある青年は、「僕の名前はバミレケっぽくないから、まわりの人は僕がバミレケだとは知らないんだ³³」と誇らしげに語った。またバミレケのフランス語は「訛り」がきつく、一言話せば区別できると言われるが、ある大学生は「僕はちゃんと教育を受けているから、バミレケのような訛りがない」と語った。またある女子高生は「私は、バミレケの友だちは欲しくない。彼らのメンタリティーは複雑だから」と、自らがバミレケであることを忘れたかのような発言をした。「バミレケはカネがあるのに身なりが汚い」と言われることに対して、ある年輩の女性は「私は、いつも身なりをきれいにしているから、誰も私をバミレケだとは思っていない」と語った。このような発言をしない人も、もちろんいる。しかしそれが、都市で「バミレケであること」に何ら否定的な感情がないことにはならない。彼らは、ヨーロッパと真っ先に接触し早くから「開化民」となった「ドゥアラ」や、植民地政府に公務員として徴用された「エウォンド」などと同じようには、エスニック・オリジンを堂々と表明できない。ヤウンデの公衆の面前で、バミレケが「私はバミレケだ」と威張ることはまずない。「バミレケは、自分がバミレケであることを恥じている」と言われるが、これらの発言はその裏付けともとれる。

しかし、こういったイメージに対して当然反発が生まれる。

「ヤウンデやドゥアラなどの都市を発展させたのは我々バミレケだ。ドゥアラやエウォンドが何をしていたっていうのだ？ 奴らはカネを食べるばかりだ」という反発は多くのバミレケが持っている。それは政治に結びつき、カメルーンの政治が南部の人間に支配されていることに対して、「バミレケが大統領になり政権をとれば、カメルーンはよくなる」と考えている人も多い。

このような反発は、バミレケの商人としての性質に関しても生まれている。例えば聞き取り中の次のような発言を見てみよう。

³³ たいていの場合、名前によってエスニック・グループが区別できる。

- ・「わたしの成功は、厳しい態度に基づいている。私は厳しいし、多くの人も私を厳しいと言う。私はバミレケだ、私は厳しい、だが、誠実でもある（後略）」（文房具店経営者）³⁴。
- ・「（バミレケの故郷）西部州の人間は、全員が商人なのよ」（書店経営者・女性）³⁵。
- ・「子どもの頃の商売？もちろんしたよ、すべての良いバミレケのようにね。小さい時から頭にお盆をのせて売ることを訓練されるんだ。そう、僕はバミレケで、僕もそこを通ってきたんだ」（古着商・28歳・男性）³⁶。
- ・「小さい時は、医学を勉強したい、それが私の願いだった。でも、バカロレアで、CUISSSE（ヤウンデの大学病院）の試験に2回不合格になって、経済学を勉強しようと思った。たくさん節約しようと思って。すべてのバミレケのように」（タクシー運転手B）³⁷。

このようなバミレケ自身の発言からは、彼らが「バミレケ」を、商売、金銭の文脈で語りながらも、外から押しつけられるネガティブな評価をポジティブな評価へ読み変えていることがわかる。

「バミレケ」と言っても彼らは社会的に一枚岩ではなく、多くの首長制社会にわかれ、村ごとのアイデンティティーが卓越している³⁸。ヤウンデのような都市においては、首長制社会間の競争意識もある。同郷者のあいだでは、どこのリネージなのか、どこの地区なのかという、細分化された政治がうごめいている。そのようななかで、彼らが「我々バミレケは」と語ることは、バミレケ以外の人に向けての発言である。自分がバミレケであることや、そこから逃げたり、反発したりという反応は、彼らの都市での体験、つまり他のエスニック・グループとの交わりから生まれてくる。

都市における「バミレケ」にまつわる語りの多くは金銭をめぐるものであり、彼らも

³⁴ 聞き取り：1998年6月10日・ヤウンデ。

³⁵ 聞き取り：1998年7月20日・ヤウンデ。

³⁶ 同章、第2節、1の古着商参照。

³⁷ 同章、第2節、3のタクシーマンB参照。

³⁸ この点に関して、例えばバミレケ内部でもステレオタイプが存在する。チャンの人（バンブトス、メヌア県出身者）は、「田舎者」で「愚鈍」なイメージ、バフサムの人（ミフィ、クンキ、オーブラトー県出身者）は、カネのためなら何でもやるという（いわゆる一般的なバミレケの）イメージ、パンガンテ（ンデ県出身者）は、「白人」のように振る舞う享楽主義者のイメージである。

それを受け入れ、内容をポジティブなものに変えて自らのアイデンティティーとしている。日々金銭を扱うバミレケ商人たちは、ポジティブなバミレケ商人像を必要とするのである。彼らは金銭をめぐる言説から逃れることはできないからである。

しかし、他のエスニック・グループは、バミレケをネガティブにとらえてばかりいるわけではない。そのような事例を次に述べる。

2 他のエスニック・グループが語るバミレケ性

カメルーンでは「怠け者」と評判を取っているエスニック・グループ、ドゥアラのガス販売業者（43歳）の言葉を聞いてみる³⁹。ガスボンベを売る商売はバミレケの仕事とされているが、そのなかで彼は、バミレケのように振る舞いながら孤軍奮闘している。

「私は自分の一族において最初の商人だ。みんな、どうなっているのかって顔をしている。私のことをバミレケだと言い出す奴もいる。ガスの受取所では、私にバミレケの言葉で話しかける奴もいる。私はただ、やあやあといって返事をする（略）。ひとびとに自分がバミレケじゃないということを見せたくないんだ。だけど私はカメルーン人じゃないか、そして私は彼らと同じ事をするができる。バミレケってのは愚か者なんだ、そこに座って毎日ガスボンベを売る。一人のドゥアラが、子どもみたいにこうやって辛抱しているのは普通じゃないんだ」。

「バミレケは100万フランあれば、車を買ってタクシーをやろうとするが、ドゥアラはくさあ、これで食べに行こうぜ！>と言うんだ」。

彼の店に5人いる従業員のなかにも、ドゥアラは一人もいないと言う。それがなぜかと聞くと、彼は次のように答えた。

「それは、イデオロギーによるものだ。私は（ドゥアラの）特別なケースなんだ。なぜかって、私が見たところ、西部の奴ら（バミレケのこと）は、我々や他の者たちより賢いってわけじゃない。彼らがどこかで成功する時は、（賢いからではな

³⁹ 聞き取り：1998年6月4日・ヤウンデ。

く) 辛抱しているからなんだ。彼らは自分のやっていることを信じているんだ。だが、頭腦的な面では、我々はすべて同じ思考システムを持っている。だから、彼らが成功する場所で、なぜ私が成功できないってことがあるだろう？私はそれを確かめるために(そこに)分け入り、背広を脱いで、彼らと同じレベルに身をおいている。私は自分が誰々の息子である、ということは忘れたんだ。」

彼は、バミレケと同じレベルに「下りて」、バミレケと同じように商売をしている。彼の解釈では、バミレケの成功の鍵は、呪術でも詐欺でもなく、「辛抱」である。彼はバミレケの友人らとトンチンをしているが、30人中唯一のドゥアラである。彼はドゥアラに4つのアパートを持っており、家賃収入は月々30万フランになるという。これで十分良い暮らしを送ることができるが、彼はより大きな成功を求めて奮闘を続けるという。

公務員をしながら農場経営に乗り出した女性実業家(49歳)⁴⁰は、ヤウンデ周辺のエスニック・グループ、エウォンドである。エウォンドもドゥアラと同様に「怠け者」というイメージを持たれている。彼女は次のように語る。

「私自身、私の姉妹たちを(バミレケのように)ダイナミックになりなさいと励ましているところです。なぜなら私たちは、特にダイナミズムとリスクへの嗜好に欠けているのです(中略)バミレケやアングロフォン(英語圏地域の人)が事業をなすのは、彼らがダイナミックでリスクを負っているからなのです。」

この二人は実業家としてバミレケを単に「ケチだ」と非難するのではなく、積極的にとらえようとしていることがうかがえる。同時に、事業に積極的でない自分たちの仲間に対し、ある種のいらだちを感じている。

バミレケ自身が、「商売の民＝バミレケ」という図式をそのままに評価を読み変えるのとは異なり、他のエスニック・グループの商人は「商売の民＝バミレケ」という図式そのものを崩そうとする。なぜなら、彼らの成功要因がエスニック的特性である限りは、彼ら(のエスニック・グループ)は成功できないということになるからである。その図式を読み変えることで、エスニック・オリジンがなんであれ、やり方次第では誰でも成功できる

⁴⁰ 聞き取り：1998年7月21日・ヤウンデ。

ことを証明しようとするのである。

ここまで見てきたように、バミレケの企業家としての実践は、資本主義的性向を生み、商人としてのバミレケ・アイデンティティーを生み出す。彼らは事業を通じて、日々金銭を回すが、ただ回すだけでなく、増やすことを目的にしている。金銭を回転させる技術は日々の商売のなかで培われていく。うまく回し、金銭の量を増やした者は成功し、増やせなかった者はそこで止まる。

しかし重要なことは、彼らは金銭を止めない、ということである。常に金銭を回し続けることこそが、彼らの事業の真髄である。「金銭は金銭を生む」、「時間は金銭を生む」、という哲学は、金銭を回し続けるからこそ有効なのである。

第4章 金銭の意味を変える貯蓄法

前章ではバミレケの商売実践に焦点を当てたが、本章ではそこで得た金銭の貯蓄法に焦点を絞る。特に、小規模事業主から大企業家にいたるまで、バミレケのあいだで最も利用されている貯蓄法トンチン (tontine)¹が考察の中心となる。

第1節 バミレケの「伝統」としてのトンチン

1 トンチンとは何か

トンチンは、日本では頼母子講（あるいは講）、無尽などと呼ばれ、世界中に広く見られる庶民金融である。日本においては1951年、政府の介入で、大規模なもの（無尽会社）は相互銀行（現在は普通銀行）に形を変え、小規模なものはほとんど姿を消した。しかし、アフリカ、アジア、ラテンアメリカなど、世界の広い地域では現在も活発に頼母子講が行われている。カメルーンも例外ではない²。経済階層に関わりなく、多くの人がトンチンを行っている。

頼母子講はフランス語で一般にトンチンと呼ばれ³、カメルーンでも同様に使用されるが、カメルーンのフランス語圏地域では「分担金（の支払い）」という意味のコティザシオン (cotisation) と呼ばれることもある。バミレケ・ランド、ンデ県のメジンバ語ではンシュア (ncua'a) と呼ばれ、その他のバミレケ地域ではチュアなどと呼ばれる。また、バミレケと同様に首長制社会を形成している英語圏の高地地帯ではジャンギ (njangi) と呼ばれる。

トンチンの運営方式はさまざまであるが、一般的な方式は次のようなものである。まず参加者を募り、各自金銭を出し合い、参加者の一人（あるいは複数人）にその総額を与える。これを定期的に繰り返し、順番にすべての参加者に与えていく。この仕組みにおいて、

¹ トンチン (tontine) という呼び方は、イタリアの銀行家Tontiが1653年頃フランスで始めた金融制度に起源を持つ。

² カメルーンのトンチンについて、地域、民族を限定しない研究ではンゼメン (Nzemen 1988; 1993)、ヘンリーら (Henry, Tchénté and Guillerme-Dieumegard 1991) の研究があり、限定したものとしてはバムンの事例 (和崎 1984)、北西部州マンコン社会の事例 (端 1993)、バミレケの事例 (Soen and Comarmond 1971; 野元 1996) 研究などがある。

³ フランスでの発音は「トンティン」と表記するほうが近いかもしれないが、カメルーンでは「トンチン」のほうが正確である。また小川もセネガルの事例で「トンチン」と表記している (小川: 1998)。

最初の受領者は純粋な貸し付けを受けたことになり、最後の受領者は純粋な貯金をしたことになる。いったんトンチンに参加すれば、全員がひとまわりするまでやめることはできない。すでに受領した者が支払いを滞らせるとトンチンは回転しなくなる。これは「持ち逃げ」行為とみなされ、重大な問題になる。そのため毎回、参加者は金銭の工面をしなくてはならない。つまりトンチンは、先に受領する者にとっては返済を、後に受領する者には貯蓄を強制するという特徴を持つ。

トンチンでは、先に受け取る金銭は利子なしの借金である。「バミレケはポケットに何もなくても資金をつくることができる」と言われるが、それが可能なのはトンチンのおかげである。例えば、なけなしの1,000フランを持って150人のトンチンに参加して最初の受領者になれば、トンチンが終わる時には1,000フランが15万フランになっている。これで何かの商売をはじめると。例えば卸売商のところで交渉し、15万フランで30万フランの商品を受け取る。この時点で1,000フランが30万フランになっている。商品を販売し、約束より早く卸売商に借金を返済すれば、その卸売商は彼を信頼して次には60万フラン分の商品をくれる可能性もある。このようにして、ゼロから百万長者へと登りつめることもできるのである。たいてい、現実はこのように上手くはいかないが、それでもこの話は、トンチンを利用した資本蓄積過程をうまく説明している⁴。

しかし、本章では、トンチンで金銭を回すことが資本蓄積以外にも多くの意味があることに注目する。以下では、トンチンが彼らにとってどのような意味を持ち、金銭の意味がどのように変化するのかを考察する。

2 バミレケのトンチンの起源

バミレケの多くが、トンチンはバミレケの伝統だと言う。それは例えば、次のような発言に表れている。魚卸業を営む男性にトンチンをしているかをたずねると、「バミレケが、トンチンをしないですませることができるかい？」という答えが返ってきた。また、ある電気修理店店主は「トンチンはバミレケの慣習なのだ。バミレケである自分も自動的に二つのトンチンをしている」と語った。トンチンは現在、カメルーンにおいては、バミレケに限らず多くの人が行っている貯蓄法である。しかし、バミレケに言わせると、「他のエ

⁴ この話は、ある同郷者組織の会長、副会長、会計などが、トンチンのメリットとして筆者に話してくれたものである。

スニック・グループのトンチンは、バミレケのコピーに過ぎず、元祖は自分たちである」ということになる。

では、バミレケは、いつ頃からトンチンを行っていたのだろうか。

バングラップ首長国において、100歳近い老人Mにトンチンに関する聞き取りを行った⁵。ドイツ支配下でのトンチンについて彼は次のように語っている。

「その時代、4、5、6人くらいの友人が集会をし、カネ（モニ）を集めた。カネはその当時手に入れるのが難しかった。1シリングを見つけることは難しかった。（中略）だいたいぶたってからフランがきて、フランを使った」。

彼は、現在カメルーンに流通していない貨幣について話している。ドイツ時代、マルクより英国の通貨シリング（shilling）が広く流通していたという。これらの貨幣は1925年に、カメルーンにおいて交換価値をなくし、バミレケ地域はフランスの植民地となり、フランが入った。先に述べたように、メジンバ語で貨幣は「ンカプ」であるが、村ではピジン・イングリッシュの「モニ（money）」もよく使われる。

現在のトンチンでは、ノートに受領者や受領額を書き、領収書まで発行することが普通になっているが、そのような手法が定着する以前は、どのように記録していたのだろうか。80歳を越える別の男性は、竹に傷をつけて記録していたと言った。ドイツ時代で、「学校」がまだなかった頃の話である。一方、老人Mは、受領者や受領額などの記録は記憶に頼っていたと話した。

「その当時、頭のなかに記録した。でもみんな良く知っていた。規則正しかった。すべての人が知っていた。誰かがトンチンを受領する時、食事を作り、ヤシ酒を持ってきた。（中略）私はシリングのトンチンをしなかった。私の父はシリングのトンチンをしていた。しかし、私は市場で売った。私は子安貝（mbam）を使って市場で売った。妻を買うためにも（婚資として）子安貝を使った。私は今もバンガンテ（隣町）に子安貝を保管している。私が集会（トンチン）を始めたのはフランでだった」。

⁵ 第1章、第2節、3の老人Mを参照。

ここで子安貝という「伝統貨幣」についてもMは言及している。子安貝は、ドイツ植民地時代もバミレケ地域では貨幣的役割を果たしていた⁶。Mはシリングではなく、フランでトンチンを開始したが、また同時に、子安貝を使って、この地域のいくつかの市場を回って商売をしていた⁷。ドイツ時代には依然婚資として子安貝が用いられていたが、シリングも婚資として問題はなかったと語っている。この老人Mは、子安貝のトンチンについては語っていないが、別のバミレケ女性（推定70歳）は、子安貝でのトンチンは貴族を中心に行われていたと語った。

このように、子安貝はヨーロッパの貨幣が入った後に、通貨としての機能を果たしていた。しかし、ヨーロッパの貨幣が入ってくる以前も子安貝は貨幣として使用されており、すでに当時、これを使ったトンチンが成立していたと考えられる。その理由としてワルニエは、次のように書いている。「私の意見では、（中略）グラスフィールドズにおいて地域的商業、あるいは長距離の商業が、19世紀のトンチンと同様の、あるいはそれに非常に近い蓄財システムなしに、発展しえたとは思えない。つまり、それはかなり古い制度なのである」（Warnier 1985: 93）。アードナーは、バメンダ＝バムン高原（バミレケ地域も含まれる）のような地域では、トンチンがヨーロッパ貨幣の流通以前から存在し、カメルーンの他の地域では、ヨーロッパのプランテーションが導入されて以後、導入されたと述べている（Ardener 1964: 206）。これらの指摘は、「トンチンはバミレケの伝統」であるとバミレケのひとびとが語ることと一致する。他のエスニック・グループのトンチンは必ずしもコピーではないにしろ、カメルーンにおいて、バミレケのトンチンは他と比べて最も発達していることは間違いない。バミレケはヨーロッパ貨幣導入以後、すでにあったトンチンのシステムをそのまま活用した。その後、トンチンはバミレケの移住先にも持ち込まれ、一層活発に行われるようになったのである。

第2節 同郷者組織

⁶ ワルニエは、グラスフィールドズの貨幣について論じている。それによれば、このあたりでは19世紀初頭まで、鉄製のクワが唯一の貨幣的役割を果たしていた。それより南側、あるいはバミレケ地域においては、さまざまな形の小さな真珠が貨幣として使用されていたようである。子安貝は北部からのハウサ商人がもたらしたとされ、その導入は19世紀半ば頃と見られている。同じ時期、東のカラバール（ナイジェリア）からは真鍮の輪も貨幣として入ってきたようである（Warnier 1985: 88）。

⁷ ドイツ時代、取引はニワトリでも行われていたという。

トンチンは、自分以外にもう一人いれば、二人でも行うことができる。しかし、二人では、2回で1巡してしまい、貯蓄システムとして有効でない。大規模なトンチンを行うためには一定規模の人数が必要となる。しかも「持ち逃げ」を防ぐために信頼のおける人間が必要となる。ヤウンデのような都市部では持ち逃げリスクが高くなる。その点から、同郷者は彼らがトンチンを行う上で最適なメンバーといえる。村を同じくするひとびとのつながりは、そうでない者たちと築くつながりよりも信頼度が高いからである⁸。そこでは持ち逃げは稀である。

都市におけるバミレケ同郷者組織⁹の数は、バミレケ移住民の増大に従って増え続けてきた。1937年にヤウンデに移住したバンガンテ出身の男性（1918年生まれ）によると、当時は「バミレケ・ランド出身者」という枠の組織しかなかった。しかし1943年頃から、彼の出身である「ンデ県出身者」だけが集まるようになった。バミレケ・ランド全体から、県単位の集会が可能になるほどバミレケ移住民の数が増えたのである。その後、1950年頃までの間に、村単位の組織が増えてきたという。現在ヤウンデにおいては、バミレケ・ランドに100以上もある村（首長制社会）すべてが、それぞれ独自の同郷者組織を持つと言われる。それと平行して、A村のB地区出身者たちの組織といった村の地区単位の組織も1960年前後から設立されはじめた。言わば、バミレケの同郷者組織は、都市での人口が増えるにつれて、メンバーシップが細分化していったのである¹⁰。このように、バミレケの同郷者組織は、環境にあわせて変化を重ね、今日まで継続されている。ヴォランタリー・アソシエーションであるこれらの組織への加入は、個々人の意志による。参加を強制されるわけではない。しかしそれは、仲間うちの親睦会といった娯楽ではない。規則や罰則は明文化され、組織編成も決まっている。役員をはじめとするメンバーは、多大な労力と時間、金銭をも費やして、組織を維持している。彼らにとって、同郷者組織の参加、運営は、

⁸ ある同郷者組織のメンバーは言った。「逃げても良い、だけど村にはそいつの家族がいる」。つまり、村の家族を押さえている限り、逃げ切ることはできないと考えられている。どこかで逃げた当人と出会えば、「集会に来いよ、少しずつでも返済していこう」と説得するという。

⁹ このような組織はヴォランタリー・アソシエーション（自発的結社）と呼ばれ、アフリカ都市研究の重要課題とされてきた。ヴォランタリー・アソシエーションの研究では、都市に移住してきた者たちが都市に適応する過程で重要な役割を担うという適応メカニズムが注目された（cf. Little 1957; Banton 1956）。しかしこの考えには、「脱部族化」し、「部族民」から「都市民」へと変化する近代化モデルが基礎にある。1970年代からは、ヴォランタリー・アソシエーションの経済的、政治的ダイナミズムに注目されてきた。例えばエラは、エスニック・アソシエーションによるエスニック・グループの分割が階級意識の形成を妨げている可能性を示唆する（Ela 1983: 105-125）。

¹⁰ ただし、地区単位の組織が設立されても村単位の組織がなくなるわけではない。選択肢が増えたのである。

都市生活においてかなりのウェートを占める重要事項なのである。

では、ヤウンデのバングラップ同郷者組織を詳しく考察してみよう。バングラップの場合、同郷者であれば誰もが参加できる集会は男女別になっており、男性組織はマンジョ (mandjo)、女性組織はケナーダ (kenandè) と呼ばれる。マンジョは、もともと「戦士の組織」である。かつて、村におけるすべての成人男性はマンジョへの参加が義務づけられていた。マンジョ (時にマンジョン) と呼ばれる戦士の組織はバングラップのみならず、他のバミレケ社会や北西部州の首長制社会においても幅広く見られた。現在も、都市における男性組織をマンジョあるいはマンジョンと呼ぶ村は多い。一方、ケナーダは「ゆっくり (優雅に) 行くひとびと」という意味である¹¹。

この二つの組織は、バングラップの¹²男性、あるいはバングラップの女性なら誰でも参加できる。「バングラップの」という範囲は、父親か母親だけがバングラップでもかまわない。このあたりの基準は厳密ではなく、身辺調査が行われることもない。バングラップが自分の村であると認識しているかどうかの問題となるのである。また、「バングラップでなくても、信頼できる人であれば誰でもいい」と言う人もいるが、実際はバングラップと縁もゆかりもない人が参加していることはまずない。

女性の場合、これに「バングラップの妻 (nzwi ngulabè)」というカテゴリーが加わる。ここでは、バングラップでも、バミレケでもない女性が、夫の村の組織に参加するケースがみられる。ケナーダで1998年まで会長を務めた女性は、夫はバングラップだが、バムンを父親に持つ女性であった。また同組織では、バッサの女性が「バングラップの妻」として組織の役員になっている。実際、こうした「バングラップの妻」の方が、バングラップ (父親がバングラップ) の女性「バングラップの娘 (ngòn ngulabè)」よりも数が多い。両方にあてはまる者は「バングラップの妻」の立場が優先されるからであり、また夫の出身村の組織に入ることは、自分の出身村の組織に入ることよりも重要だと考えられているからである。また、ケナーダの役員になるには、夫が男性組織マンジョのメンバーであることが条件となる。それは、ケナーダ役員会で議論される重要事項が、バングラップ出身者以外に漏れないようにするためだという。ここでは、「彼女が誰か」よりも「彼女の夫が誰か」ということが重要なのである。しかし、「バングラップの娘」は「バ

¹¹ この名前がなぜついたか、はっきりした理由はわからない。

¹² 「バングラップの」という場合、「バングラップ出身の」という意味と同時に、「バングラップ人の」というエスニック・カテゴリーとしての意味もある。

ングラップの妻」より立場が弱いわけではない。「娘」は組織のなかで男のようなものと語られ、時には組織の「憲兵」と呼ばれる。「娘」たちが男として分類される一方、「妻」は女であり、象徴的に「娘」たちの「妻」とみなされる。例えば、組織のなかで食事が振る舞われる時、給仕をするのは「妻」たちの仕事になっている。夫、あるいは男とみなされる「娘」たちは、男がそうであるように、給仕されるのをただ座って待っている。

女性は結婚すると、「娘」以外に「妻」の資格を得るが、出身村が夫と異なる場合、既婚女性は自分の村の組織には「娘」として参加し、夫の村の組織には「妻」として参加できる。つまり、女性は複数の同郷者組織に参加できることになる。例えば、あるケナーダのメンバーは、夫の村側のケナーダ以外に、夫の村の地区組織、自分の村（つまり父親の村）の組織、そして母親の村の組織にも参加している。

男性組織マンジョと女性組織ケナーダの構成人数を比べると、ケナーダの方が多い。その他、男女が一緒に活動する地区組織など、たいていどの組織でも女性の数が男性を上回る。同郷者組織において女性の方が活発に参加している事実は、女性が「娘」と「妻」の二つの資格を持つことが一つの要因だと考えられる¹³。

1 集会所

バミレケの同郷者組織は専用の集会所を所有している事が多い。ヤウンデにおいてはバミレケが多く暮らす北西地域、マダガスカル、モコロ地区などに多く見られる。バングラップの集会所もかつてはモコロ地区にあったが、メンバーが増え集会所が手狭になったため、少し離れたカリエ地区に新たな集会所を建設した。建物は二階建てで、バングラップからの移住民の寄付と若者の労働奉仕によって建てられた（写真IV-1参照）。マンジョ（男性組織）の集会所も、ケナーダ（女性組織）の集会所も、バングラップ集会所で行われる。集会所の看板には、フランス語で「Foyer culturel et social BANGOULAP（バングラップ文化社会集会所）」と記されている。集会所のなかは各階とも縦15メートル横10メートルほどの広い空間となっており、その他、物置に使われている小さな部屋が1階と2階それぞれについている。また、敷地内にはあるメンバーの家族が経営する売店がある。

1階の集会部屋には、黒板、三つの木製の机、200脚ほどの鉄製の椅子がある。壁には

¹³ その他、女性が堂々と外出できる機会であるという理由も考えられる。

ビヤ大統領の写真が額に入れて飾ってある。鉄製の椅子は黄色に塗られ、赤い色で

「BGLP YDE (Bangoulap Yaoundéの略)」と書かれている。葬礼などで椅子を外に持ち出す時、椅子が紛失しないようにするためである。一方2階の集会部屋には、同じく椅子と机があるが、1階と異なるのは壁に多様な装飾品が飾られていることである。正面には、双子だったと言われるバングラupp初代首長とバメナ初代首長の二人が握手をかわしている木彫りの壁掛けと、その横にバングラupp現首長の肖像画がかけられている。また正面に向かって左手の壁にはバングラuppの各地区とその尊称¹⁴の一覧表があり、右手の壁にはバングラuppの名所が書かれた表、メジンバ語アルファベットの覧表がある。これらの表は、「バングラupp学生の会 (BSA: Bangoulap Student Association)」というバングラupp出身学生たちの会が製作したものである。この「学生の会」の集会も、この2階の集会部屋で行われている。

バングラupp集会所は、集住していないバングラuppのひとつとにとって「ヤウンデのバングラuppのような」場所である。ひとつとは、時にこの集会所を「バングラupp」と呼ぶ。本当のバングラupp村のことは「村」と言えばすむので、両者が混同されることはない。

日曜日の午後には、12時30分から1階で女性組織ケナーダの集会が、13時から2階で男性組織マンジョの集会が行われる。この集会所はこれら以外にも、バングラuppの地区組織の集会などに利用されている。また結婚式会場など、他のイベント会場として使用することもできる。バングラupp以外の人にも貸し出し可能であるが、使用料が必要となる。その場合、集会所は利益をもたらす施設になる。

2 ケナーダ

ここで、ケナーダの集会の流れを見る。

ケナーダ集会の座席配置は図IV-1のようになっている。集会部屋の前方は、30センチほどの段差があるステージになっている。このステージの向かって左手には、会長（一人）、副会長（一人）など、組織のヒエラルキー順に座席がもうけられている。彼女たちの座席の前には机がある。ステージにはそれ以外に、組織の役員が座っている。役員は30人ほどである。会長、副会長、そして役員は、毎週金曜日の午後に役員会を開いている。集会の

¹⁴ 尊称については第1章を参照のこと。

運営方法を取り決め、メンバー間のもめ事などを解決するのはこの役員会である。この集会では、誰がどの辺に座るかは概ね決まっているが、明確な基準はない。しかし、年若い者たちが、比較的後ろの席に座るのは共通している。

ステージ上に座るのは原則的に、会長、副会長、役員のみであり、その他の者は「バングラップの妻」席、「バングラップの娘」席、「名誉」席に別れて座り、それぞれ集会所の中央に向かい合うような形になっている。バングラップ出身で、なおかつ夫もバングラップ出身であった場合は「バングラップの妻」という資格が優先されるため、人数は「バングラップの妻」たちの方が多く、「バングラップの娘」の倍ほどになる。多い時には集会に200人近く集まる（登録者は300人を越える）が、少ないと50人ほどのこともある。「名誉席」はこの組織に長く所属し、かつ役員ではない年輩の女性たちが座る席である。この席は集会中に来る客人たちの席としても使用される。中央には会計、秘書らが座る席と机が用意されている。普通、秘書は二人、会計も二人である。この他、監視役が一人か二人おり、警告用の笛を持って集会所のなかを動き回っている。彼女たちはトンチンの分担金を集めて回り、私語を行うメンバーには警告をあたえる。彼女たちは「ポリス」とも呼ばれる。

集会の開始時刻である12時半になっても、人の集まりは悪い。しかし秘書はかまわずにトンチンを始める。始まりの言葉もなく、秘書が参加者の名前を呼び始めれば、集会は開始となる。トンチンの登録者と金額を記録した大きく分厚いノートを開き、登録者の名前を順番に読み上げる。名前を呼ばれた人は、座ったまま監視役の女性に分担金を手渡す。監視役は金銭を集めるために会場を動き回り、受け取った分担金を会計係の机の上に置く。秘書は名前を呼びながら金額を記帳していく。ノートにはカーボン用紙がはさんであり、そのオリジナルの頁は切り取って領収書として、受領者に金銭と一緒に渡される。そのため、最終的にコピーの頁だけがノートに残る。ケナーダのトンチンは、「プチカイエ（小さなノート）」と呼ばれる500フランか1,000フランを毎週支払う少額のもの、2,000フランか3,000フランを毎週支払うもの、そして「グランカイエ（大きなノート）」と呼ばれる5,000か10,000フランを毎週支払う高額のものとして三つある。参加者は支払い可能な「ノート」を選ぶ。ノートの1巡期間は長くて1年と決められており、参加者が多すぎるノートはメンバーを二つに分ける。トンチンの集金がすべて終わるまでたいてい2時間以上経過する。この間にメンバーが次から次へと入ってくる。開始から30分ほどで遅刻者に罰金が徴収され始める。遅刻者たちは、入り口に置かれた椅子に25フランの罰金を置い

てから席に着く。用事などでトンチンの支払いに間に合わない時は、あらかじめ分担金を知り合いに預けておく。トンチンが行われているあいだは私語は一切禁止され、喋っている者に対しては監視役が笛を鳴らして忠告をする。しつこく繰り返されると、その場で罰金が徴収される。トンチンの分担金徴収が終わると、その日の受領者は秘書の机におもむき会計から授与金を受け取り、ノートに領収サインをし、その紙を受け取る。受領者の挨拶はとくに行われぬ。席に戻ると、受領者は登録者と金額が書かれた領収書（資料IV-1）をまわりの者たちに見せる。これは義務ではないが、まわりから見せるように要求される。その紙は、集会所のあちこちをメンバーの手から手へと回っていく。その紙を見れば、自分の順番が何週後に回ってくるのか、またすでに受領した者は、あと何週で払い終わるのかがわかる。さらに、その週の集会所を欠席し、トンチンの支払いを怠った者が、一目瞭然となる。

トンチンが終わったあと、月に一度、保険料（1,000フラン）の徴収が行われる。その後、メンバー関係の葬礼の告知（日時や場所など）、すでに終わった葬礼やメンバーの親族の死亡などが報告される。集会中、時おりは客人が来る。男性組織マンジョのメンバーが、バングラupp移住民全体に関わる重要事項の報告に来たり、物売りが商品を宣伝しに来たりとさまざまである（写真IV-2参照）。何もなければ集会は終わりになる。ケナーダでは始まりの言葉も終わりの言葉もない。また集会中は娯楽的要素がなく、退屈を感じる人も多い¹⁵。居眠り、私語は罰金の対象であるし、足を組むことも罰金である。集会中は前を向いて黙って座っていることが求められる。そのため集会は途中退場は禁止されているにもかかわらず、自分のトンチンの支払いが終わるとこっそりと帰ろうとする人も多い。しかし、たいていは会長や監視役に見つかり、引き戻される。

¹⁵ 筆者はある日曜日（1996年10月13日）、知り合いのドゥアラ女性に付いて、彼女が月に一度参加している二つの組織の集会所を回った。一つ目の集会所はドゥアラ近郊の小さな村の女性同郷者組織のもので、メンバーは2,000フランをトンチンに支払い、それとは別に1,000フランの食事代を支払った。集会所はメンバーの家の持ち回りであり、担当のメンバーの家族が料理をし、メンバーに提供する。これは毎回の集会所で行われ、特別な日だけではない。この時は、ワインやビール、豪華な料理が提供された。集会中は騒がしく、私語をしても注意されない。彼女は次にドゥアラ女性の有志で作る集会所に行った。ここも、メンバーの家が集会所となっていた。ここでは食事代が2,000フランで、トンチンの分担金1,000フランを上回っていた。彼女のこの二つの集会所での支払いは合計6,000フランであり、そのうち3,000フランは食事代に消えたことになる。このような大きな消費を伴う集会所は、貯蓄システムとしてより、娯楽であると考えられる。二つをかけもちをしている彼女は、食べきれない食事や飲み物を持参したビニール袋に詰めて持ち帰った。彼女はまた、ドゥアラのひとびとが集まる教会のコーラスグループ（男性）の妻たちの会にも参加している。そこの集会所も月に一度であるが、毎回1,000フランの食事代が徴収され、みなで飲み食いをする。ドゥアラの集会所は、食事がないと人が集まらないという。バミレケの同郷者組織集会所とは好対照である。

集会中に発言する時は、手をあげて、監視役に発言許可を受けてから話さなくてはならない。発言者は起立して、まず「ンゴンゲン (ngò'ngam)」と呼びかける。そして、他の人は一斉に「ンゴンクニ (ngò'nkù'ni)」という言葉返す。このやりとりは通常二回繰り返される。「ンゴンゲン」は「隠喩の国」という意味で、バングラップ国のことを指す。バングラップは「隠喩」を話す国とされ、はっきりと物事を言わず遠回しにことわざなどを使い、よそ者にはわからないような話し方をするとされている。「ンゴンクニ」は「名誉の国」の意味である。この合い言葉はバングラップ同郷者組織の集会すべて、またバングラップ村における集会においても使用される。この合い言葉以外に、組織個別の合い言葉を持っているところもある。例えば、男性組織マンジョには「マンジョ！」と呼びかけ、まわりが「オオー」と答える「合い言葉」がある。

3 組織の活動

ここで、同郷者組織の諸活動のうち、トンチン以外のものを説明しておく。

(1) 保険 (マンガア: mà'ngua'a)

同郷者組織では、トンチンと同様に保険制度が重視されている。メンバーやその家族が死亡した場合、規則に従って一定の金額が支払われる。

ケナードでは、月に一度1,000フラン（まとめて支払いも可能で、年間8,000フランで支払い終了）を保険料として支払わなくてはならない¹⁶。支払われる保険金の基準は以下のとおりである。

- ・メンバー自身の死亡： 13万フラン
- ・メンバーの夫の死亡： 12万5,000フラン（ヤウンデで死亡の場合）
93,300フラン（村で死亡の場合）
- ・メンバーの子ども： 現在、財政難のためなし
- ・メンバーの親： 90,000フラン（ヤウンデで死亡の場合）

¹⁶ 1997年の10月に一人のメンバーが死亡した際、そのメンバーは1月から支払いを行っておらず、ケナードとして保険金を支払うべきかどうか議論になった。結局、役員会で、「車の保険と同じで、保険が切れた翌日に事故に遭っても、保険がおりないのと同じことだ」という結論で、保険金は支払われなかった。

74,300フラン（村で死亡の場合）

このように、保険金の額は細かく決められている。夫と親の死亡保険金が死亡場所によって異なるのは、ヤウンデで死亡の場合なら遺体を村まで運ぶための費用がかかるからである。この保険金は「棺桶代」と呼ばれる。棺桶代というものの、遺族はその金額を何に使ってもよい。埋葬には、棺桶代の他、ヤウンデから村までの車のチャーター費用がかかるため、この保険金は遺族にとって重要である。13万フランあれば、棺桶代、遺体と数人の遺族の交通費などはまかなえる。つまりこの保険制度は、メンバーにとって大変心強いものだと言える。

この保険をめぐる男性組織マンジョと女性組織ケナーダとの関係が見える。マンジョは毎年10,000フランを保険料としている。組織のメンバーになるためには、この保険料を支払わなくてはならない。マンジョの保険金が支払われるのは、メンバー本人や家族が死亡した時である¹⁷。メンバーの妻の死亡には10万フランが支払われることになっているが、この金額を受け取るためには、妻が女性組織ケナーダのメンバーであることが条件になっている。妻がメンバーではない場合は、受領額は50,000フランと半額になる。この決まりは、夫は妻をケナーダに参加させるべきというマンジョ組織の考え方を反映している。また、子どもの死亡時には50,000フランが支払われるが、成人とされる21歳以上の子どもには支払われない。この決まりもまた、成人男性であればみな、マンジョのメンバーであるべきという組織の考えを反映している。

（２） 銀行（Bank）

銀行はトンチンや保険に比べて重要性が低い。また、銀行への参加は義務ではない。銀行の仕組みは、メンバーが自分の都合にあわせて貯金をし、一年に一度満期になると、全額を受け取るというものである。利子を付けてメンバーに預金を貸し出し、満期の際、預金者にその利子を分け与える組織もある。満期の時期は12月のクリスマス前か、9月の子どもの新学期前に設定している場合が多い。後者は「学校基金」と呼ばれることもある。銀行で蓄えられた貯金は、メンバーに有利子で貸し与えることもある。利子は貯蓄した者のあいだで金額に応じて分配される。

¹⁷ 夫が死んだ場合、未亡人となるケナーダのメンバーは、マンジョで夫の代わりに保険を継続する。それによって、保険金受領資格を喪失しないで済む。

ケナダでは、カメルーンの経済危機が深まった1992年頃から、銀行は機能していない。利用者が減ったからである。このように、銀行制度は組織の存続には影響が少ない。

(3) 葬礼参加とダンス

葬礼参加は、同郷者組織にとって相互扶助の一つであり核である。メンバーの関係する葬礼（メンバー自身、メンバーの親族の葬礼）に、組織のメンバー全員で参列する。また、遺体安置所への遺体引き取りに同行し、その後の通夜に参列する。さらに、遺体を村に運び埋葬する際、何人かのメンバーを代表で派遣する（その際のメンバーの交通費等は、組織が支払う）。その他、バミレケの伝統である、死後数カ月から数年たってから行われる「死者祭宴」¹⁸を行う場合もメンバーが参加する。ヤウンデで行われる場合は全員参加が義務であり、欠席すると罰金が科せられる。メンバーが親族の死者祭宴を企画すると、他のメンバーは決まった金額を支払い、儀礼時の自分たちの飲食代をまかなう。普通は葬礼を行う遺族が振る舞わねばならない食事をメンバー自身が負担し、葬式に参加するのである。

ケナダでは、メンバーの死者祭宴があるごとに各人1,000フランを出し、食事係になったメンバーたちが、それで食材を買い調理するか、その金額をもらった遺族が調理する。死者祭宴はたいてい日曜日の午後からで、祭宴のある日のケナダ集会は午前中に行われる。朝10時から始まり、最初メンバーの出足は鈍いが、トンチンが終盤にさしかかる13時頃には、普段より多くのメンバーが集まる。普段の集会は、300人ほどが登録しているにもかかわらず、100人も集まれば多い方であるが、死者祭宴の時は200人ほどのメンバーが揃う。トンチンが終わると、大鍋に入った食事と飲みもの（瓶ビールやジュース）が集会所に運び込まれる。先に述べたように、そこでは「バングラップの妻」たちが給仕をする。死者祭宴の食事は、たいてい、コンドレと呼ばれるヤギの肉とプランテン・バナナをヤシ油で煮込んだ料理と決まっている。食べ終わった者から指示された儀礼会場に移動する。近い時は歩き、遠い時は個々人が乗合タクシーで向かう。

死者祭宴の日には、ケナダのメンバー全員が「制服」を着用する。制服は、上は私物

¹⁸ この「死者祭宴」は分析用語である（cf. 内堀・山下 1986）。バミレケのひとびとは、フランス語では「葬式（Funérailles）」と呼んでいる。死者祭宴の詳細については、第5章参照のこと。死者祭宴は保険金支払いの対象にはならない。

の白い服（ブラウスやTシャツなど）¹⁹、下はケナーダで共同で購入した同じ柄の布でつくった腰巻きである。頭には腰巻きの布と同じものをまく。右足には鉄の輪をつける。足を動かすたびに音が鳴る。手には馬の毛の房が付いた棒（sùwa）を持つ（写真IV-3参照）。この格好でメンバー全員で一つの輪になり、バングラップのダンス「ケス（kèsù）」を踊る（写真IV-4参照）。ケナーダはダンス・グループとしての役割も果たしているのである。バミレケの死者祭宴で、ダンスは欠かせないものである。多くのダンス・グループを招待することが、遺族と死者の名誉となる。ケナーダは、ここでダンス・グループとして場を盛り上げる。儀礼に招待する遺族にとって、ケナーダのメンバーであるということは、自分の執り行う死者祭宴に、ダンス・グループを無料で招待できることである。もし自分がメンバーでない組織のダンス・グループを呼ぶと、多くの支払いが要求されるからである。ケナーダのメンバーたちは夕方近くまで踊り続け、最後に飲み物とラッカセイが配られるので、それをもらってから家路に着く。

ダンスをすると遺族から謝礼が与えられる。謝礼は次のような様式にのっとって渡される。ダンスはたいてい真ん中に太鼓などの楽器があり演奏者が陣取る。その周りを踊り手がまわく輪になって踊るが、その輪のなかに数人の遺族が交代で椅子を置いて座る。そして彼らの額に、他の遺族らが次々に踊りながら紙幣を貼り付けていく（写真IV-5参照）。この紙幣はすべて踊っているダンス・グループ（この場合ケナーダ）のものになる²⁰。次の集会では、その謝礼の総額が発表される。その際、会長はダンスを盛り上げたと見なされるメンバー数人にその一部を報酬として与える。それ以外は組織の基金としてプールされ、文房具購入やメンバーの病気見舞いにあてられる。葬礼の参加は、組織の運営資金をつくるための集金活動でもあることが明らかになる。

4 トンチンの重要性

このように同郷者組織は、トンチンだけでなくさまざまな活動を行っているが、多くの同郷者組織において、トンチンは欠かすことのできない活動である。メンバーはトンチンに参加することが義務とされ、どこの組織も集会はトンチンから始まる。トンチンの支払

¹⁹ ちなみにメンバーやその家族の通夜などに参加する時は、黒い服を着用しなくてはならない。またメンバーが死亡した時は、1カ月間、集会には黒い服で参加し喪に服するという義務がある。

²⁰ 演奏者や踊り手、歌い手などへの個人的な祝儀は、その人の胸元やポケットに入れる。

いへの遅刻には罰金を課し、集会の最初からみなを参加させるような仕組みになっている。しかしながらひとびとは、「集会〔tse'tə〕に行く」とは言っても「トンチンに行く」とは言わない。それは、トンチンが主要な活動であるとはいえ、同郷者組織のメンバーにとって、必ずしもそれが最重要活動とは考えられていないことの証拠である。同郷者組織に参加している理由を問えば、「バングラップの人間だから」、あるいは「何かあっても助けてもらえるから」などの答えが帰ってくる。しかしそのような「建て前」だけで、人を毎週集会に引きつけることはできない。「トンチンがない組織はあり得ない」と言われるが、その本質は「トンチンがないと、誰もまじめに集会に来なくなるから」である。これは例えば、ケナーダが金曜日に行う「役員会」も同様で、そこでも役員たちだけのトンチンが行われている。「役員会」であっても、トンチンがなければ、人は集まりにくい。つまり、トンチンのために人が集まるのではないが、かといってトンチンがなければ、人は集まらないのである。

「助け合い」を必要とするひとびとの連帯は、トンチンが介在しないと成り立たない。それはなぜだろうか。トンチンは一度始めたら、途中でやめることができない。毎週、あるいは毎月、定期的に金銭を支払う義務が発生する。同郷者組織の多くは、土、日が集会日になっているが、働いている人にとり、貴重な休日である。疲れて参加したくない時もあるだろう。しかしそれでも、多くの人はトンチンの支払いのために集会に行く。「みなで助け合おう」という声高な訴えは、トンチンの支払い義務ほどの集客力は持たないのである。同郷者組織のメンバーの連帯はトンチンによって支えられ、またトンチンは、メンバー間の連帯によって回転していく。両者は互いに支え合っているのである。

第3節 村の組織と都市の組織

ここまでは、トンチンがひとびとを集会に呼び寄せる力について述べたが、この節ではバングラップ村のランベン地区に住む住民の組織と、ヤウンデにおけるランベン地区出身者の組織を比較検討し、トンチンで回る金銭の意味と変化について明らかにする。

1 村の組織の概要

まず、バングラップ村のランベン地区住民によって構成される組織の概要を説明する。

ランベン地区はかつて鍛冶が盛んで、まわりの首長制社会との闘いではこの地区で生産される武器が使用された。現在、この伝統を受け継いでいる鍛冶屋は80歳を越える男性一人である。彼も今ではほとんど鍛冶を行っておらず、また後継者もいないため、彼が亡くなれば、伝統的手法の鍛冶は終焉を迎える可能性もある。その一方で、機械を導入した近代的手法で鍛冶を行っている男性が一人いる。この人物はランベン地区長である。彼は、この地区で一番の企業家である。彼は、機械で生産したシャベルなどをバミレケ系の金物チェーン店に卸している。

この地区の住人は166人である（1987年²¹）。この地区で行われている「ランベン地区集会（Réunion de quartier Lafeng²²）」は通称「ンターラ（ntanla'）」と呼ばれている。これは集会の開かれる伝統週の日曜日の名前である。この日はクワを使った畑仕事をしない、言わば休日である。集会は、地区長の家の敷地で、屋外に椅子を並べて行われる。しかし、バンガンテの市日である水曜日と土曜日にぶつかると午後からになる。市日には、多くの住民が市場に買い物や農産物販売に出かけるからである。また日曜日にぶつかっても集会は午後になるが、それは教会の礼拝や葬礼が行われるからである。

ンターラの主なメンバーはこの地区の住人であるが、その他、独自の地区集会がない周辺地区の住民も参加している。伝統週の8日に一度開かれる集会は、この地区の成人であれば、誰もが参加すべきとされている。ンターラは、地区で起こった問題を解決するなど、「地区の寄り合い」でもあり、生活と密着している。つまり、ンターラのメンバーであることは、この地区および周辺地区の住民であることを意味する。例えば、この地区で起きた問題はンターラで議論され、解決が図られる。ここで解決が不可能な場合、問題は首長の宮廷で行われる「裁判」へ持ち込まれるが、そこでも決着がつかない場合、ようやく郡の裁判所に持ち込まれる。ランベン地区の住民は、問題や事件を起こした際、まずこのンターラで裁かれる。そのため、普段からンターラに真面目に参加することは、自分の立場が不利にならないようにするためにも重要である。ひとびとは、ンターラに参加することについて、次のように話す。「参加することはあたりまえ。孤立して生活すべきではないのだ」。「参加しないとみんなに悪い評判をたてられてしまうから」。「孤立していると、ひとびとは自分を疑いの目で見られるようになるから」と。つまり、自由参加が前提となっている都市の同郷者組織とは異なり、ここでは半ば強制的に参加が求められている。

²¹ Direction nationale du deuxième recensement général de la population et de l'habitat

²² 現地語表記ではlâ'mfɛnとなる。

しかし、このような形の地区集会が出現したのは、それほど古いことではない。成人男女が集うこのような形の地区集会は、1950年代に始まったという。この時期、バミレケ・ランドで起こった反植民地闘争に住民が巻き込まれないようにすることを目的に、植民地当局が設置させたと言われる。彼らはそのことを、「アヒジョの命令でつくられた」と話す。アヒジョとはカメルーン初代大統領である。

しかしもともと、この地区に組織がなかったわけではない。ンターラの現会長はこの組織の創設時期について、「地区の成立と同時に生まれた」と語る。これは先に述べた戦士の組織マンジョのことであり、かつてあった地区の成人男性組織のことを指す。女性は女性同士で集まり、トンチンなどを行っていたという。つまり、集会の形態はあったが、現在のように男女共同で行う形ではなかったのである。ンターラでは、集会の後に男性だけが集まる役員会が開かれる。しかし、役員会といっても、男性は全員そこに参加する資格を持ち、女性を閉め出しただけの集会である。この役員会は規約に「役員会」と書かれているが、多くの人はこの役員会をマンジョと認識している。つまり、ンターラとは別の男性だけの組織と考えられている。このマンジョの集会は地区長の家の応接間で行われ、主にトンチンが行われる。

ンターラ全体の集会でのメンバーの座席配置は、地区のヒエラルキーが反映される（図IV-2参照）。集会では男女が分かれ、輪になって椅子に座る。入り口部分に立って見ると、左半円が男性、右半円が女性である。そして、男女それぞれのなかでも若者と年配者は分かれて座り、若者は下座に座る。貴族はランクの高い者から席順が決まっている。全体で見ると、貴族、年長者、若者という順番である。つまり集会という場において、この地区におけるヒエラルキーが顕在化する。女性も同様に、貴族は最も上座に座り、あとは年代順である。都市の同郷者組織のように、「妻」と「娘」には分かれていない。

会の執行部は、会長、事務総長、会計監査、会計、監視係である。このなかで、女性は監視係のみで、後は男性である。ただし、女性メンバーを指導する女性代表が一人いる。会長は、首長の家系出身の貴族である。この会長は、1966年以来30年以上会長の座にある。それ以前も、やはり別の貴族が死ぬまで会長を続けていた²³。ンターラのメンバー数は正確に把握されていない。全員が参加しなくてはならない「保険」の制度は1995年以降取り止められており、トンチンだけが行われている。トンチンの参加者の数は74人である

²³ 都市の場合は、会長は選挙によって選ばれ、任期も定められていることが多い。

が、参加していない人もいるため、実数はそれより多くなるとみられる。

ンターラの集会はトンチンの集金からはじまる。事務総長が名前を呼びながら、集金係がカネを集めて回る。遅れてやってくる者は、合い言葉を述べてから席に座る。このンターラの合い言葉は、ヤウンデのバングラップの多くの同郷者組織が使用しているのと同じ「ンゴンゲン」「ンゴンクニ」が、ランベン地区に共通の合い言葉「ンソグラム (nsòg lòm)」「ンフィンフィ (mfi' mfi')」というかけあい、あるいは続けて「バーバ (bāba)」「ソックデウッタ (sògkèdu'tà)」という「合い言葉」である。これらのかけ合いは、ランベン地区の特徴を示したものである。この地区は、先にも述べたように鍛冶の伝統を持つ。「ンソグラム」は、鍛冶のふいごのことで、「ンフィンフィ」は「(それは) いろいろ」という意味である。ふいごにはピンからキリまでであるという意味になるのか。またその後に続く「バーバ」は、ランベン地区の境界を定めている小川の名前である。「ソックデウッタ」は「擦らずに洗う」という意味である。それは、バーバには滝になっている場所があり、そこに入れば擦らなくても身体が自然に洗われる、という意味である。ンターラでは、バングラップ全体に通用する合い言葉と、ランベン地区特有の「合い言葉」の両方を使用しているのである。

トンチンの分担金を集め終わり、受領者に渡す段になると、渡す側は「あなたがこのカネでなすことが上手くいきますように²⁴」と手にした金銭に向かってつぶやき、そこに唾をプツ、プツとふきかける。唾をふきかけるのは幸運を祈る行為である。

ンターラの特徴は、その日のトンチン受領者がヤシ酒を持参する決まりになっていることである。受領者は規約に定められた通りヤシ酒を10リットル²⁵持参する。集会が終わると、それをみなに振る舞う。この際、ヤシ酒の瓶の蓋を取るのは最高位の貴族で、また酒が注がれるのも貴族から、男性が終わると女性の貴族からという順番である。みな自分のコップを持参しており、それを必ず右手で持って飲む。左手で飲むことは無礼とされる。余ったヤシ酒は貴族たちの前に置かれる。ヤシ酒を飲み終わると、ひとびとは三々五々帰っていく。

集会では地区住民に関わる出来事などが知らされる。それは宮廷で行われる政治集会の知らせであったり、新しい市場の建設であったり、村で起こった強盗事件の顛末などであ

²⁴ ンターラでは、受領者の生活状態によって、「これで病院に行け」、「これで学費を払え」など、金銭の使い道に関してみなが助言していた。しかし1998年のある集会で、一部の参加者が反発し、それ以降、使い道に関しては何も言わないことになった。

²⁵ 自家製でない場合、600フランほどの負担になる。

る。先に述べた裁判も、必要となれば、集会中に行われる。裁判をする際には、原告は1,200フランと10リットルのヤシ酒を組織に支払い、また被告は、1,200フランに「召喚代」300フランを足した1,500フランと10リットルのヤシ酒を支払わなくてはならないことになっている。原告が有罪判決をとりつけた場合には被告から原告に、被告が無罪を認められた場合には原告から被告に、支払った分を賠償するという決まりになっている。

2 都市の組織の概要

次にヤウンデの事例から、都市の組織の実際を見てみる。この組織は正式名称「ヤウンデのランベン家族の会 (Famille Balafen²⁶ de Yaoundé)」である。1959年、ヤウンデのランベン地区出身者が結成した。この創設メンバーの一人によれば、当時すでにドゥアラやンコンサンバといった他の都市にランベン出身者の組織があり、それに倣ってヤウンデにも同様の組織を作ろうと結成された。当時はメンバーの家で集会を行っていたが、人数が増えてきたため、専用の集会所を作った²⁷。

彼らの集会は、土曜日の14時から集会所で行われる。土曜日の午後に設定しているのは、バングラupp全体の男性組織マンジョや、女性組織ケナーダの日曜日の集会と重ならないようにするためである。つまり、同地区出身者の集会は、マンジョやケナーダという全体集会と競合しないように設定されており、それは他の同地区出身者組織の集会も同様で、日曜日の午後に設定しているものはない。全体集会と地区ごとの集会の両方に参加できるようにするためである。

このランベン家族の会の集会でも、座席は決まっている (図IV-3)。集会所には一段高くなったステージがあり、男性はみなそのステージに座る。ステージ上では、貴族の座席、年配者の座席、若者の座席のそれぞれが決められている。女性はステージに座らないが、貴族席、そして「ランベンの妻」席、「ランベンの娘」席が決まっている²⁸。中央には、会計と秘書の座る机が置かれている。

会の執行部は、会長、副会長、事務総長、副事務総長、会計監査、会計、監視係、報告

²⁶ 現地語表記ではbā lā'mfenとなる。

²⁷ 他の同地区出身者組織では、専用の集会所を持たず、バングラupp集会所を使用しているところも多い。

²⁸ 妻、娘に関しては、ケナーダの事例と同様の基準である。

係²⁹、指導係³⁰とさまざまな役職がある。このうち、報告係2名、監視係1名が女性である。それ以外に女性会長、女性会長補佐が一人ずついる。村の組織に比べ、都市の組織では女性が多く役職を得ていることがわかる。

集会は、キリスト教の祈りから始まる。まず会長がメンバー一人を指名し、祈りの言葉を述べるように指示する。全員が起立して祈る。祈りの後、トンチンが始まる。秘書が登録者の名前を呼ぶ。トンチンは毎週行われ、保険（「救済基金」と呼ばれる）の料金が月に一度徴収される。集会の終わりには、2週間に一度（つまり2回の集会で1回）、飲み物が振る舞われる。ランベン家族の会では、村の組織ンターラのように毎回酒を飲むことはないが、ケナーダやマンジョのように、葬礼の時だけ飲み物があるわけでもない。この会は両者の中間にあるといえる。飲み物はヤシ酒ではなく、瓶ビールやジュースであり、一人に一本ずつあたるようになっている。この飲み物の費用（一回につき20,000フランほど）は、受領者個人が負担するのではなく、受領者の受領金の一部を飲み物代として差し引き、それを組織にプールして、組織が支払う形になっている。飲み物を配る順序は村の組織ほど厳密ではないが、会長から始まり、貴族、若い男性、女性会長、「ランベンの娘」、「ランベンの妻」の順に配られる傾向がある。配るのは若い男性メンバーである。

この集会の合い言葉は、「ンソグラム」「ンフィンフィ」というランベンの合い言葉をもっぱら用いている。しかし、バングラップ全体に使用される「ンコングン」、「ゴンクニ」という合い言葉はめったに用いられない。このことに関しては、あとで分析する。

3 メンバーシップの比較

ここで、村の組織ンターラと都市の組織ヤウンデのランベン家族の会のメンバーについて、詳しく見ていく。

ンターラのメンバーは、ランベン地区あるいはその周辺地区に住む成人男女である。ランベン地区は、バングラップにある8つのリネージのうち、一つのリネージのテリトリーである。しかしランベン地区には、他のリネージの者も暮らしており、ンターラはランベン・リネージの者にメンバーを限定していない。しかし、村から300キロ離れたヤウンデ

²⁹ 報告係は、葬礼などに参加した際、メンバーが来ているかをチェックし、また遺族からの謝礼を袋に入れて管理し、集会の時に金額を報告するなどの役目を負う。

³⁰ 指導係は、葬礼などに組織のメンバーが参加した際、踊るのを休んでいるメンバーを踊りの中に連れ戻すなど、メンバーの行動を秩序づける役目を負う。

の組織においては、そのリネージがより重要なものとして考えられている。都市の組織のメンバーは、ヤウンデに暮らすランベン地区出身ではなく、ランベン・リネージである者（ランベン・リネージの父、あるいは母を持つ者、その子どもたち、彼らの妻たち）である。ここで、頻繁に聞かれる尊称はランベン・リネージの尊称であるトンタン・ンゴラム、タンコンガン、ンシュンバである³¹。

つまり、村では地縁の方が重要視されているのに対し、都市では血縁がより強調されていることになる。それを考えれば、先に述べた合い言葉の違いも理解できる。かけ声に関していえば、都市の組織でのかけ声は「ンソグラム」「ンフィンフィ」など、ランベンのかけ声をもっぱら使用するのに対し、村ではそれと同程度に、バングラップ全体の合い言葉「ンコングン」「ンゴンクニ」がよく用いられている。都市では、村よりもランベン性を強調する仕組みになっている一方、村の組織は必ずしもランベンの者ばかりではないため、バングラップ全体のかけ声も使用されるのである。

都市の組織がランベン性を強調する理由の一つは、他の組織と差別化を図るためである。村の組織への参加は地区住民にとって選択の余地がないに等しいが、都市の組織は参加の自由度が高い。例えば、バングラップの男性組織マンジョや女性組織ケナーダだけに参加して、同地区出身者組織に参加しないという選択もできる。そのため、組織の側はメンバー獲得のため、組織に特徴を持たせなくてはならない。この会の名称「ランベン家族の会」によく表れているように、メンバーが「一つの家族」であるように強調することは、この組織の特徴である。

ところで、二つの組織のメンバー数を調べると、都市の組織は148人（1998年）、村の組織は80人（1998年）ほどである。都市のメンバーシップはより限られているにもかかわらず、メンバー数は都市の方が多いことがわかる。その理由の一つは、村における過疎化の進行である。村では青年層は少なく、子どもと老人ばかりが目立つ。したがって、村でいくら組織のメンバーシップを広げても、人数は都市（ヤウンデ）にかなわないのである。

4 組織の活動の比較

次に、両組織の活動を比較してみる。村の組織も、都市の組織も、ともに一週間に一度

³¹ 筆者は、首長リネージの尊称ンテシュンという首長家系の尊称と、ランベン・リネージの尊称ンシュンバの両方をもらっていたが、この組織のひとつとは、筆者を好んでンシュンバと呼んだ。

の割合で集会が開かれる。ただし都市では毎週土曜日、村では伝統週のンターラの日である。

活動内容は都市の方が多様である。村では1998年現在、トンチンしか機能していなかった。かつては村にも保険があり、それに参加することがメンバーの条件であったが、年1,200フランの保険料を払えない人が多くなり、1995年以降停止している。現在、助け合いが必要な場合、その度に保険料は徴収されるが、せいぜい一人200～500フランである。一方都市の組織では、一人年間10,000フランを保険料としてプールしている。これを支払うと「助け合いカード」がもらえる（資料IV-2参照）。この保険で、メンバー死亡の際は13万フランの「棺代」が遺族に渡され、さらに村への埋葬付添人二人をメンバーから派遣する費用20,000フランが出る。また死者祭宴があれば、儀礼参加に必要なメンバーの飲食代1,000フランずつが集められる。

また都市の組織では、トンチン、銀行（この組織では、学資基金 *caisse scolaire* と呼ばれている）、保険、そしてンシュワ＝ブランギが行われている。ンシュワはメジンバ語でトンチンを意味し、ブランギはピジン・イングリッシュでブランケットを意味するので、ンシュワ＝ブランギは言わば「毛布のトンチン」である。「毛布」はモノ（物品）の象徴で、受領者は現金ではなく物品で受領する。受領者はあらかじめ欲しい物品を他のメンバーと一緒に買いに行き、集会時にそれをあらためて受け取る。購入後余った金額も料理油などで調整され、現金が渡されることはない。これは言うてみれば、貯蓄から消費までを統制するトンチンである。これは女性のためのトンチンとされ、その物品（たいていは大鍋、ボウル、皿など）は女性会長の手から受け渡される。

葬礼への参加においては、都市でも村でも似たような「助け合い」がみられる。男性メンバーは飲み物を負担し、女性メンバーは食事をつくって持ち寄る（飲み物は、村ではヤシ酒、都市では瓶ビールという違いはある）。これらの飲食物は、メンバー全員で分け合って食べる。そして、そろいの制服をまとい、ダンスを踊ることも両組織で共通している。ダンスはどちらも、ランベン地区伝統のダンス「ラム（*lâm* 鍛冶という意味）」を踊る。ダンスの輪のなかには太鼓奏者や歌い手などがいるが、そこに鍛冶の象徴としての伝統的なふいご、装飾をほどこした皮の鞘（*nba nwi*）、マチェット（*nwi*）を手に踊るメンバーもいる。長い鉄製の剣（*bicwèd*）はダンスの輪の回りにぐるりと10数本突き刺してある。鉄を叩く道具ツウェラム（*tswè lâm*）は、楽器として打ち鳴らされる。ふいごには燻った石炭が入れられ、煙が出るように演出される。ふいごを持ったメンバーは、

2本の棒で風を送り続ける。踊りの最後には、めいめいが一枚の葉を持ち、そのふいごに投げる。これは鍛冶が終わり、その火を消すという象徴的行為である（実際は、ふいごの石炭に水をかけて消す）。このように、鍛冶の伝統を全面に出した小道具と共に踊るのが、村と都市の両組織において一般的である。

両組織の「助け合い」は、先にみたバングラップ全体の女性組織ケナーダとは異なっている。ケナーダでは、集会所で飲食をすませてから儀礼に出かける。また、ランベン家族の会のように土曜日から日曜日にかけて一晩中踊るというのは、大変な労力をともなうので、ケナーダのダンスは日曜日の午後だけと決まっている。実際に、ランベン家族の会では、夜通しのダンスについてメンバーから不満の声が出ている。多くのメンバーは土曜日にも働いている。土曜日に仕事が終わって、そのまま食事を作って儀礼に参加し夜通し踊る。疲れて休んでいると指導係に注意を受け、輪のなかに引き戻される。しかし、「我々は家族だから」という「正当な」理由の前に、メンバーからの不満の声はかき消されてしまうのである。

5 村のタブーとトンチン

次に、村の組織と都市の組織の両方で最も重要であるトンチンのしくみが、それぞれどのように違うのか考察する。

村の組織におけるトンチンは一つしかない。一方、都市の組織においては、「毛布のトンチン」を除いてもトンチンが6つある。その支払い金額はそれぞれ、15,000～20,000フラン、10,000フラン、5,000フラン、3,000フラン、1,000フラン、500フランである。このなかから、各自が支払える金額のものを選ぶ。500フランのものに登録したら、毎週500フランを払い続ける。これらのすべてに登録してもよいし、一つしかしなくてもよい。一つのトンチンに、数回支払いをするのも自由である。村のトンチンでも、原則的には支払い金額を自由に設定できる。しかし、トンチンは一つしかないため、メンバーの支払い金額は100フランから1,000フランまでばらつきがある。このような場合、受領者はもらった金額に応じて返していくことになる。例えば、Aという人が最初に受け取るとすると、次回Bが受け取る時、AはBがAにくれた金額を支払い、Cの時はCがくれた分を支払うというようになる。最後の受領者のみが、自分が決めた一定の額を毎回支払えば良いわけである。

なぜ、村には一つのトンチンしかないのだろうか。まず考えられるのが人数規模の違い

である。先にも述べたが、村でのトンチン参加者は74人で、都市では148人である。つまり、村の組織は都市の組織の半分の規模である。そのため、村の組織が都市の組織のように6つのトンチンを回すことはできない。次に考えられるのが、メンバーの質、より正確には職業の違いである。メンバーの職業を見ると、都市の組織で調査できた104人のうち、半数以上の55人が商売をしていた。一方、村の組織に登録する人の多くは、農業が主な仕事である。商人と農民が日常的に手にする金銭の量は比較するまでもなく、商人の方が大きい。

都市の組織のトンチンは、先にも述べたように15,000～20,000フラン、10,000フラン、5,000フラン、3,000フラン、1,000フラン、500フランがある。15,000～20,000フランのものは月に一度しか行われないため、それを省いても10,000フランでは34人、5,000フランでは10人、3,000フランでは56人、1,000フランでは60人、500フランでは42人が登録している。シュワ・ブランギは32人が1,000フランで参加している。これらを単純計算すると、毎週の集会で、約100万フラン（20万円）が動いていることになる。

一方村のンターラは集会によって集まる金額が異なるが、1997年9月24日の集会では、最高額1,000フランが3人、600フラン1人、500フラン22人、400フラン1人、300フラン10人、250フランが5人、200フランが20人、100フランが2人であった。これを合計すると23,450フラン（5,000円弱）である。最後の受領者が1,000フラン支払っており、登録者74人のすべてから1,000フランを集めたとしても74,000フランにしかない。100フランの登録者が受け取る金額は、全部合わせても7,400フランである。

村の組織にあっても、二つのトンチンを回すことは可能であろう。一つのトンチンで回る100フランと1,000フランの差は10倍である。そこで、例えば500フラン～1,000フランのトンチン、400フラン以下のトンチンと、金額に応じて二つに分けることは可能である。しかしそうしないのは、そのような金額に応じた分割がひとびとをも二分し、経済的格差を顕在化させるからである。都市の組織では、最高が20,000フラン、最小が500フランと、その差は40倍である。しかも、余裕のある者は20,000フランに2口、3口と登録しており、受領金額の差はさらに拡大する。都市の組織がいくつもの金額のトンチンを回すのは、メンバー間の経済的格差をみながはじめてから認めており、しかもいかなる収入の人も集会に参加できるように工夫することの方に力点を置いているからである。一方、村の組織のトンチンでは経済的格差の存在が否定されている。では、村に格差がないかと言えばそうではない。実際、この地区では事業をしている者、大きなコーヒー畑の所有者などがいる。

つまり、乗合タクシー代にもならない100フランから、1,000フランまでの金額が一つのトンチンのなかで回っていることは、実際の経済的格差の有無では説明できないことになる。

バミレケ社会は、貴族とそうでない者とのあいだの線引きがはっきりしており、先に見たように、集会においても伝統的ヒエラルキーが視覚化される。しかし、それとは対照的に、金銭に基づくヒエラルキーは村において見えないものにされている。村の組織ではトンチンの上限は定められておらず、1,000フラン以上を出すことも可能である。ただ、トンチンが一つしかないということが、たとえ裕福な者でもそれ以上の金額を支払うことをためらわせるのである。そのためらいは、例えば先に見た「嫉妬」や「邪術」という言葉で説明されることが多い。村の裕福な者たちは嫉妬を恐れ、また都市の者たちの多くは村にうずまく「嫉妬」を語る。村でトンチンが一つしか動いていないということは、メンバーのあいだに嫉妬をうみ出さないための知恵であると考えられる。一方、都市においてももちろん嫉妬は存在する。しかし、都市の組織のメンバーたちはヤウンデのあちこちに暮らし、また仕事も仕事場も同じではない。ところが、村での集会メンバー同士は、普段の生活においても密接な関係を持っている。集会で問題が起これば、それは生活にも直接反映してしまう。そのため村の集会では特に、金銭の取り扱いに慎重さを要求されることになる。村の富裕な者たち、余財のある者は、金銭を家畜などに変えて貯蓄をする。金銭について、ひとびとは多くを語りたがらないが、家畜は自慢げに見せてくれる。村においては、金銭こそタブーなのである。

6 トンチンにおける金銭の意味

では、村の組織において、嫉妬を招く金銭が飛び交うトンチンを行うことは、どのような意味があるのだろうか。まず一つの理由は、本章の前半に述べたように、ひとびとを毎週集会に参加させるためである。トンチンがないとひとびとは熱心に集会に来ない。

トンチンへの参加は、村の組織でも都市の組織でも義務づけられている。村の組織では、トンチンに参加できない者には10リットルのヤシ酒が「罰金」として科される³²。しかし、みな罰金を恐れてトンチンに参加しているのではない。彼らが恐れるのは社会的な非難

³² 村の組織の集会では、トンチン受領者が10リットルのヤシ酒を集会で振る舞う決まりになっている。しかし、トンチンに参加しない人にはそれを振る舞う機会がないため、罰金という形で10リットルのヤシ酒を支払わなくてはならない。

である。ひとびとは「トンチンに参加しないと、怠け者だと思われる」と言う。トンチンへの不参加に対するこの社会的な非難は、その村びとがたとえ老人でも病気でも貧乏でも、免れることができないという。どんな状態にあっても、「100フランくらいなら稼げるはず」だからである。このような言説が聞かれる限り、すべての者は次の集会までの7日間で、トンチンに支払う金銭をどうにかして稼ぐしかない。都市の組織でも次のようなことがあった。ある女性が休みがちになり、トンチンの支払いを3週間滞らせた。最初の2週間は、彼女の友人が立て替えたが、3週間目は誰も払おうとはしなかった。彼女の名前が呼ばれた時、その友人は「彼女は病気だから来られないだ」と発言した。しかし、他のメンバーが次のように言った。「病気になることはあるだろう。しかしトンチンのカネは決して病気にはならない。病気で来られないならば、カネだけよこすべきだ」。この発言にもあるように、トンチンの支払いは、いかなる場合にも優先される。例えば、トンチン継続中にメンバーが死亡すれば、そのメンバーの家族はトンチンが終了するまで支払いを続けなくてはならない。

われわれは金銭を稼ぐ行為を個人的なものとして考えがちである。しかしバミレケのあいだではそうではない。トンチンに参加を強いることは、金銭を稼ぐという個人的な行為を、集団的行為にまで高めることである。一人一人が、なんとか金銭を集め、トンチンに参加する。トンチンに参加することは、金銭を手に入れる努力をした、怠け者ではない、と人に証明することである。そして、一人一人が出し合った金銭を一つにまとめ、受領者に与える。この金銭は、銀行の貯金とはたとえ同額でも意味がまったく異なる。一人一人が稼いだ金銭が、トンチンを通じて、一旦組織のものとなる、つまり、個人の金銭が集団の金銭になるのである。純粋な貯蓄をしたはずの最後の受領者にとっても、例えばその10,000フランは、領収書のノートに書かれたメンバーの一人一人が、その日の集会のためにそれぞれ稼いだ金銭の束であり、自分がこれまで支払ってきた10,000フランと額は同じであっても、そこに含まれる意味は同じではないのである。銀行がトンチンに代替できない点は、ここにある。自分が稼いだ金銭を一時集団のものとして預け、そこから受け取るという過程こそが、彼らにとっては重要なのである。

都市の組織においても同様のことが言える。トンチンに参加することは「善」である。銀行への貯蓄はともすれば非難を浴びるが、トンチンへの参加自体を非難されることはあり得ない。トンチンは、金銭を稼ぎ、貯蓄するという「利己的」な行為を集団的行為とし、正当化する。それによって、受領者にとってトンチンの受領金は、給料でも貯金でも、ま

た貸付金でもないものになる。大企業家による高額なトンチンとは別に、コミュニティ・レベルのトンチンにおいては、受領の順番について「先にもらうと特だ」、「後にももらうと損だ」という議論はあまりおこらない³³。それは基本的に、トンチンで受け取る金銭の意味が、もらう順番によって変化することはないからである。銀行預金や郵便貯金といった貯蓄方法が身近にある都市においても、村で行われていたトンチンが依然として活発なのは、そうした預貯金とはトンチンにおける金銭の意味が異なるからである。さらに都市においては、村に存在する金銭のタブーは弱まり、より自由にトンチンを行うことができる。

トンチンは、しばしばバミレケの商売の成功と結びつけて語られる。トンチンという半ば強制的な貯蓄法は、実際に彼らの資本形成に役立っていることは確かである。しかし、貯蓄システムとしてのトンチンだけでなく、「トンチンに参加することは良いこと」、「そのためにカネを稼ぐことは良いこと」、というトンチンに付帯する価値観も同様に重要である。つまり、この価値観は、トンチンの前段階、金銭を稼ぐ段階に作用する。よく言われるように、「バミレケはトンチンのために働いている」のである。

ここで、序章で紹介したマレーシアのランカウイの漁村の事例を通して、バミレケのトンチンを検討する。カーステンは、この漁村においては、女性の存在が金銭の象徴的意味を転換させていることを明らかにしている。ランカウイでは男性のみが漁業を営み、現金収入を得ている。男性はこの現金をすべて女性に渡してしまう。女性はこの金銭で家計を切り盛りすることにより、男性の稼いだ個人的なカネを「共有された一女性の一親族の一金銭」に変化させる。注目すべきは、この女性たちが頼母子講 (*kur*) を行っていることである。ここでの頼母子講の受領金は、女性によって家計に費やされる。カーステンは、トンチンが近隣や親族を結びつける重要な役割を果たしているとしている (Carsten 1989)。

この事例では、頼母子講などを利用する女性が、金銭の象徴的意味を転換させるフィルターの役割をしているとすれば、バミレケの場合、トンチンそのものがフィルターの役割を果たしていると言える。トンチンに参加する者は、個人のものから集団のものへと意味を変えた金銭を受け取る。マレーシアの事例が「金銭の反親族的、反社会的な要素を無効にする女性の力」を表しているなら、バミレケの事例は、金銭を集団のものとして承認し、

³³ トンチンは、順番がすべて終わるとすぐに新しいサイクルが始まる。その際、特別な事情がない限り、順番は前回と同様のまま行われる。

金銭を得、富を蓄積することを奨励するトンチンの社会的意義を表している。村においては、蓄積はある一定の限度額が設けられるが、都市においてはその限度額が高い、あるいは無い。彼らがトンチンにこだわるのは、トンチンというフィルターを通すことで、自分の稼いだ金銭の意味を変えることができるとともに、金銭を稼ぐという村においては「反社会的」ととらえられる行為を社会的に正当化できるからだと考えられる。つまり、トンチンによって、金銭を稼ぐこと自体の社会的意味をも変えることができるのである。

このように、バミレケが資本を蓄積し商人として成功できた要因の一つは、他のエスニック・グループのように金銭の獲得、蓄積を反社会的な行為のままにせず、トンチンによって正当化できたからだと言える。

第5章 都市居住者の生み出す「故郷」

本章では、バミレケ都市居住者の金銭の回し方のなかで、彼らが都市で稼いだ金銭が、いかなる目的でどのように村へ投資されるのかを論じる。つまりここで扱うのは、都市で稼いだ金銭（短期サイクルの金銭）を、村の秩序（長期サイクル）に投資する事例であり、この投資が村と都市双方にどのような影響を与え、どのような結果をもたらしているかについて考察する。その事例として、第1節は死者祭宴、第2節は故郷の家、第3節は貴族の称号獲得をとりあげて考察する。第4節では、それらが生み出す結果を分析する。

第1節 死者祭宴にみられる消費

バミレケが、金銭を公然と消費するのは、葬礼においてである。普段の儉約が嘘のように、彼らは葬礼に金銭をつぎ込む。この節では、彼らがなぜそのような行為を行うのか、金銭の動きを中心に考察する。

1 死者祭宴の重要性

バミレケの葬礼はいくつかの段階を踏む。都市においては次のようである。まず死者が出ると「（死の）嘆き（vu）」がある。これは、故人の家へ知人、近隣の者が弔問に訪れ、故人の死を悼む通夜のようなものである。遺族は額に入った故人の写真を弔問客に見せる。また、同郷者組織が出向いて、賛美歌などを歌うこともある。弔問客には、飲み物¹や茹でたラッカセイがふるまわれる。都市の場合、その間、遺体はたいてい霊安所に置かれている。遺族によっては、遺体を霊安所から家に移して安置する際に、賛美歌などを歌う儀式を執り行う。遺体を家に安置して一夜を明かし、たいていは翌朝、遺族や友人らが村へ遺体の埋葬（nècone）に向かう。村では故人の家の敷地に墓穴が掘られ、遺体が埋葬される。参列者には飲食物が振る舞われる。埋葬から9日間は「（死の）嘆きを泣く（lăn vu）」期間で、服喪期にあたる。この期間が過ぎると、同郷者組織などが歌って

¹ 村ではこの飲み物はヤシ酒だが、都市では瓶詰めのビールやジュースである。ビールなら一本350フラン（約80円）の出費となる。同郷者組織の場合、この費用を寄付で集めている場合がある。

踊る、別の「嘆き」²が行われ、その後とりあえずの喪が明ける。喪が明けるこの時まで、遺族はベッドにではなく、床に寝る。

しかし、遺族にとって最も重要で多額の金銭を出費するのは、死者祭宴である。これは「(死の) 嘆きの終わり (zè vu)」と呼ばれる。これを行うことで本当の喪が明ける(「黒い服³を脱ぐ」と言われる)。死者祭宴で遺族が果たすべき最も重要な義務は、死者の名誉のために、多くのひとびとやダンス・グループを招待して踊ってもらい、彼らに酒と食事を提供することである。しかし、これをするためには多額の出費が必要となる。この死者祭宴は、普通死後数カ月から数年たって行われる。10年以上たって行われることも珍しくない。死の直後に行う場合もなくはないが、多くの人はその準備に時間をかける。費用を工面する時間も必要となる。ではなぜ、彼らは死者祭宴に金銭を費やすのだろうか。バングラップのランベン地区で行われたある死者祭宴を例に、この点を中心に考察していく。

(1) 祭宴の日取り

死者祭宴は故人が生活していた場所で行われることが多く、都市居住者が死亡した場合は都市で、村びとの場合は村で行われる。このことは、都市居住者が亡くなると都市ではなく必ず村に埋葬されることとは対照的である。乾季の週末ともなれば、都市や村のあちこちで死者祭宴が繰り広げられる⁴。

以下は、バングラップ村のランベン地区で行われたある死者祭宴の記述である。故人は村で暮らしていた60歳過ぎで亡くなった女性である。祭宴は1998年2月21日～22日の2日間行われ、曜日は土、日であった。通常死者祭宴は土、日に集中するが、これは参列者、特に村の場合は都市からの参列者の便宜を図ったものと言える。村の生活は基本的に伝統週⁵の8日を基準としているが、7日周期の近代週を村の生活に持ち込むものがある。それらは日曜日の教会の礼拝、学校、水曜日と土曜日に開かれるパンガンテの市などであり、

² これについて特別な名称はなく、フランス語でヌベン (neuvaine: カトリック用語で「9日間の祈り」) と呼ばれることが多い。

³ バングラップのしきたりでは、夫を亡くした女性は服喪の間、常に青か白の服を身につけなければならない。しかし、最近では死者祭宴がすんでいなくても、普通の服を着る傾向にある。親や子供、兄弟、妻を亡くした場合は、遺族は黒い服を着ることが一般的であるが、未亡人の場合ほど長期間着られることはない。また死者が出ると、親族は頭を剃る。

⁴ 乾季が好まれるのは村が農閑期であり、また死者祭宴はダンスが中心で屋外で行われるためである。

死者祭宴もその一つである。死者祭宴が行われる日曜日と、地区集会が行われるンターラの日がぶつかれば、集会は時間をずらして午後から行われる⁵。しかし、「ンシア」の日の死者祭宴は禁止されている⁶。第1章でも述べたが、ンシアはバングラuppにおいて初代首長が亡くなった日とされ、また宮廷でリネージ長会議が開かれる日でもある。「この日に死者祭宴を行ったら、たとえ首長であろうとも制裁される」という。しかし、村で守られているンシアの死者祭宴の禁止も、都市では効力がない⁷。この死者祭宴はバングラuppで行われたため、ンシアの日は避けられ、ンジニャムとンタンブの日にあたっていた。

(2) 祭宴の決定

調査を行った死者祭宴は大規模といえない。故人も故人の夫も貴族ではなく、経済的にも豊かではなかった。故人の夫Mは老齢で、祭宴を行うのは経済的、肉体的に困難であった。したがって、この死者祭宴を実質的に支えたのは、ヤウンデ在住の次女N（42歳）をはじめとする都市に暮らす子どもたちであった。Mは祭宴に際して一銭も支払わず、代わりに祭宴の費用はすべて、子どもたちが負担したという。「昔はプランテン・バナナを買うことができる子どもがいなかったが、もう子どもも大きくなったから、そろそろ祭宴をやらなくてはいけないと思った。いつまでもやらないと、私が妻を愛してなかったと思われるから」とMは語ったが、彼の妻が亡くなったのは1985年で、13年の歳月がたっていた。

Mが祭宴の日取りを決定したのは、祭宴が行われた頃から1年ほど前である。その時、彼は子どもたちに相談をしなかったという⁸。「自分は、子どもたちにとっては父親であるから、相談をする必要はなかった」が、「自分はまた自分の父親の子どもであるから、父親にはうかがいをたてた」と言う。彼がここで父親と呼ぶのは彼の父親の相続人のことである。彼の父親の相続人は彼の兄であったが、その兄も死んでしまったため、その相続人である兄の息子、つまり彼にとっての甥（ンコンサンバ在住）に祭宴の日取りについて

⁵ 教会の礼拝が死者祭宴とぶつかれば、ひとびとは死者祭宴への出席を優先する。これについて、ランベン地区のプロテスタント教会牧師は不満を述べた。彼は、通夜や埋葬儀礼ならよいが、死後何年もたって行われる死者祭宴は「慣習」であり、容認できないと語った。

⁶ 「ンシア」の日の埋葬は禁止ではないが、普段のように太鼓は叩かれず、ひっそりと行われる。

⁷ このことについて、「都市では伝統週と関係のない生活を送っているから」と説明されるが、この禁忌は、村という場所とセットになってはじめて重要になると思われる。

⁸ 普通、死者祭宴を行う前は、親族会議が開かれ、共同の出費について分担を決める。

相談をしたという。

(3) 招待

バミレケの死者祭宴で特徴的なのは、故人一人の死者祭宴で、遺族それぞれが別の場所（普通は1軒の家屋）で、別々に自分の招待客をもてなすということである。もてなす場所は二つのカテゴリーに分けられ、一つは「嘆きの家（bà' vu）」、もう一つは「嘆きの部屋⁹（ndα vu）」と呼ばれる。「嘆きの家」（以下家）は死者の家として設定され、祭宴の中心となり、普通故人の相続人が、故人の自宅を「家」として主催する。故人が女性の場合は、夫（あるいは夫の相続人）が担当することになっている。ここで取り上げる死者祭宴も故人は女性であるため、夫Mが「家」を、子どもたちがそれぞれ「嘆きの部屋」（以下部屋）を主催した。そこでの飲食は、原則的にその場所の主催者が負担する。特に子どもたちにとって、「部屋」を自分の責任において主催することは、自分たちが経済的に自立し一人前であることを示すためにも重要である。

次に、この死者祭宴で、誰がどこに「家」や「部屋」を主催したのかを見る。この夫婦には、年齢が50代から30代にまたがる6人の子どもがいる（図V-1）。村にいるのは長女L一人だけで、あとはヤウンデに二人、ンコンサンバに二人、ドゥアラに一人である。そのうち失業中の二人を除き、4人が「部屋」を主催した。その他、長女の義理の父親も「部屋」を主催した¹⁰。各「部屋」は、なるべく「家」の近くに配置される（図V-2）。

「家」には、故人が生前暮らしており現在M一人で暮らしている家を使い、その向かいに住んでいる長女Lも、自宅を「部屋」とした。村に住んでいない他の三人の子どもたちは、それぞれ村びとの家を「部屋」として借りた。「部屋」を借りる場合、村びとは親族である必要はない。「部屋」に使用したいと申し出を受けた村びとは断れないものとされており、快く自分の家を提供しなくてはならない。借りる側は相手との関係もさることながら、電気がきているかどうか、立地はどうかということを考慮するようである。

(4) 祭宴の流れ

⁹ bà'もndαも、ひとびとは「家」として説明することもあるが、bà'はどちらかというと建物そのものを指し、ndαは家の内部を指す。ここでは両者を区別するためndαを「部屋」とする。

¹⁰ 親族であれば、原則的に誰でも「部屋」を主催することができる。しかし、金銭的な理由もあり、ふつう「部屋」を主催するのは近い親族や故人と親交が深かった者に限られる。

ヤウンデ在住の故人の次女Nは、祭宴前日の金曜日の午後に到着した。彼女が女性会長をしている「ヤウンデのランベン家族の会（以下ランベン家族の会）¹¹」の女性メンバー数人も一緒である。彼女たちは、翌日から2日間の料理作りのためにやって来た。彼女たちは、プランテン・バナナなど多くの食糧を運び込む。Nが「部屋」として使用したのは、この地区で唯一の売店を経営する家で、ランベン地区の中心にある。それは、壁がセメントで固められ、床も土間ではなくタイルを貼った「都会的」な家である。

土曜日、泊まり込んだ女性メンバーたちが、朝からもてなしの料理作りにとりかかる。彼女たちが作る料理でメインとなるのは、コンドレ（ヤギの肉とプランテン・バナナをヤシ油で煮込んだ料理）である。この料理は死者祭宴には欠かせない。また、肉はヤギの肉でなければならない。ヤギ肉は彼らにとって最も価値あるものとされる。午後には、「ランベン家族の会」の田のメンバーが到着する。到着した者はNの「部屋」でまず食事を供される。食べ方は特になく、来た順番に個々人が思い思いに適当なところに座って食べる。「ランベン家族の会」のメンバーは、ヤウンデからマイクロバスを貸し切ってやって来ており、35人ほどが参加した。この会は通常は、毎週土曜日に集会を行うが、Nの死者祭宴が土、日に行われるため、その週の集会は木曜日に振り替えられた。ヤウンデで行われる「ランベン家族の会」のメンバー関係の祭宴には、全員参加が原則である。しかし今回のように村で行われるものは自由参加である。との時には、Nと親しい者、招待された者だけが来ている。

土曜の朝、故人の夫Mの「家」の前には、ランベン地区集会、ンターラのメンバーが集まりはじめる。彼らは葬礼ダンス用の制服を着ている。故人も夫のMも長女Lもンターラのメンバーであったため、他のメンバーたちがダンスを踊りに来たのである。女性メンバーたちは、各人が食事を作ってきており、男性メンバーたちは各人5リットルのヤシ酒を持参している¹²。10時過ぎから、メンバーと遺族らはランベンのダンス、ラムを1時間ほど踊った（写真V-1参照）。踊りが終わると、故人の夫Mは参加者に感謝を表す演説をし、ンターラのメンバーたちは自分らが持ち寄ったヤシ酒を飲み、また踊りはじめる。ここでは、メンバーや遺族以外にも他の村びとや都市居住者など、多くの参加者が踊りに加

¹¹ 前章で述べた「ヤウンデのランベン家族の会」と同じ。

¹² 金銭を支払って招待したダンス・グループなら、主催者側が彼らに飲食物を提供する義務を負うが、この事例では、ダンス・グループに主催者が所属しているため、メンバー自ら飲食物を用意し、無償でダンスを提供してくれる。

わった。メンバーたちは、そのあと自分たちで持ち寄った食事を食べた。ンターラのメンバーは午後にも再びラムを踊った。

都市に居住する他の子どもたちも、「部屋」を主催する限りにおいて、ダンス・グループを招待しなくてはならない。ダンス・グループを呼ぶことは、「部屋」の主催者の義務だからである。普段から相互扶助組織に参加し、自らの義務を果たしていれば、組織のメンバーが無償で踊ってくれる。つまり組織への参加は、一種の貯蓄であると考えることができる。

長男Jの「部屋」では、彼の義母がランベン地区の隣に位置するコブダ地区からダンス・グループを呼んでおり、「ラリ (lale')」という戦士のダンスが行われた。この義母はコブダ地区に暮らしており、このダンス・グループのメンバーであった。長男J自身は「クワ (kwa)」という踊りを行うダンス・グループをンコンサンバから招待した。』はンコンサンバ在住で、そのグループのメンバーであった。末息子Fはバンガンテのダンス「マンガム (mângàmbe)」のグループを招待した。Fは1993年から1996年までバンガンテに暮らしており、このグループのメンバーであった。Fはまた、ンコンサンバに移り住んだ後も同グループのメンバーとして活動を続けていた。また土曜の夜、彼の「部屋」はディスコの会場となった。Fが持ち込んだ音楽機材から大音量でポップミュージックが流され、若者たちは朝まで踊った。「部屋」は主催しなかったが、故人の母方のイトコ（男性）は「ダンジ (dànji)」を踊るダンス・グループを招待した。

土曜の夕方、次女Nの「部屋」の前ではテント設営が始まる¹³。日が落ちると、ヤウンデの「ランベン家族の会」のメンバーたちが、テントの下でラムを踊りはじめた。途中に休憩を入れてNの「部屋」で食事を取り、夜中まで踊った。メンバーを含めた弔問客の宿泊場所は、基本的にNの「部屋」であるが、当然のことながら全員のベッドが用意されているわけではない。ベッドの上は雑魚寝状態で、床にマットをひいたり、椅子を並べるなどして、窮屈に寝るしかない。近所に親族などがいる場合はそこで寝ることもある。

日曜日の午前中は次女Nの「部屋」の前で、死者祭宴の中心である「（死の）嘆きを泣く (lăn vu)」が行われた¹⁴。「嘆きを泣く」は、「嘆きを始める (to'o vu)」とも

¹³ テントは日よけという実用性もさることながら、盛大な雰囲気を出す演出の一つであり、また金銭的余裕を見せる意味もある。この時は、テントを張ったのはNだけであった。

¹⁴ 先にも述べたように、死者祭宴が土、日に行われるのは都市居住者の便宜を図ったものであり、最も重要な「嘆きを泣く」を日曜日の午前中に行うのは、月曜日の仕事に戻るように、日曜の正午になればドゥアラやヤウンデに向けて帰っていく都市居住者のためである。ヤウンデで行われる死者祭宴の場合「嘆きを泣く」は午後に行われる。

言われ、時計と反対周りの踊りの輪の内側に、時計回りに遺族の列が故人の遺影を持って入り、涙を流すというものである。周りの踊りの者たちは遺族の流す涙をふき、もらい泣きをしながら踊る。この時太鼓は、ゆっくりとした「死を泣く」ためのリズムを打つ。これが終わると正式に喪が明ける。リズムが変わり、喜びの踊りに変化する。そして踊りは続くが、これで死者祭宴が終わったことになる。ひとしきり踊ると、三々五々、都市居住者は帰っていく。正午、ヤウンデの「ランベン家族の会」のメンバーは、来た時のマイクロバスで帰っていった。多くの客が帰った後でも、長男の義母が招待したダンス・グループは、「ラリ」を踊り続けていた。

2 死者祭宴のための出費

先にも述べたように、この死者祭宴はそれほど大規模なものではなかったが、それでも「家」や「部屋」の主催はかなりの出費である。

ンコンサンバ在住で配管工事会社に勤務する末息子Fは、この死者祭宴のために招待状（資料V-1参照）を刷り、100人に配った。そのうち80人が来てくれたという。印刷費用は7,000フランであった。その他食料費が78,500フラン、飲み物（リカー、ヤシ酒、ワインなど）代が66,000フラン、交通費（本人と数人の友人分）が16,000フラン、白ワインを入れる瓶が7,000フラン、ダンス・グループへの祝儀が12,000フランであった。彼が負担した額は合計18万6,000フランで、彼の月給の約3カ月分にのぼった。収入は、彼が所属する組織（バンガンテのダンス・グループ）から死者祭宴の費用として受け取った12,500フラン¹⁵、また弔問客から遺族への弔問品である「嘆きのもの（ju va）」と呼ばれる贈与の総額は23,500フランであった。「嘆きのもの」は現金だけでなく、ワインやヤムイモなど飲食物という形での差し入れもあるが、それらはすべてその場で消費されたり、あるいは土産として弔問客に贈与された。

今回の死者祭宴では、マンブンという女性貴族の称号を持つ次女Nが、最も多くの金銭を費やしたとされる。彼女の「部屋」を訪れて食事をした人数は、土曜日の正午から22時までで、延べ600人にものぼった。このための食料費だけでも20万フランをくだらなかったと言われる。この死者祭宴では最大規模の出費である。Nはまた、この日のために新し

¹⁵ もしメンバーでなければ、このようなお悔やみ金が渡されるどころか、ダンスをしてもらうために、ヤギ1頭と、最低30,000フランの現金を支払わなくてはならなかった。

い服を仕立て、一部の友人の交通費も支払った。彼女はヤウンデで仕立屋を営み、また家賃収入もある。彼女が女性会長を務める「ランベン家族の会」では、毎週2万フラン（この組織での最高金額）のトンチンに参加している。彼女の母親の死者祭宴には、都市である程度成功している彼女に見合った出費が必要であった。この死者祭宴が終わった後、祭宴がうまくいったと思うかとたずねると彼女は、「きちんと考えたようにすすみました。なぜならみんな十分に食べたし、十分に踊ったし、帰る時誰も怒ってなかったから」と答えた。招待した者たちをもてなし、満足させることが、彼女の一番の気がかりだったのである¹⁶。

死者祭宴では、参列者側も出費を強いられる。彼らは手ぶらで死者祭宴に来るのではない。上で述べたように、「嘆きのもの」と呼ばれる酒や現金を遺族に贈与する¹⁷。また、ドゥアラ、ヤウンデ、村と、親族や知人があちこちに住んでいるため、彼らの葬礼に駆けつけるだけでも出費がかさむ。例えば、ヤウンデから村へは往復5,000フランかかる。

「誰某が死んだ、通夜に行かなくては」、「死者祭宴の招待状をもらってしまったが、カネがない」と言って溜息をつく人は少なくない。

葬礼の招待を受けると、まず断ることはできない。相手が過去に自分が主催した死者祭宴や通夜に出席していたなら、なおさらである。招待する側は、誰彼となく招待しているわけではないのである。友人の葬礼に出席しないことは、トンチンで金銭を受け取って、そのまま返済せずに逃げることに等しい。実際に、「トンチンにおける持ち逃げのようなものだ」と言われる。さらに理由もなく欠席すると、故人殺しの疑いにまで発展することもある。バミレケのあいだでは、死者祭宴など葬礼の出席をめぐる壊れてしまう人間関係は多い。

3 死者祭宴の華美さ

では、なぜ彼らは負担を引き受け、死者祭宴で消費するのか。

実は、今回の死者祭宴の裏では、同じ家族のなかで、もう一人の故人のための死者祭宴が行われていた。もう一人の故人とは、今回の祭宴が行われた女性の父であり、この家

¹⁶ 彼女が唯一残念がっていたのは、この祭宴に合わせて新調した靴が一度も履かないまま盗まれてしまったことだった。死者祭宴では、祭宴の混乱に乗じての盗難がつきものであるという。

¹⁷ 遺族は、「嘆きのもの」を保管しておく場所（fa va）をつくって管理し、誰が何を持ってきたかを記録している。

族は彼のための祭宴をまだ行っていなかった。順番から言えば、遺族は先にこの父の死者祭宴をしなくてはならなかった。そのため、死者祭宴の「家」が別に設けられ、土曜日の夜にこの父の墓前で小規模なダンスと「嘆きを泣く」が執り行われた¹⁸。しかし、この死者祭宴に故人の当の男性側の親族は猛反対し、出席しなかった者もいた。彼らはより盛大な死者祭宴を、この男性のためだけにやりたかったのである。「今はカネがないから待とう」と言っている間に新たな死者が出る。そうして、やらねばならない死者祭宴は蓄積されていく。やるべき祭宴を10も20も抱え込む遺族もある。先に死んだ者から順番に行わない限り、後に死んだ者の死者祭宴は執り行われぬ。そのため、バミレケの死者祭宴は順番待ちの状態、故人の死後すぐに行われることはなく、のびのびになる。今回の死者祭宴の場合、一人の死者祭宴を簡素化した結果、親族のあいだに亀裂を生んでしまった。死者祭宴の簡素化は、遺族の名誉がかかっている以上、容易ではないのである。

バミレケが死者祭宴を行うのは、故人の名誉のためである。死者祭宴を催すことは、残された者の故人への義務と考えられている。故人はこの死者祭宴を済ませて、本当の「先祖 (təlonə)」になるといわれる¹⁹。この義務を怠ると、故人をいつまでも曖昧な状態におくことになる。そのため、この義務からは何年たっても逃れることはできない。自分ができなければ、その義務は子どもや孫に受け継がれる。死者祭宴は蓄積されていくのであり、トンチンの債務と同様に免除されることはない。

デュドネ・ムアフォは、1970年代以降バミレケの死者祭宴が年々派手になる傾向を指摘している。死者祭宴の盛大さが都市での成功やステータスと結びついたことにより、それまでの宗教的な性質が社会的なものに変化してきたと述べている (Mouafo 1994)。従来も、バミレケ社会では死者祭宴の壮大さを誇ることはあったが、それは首長や貴族といった社会のヒエラルキーに応じたものであった。首長や貴族は、地位に応じた規模の死者祭宴を行うことが義務であった。しかし今は、金銭の余裕があれば、誰でも華美な死者祭宴を行うことができる。死者祭宴を盛大に行おうとする欲求は、経済的に余裕のある都市居住者が、祭宴の盛大さと自分たちの社会的地位を結びつけようとするところからつくりだされたのである。故人への義務を果たすことが目的ならば、ンターラがそうであるように、みなでささやかな飲食物を持ち寄って踊ればよい。しかし、現実には華美な死者祭宴が望まれ、その規模は金銭的な余裕との関係で決定される。そこで意図されるのは、成功

¹⁸ 主催者は、この故人の父の継承者である。この人物はドゥアラ在住であった。

¹⁹ また、死者祭宴の場は、その故人の相続者を公にする機会でもある。

の見せびらかしである。特に都市居住者による村での死者祭宴では、そのことが顕著になる。

村で死者祭宴が行われると、村の生活は一時的に都市的な様相を帯びる。人とすれ違うこともあまりない閑散とした普段の村の風景は一変し、人口が増える。その多数が都市居住者であることも珍しくない。また、村では普段目にしない4輪駆動車や高級車が何台も並ぶ。本章であげた事例でも、13台の車両がランベン地区に集まった²⁰。ナンバーを見れば、9台がドゥアラやヤウンデといった都市からの車である。また、遺族によっては、故人の写真などが印刷されたスカーフやTシャツなどをつくって配る。その他に、大勢の客を呼び、食べ物を振る舞うこともある。こうして村びとには、都市居住者の財力が見せつけられる。このような都市居住者の見せびらかしは、都市には村よりいい生活があるという神話を村びとに確認させることになる。

儉約を重視するバミレケの生活で公然とした消費が評価されるのは、葬礼くらいである。このため、遺族は無理をして金銭をつぎ込む。見せびらかしは、見せつける相手を必要とし、それは一人でも多い方がよい。招待される側は、その目撃者として必要とされていることを認識し、無理をしてでも駆けつけ、遺族が時間とカネをかけて準備した祭宴に参加し盛り上げる。見せびらかしとしての死者祭宴は、主催者遺族と招待客、両者がそろって成立するのである。

第2節 都市居住者が建てる村の家

次にこの節では、都市居住者がなぜ村に家を建てるのかを考察する。

1 村の家とその貸し借り

バミレケの都市居住者にとって、都市での成功の証の一つは都市と村に自分の家を建てることである²¹。彼らは当面、村で暮らす予定はなくとも村に家を建てる。表V-1は、1998年にバングラップのランベン地区で調査した、家の所有者の居住地と家の軒数である

²⁰ もともと、ランベン地区で乗用車を所有する世帯は一つしかない。

²¹ ただし、女性は結婚すると、自分の故郷に家を建てることは稀である。埋葬も夫の村である。

²²。表V-1でわかるように、ランベン地区にある家132軒のうち、3分の1以上の48軒が都市居住者²³によって建てられたものである。このうち31軒は誰も住んでおらず、空き家になっている。

家の外観を見てみる。伝統的な草葺き屋根の家はこの地区にはなく、すべてはトタン葺きである。しかし、家の壁には3種類ある。一つ目は日干し煉瓦、二つ目は日干し煉瓦の上からセメントを塗ったもの、三つ目はコンクリート・ブロックの上からセメントを塗ったものである。調査地ではこの順番で、より「近代的」とであるとされる²⁴。この地区では、コンクリート・ブロック壁を持つ家が7軒あるが、それらはすべて都市居住者の家である（表V-2）。7軒のうち、4軒は家の敷地の周囲にコンクリート塀が張り巡らされ、村に都市的様相を持ち込んでいる（写真V-2参照）²⁵。日干し煉瓦の上からセメントを塗った家は24軒あるが、うち14軒は都市居住者の家である。それ以外のほとんどの家は、日干し煉瓦の壁に床は土間の質素な家である。

長期間空き屋にしておくと、家が傷み、家財道具を盗まれるなどのリスクがある。そのため、家の所有者は誰かが住むことを望む。ランベン地区では、17軒の家で所有者以外の人に住んでもらっている（家賃は発生しない）が、うち5軒が日干し煉瓦にセメントの家、12軒が日干し煉瓦の家である。7軒のコンクリート・ブロックの家はいずれも空き家のままである。

人を住まわせる場合、所有者と居住者とは必ずしも親族関係にはない。17軒のうち15軒について調べたところ、両者が親族関係にあったのは6軒、そうでないのが9軒であり、親族関係にない方が多かった。親族でない者を住まわせるのは、過疎化の進んだ村でよく見られるが、それは村内に適当な親族がいらないからである。親族を住まわせている場合の内訳は表V-3の通りであるが、所有者の妹のみ60代の女性で、他は男性で30代が二人、20代が三人と若い。この男性たちは、都市から戻ってきた者や成長して両親の家から独立した者たち、つまりまだ自分の家を持ってない若者である。これより上の世代は、たいてい自

²² 所有者は故人も含み、故人が暮らしていた場所を居住地とした。また、村びとが新たに家を建てる際、うち捨てた無人の家屋は数に入れていない。

²³ 彼らの居住地の内訳は、ヤウンデ15人（うち一人は2軒所有）、ドゥアラ、ンコンサンバ各10人、バンガンテ5人、バフィア、サア、マケネネ、クリビ、トンベル、ガルアがそれぞれ一人ずつとなっている（不明は1軒）。バンガンテはバングラップから徒歩でも行ける距離であるが、県庁所在地で人口も30,000人を越えるため、都市に含めておく。

²⁴ 日干し煉瓦は村の中で制作されているが、コンクリート・ブロックは都市から買い付けなければならない。

²⁵ このような塀は、村によく見られる境界を示すための竹や木の塀とは異なり、盗難よけという役目も負っている。

分の家を持っている。つまり家の所有者と家のない者の双方にとって都合の良い状態である。一方、若者が少ない村において、自分の親族のなかで適当な人を探すのは難しいことが、親族関係にない者を住まわせる一因にもなっている²⁶。

では、親族以外との家の貸し借りを、村びとと都市居住者は互いにどう考えているのか。親族関係なしに家を借りている村びとたちは、「自分は信頼されているから」と話す。都市の所有者の側からも、「信頼がおければ住んでくれる人は誰でもいい」という言葉が聞かれた。しかし、以下のような事例を考慮すると、その言葉通り受け取ることは難しい。

1997年8月10日から24日まで、カメルーン各地にあるバングラップ出身者の学生組織「バングラップ学生の会」が、2年に一度の大集会をバングラップで開いた。ヤウンデをはじめ、ドゥアラ、ンコンサンバなど各地のBSAのメンバーたちが村に集合し、さまざまな催しを行った。筆者もBSAのメンバーとして、ヤウンデBSAのメンバーたちと一緒に村へ行き、ヤウンデBSA会長であるRの家にみなと宿泊した。Rの両親はヤウンデ在住で、その家はRの父親が建てた家であった。この家には、親族ではない若者が一人で住んでいた。Rは筆者に何度も繰り返し忠告した。「いいかい、部屋を出る時は絶対に鍵をかけるように。君の持ち物が無くなっても知らないよ。僕らは村びとを信頼していないんだ」。もちろんRは、家に住むその若者の前ではそのような素振りを見せない。自分の服をあげたり、食べ物を分けるなど親切にしておいて、他の者には次のように言う。「こうしておけば彼は喜んで、しっかり家を管理するだろう」。ある女子メンバー姉妹の家も、ヤウンデ在住の父親が建てた家で、親族関係にない若い夫婦と子どもが住んでいた。彼女たちは久しぶりに訪れた家を見回して言った。「ああ汚い。どうして掃除しないのかしら？村の人はきれいにするってことを知らないのよね」と。ここでも出かける時は、荷物を置いている部屋にしっかりと鍵をかけ、荷物の安全をはかった。彼女らは、その夫婦にヤウンデからの土産をわたすなど、表面的にはすこぶる友好的に振る舞っていたにもかかわらずである。

これらの事例がすべてではないだろうが²⁷、次のようなルールはバミレケのあいだで広くみられる。多くの都市居住者が村びとを家に住まわせる場合、たいてい一部屋（最も広くて良い部屋）には嚴重に鍵がかけられている。住み手の村びとには、その他の部屋を使

²⁶ このような理由以外に、あえて親族に住まわせない場合もあると考えられるが、今のところ資料はない。

²⁷ BSAの会長Rや姉妹がみな、ヤウンデ生まれのヤウンデ育ちであることも、彼らの対応に影響していると思われる。

わせる。都市居住者は、「鍵をかけておくのは、葬礼などで帰郷する時、いつでも使えるようにするため」と説明する。しかし、この閉ざされた部屋は、貸し手と借り手の不平等な関係を表している。村びとの側も、都市の所有者やその家族から、自分が完全に信頼されていないことを感じている。間借りするのは、彼らにとって自分の家を建てるまでの辛抱であり、都市居住者の側にとっては、空き家にするよりは望ましいという程度の妥協なのである。

2 埋葬の場か余生の場か

空き家のままにしる村びとを住まわせるにしろ、管理の難しい村の家を、なぜ都市居住者は建てたがるのだろうか。バミレケの都市居住者にとって、村の家は都市の家と同様、あるいはそれ以上に重要であるが、その理由としてあげられるのが「埋葬」である²⁸。

村びとはもちろん、都市居住者にとっても埋葬場所は村に限られる。その理由をたずねても、その質問は愚問だという顔をされ、「自分の村なのだから当然だ」、「我々の伝統だ」という答えが返ってくるばかりである。ある少年は、この愚問になんとか答えようとしてくれた。ヤウンデで、学校の長期休暇にタバコの行商をしているこの13歳の少年は、村に埋葬されたい理由を次のように話した²⁹。

「このあたりの都市では、とにかく（ここのひとびとは）僕らのひとびとじゃない。村には、とにかく僕らのひとびとがいる。そこに、君を埋葬したら少なくとも君の墓は残って、人がそこを耕しに来ることはない。君の場所とはとにかく残って、誰が埋葬されたかってことを人は知っている。君の子どもたちはしょっちゅう、花だっ
て供えにやって来る。」

彼は、村に暮らす「僕らのひとびと（*nos gens*）」と「都市のひとびと」を区別した。都市のひとびとは自分の墓を耕すかもしれないが、村に暮らす「僕らのひとびと」は自分の墓を尊重してくれる。将来ヤウンデと村の両方に家を建てるつもりだが、「ヤウンデの

²⁸ 故郷への埋葬が、アフリカ都市に生きる者たちにとって重要な関心事であることは、松田がナイロビの事例で論じている（松田：1996）。

²⁹ 聞き取り：1997年6月16日・ヤウンデ。

家は誰かに奪われるかもしれない」ので、彼にとっては「村の家の方が大事」と言う。ヤウンデに生まれ育ち、村には2回しか行ったことのない彼が、村の方に信頼をおいている。

また、ヤウンデで買い物袋の行商をしている16歳の少年は、埋葬について次のように話した³⁰。

「ここ、ヤウンデに誰かを埋葬するの？それ（ヤウンデ）はたぶん国家のカネなんだ。ヤウンデに君を埋葬できる、墓地になら埋葬できる。でも君の家には埋葬できない。（村では）君の家の前に埋葬できるんだ」。

この少年は、村と都市に、それぞれ違うルールがあると認識している。

少年が言うように、バミレケの村では家の敷地に埋葬する習慣がある。もし自分の家がなければ、父親の土地に埋葬されることになるが、それは、父親を相続した者でない限り恥すべきことである。相続しなかった者は、自分の家を建ててはじめて一人前とみなされる。男は自分の家を建て、そこに埋葬されるのが理想である。埋葬後、数年たつと頭蓋は掘り出され、小さな祠に移される。そこで故人は、自分の家族の創設者となるのである。一方、父親を相続した者は、代々伝わるいくつもの頭蓋を守り続ける³¹。

では、村の家は埋葬の場としての意味しかないのかというと、そうではない。バミレケの都市居住者の多くは、年をとって仕事を引退したら村で暮らしたいと語る。「余生のための家」である。しかし「引退して余生を村で暮らす」ことは、ただ村に帰って、他の村びと同じように、畑仕事やヤシ酒づくりではそばそと生きていくことではない。むしろ、都市でのようにあくせく働かず、悠々自適に暮らすということである。そのためには、都市である程度成功し、村にはそれに見合った家を建て、死ぬまで楽に暮らせる貯金、あるいは収入源を確保していなくてはならない。つまり、「余生を村で過ごす」というのは、成功者にのみ可能であり、口で言うほど簡単ではない。例えば、バングラuppのランベン地区で調査した限りにおいて、この理想にあてはまる者には出会わなかった。都市からの帰還者はかなりいるが、たいていは「相続をしたから」、「病気になったから」という理

³⁰ 第2章、第1節、2の（事例10）参照。

³¹ この慣習は、バミレケすべてに共通ではない。バングラuppの中でも、リネージによってやらない者たちもいる。頭蓋を掘り出さないリネージは、墓の一部の土をとって、頭蓋のかわりに保管する。頭蓋を守る者（相続者）は、その一族から要請があれば（例えば、病気など）、ヤギの肉やヤシ油を供物として頭蓋に捧げて祈る。それをしないと不幸が起こると考えられている。

由で村に帰還している。しかし、よく聞いてみると、彼らが実は都市において経済的な問題を抱えていたことがわかる³²。「余生を過ごす」のが成功組とすれば、彼らは「失敗組」である。「都市でやっていけなかったから」と彼らが言わないのは、せめてものプライドである。「失敗して村に帰ること」は恥なのである。つまりランベン地区では、余生のために家を建てる成功者は多いが、現実には成功者の誰一人として村で余生など過ごしていないのである。

しかし、バミレケのなかに成功者は多い。成功者は、豪邸と呼びうる家を村に建てる。バミレケ・ランドの半サバンナ地帯の丘陵地に、「伝統的」家屋に混じり、豪邸が点在している（写真V-3、V-4、V-5参照）。ホテルと見まがうような建物もあり、電気、水道設備はもちろん、電話線が通っていることも珍しくない。彼らは引退後、その豪邸で悠々自適の生活を送らないのであろうか。ドンモは、彼らが帰還しない理由を経済的なものと見ており、彼らが財の大部分をバミレケ・ランドの外部に所有しているせいだと分析する

（Dongmo 1981 vol.II: 215）。都市の成功者たちが村に豪邸を持つとしても、それは彼らにとって余財であり、都市にはそれ以上の財や事業がある。第3章でみたような満足を知らない企業家たちは、事業拡大を諦めてまで村の余生に執着しないのである。

しかし、ドンモの言う経済的な理由以外に心理的な要因も考えられる。それは村びとへの不信である³³。都市居住者と村びととのあいだに経済的な格差が存在することは、村びとにも都市居住者にも顕然たる事実と考えられている。実際には、都市居住者の内部でも、村の内部でも経済格差はあるが、それよりも都市と村自体の格差が強調される。この経済格差は、都市居住者に村びとへの恐れを抱かせる。それは呪術（邪術）という言葉で語られることが多い。これはバミレケだけでなくカメルーンの他地域においても見られ、カメルーンにおいて村から都市への移住の理由の一つは、村にはびこる呪術への恐れと考えられていた（Rowlands & Warnier 1988）。「結果的に都市居住者は次の選択を迫られる。自分のルーツを切り離すか、村の利益になるよう自分の富の一部を再分配するか、呪術によって脅かされるか、あるいは実際に起こっていることだが、それら三つすべてのカクテ

³² 相続は正当な帰郷理由に思えるが、相続しても都市に暮らし続ける人は数多い。首長の座を除いて、本来都市でうまくいってれば、相続しても帰郷を強いられることはまずない。

³³ 先の若者の事例もそうであるが、別の事例もある。筆者が、はじめてバングラップ村へ行くため、バングラップのヤウンデ代表者に伺いをたてた時であった。彼は筆者に、「誰が君を守るのか?」、「君は白人だから、カネを持っていると思われて、どんな目にあうかわからない」、「村では常に安全に気を付けなさい」など、ひたすらネガティブな忠告をした。バングラップ村の同郷者組織に積極的に関わり、代表まで引き受けている人物からそのような言葉を聞かされて驚いた。彼の反応は、筆者に何かあっては困るという責任感だけでは説明できないように思えた。

ルを享受するかである」(Rowlands & Warnier 1988: 130)。村への分配を都市成功者に強いる呪術は、両義的である。呪術は都市成功者が村へ投資するなど、絆を深める方向に機能すると同時に、その恐れから成功者を村から遠ざけるからである(Geschiere 1997: 97-130)。

都市居住者は、自分の存在が村びとの嫉妬をかきたてるのではないかと恐れる。都市居住者、特に成功者にとっては、多くの財を持ち込み「村に帰って余生を過ごす」ことは恐怖なのである。

3 村の家の持つ意味

余生のためと言いながら家を建て、それが実現しないとなれば、やはり疑問は残る。なぜ都市居住者は村に家を建てるのか。埋葬のためだけに、豪邸は必要であろうか。

都市で、彼らが積極的に不動産に投資してきたことは2章で述べた。都市に自分の家を建てれば家賃が節約でき、賃貸用の家を建てれば、賃貸料が得られる。つまり都市の不動産には経済的利点がある。一方、村の家には経済的利点がほとんどない。それは、いつ住むのかわからない家であり、賃貸料を得ることも期待できず、投資にならない家である。それでも都市居住者が村に家を建てるのは、村の家が別の利点を持つからである。

都市の家は、ひとびとから個人的な財とみなされる。一方、村の家は個人的な財であると同時に、村の財であるとみなされる。それは、次のような例からも確かめられる。前述したBSA(バングラupp学生の会)の大集会の期間中、「邪術³⁴と村の発展」というシンポジウムが開かれた。そこでは、「バングラuppは他の村に比べると発展が遅れているが、邪術で人の命を犠牲にしてまで村を発展させることは悪だ」という議論がすすんでいた。しかしヤウンデ在住の学生が異論をはさみ、「邪術だろうと村が発展するならいいではないか」と言った。すると司会は、「じゃあ君は、この村に豪邸が4軒建つのと引きかえに、自分の命を犠牲にできるか?」と彼に問うた。彼は「もちろんだ、それが村の発展になるなら」と真顔で答え、会場から失笑が起きた。注目すべきは司会の質問である。「<村の>豪邸のために命を捨てられるか?」という質問がなりたつのは、村の豪邸が誰か個人のものである以上に、村のものという考えが、みなに共有されていることを示している。そ

³⁴ ここでの邪術は、平等化を志向する貧者から富者への邪術とは逆に、3章で述べた「ファムラ」のように、人の命を犠牲にして豊かになるという富裕化を志向した邪術である。

してその学生は、自分のものではない豪邸のために、ひいては村の発展のために、命を捨てると言ったのである。またある時、ドゥアラ在住のバンガンテ出身の若者にバングラップまで車で送ってもらったことがあった。彼はバングラップに来るのは初めてだったが、しばらく村のなかを進んでいくと突然笑い出した。「なんだいここは？大きな家がどこにもないじゃないか。笑わせるよ。ドゥアラのバングラップの奴らは、バングラップのことをまるでパリであるかのように触れまわっているんだ。どこがパリなんだ？単なるブッシュじゃないか！」。

病院、学校、水道施設がどれだけあるかは村の発展の目安である。しかしそれに加え、個人の豪邸も目安の一つなのである。そのため、村に自分の家を建てることは、村の発展に貢献した事になる。つまり、都市の家が家賃の節約や賃貸料を見込んだ個人的な「経済的価値」を持つとするならば、村の家は村の発展を示す「象徴的価値」を持つのである。その価値は、大きな家であればあるほど上昇する。そのため、バミレケの都市居住者は、都市で自分が築いた「経済的価値」に見合った「象徴的価値」を持つ努力をするのである。彼らにとって、そのどちらが欠けても、また両者のバランスを欠いても、理想的なバミレケ都市居住者ではなくなるのである。

第3節 新貴族とエリート

村の家とならんで「象徴的価値」と言えるのが、貴族の称号である。近年、都市の成功者の多くが、貴族の称号を首長から受け取るようになっている。

1 称号授与の決まり

バミレケ首長制社会において、9 貴族や首長の側近貴族たちの称号は、授与できる性質のものではない。この称号を相続する以外に、9 貴族やリネージ長になることはできないからである。授与できる称号としては次のようなものがありランクが決まっている。最高位がメンカム (menkame) で、次にンブ (mbu)³⁵、ンスupp (nsup)³⁶、サ (sa')。

³⁵ 「子安貝」という意味があり、戦闘時に宮廷へ抛金した者に与えられた称号 (Delarozière 1949a: 67)。

³⁶ 首長の兄弟や息子らに与えられた称号である (Delarozière 1949a: 67)。

³⁷と続く。ンブ、ンスップ、サは、その前に「ンジャ (njâ)」という称号を重ねるとランクがあがる。例えば、ンジャ・ンブ (njâ mbu) は、たんなるンブよりもランクが高い。ンスップ、サの場合も同じである。ただし、ンジャ・メンカムという称号はない。

さて、誰が誰に称号を与えることができるのか。まず首長であるが、彼はいかなる者にもこれらすべての称号を与えることができる。例えば、首長であれば、自分の首長制社会の者に限らず、他の首長制社会の者やバミレケ以外の者にも授与することができる。現在は、首長が外交的目的で、政治家などの国家エリートに称号を授与する例がある。首長以外に称号を与えることができるのは9貴族である。リネージ長でもある彼らが与え得る相手は、そのリネージの者たち、つまり彼の「子どもたち」である。その称号の上限は、ンジャ・ンブまでである。というのは、9貴族自身のランクが、最高位のメンカムと同等だからである。メンカムは、「付き従うひとびとを持ち、他の土地に行けば、そこに新たな首長制社会を作るだけの実力がある者」とされ、首長の対抗勢力となりうる者である。したがって、最高位のメンカムと同等にランクされる9貴族たちも、当然のことながら首長の対抗勢力であるが、9貴族たちの多くはンジャという称号しか持たない。これは、上で述べたように、ンスップやンブを強める時に使用されるのと同じ称号であるが、9貴族以外にンジャという称号を単独で持っているものはいない。つまり、メンカムは人に授与できる称号であるが、ンジャという称号は単独で授与できるものではなく、一部の9貴族が相続によって受け継いでいく称号である。ただしバングラップの場合、9貴族のなかにンジャではなく、「ンブン (mfèn)」という称号を持つ者もいる。ンブンとは「首長」の意味であるが、彼らは本当の首長と区別され、「ンブン・ンテッ (mfèn ntè')」と呼ばれる下位首長である。彼らのランクは「アゼ (aze)」と呼ばれ、首長と同じ位である。そのため、彼らはメンカムを与えることができる。下位首長とは、もともと首長制社会同士の戦争に破れて避難してきた元首長や、併合されて下位首長として残された元首長である。その他、首長から称号を受け、下位首長になる者もいる。バングラップにおいて下位首長は5人いるが、そのうち二人はかつてバングラップに侵略された元首長たちの子孫である。残る三人は、近年、首長から「ンブン」という称号をもらい、下位首長に「昇進」した者たちである。

2 カネで買う貴族の称号

³⁷ 戦闘で活躍した臣下に与えられた称号である (Delarozière 1949a: 67)。

通常、貴族の称号は相続によって受け継がれる。父親が選んだ息子の一人が、死後、その父の称号を引き継ぐ。相続する以外に称号を得る方法は、授与である。授与される者は首長制社会に貢献した者で、かつてならば、近隣社会との戦闘で手柄をあげた者などであった。戦争がなくなった現在、最も主流な「貢献」方法は首長（あるいはその他の有力貴族）への金品の贈与である。植民地化以前にも、商人として成功した者が首長にその利益の一部の子安貝を与え、貴族の称号をもらうことはあった（Pradelles de Latour 1981: 399）。しかし、それは現在行われているほど頻繁でなかった。金銭を得る機会が多いのは、当然のことながら村でなく都市である。都市の成功者は首長や有力貴族になんらかの贈与を行い、見返りに貴族の称号を得る。このような称号の「売買」はバミレケ首長制社会においてありふれた事となっている。こうして、ワルニエが「新貴族（Néo Notable）」と呼ぶ新しい貴族が多く現れたのである（Warnier 1993）。

なぜ、首長らは都市居住者に貴族の称号を与えるのであろうか。まず一つ目の理由は、首長らが自らの権力維持のために、金品（あるいは便宜）を必要としているからである。称号が欲しい成功者との利害がここに一致する³⁸。二つ目は、都市の成功者を自分の味方につけるという政治的な目的である。首長や貴族の側にとって、ある成功者に貴族の称号を授与することは、自分の側にその人物を取り込むことである。首長が9貴族を「下位首長」にしたり、都市の成功者を貴族にすることは、彼らを自分の支配下に入れ、自分の権力基盤を固めることにつながる。

バングラップの首長は毎年、都市居住者数十人に称号を与えたり、またその称号のランクを上げたりしていると言われる。例えば、ヤウンデでスーパーマーケットを経営している輸出入業者のTは、それまでンジャ・ンスップの称号を持っていたが、首長から最高位のメンカムを授与された。Tは1997年3月、新マンブン（首長の母）の就任式がヤウンデで行われた際、首長をはじめ村の有力貴族たち60人のヤウンデ＝バングラップ間の往復の交通費、ヤウンデにおける寝食を一手に引き受け、これが評価された。しかしTがメンカムになった事は、ヤウンデのバングラップのひとびとに好意的に受けとめられなかった。

³⁸ 女性に授与される称号に「マンブン」がある。先にも述べたように、「首長の母」の地位を表すものだが、それ以外にも女性貴族の称号として授与することができる。バングラップにはマンブンの他に「マァヴェングブ（mābwengùb: 首長の第一夫人）」という女性貴族の称号もある。このマァヴェングブが授与されるようになったのは最近であり、「首長がカネのためにつくった称号だ」と語る者もある。首長は、「マンブン」と「マァヴェングブ」と二つの称号をつくることにより、成功した女性に称号を与える機会（つまり見返りを受ける機会）を倍にしたのである。

経済力だけで高い称号を得た事があからさまだったからである。

首長は貴族の称号に関して、「これは、勲章のようなもの、軍人の階級章みたいなものだ。よく働いた人にあげるのだ」と話す。しかし、彼は称号を、毎年何人に授与するのかという質問には決して答えなかった。「首長は称号を売っている」、「今の首長はカネが好きだ」という批判が、村や都市を問わずバングラップのひとびとのあいだで高まっていることを、彼は気にしているのである。

では、都市居住者はなぜ貴族の称号が欲しいのだろうか。それは、彼らの都市での金銭の蓄積が、称号をもらうことによって正当化されるからである。それはまさに、短期サイクルから長期サイクルへの金銭のコンバージョンであり、都市での個人的な蓄積が、故郷や都市の同郷者コミュニティ内で社会的に承認される効果を持つ。また、彼らの富の蓄積は社会に承認されるだけでなく、首長制というシステム、つまり長期サイクルを維持する費用となる。自らの富を正当化したい都市の成功者（とその共同体）と、首長制社会を維持する費用を常に欲している「伝統」社会の利害が一致するわけである。

称号獲得の動きはバミレケ・ランドだけでなく英語圏地域の首長制社会でも広くみられる。その一つであるンソ（Nso）首長制社会の都市エリートたちの伝統的称号獲得について、フィジーとゴヘンが考察している。彼らは、エリートの伝統的称号の獲得を機能主義的には説明できないとし、国家が市民に意味も安全も与えられないなかで生まれてきた歴史的社会的過程の結果としている（Fisiy and Goheen 1998）。

3 エリートと貴族

しかし最近では、貴族の称号を欲しがめる傾向は若者を中心に減ってきている。現在、若者の多くがなりたいと欲するのは、貴族ではなく「エリート」である。エリートはもちろん、首長などから授与される称号ではない。エリートかそうでないかは、学歴、職業、事業規模などを基準にして、あくまでも周りから判断される³⁹。そしてエリートは、村への貢献を欠かさないと考えられる。彼らは貴族ではなくエリートとして、村に多くのものを与えたいと願っている。

³⁹ エリートには、「エリート・アカデミック（*élite académique*）」と「エリート・エコノミク（*élite économique*）」があるという。エリート・アカデミックは高学歴者を指し、大学生などが自分はずでにエリート・アカデミックだと自負する場合もある。しかし、たいていの場合、エリートとは社会的な成功者（大企業家や高級公務員、政治家など）を指す。

言ってみればエリートは、現代の貴族である。しかも、カメルーン全土で通用する「称号」である。今日では、もはや首長は、伝統的貴族の称号を売る市場を失いつつあると言えるが、それでも村への貢献に興味がない若者はまずいない。たとえ都市生まれであっても、村への貢献を願う若者は多い。古着商の若者は、この点について次のように語った⁴⁰。

「村の発展に貢献したい？もちろん、絶対したい。僕の村は、オーンカム（バミレケ・ランドの県の一つ）のなかで、最も発展が遅れている村の一つなんだ。なぜなら、他と比べて十分な財産を持った人が村（出身者）にいないからだ。例えば、バナ（村）にはカジ氏がいるし、バカサ（村）にはモンカム氏がいる⁴¹。でも、僕たちの村にはそんな有名人はいない。僕はそんな村の偉大なエリートになりたいんだ」。

彼らが示す村への貢献の熱意は、たんなる村への愛情では説明できない。村びとによる呪術への恐れからくる再分配でもない。その熱意はむしろ、各村出身者がいかに自分の村を開発するかという競争が、都市で繰り広げられていることから説明できる。村よりも、都市においてこそ強いのが、先の若者たちや運転手に見られるような村同士の競争意識である。都市に住むバミレケは、どの村にどのような成功者が何人くらい生まれ、彼らがどのような豪邸を建て、彼らの寄付によって村にどのような施設が建設されているか、という事に強い関心を持っている。バミレケ・ランドや村外に住むバミレケ向けの新聞には、「バングラップのエリートたちが村に飲料水のための施設を建設」⁴²、「トンガ（村）のあるエリートがその町で最初の井戸を提供」⁴³、などの見出しが溢れている。村の家が誰か一人のものではなく村全体のものでもあるように、エリートにとっては、都市での個人的な成功を都市の同郷者コミュニティーや村全体の成功につなげる必要がある。それは、他の村に負けないように自分の村を発展させよう、そのために都市で成功しようという動機付けになる。この意識は都市で生まれ育った者たちにも共有されるばかりか、過疎化がすすみ、村に自分の親族がほとんどいなくなってしまった都市居住者にさえ共有される。それは、このような村間の競争意識や発展競争が現れたのが、村ではなく都市においてだからである。村に貢献しようという熱意は、都市居住者のあいだにこそ強く存在するので

⁴⁰ 同章、第2節、1の古着商参照。

⁴¹ カジ氏もモンカム氏もカメルーンで有名な実業家。

⁴² インデ県出身者のための月刊新聞『インデのこだま（Echos du Ndé）』1995年6月（第7号）。

⁴³ 『インデのこだま』1995年5月（第6号）。

ある。

第4節 ローカリティーの生産

本章ではここまで見てきたように、死者祭宴での出費、村の家の建設、貴族の称号購入という、都市に住むバミレケの金銭の回し方に焦点を当ててきた。その回し方は、ある意味で金銭の出費であるが、実際は社会的に意味のある投資になっているところに特徴がある。そこで彼らが得るものは、経済的価値ではなく象徴的価値である。それは、短期サイクル、つまり都市の商売実践で得た金銭の、長期サイクル、つまり社会的秩序の再生産への投入である。しかし、村の秩序の再生産に役立つはずのこのコンバージョンは、村に肯定的な結果ばかりを生み出しているわけではない。この節では、その変化と意味を考察する。

1 リネージ長会議の変化

村の貴族たちは新貴族に対して批判的である。富裕な新貴族層の成立により、彼らの地位が相対的に下がったからである。伝統的ヒエラルキーに変化が起きているのである。

週に一度、宮廷で開かれる9貴族によるリネージ長会議（クム・ンシア）は、第1章で述べたように、もともと9貴族の会合である。しかし現在、9貴族9人のうち、参加しているのは一人だけである。その他の8人はリネージ長会議に参加していない。彼らに代わって会議に出席しているのは、主に「新9貴族（以下新9）」たちである⁴⁴。この新9は首長の「息子（父方家系が首長リネージに起源を持つ者）」たちである。首長は自分の身内と言える「息子」のいく人かを新9にしたのである。これにより、首長と対等に渡り合える「対抗勢力」としての9貴族という図式が崩れたことになる。9貴族という「対抗勢力」への「対抗勢力」（息子たち）である新9はおよそ30人であり、9人しかいない旧9貴族（以下旧9）を数の上でも大きく上回る。旧9と新9の対立は表だっていないが、旧9は新9に対する不満を隠さない。彼らからは「本当の9貴族は私たちだ、首長が勝手に自分の息子たちを9貴族のようにしている」という不満が聞かれる。このような状況は

⁴⁴ 彼ら自身は、9貴族のように振る舞っているが、9貴族だと主張しているわけではない。

バングラップにおいて新しく⁴⁵、1992年に首長が再任した後に始まったものである。

新9の出現は、多分に都市の新貴族に影響されていると言える。今では「カネさえ出せば、誰でも貴族になれる」状況だからこそ、9貴族という最も重要な貴族をも、首長自ら作り出すことができたのである。

旧9のN氏が唯一リネージ長会議に出席しているのは、彼の親族筋が首長の家系に嫁いているためと言われる。その他の旧9が出席を拒否するのは、現首長への反発以外に、「悪い死 (kwa kè bwò': 直訳では良くない死)」への恐れのためである。バミレケの、少なくともンデ地域では悪い死という考え方があり、なんらかの慣習 (ndu) 的禁忌を破った者はこの悪い死に襲われるとされる。都市居住者にも村びとにも、恐れられている死に方である。悪い死の特徴は、体、とくに腹が膨らんで死にいたることである。死者に対しては、「彼(女)は死んだ (a kwè)」ではなく、「彼は過ぎ去った (a tok)」と言われる。この婉曲的言いまわしは、双子や首長など、尊重される存在の死亡時にも用いられるが、あってはならない死ということから来ると考えられる。新9とともに、リネージ長会議に出席していたある旧9が、数年前、悪い死を迎えた。以来、他の旧9は会議に行くことをやめているという。彼らは、リネージ長会議が本来のそれでなくなっている以上、会議に通い、新9と同席するのは先祖の意思に反しており、それが悪い死を招くと考えたのである。

リネージ長会議が首長側の人間たちで行われ、本来の旧9が不在というバングラップの状況は、変化がすすむバミレケ首長制社会のなかでも珍しい例のようである。かつて社会を実質的に統括していた旧9が集まる機会はもはやなく、それにつれて首長の求心力は落ちている。

2 土地の商品化

貴族の称号が「商品化」されてきたと同時に、土地も商品化されつつある⁴⁶。

バングラップの首長に話を聞きに行った時のことだった。いつも首長に話を聞く時のよ

⁴⁵ 19世紀にはすでに、バミレケ首長制社会では中央集権化、および首長の権威拡大がおこり、9貴族に代わり、首長の息子や臣下らの「行政」機能への取り込みが行われていたと推定されている (Barbier 1981: 336)。新9貴族のようにあからさまではないが、首長の息子 (中央権力) などが、「地区長」となって領域全域にちらばり、その地区で重要な貴族となってきた歴史は、バングラップにも古くからある。

⁴⁶ 同様の現象は、北西部州でも起こっている (Fisiy 1995)。

うに、宮廷の応接間のソファに座った首長の横にひざまずき、テープレコーダーをまわし、質問を始めたところ、彼はみるみる激昂していった。何か気に障ることでも言ったのかと青くなったが、その時彼が腹を立てていたのは、こちらの質問とは関係のない、村の土地売買に関することであった。彼は次の話をフランス語でまくしたてた⁴⁷。

「いいか、すべての貴族は私が決めるのだ。昔は、下位首長にはこんな権力はなかった。土地を与えるのは私だ。所有地 (domaine) などという考えは、君のような白人のためのもので、私たち黒人のためではない。土地は売らない。埋葬する時はどうするのか？土地のことをすべて知っているのは首長だ。もし君に土地と称号を与えても、君はその土地を誰かにあげてもいいが、カネ儲けのために売ってはならない。土地所有者と称する者がなぜここに来るのか？サインを頼みにやってくる。私がそれを認めていたっていうのか？彼らは命令しにやってくる。我々は戦争によって土地を奪ってきたのだ。バンガンテはバンガンテ首長が命令するものなのだ。ここに、私は自分の土地を持っていた。ドゥアラのP（人名）が私の土地を彼の土地だと主張した。彼は役所に行った。副知事のところだか、知事のところだか知らないが。3年、4年、5年闘った。バフサムで裁判をして私が勝った。勝った時、私に膳本はもらえなかった。しかし、私が刑務所に入っていた時、彼は登録をしてしまっていたのだ。私も登録したかった。それで5,000フランをひとに渡して、バフサムの裁判官に彼が登録したかどうか、文句を言いに行かせたのだ。（中略）そして言われた。すでにPが登録して分配している（売っている）だろうと。なぜ私のサインなしに勝手に分けたりしているのか？どういうことだ？1977年からそうなのだ。こんなことが、国やひとびとを殺すのだ。昔は、国はこんな風ではなかった。どんな首長も許さない。この私が土地を分ける者なのだ。ここに、カネで警察やらなんやら連れてくる。ンクワ（Nkwa：森林部などに住むひとびとを指し、ここではバミレケと対照的なひとびとという文脈）の首長はオノを持って土地のためにひとびとを殺す。バングラップは違うんだ。土地を防衛するひとは、ここにいてはいけない。土地はただで分ける。地区の長に誰かに土地をわたす権利はない。こんなことは許せない」

⁴⁷ 聞き取り：1998年3月23日・バングラップ。

この日は首長が怒りはじめたことで聞き取りが終了となったが、彼は一つの頼み事をした。「その録音したテープを、ビヤ（カメルーン大統領）のところに持って行って、説明してくれ」と。返事に困っていると、まわりで聞いていたひとびとが、うなづくようにと目で合図を送っていたので引き受けた。首長は、国家元首に自分の意見を伝えるのに、埒のあかない郡知事や県知事よりも、白人（アジア人も白人である）に頼んだ方が早いと考えたのだろうか。1カ月ほど後に再会した時にも、「あれはビヤに話してくれたのか？」と聞かれた。首長にとって、土地のことはそれほど気にかかる問題なのである。1931年から現在まで激動の時代を生き、バングラップ追放や投獄を経験してきた彼は、「新貴族」や「新9貴族」を積極的につくりだし、自分の政治基盤を強化したが、それ故にバングラップという「国」を変化させてしまったのである。

首長は必ずしも、「伝統を守る」ためだけに土地売買を非難しているわけではない。あるインタビューで、首長は土地問題について次のように語っている。「私が、ある1区画の土地を1フランだと認めれば、何十億フランを持って登場し、村すべてを買い占める奴が出てくるだろう」⁴⁸。彼は価格競争になれば、たとえ首長でも勝ち目がない事を熟知しているのである。土地は有限であり、与えても減らない貴族の称号とは違うのである。

首長がまきこまれている土地問題は、一般の村びとにとっても身近な問題である。

バングラップ村のランベン地区で悪い死の死者が出たのは、1998年5月の事であった。貴族A氏は、5月のはじめに発病し腹が膨れはじめた。そこで隣町バンガンテの病院に入院したが1週間経っても治らず、本人の申し出で伝統的治療師（ngâyũ'fu⁴⁹）から治療を受けていた。しかしその甲斐なく腹の膨張は脚や性器にまで及び、5月21日木曜日に死亡した。その2日後に親族だけで埋葬を行い、普通は立ち会うはずの地区住民は参加しなかった。

A氏は首長の家系であり、かなり高位の貴族であったが、暮らしぶりは貧しく一人暮らしをしていた。彼の妻は都市の息子のところで暮らしており、他の彼の子どもたちもみな都市で暮らしていた。A氏の主な現金収入はヤシ酒販売によるものであった⁵⁰。畑も持っていたが老齢で脚が悪く、耕す体力もひとを雇う財力も無いようであった。彼が暮らして

⁴⁸ BSA製作の雑誌（約一年に一回発行）『ンターニの神（nsi ntanyi）』の1990年13号に掲載された首長のインタビューより。ンターニはバングラップの聖なる場所の名である。

⁴⁹ ンガユフ（ngâyũ'fu: 薬をつくる人）は、たいていはンガカ（ngàkà: 呪術をもつ人、呪術師）をかねている。邪術師はンガサ（ngàsà）と呼ばれる。

⁵⁰ 確認はできていないが、時おり、都市の子どもたちから経済的援助もあったと思われる。

いたのは、都市居住者の建てた立派な家の敷地にある台所用の小屋であった⁵¹。その敷地はもともと彼の土地であったが、彼は都市居住者に売ったのである。彼はその土地以外にも、自分の土地を販売していた。彼のこの行為は、悪い死の原因の一つとして噂された。

悪い死は放っておくと親族に伝染する。この伝染を断ち切るために、コップ（kob）という儀礼がある。A氏のコップ儀礼は死後10日たって行われ、儀礼が終了した後、遺族が地区住民にヤシ酒や食べ物を振る舞った。その場で遺族の代表が挨拶を行い、「ここは、わたしたち家族の土地です。それに異論があるひとは、後で相談しに来て下さい」と語った。異論があるひとは、A氏から土地を買った者のことを指し、遠回しに彼らに土地の所有を諦めるように言っているのである。A氏に土地代を支払い、すでに土地登記を済ませていたある男性は、その言葉に落胆していた。「相談して、カネが返ってくるかって？ そんなことはないだろう。つくづく村がいやになった」と。

村の土地の売買がいけないことは知りつつも、売る者も、買う者も後をたたない。なぜなら国家は土地の売買を認めているからである。彼らの背後には、首長がビヤ大統領に代表させたように「国家の論理」がついている。しかし、時には「悪い死」という偶然によって、「村の論理」が勝つこともある。しかし、首長と土地争いをする者までいるように、「国家の論理」の優勢は今後も強まっていくだろう。「国家の論理」は、特に富裕な都市居住者が持ち込む。それは例えば、一人一人が村に家を建てたいという長期サイクルを満たすための動きと連動しているのである。

3 「故郷」というローカリティー

次に、村同士の競争意識、開発競争についても考察しなくてはならない。豪邸が何軒あるか、学校がいくつあるのかという村間の競争は、都市に暮らすバミレケにとって重要なものである。彼らは、村を都市化することが究極の目標であるかのように、自分の村の開発を望んでいる。これら開発への欲求や、他の村との開発競争は、主に都市居住者が引き起こしているものであり、首長や有力貴族以外の村びとがどれだけ関心を持っているのかは疑問である。例えば、自分の家を村に建てるのが村への貢献になると考えるのは都市居住者である。村に富を分配しないと邪術をかけられるという言説を流すのも都市居住者であ

⁵¹ 自分の家を持つことは、バングラupp男性としては重要なことで、これを持たなかったことが、妻を怒らせたとも言われる。

る。

都市居住者は死者祭宴で大盤振る舞いし、村に家を建て、貴族の称号を得る。しかしここまで見たように、このような短期サイクルから長期サイクルへの投資は、伝統的秩序の再生産を促進するどころか、変形あるいは破壊している。なぜなら、彼らが再生産しているのは、村の現実とは別の「故郷」だからである。これは、アパドゥライの言葉で言えば、「ローカリティー (locality)」である。ローカリティーとは数量的、空間的なものではなく、関係的、文脈的なものであり、主観的あるいは現象学的意義を持つものである (Appadurai 1995)。ローカリティーは、「ネイバーフッド (neighborhood)」という社会形態に具現化する⁵²。バミレケ都市居住者のローカリティーが具現化、空間化するのとは、実際の「村」という空間ではない。なぜなら、彼らは都市の現実を生きており、そこに表れるネイバーフッドとは、バンガンテやバングラップという村ではなく、むしろヤウンデの同郷者組織であり、ドゥアラで繰り広げられるバミレケ同士の開発競争のなかにある。そこは、他のエスニック・グループ、国家政治、世界市場など、より広い文脈に影響される空間である。そこで生きるために必要とされる「故郷」は、実際の村とはズレていく。このズレに、都市に暮らすバミレケが気づいていないわけではない。多くのひとが村に家を建て「余生を村で送りたい」と表明しながら、現実には実行しないという事実は、その一端である。

都市居住者のつくるローカリティーが村にさまざまな歪みを生んでいることは、これまで述べたとおりである。ローカリティーは、生産される時、「植民地化」の契機を持つとされる (Appadurai 1995: 208-209)。ローカリティーは、そのローカリティーを共有していない者たちにとって暴力性を持つのである。都市居住者による、村の価値を高めるはずの豪邸の建設、村びとへの「再分配」として振る舞われる死者祭宴でのご馳走、村びとの生活を豊かにするはずの電気、電話線設備投資などは、その意図に反して、村に居住する者たちにはある種の暴力となる。例えば、電気線や電話線が引かれても、電気会社や電話会社への料金支払いは各家庭の負担である。すると、現実には、一部の村びとしかその恩恵を受けられない。特に電話は都市においてもそれほど普及しておらず、村においてはごく一部の富裕な村びとや、成功した都市居住者が帰郷時に利用するくらいのものである。

⁵² ネイバーフッドは、ローカルな主体を生産し、認知し、組織する「共同体」、つまり近隣やつきあいなど、日常的な社会関係によって形成される客観的なものである。ローカリティーとネイバーフッドの関係は文脈に応じて変化する。

都市居住者による「故郷への貢献」は、村のなかの階層差を暴き、都市居住者との格差を際立たせるように作用するのである。

もはや首長の座も都市と無関係ではない。近年、新首長が選ばれる際には、ヤウンデやドゥアラなど都市居住者から選ばれるケースが多くなっている。表V-4は、ンデ県で有力な13の首長制社会における首長の就任年齢と、就任決定時の居住地と職業を示したものである。これを見ると、特に1980年代以降、新首長はドゥアラやヤウンデなどの都市居住者から選ばれていることがわかる。バミレケの移住の歴史が長いンコンサンバ居住者は、1970年代から首長に選択されている。就任決定時ンデ県に居住していたのは、バンガンフォカムとバレングの首長であるが、バンガンフォカム首長が当時ンデ県にいたのはバズー郡長として赴任してためであり、バレング首長は当時、県都バンガンテの高校に通っていたためである。彼は卒業すればバンガンテ高校 (lycée Bangangté)を卒業した多くの若者と同様、ヤウンデやドゥアラへ去った可能性が高い。つまり、今や多くのバミレケ首長制社会が都市生活を経験した比較的若い世代を首長にむかえている。バングラップ首長はこの13人の首長のなかでは最年長で、旧世代に属している。しかし、バングラップの次の首長はまず間違いなく、都市居住者から選ばれるであろう。都市生活の経験がない者にとって、国家エリート（高級公務員、政治家）や実業家などと渡り合い、そこから利益を引き出すことは難しいからである。いずれにせよ、バミレケの「伝統」の中枢に若い世代の都市生活経験者が入っていくことで、都市の力がますます強まることは十分に考えられる。

4 「故郷」をめぐる都市居住者内の争い

しかし、都市居住者によるローカリティーの生産が圧倒的な強度を持つと考えることは間違いである。なぜなら、国家や世界経済の影響で不安定な立場におかれ、村から離れて暮らす彼らが「故郷」というローカリティーを生産することは、一つの戦いになってきているからである (cf. Appadurai 1995: 213)。それは、都市居住者のあいだにさえも、さまざまな歪みを生んでいる。

バミレケ移住民が多い大都市では、各村の代表（「家長: chef du famille」と呼ばれる）を決めている。代表は、村における首長のように同郷者コミュニティ内で最も権威

ある者とされる。初代バングラップ村の代表は、1960年、ヤウンデ在住の貴族によって任命された。代表自身も貴族であり、1968年に死亡するまで代表の座にあった。2代目の代表Nも同じく貴族であり、ヤウンデの貴族たちが任命した。調査時（1998年）のバングラップ代表T⁵³の言では、2代目の代表Nは「民主主義がやって来るまで」代表の座にあった。1994年、バングラップ代表を貴族だけでなくヤウンデ居住のバングラップ全員で選ぶという機運が高まり、村の首長の許可をとり選挙が行われた⁵⁴。この時の選挙で選ばれたのが代表Tである。Tは貴族であるが、民主的な選挙で選ばれた初の代表である。また、これまで無期限だった代表の任期も5年と定められた。しかし、5年ごとに「貴族が」彼の働きを評価すれば、任期延長の可能性も残された。任期延長が可能であること、働きを貴族が評価することは、「中途半端な」民主主義に思える。彼らは民主主義を標榜しながらも、貴族の権威を守っているからである。このような揺れは、『バングラップ共同体憲章』⁵⁵にある「自分の出自を誇らない」という禁止項目と、「貴族への尊敬」という遵守項目の矛盾にも表れている。

また、以下にあげるバングラップ代表の立候補資格⁵⁶にも、彼らのバランス感覚が見うけられる。

- 1) 少なくとも35歳であること
- 2) ヤウンデに居住するバングラップの者であること
- 3) 公民権を享受していること
- 4) 少なくとも10年間、一つのアソシエーション⁵⁷で活発なメンバーであること
- 5) 諸アソシエーション内で、公金の横領をしたことのない者
- 6) 金銭的義務から解放されており、またマアグワ（保険）のカードを持っていること
- 7) 公用語2言語⁵⁸のうち少なくとも一つを読み書きできること

⁵³ 1999年に選挙が行われ、この家長は敗北し、現在は別の人物が代表となっている。

⁵⁴ このあたりのいきさつは、1992年、カメルーンで複数政党制が導入後初の大統領選挙が行われたことと関連している。

⁵⁵ 後に述べるバングラップ評議会により1996年に作成された。

⁵⁶ 「バングラップ評議会内規」（1996年作成）より抜粋。

⁵⁷ バングラップ出身者の同郷者組織のことを指している。

⁵⁸ 英語とフランス語。

- 8) 統率力があること
- 9) 倫理的に優れていること（真摯、冷静、穩健）
- 10) 職業を持っていること
- 11) 既婚であること
- 12) メジンバ語を完璧に話すこと
- 13) バングラップに対し、ある信念と大きな野心を持っていること
- 14) ヤウンデとバングラップに家を建てていること

これが代表となる者の条件である。代表者は英語あるいはフランス語が堪能で、なおかつメジンバ語も完璧に話せなくてはならない。そして、ヤウンデにもバングラップにも家を建てている必要がある。このように、彼ら都市居住者は微妙なバランス感覚でローカリティーを修正、再生産していることがわかる。どちらかに偏り過ぎると、同郷者内部で分裂を呼び起こす。

ヤウンデのバングラップ同郷者が内部分裂を起こしたことは、実際に何度もある。近年、ヤウンデのバングラップにとって最大の事件は、バングラップ男性全体の組織マンジョの分裂であった。先に述べた1994年のバングラップ代表の選挙時、T代表と争ったのは、2代目の代表Nであった。2代目の代表Nに不満を持つ勢力がTを担ぎだし、一騎打ちの選挙となったのである。つまり、この選挙は単純に「民主主義が来たから」行われたものではない。「民主主義」というひびきの良い言葉を利用した、バングラップ共同体内部の権力争いである。Nは勝つ自信があったようであるが結果的に敗北し、NとNを支持する勢力はビエマシ（Biyem-Assi）という地区にもう一つのマンジョを作った。マンジョはバングラップ移住民にとって最も重要な組織であり、そのマンジョの分裂はバングラップ移住民コミュニティをも引き裂くことになった⁵⁹。両陣営が、葬礼の時ですえ互いに参加を避けるまでに事態は発展した。この事態は4～5年続いたが、マンジョより上位の組織として「ヤウンデ・バングラップ評議会（Conseil général de la communauté Bangoul

⁵⁹ これは主に男性たちの権力争いであるが、たいていの家族において妻は夫の選択に、子どもは父親の選択に従うことになった。新しいマンジョのメンバーを夫に持つ妻たちは、別のケナーダをビエマシ地区につくり、ケナーダも二つに分かれた。

ap de Yaoundé) 」を設立することで、事態は收拾された⁶⁰。この評議会は、バングラップの各種同郷者組織26組織からの代表者によって構成される委員会であり、これ以降、マンジョなど組織に関わる問題をこの評議会で解決することとなった⁶¹。

このバングラップの内部分裂の事例は、都市的価値と村的価値、さらに言えば、近代的価値と伝統的価値の狭間で吹き出した矛盾の表れと解釈することも可能である。しかし、彼らは必ずしも「民主主義」という新しい理念と「貴族への尊敬」という古い秩序のあいだで苦しんでいるのではない。むしろ、彼らは自分（たち）にとって必要な「故郷」に修正するため、二つの価値をうまく利用し、権力争いをしていると解釈した方が妥当だと思われる。彼らは、民主主義や貴族の権威、その他いろいろな選択肢を残しておき、「故郷」を作り替えるために活用しているのである。

⁶⁰ 今現在も、マンジョ（とケナーダ）は二つに別れたままである。古いマンジョはバングラップ集会所で行われているが、新しいマンジョはビエマシ地区にあるメンバーの家を集会所にしている。ビエマシ地区とバングラップ集会所のあるカリエ地区は距離にして10キロも離れている。今ではこの二つのマンジョのどちらに行くかは、居住地などから個々人の判断に任されている。

⁶¹ しかし、再び問題は生じている。評議会会長という役職をつくったために、評議会会長と代表職の上下関係の問題が持ち上がった。この問題は尾を引き、筆者が長期調査を終えた1年後の1999年の代表選挙で、再選を目指すT代表陣営とM評議会会長を支持する陣営にわかれ、村の首長を巻き込んだの騒動となったという。結局T代表は選挙に破れ、M評議会会長らが支持した新しい代表が当選した。

終章

本章では、これまでのまとめと考察を行う。

第1節 まとめ

本論文では、カメルーンで「商売の民」といわれるバミレケが、金銭をいかに創造的、戦略的に回し、そのなかでいかなる意味や価値を作り出すのかを論じてきた。

金銭に関する従来の人類学的研究において、金銭の取引には、個人の欲求を満たすために行われる短期サイクルと、社会秩序や道徳を再生産するための長期サイクルが一つの文化内に存在し、短期サイクルと長期サイクルが金銭のコンバージョンを通してうまく接合していることが明らかにされてきた。しかしその静態的モデルがいかなる場合に可能となり、いかなる場合に壊れ、変化するのかについては十分に論じられていなかった。こうした問題意識にたって、本論文では、カメルーンの首都ヤウンデに暮らすバミレケ都市移住民の金銭をめぐる諸活動を中心に考察した。まず、第1、第2章では、バミレケ都市居住者の背景について記述し、続く第3章から5章にかけてバミレケ都市居住者の金銭の回し方について論じた。

バミレケ都市移住民の金銭の回し方をまとめると、次の三つに大別できる。

まず一つ目は、金銭の量の変化、つまり金銭を増やすことを目的とした回し方であり、短期サイクルでの金銭の循環である。これは、第3章で論じたように、商売を通して行われる「投資」である。ある者は幼少期から、ある者は就職に失敗してから、またある者は雇用され給与を貯蓄してから小規模自営業に参入する。いずれにせよ、多くの人はわずかな資金を頼りに下積み生活を開始する。彼らは時間や金銭の「無駄」を最小限に食い止め、金銭を回し、その量を増加させていく。増えた金銭は資金として常に次の新しい計画へと投資される。もし金銭量が増加しなければ、彼らは次に進めず、その場に止まり続けることになる。彼らはこのような商売を通して、金銭への態度や価値観、資本主義的性向を体得してきた。彼らの商売と価値観は「バミレケ＝商売の民」という偏見を生みだしてきた

が、バミレケ商人たちはこの偏見を商売に対する高い資質と読みかえ、肯定的な自己イメージをつくる。一方、他のエスニック・グループの事業主たちは、バミレケのエスニックな「商才」を否定し、自分たちも獲得できる一般的なものとして、成功に必要な手法や姿勢を学び取ろうとする。バミレケはこのような他のエスニック・グループとの関わりのなかで、商売を通してエスニック・アイデンティティーを再生産させている。

二つ目の金銭の回し方は、金銭の意味を変化させる目的で行うもので、第4章で論じたトンチンを通して行われる「貯蓄」である。バミレケのトンチンについては資金蓄積という経済的側面が注目されてきたが、それ以外に、その金銭支払いを義務づけるシステムが人を連帯させるという社会的側面もある。トンチンへの参加は、都市のバミレケ同郷者組織において義務である。この参加の強制は、金銭を稼ぐという個人的行為を集団的行為として義務化し、奨励することでもある。つまりトンチンは、金銭獲得をひとびとに要求し、個人が獲得した金銭を一時集団のものとするすることで、「利己的」に稼いだ金銭を共有化された金銭へと変化させる。金銭を稼ぐ行為を正当化することで、トンチンは彼らに商売の場を保証しているのである。

三つ目の金銭の回し方は、金銭の価値を変化させる目的で行うものである。第5章で論じたように、長期サイクルへの金銭の「投資」である。バミレケ都市居住者は、死者祭宴に時間と労力、金銭を費やす。死者祭宴は故人への義務を果たすと同時に、自分の成功と財を顕示するための機会である。死者祭宴を盛大に行いたいという欲求は、都市居住者から村へともたらされ、村びとに都市の幻想をあおる。またバミレケ都市居住者は故郷に家を建てるが、そこに居住する者が数少ない。村びとの嫉妬や邪術を恐れるためである。また、村の家は都市の家のように経済的価値はない。しかし、村の家には、都市における成功の証明と村の発展への貢献という象徴的価値がある。同様に、象徴的価値を持つ貴族の称号は、都市での成功と富を正当化するため、成功者たちから望まれ、購入される。これら一連の彼らの行動は、金銭によって社会的地位を獲得するための投資である。しかしこれらの投資は時として、村のヒエラルキーを混乱させ、土地問題を引き起こすなど、村のなかにさまざまな混乱を招く。つまり、村の秩序を変形、破壊する方向へと作用する。このような混乱が生じるのは、都市居住者の生産する「故郷」というローカリティーが、

実際の村の現実とズレているからである。しかし、都市居住者の「故郷」は一枚岩ではなく、そのあり方をめぐって、常に都市居住者同士で争われている。

以上が、バミレケ都市居住者の金銭の回し方である。この三つの金銭の循環は、どれも重要であり、それぞれが密接に関わり合っている。これら、金銭を回すという実践は、都市でバミレケとして生きているひとびとが、創意工夫によって生み出したものである。しかし、彼らが都市におかれている経済的、政治的状況次第で、これらの実践は絶えず変化する。また、個々人の意志も当然そこに付け加わる。バミレケであることから逃げ、ニュートラルな「都市民」として、これらの金銭をめぐる実践とは無縁に生きる者もいる。しかし、都市においてバミレケとして生きるか生きないかは、常に選べるとは限らない。都市での政治的な緊張が高まれば、バミレケというラベルを貼られ、バミレケとして生きることを余儀なくされる可能性もある。

第2節 考察

ではここで、長期サイクルと短期サイクルの議論に戻って、彼らの金銭の回し方を考察してみる。バミレケ都市居住者は、バミレケの「伝統」に従い、都市で稼いだ金銭を村につぎ込み、そこで家や貴族の称号つまり名誉や象徴的価値を得る。これは、短期サイクルで得た金銭を長期サイクルへ投資する行為そのものである。しかし、この短期サイクルから長期サイクルへの金銭の投資は、序論の議論でみたように、村の社会的秩序や道德性の再生産、維持に役立っていない。それどころか、その秩序を変化させ、破壊してしまう暴力性を帯びている。なぜ、バミレケ都市居住者が都市で稼いだ金銭は、村の秩序を再生産せず、破壊につながっているのか。それは、彼らの考えているバミレケの伝統が、村のそれではなかったからである。その社会的秩序や道德性は、村のものではなく、彼らにとっての仮想の「故郷」のものであったのである。つまり、彼らは確かに短期サイクルから長期サイクルへと金銭を回しているのだが、彼らの長期サイクルは、村の長期サイクルとリンクしてはいなかった。それがリンクしていた長期サイクルは、「故郷」という都市のローカリティーだったのである。彼らの短期サイクルと長期サイクルは、都市のなかではつながっていた。つまり、バミレケ都市居住者の金銭の循環は、これだけ見れば静態的な

図式を描いている。しかし、これまで見たように、それだけでは不十分である。彼らの得た短期サイクルの金銭は、「実際の」村で回り、そこから都市の長期サイクル「故郷」へ戻るという経路をたどっている。その経路は省略することできない。なぜなら、都市で生み出される「故郷」は、「実際の」村への投資によってしか維持されないからである。そのようなフィクションから成り立っているのが、都市に住むバミレケの「故郷」なのである。

都市のなかで閉じている短期サイクルと長期サイクルは、村へと金銭を回すことで輪になっている。その複雑な構造が、時に暴力性を持ち、村に残るひとびとに作用し、都市の共同体を揺るがせる。その暴力性は、都市で生きること、金銭を稼ぐことの過酷さを反映している。

しかし、このような暴力性、都市居住者の持ち込んだ金銭による村の秩序や道德性の破壊は、これまで言われてきたような単純な貨幣経済化による暴力とは異なることは明らかである。村は一方的に暴力を受けるわけではない。村は村で短期サイクルと長期サイクルが存在している。そしてもちろん、そこでも日々、修正、再生産がなされ、その内容が争われている。また重要なことは、都市居住者、村びとといっても一枚岩ではない。例えば、ヤウンデで生まれ育った若者の「故郷」と、村で生まれ社会化され都市に移住してきた年輩層の「故郷」とは異なっているはずである。村においても、畑仕事で労賃を貯めて、都市への移住時期を見計らっている若者と、都市で失敗し村に帰ってきた中年男性とは、違った金銭の回し方をする。このような個々人の実践のズレが、ダイナミズムを生む。村びとも都市居住者も、金銭を自在に操るわけではないが、だからといって金銭に操られるばかりではない。金銭を回すことには、創造的行為なのである。

本論文では、以上のように、バミレケ都市移住民の金銭をめぐる行為を考察してきたが、これによって、彼らがいかに創造的、戦略的に金銭を回しているかを明らかにできた。また、動態的な長期サイクルと短期サイクルのあり方の提示と、金銭という視点を取り込むことにより、村（故郷）と都市（移住先）のあり方を実証的に論じることができたと考える。

以上の研究をふまえ、今後は村側からの視点をより多く取り入れることにより、バミ

レケの都市と村との関係の分析を深めることができると考える。村びとにとっての都市、都市居住者とは何であるのか、村における短期サイクルと長期サイクルはどのように結びつき、それは都市とどのような関係を持っているのか。それらを詳細に考察していくことで、本論文の内容をより発展させることができるであろう。

謝辞

本論文の完成には多くの方々のご協力、ご援助があった。まず、カメルーン滞在中お世話になった方々にお礼を申し述べたい。筆者を長期間下宿させ、面倒をみてくださったフェリシテ・ワッシーさん、調査許可取得にご助力くださるなど、お気遣いくださったサミュエル・ドゥンベ＝マンガ氏、お二人とも亡くなられてしまい本当に寂しい。いつも励ましをいただいたルンペットご夫妻、ヤウンデ大学で筆者の受け入れ教官となってくださり、ご指導くださった社会学人類学部長（当時）のジャン・ンフル教授、筆者をメンバーとして暖かく受け入れてくださった「バングラップ学生の会」、「ケナーダ」、「ランベン家族の会」のメンバーのみなさん、ヤウンデのバングラップ代表のチャーナー氏一家、メジンバ語を教授してくれた友人ベンガ・バジル、ヤウンデの日常生活を支えてくれたジョゼフ・ダンジ、アルベール、シリル・キング・エディモ、その他多くの友人たちに感謝を申し上げる。また筆者の拙い質問に時間を割いて答えてくださった方々すべてにもお礼が言いたい。村においても、バングラップ首長をはじめ、ランベン地区長ビヤンドゥ氏一家、ンターラ会長など多くの方にお世話になった。また、在カメルーン日本大使館、日系企業のみなさんにも大変お世話になった。また、シモン＝ピエール・エトガとアンジュ・レンジャは調査を手伝ってくれた。彼らとともに調査計画をたて、調査を行い、議論をした。彼らの援助がなければ、本研究は全く違ったものになっていただろう。本論文は、本来彼らとの共同研究である。この貴重な現地調査の機会を与えてくださったのは、日野舜也教授、嶋田義仁教授、講談社株式会社である。両教授からは、研究会での発表の機会やアドバイスもいただいた。2年間という長期のカメルーン滞在の機会を与えてくださった講談社野間アジア・アフリカ奨学生担当の方々には、常に励ましていただいた。大変感謝している。

本論文の執筆にあたり、多くの先生方にご指導いただいた。筆者の指導教官石森秀三教授、副指導教官江口一久教授には重要なお指摘をいただき、また前指導教官の端信行教授、前副指導教官の栗本英世教授は、引き続きご指導くださった。また、1年生時の研究計画ゼミから、帰国後の数度にわたる論文ゼミに出席しご指導くださった先生方、個別に時間を割いて筆者の論文に目を通し、貴重なアドバイスをくださった田辺繁治先生、田村克己先生、吉田憲司先生に感謝を申し上げる。また、名古屋大学の和崎春日先生、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の小川了先生には、研究会での発表の機会と貴重なアドバイスをいただいた。その他、筆者が発表させていただいた研究会でご意見をくださった皆様方にも感謝したい。また総合研究大学院大学の院生や先輩にもお礼が言いたい。ゼミやその他の機会を通して重要な指摘やアドバイスをいただいた。塩路有子さんには、ゼミのコメンテーターをはじめ、作成過程の論文原稿にも目を通していただいた。その他本論文の作成にあたり、論文の草稿に目を通しチェックしてくれた平川智章さん、林史樹さん、清水郁郎さん（清水さんには地図製作も手伝っていただいた）、現地語フォントを作ってくれた西村幹也さん、地図作製を手伝ってくれた行木敬さん、論文の体裁を整えてくれた阿良田麻里子さん、その他多くの院生の方々の協力があった。最後に、いつもいろいろな形で励ましてくれた友人、家族にも感謝する。このように多数の方々の協力を得たが本論文のいたらない所は筆者がすべて責を負うものである。

引用文献

欧文

Appadurai, Arjun

- 1995 "The Production of Locality." In R. Fardon (ed.), *Counterworks: Managing the Diversity of Knowledge*, London and New York: Routledge, pp.204-225.

Ardener, Shirley

- 1964 "The Comparative Study of Rotating Credit Associations." *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 94: 201-229.

Ardener, Edwin

- 1970 "Witchcraft, Economics, and the Continuity of Belief." In M. Douglas (ed.), *Witchcraft, Confessions & Accusations*, London: Tavistock Publications, pp.141-160.

Banton, Michael

- 1956 "Adaptation and Integration of Social System of Temne Migrants in Freetown." *Africa* 26(4): 354-368.

Barbier, Jean-Claude

- 1971 *Les villages pionniers de l'operation Yabassi-Bafang*. Yaoundé: ORSTOM.
1981 "Le peuplement de la partie méridionale du plateau bamiléké." In C. Tardits (ed.), *Contribution de la recherche ethnologique à l'histoire des civilisations du Cameroun / The Contribution of Ethnological Research to the History of Cameroon Cultures*. volume 2. Paris: Centre national de la recherche scientifique, pp. 331-353.

Barbier, J.-C., C. Champaud and F. Gendreau

- 1983 *Migrations et développement: la région du Mounjo au Cameroun*. Paris: ORSTOM.

Bayart, Jean-François

- 1985 *L'état au Cameroun*. Second Edition (First edition published in 1979) Paris: Presses de la fondation nationale des sciences politiques.

- 1993[1989] *The State in Africa: the Politics of Belly*. Harper, M., C. and E. Harrison (trans.) London & New York: Longman. (Originally published in French, *L'état en Afrique: la politique du ventre*.)

Bohannon, Paul

- 1955 "Some Principles of Exchange and Investment Among the Tiv." *American Anthropologist* 57: 60-70.
- 1959 "The Impact of Money on an African Subsistence Economy." *The Journal of Economic History* 19(4): 491-503.

Carsten, Janet

- 1989 "Cooking Money: Gender and the Symbolic Transformation of Means of Exchange in a Malay Fishing Community." In J. Parry and M. Bloch (eds), *Money and the Morality of Exchange*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.117-141.

Champaud, Jacques

- 1983 *Villes et campagnes du Cameroun de l'ouest*. Paris: ORSTOM.

Chilver, E. M.

- 1981 "Chronological Synthesis: the Western Region, Comprising the Western Grassfields, Bamum, the Bamileke Chiefdoms and the Central Mbam." In C. Tardits (ed.), *Contribution de la recherche ethnologique à l'histoire des civilisations du Cameroun / The Contribution of Ethnological Research to the History of Cameroon Cultures*, volume 2. Paris : Centre national de la recherche scientifique, pp. 453-473.

Delarozière, R.

- 1949 "Les institutions sociales et politiques des populations dites bamiléké." *Etudes camerounaises* 25-26: 5-68.

Dieu, M. and P. Renaud

- 1983 *Atlas linguistique du Cameroun*. Paris: ACCT/CERDOTOLA/DGRST.

Direction de la statistique et de la comptabilité nationale

- 1998 *Annuaire statistique du Cameroun 1997*. République du Cameroun.
- 1999 *Annuaire statistique du Cameroun 1998*. République du Cameroun.

Direction national du deuxième recensement général de la population et de l'habitat

1992 *Deuxième recensement général de la population et de l'habitat du Cameroun, vol.III: Analyse préliminaire*. République du Cameroun.

Diziain, Roland et André Cambon

1960 "Etude sur la population du quartier New-Bell à Douala." *Recherches et études camerounaises* 3 numéro spécial, Yaoundé: IRCAM.

Dongmo, Jean-Louis

1981 *Le dynamisme bamiléké (Cameroun). vol.1: La maîtrise de l'espace agraire; vol.2: La maîtrise de l'espace urbain*. Yaoundé: CEPER.

Dugast, I.

1949 *Inventaire ethnique du Sud-Cameroun*. Mémoires de l'institut français d'Afrique noire (Centre du Cameroun).

Ela, Jean-Marc

1983 *La ville en Afrique noire*. Paris: Karthala.

Epstein, A. L.

1958 *Politics in an Urban African Community*. Manchester: Manchester University Press.

1961 "The Network and Urban Social Organization." *The Rhodes-Livingstone Institute Journal* 29: 29-61.

Evers, Hans-Dieter

1994 "The Traders' Dilemma: a Theory of the Social Transformation of Markets and Society." In H.-D. Evers and H. Schrader (eds), pp.7-14.

Evers, Hans-Dieter and Heiko Schrader (eds)

1994 *The Moral Economy of Trade: Ethnicity and Developing Markets*. London and New York: Routledge.

Fark-Grüniger, Michèle

1995 *La transition à l'économie l'ouest du Cameroun 1880-1990: jeux et enjeux*. Neuchâtel: EDES.

Fisiy, Cyprian F.

1995 "Chieftaincy in the Modern State: an Institution at the Crossroads of Democratic

Change." *Paideuma* 41: 49-62.

Fisiy, Cyprian F. and Peter Geschiere

- 1993 "Sorcellerie et accumulation, variations régionales." In P. Geschiere and P. Konings (eds), *Itinéraires d'accumulation au Cameroun*, Paris: Karthala, pp.99-129.

Fisiy, Cyprian F. and Mitzi Goheen

- 1998 "Power and the Quest for Recognition: Neo-Traditional Titles Among the New Elite in Nso', Cameroon." *Africa* 68(3): 383-402.

Fodouop, K

- 1991 *Les petits métiers de rue et l'emploi. Le cas de Yaoundé*. Yaoundé: SOPECAM.

Fotso, Victor (in collaboration with J.-P. Guyomard)

- 1994 *The Road to Hiala*, Paris: Editions de septembre.

Freeman, D. B.

- 1991 *A City of Farmers: Informal Urban Agriculture in the Open Spaces of Nairobi, Kenya*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.

Franqueville, André

- 1984 *Yaoundé: construire une capital*. Paris: ORSTOM.

Geschiere, Peter

- 1997[1995] *The Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa*. J. Roitman (trans.), Charlottesville and London: University Press of Virginia. (Originally published in French, *Sorcellerie et politique en Afrique: la viande des autres*.)

Geschiere, Peter and Francis Nyamnjoh

- 1998 "Witchcraft as an Issue in the 'Politics of Belonging': Democratization and Urban Migrants' Involvement with the Home Village." *African Studies Review* 41(3): 69-91.
- 2001 "Autochthony as an Alternative to Citizenship: New Modes in the Politics of Belonging in Postcolonial Africa." In E. Kurimoto (ed.), *Rewriting Africa: Toward Renaissance or Collapse?* JCAS Symposium Series 14, Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, pp.209-237.

Gluckman, M.

- 1961 "Anthropological Problems Arising from the African Industrial Revolution." In A. Southall (ed.), *Social Change in Modern Africa*, London: Oxford University Press, pp. 67-82.

Gouellain, R.

- 1975 *Douala, ville et histoire*. Paris: Institut d'ethnologie musée de l'homme.

Gray, Richard and David Birmingham

- 1970 "Some Economic and Political Consequences of Trade in Central and Eastern Africa in the Pre-Colonial Period." In R. Gray and D. Birmingham (eds), *Pre-Colonial African Trade: Essays on Trade in Central and Eastern Africa before 1900*, London: Oxford University Press, pp.1-23.

Guilbot, J.

- 1949 *Petit étude sur la main-oeuvre à Douala*. Yaoundé: Institut français d'Afrique noire.

Hart, Keith

- 1973 "Informal Income Opportunities and Urban Employment in Ghana." *The Journal of Modern African Studies* 11(1): 61-89.

Henry, Alain, Guy-Honoré Tchénté and Philippe Guillerme-Dieumegard

- 1991 *Tontines et banques au Cameroun: les principes de la société des amis*. Paris: Karthala.

Hurault, J.

- 1962 *La structure sociale des Bamiléké*. Paris: Mouton & Co.

ILO

- 1972 *Employment, Incomes and Equality: a Strategy for Increasing Productive Employment in Kenya*, Geneva: ILO.

Joseph, R.

- 1977 *Radical Nationalism in Cameroon: Social Origins of the UPC Rebellion*. Oxford: Clarendon Press.

Kago Lele, Jacques

- 1995 *Tribalisme et exclusions au Cameroun: le cas des Bamiléké*. Yaoundé: CRAC.

Kaptue, Léon

- 1986 *Travail et main-d'oeuvre au Cameroun sous régime Français 1916-1952*. Paris: L'Harmattan.

Little, Kenneth

- 1957 "The Role of Voluntary Associations in West African Urbanization." *American Anthropology* 59: 579-596.

Mainet, Guy

- 1985 *Douala: croissance et servitudes*. Paris: L'Harmattan.

Malinowski, Bronislaw

- 1938 "Introductory Essay on the Anthropology of Changing African Cultures." In L. Mair (ed.) *Methods of Study of Culture Contact in Africa* (International African Institute Memorandum XV). Oxford: Oxford University Press, vii-xxxviii.

Mbuagbaw, Tambi Eyongetah, Robert Brain and Robin Palmer

- 1990 *A history of the Cameroon*. Essex: Longman Group.

Mbuyinga, Elenga

- 1989 *Tribalisme et problème national en Afrique noire: le cas du Kamerun*. Paris: Harmattan.

Mitchell, J. C.

- 1966 "Theoretical Orientation in African Urban Studies." In M. Banton (ed.), *The Social Anthropology of Complex Societies, ASA 4*, London: Tavistock publications, pp.37-68.

Mouafo, Dieudonné

- 1994 "Crise et célébrations sociales: les funérailles en pays bamiléké." In G.Courade (ed.), *Le village camerounais à l'heure de l'ajustement*. Paris: Karthala, pp. 236-245.

Njiké-Bergeret, Claude

- 1997 *Ma passion africaine*. Paris: Jean-Claude Lattés.

Nyamnjoh, Francis B.

- 1999 "Cameroon: a Country United by Ethnic Ambition and Difference (Commentary)." *African Affairs* 98: 101-118.

Nyamnjoh, Francis B. and Michael Rowlands

- 1998 "Elite Associations and the Politics of Belonging in Cameroon." *Africa* 68(3): 320-337.

Nzémen, Moïse

- 1988 *Theorie de la pratique des tontines au Cameroun*. Yaoundé: SOPECAM.
1993 *Tontines et développement ou le défi financier de l'Afrique*. Yaoundé: Presses universitaires du Cameroun.

Obudho, R. A.

- 2001 "Urbanization and Urban Life in Africa: Creativity of Order and Disorder." In E. Kurimoto (ed.), *Rewriting Africa: Toward Renaissance or Collapse?* JCAS Symposium Series 14, Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, pp.89-111.

O'Connor, Anthony

- 1983 *The African City*. London: Hutchinson & Co..

Parry, Jonathan and Maurice Bloch

- 1989 "Introduction: Money and the Morality of Exchange." In J. Parry and M. Bloch (eds), *Money and the Morality of Exchange*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-32.

Pradelles de Latour, Charles-Henry

- 1981 "Quelques données historiques sur la chefferie bangwa (Bamiléké orientaux)." In C. Tardits (ed.), *Contribution de la recherche ethnologique à l'histoire des civilisations du Cameroun / The Contribution of Ethnological Research to the History of Cameroon Cultures. volume 2*. Paris : Centre national de la recherche scientifique, pp.393-400.
1991 *Ethnopsychanalyse en pays Bamiléké*. Paris: E.P.E.L.

Rowlands, Michael and Jean-Pierre Warnier

- 1988 "Sorcery, Power and the Modern State in Cameroon." *Man* (n.s.) 23: 118-132.

Sethuraman, S. V.

- 1976 "The Urban Informal Sector in Africa: Concept, Measurement, and Policy." *International Labour Review*, 114(1): 69-81.

Slageren, Jaap van

- 1972 *Les origines de l'église évangélique du Cameroun: mission européennes et christianisme autochtone*. Leiden: E.J.Brill.

Soen, Dan and Patrice Comarmond

- 1971 "Saving Associations Among the Bamileke: Traditional and Modern Co-operation in South West-Cameroon." *Journal de la société des africanistes* Tome XLI-Fascicule 2: 189-201.

Southall, Aidan

- 1961 "Introductory Summary." In A. Southall (ed.), *Social Change in Modern Africa*, London: Oxford University Press, pp. 1-66.

Tabapssi, Timothée F.

- 1999 *Le modèle migratoire bamiléké (Cameroun) et sa crise actuelle: perspectives économique et culturelle*. Leiden: Onderzoekschool CNWS, Universiteit Leiden.

Tardits, Claude

- 1960 *Les Bamiléké de l'ouest Cameroun*. Paris: Berger-Levrault.

Voorhoeve, Jan

- 1964 "Notes sur les noms d'éloges bamiléké." *Cahiers d'études africaines* 15(4): 452-455.

Warnier, Jean-Pierre

- 1985 *Echanges, développement et hiérarchies dans le Bamenda précolonial (Cameroun)*. Stuttgart: Steiner.
- 1993 *L'esprit d'entreprise au Cameroun*. Paris: Karthala.
- 1994 "La bigarrure des patrons camerounais." In J.-F. Bayart (ed.), *La réinvention du capitalisme*, Paris: Karthala, pp. 175-202.
- 1995a "Trois générations d'entrepreneurs Bamiléké (Cameroun)." In S. Ellis and Y.-A. Fauré (eds), *Entreprises et entrepreneurs africains*, Paris: Karthala and ORSTOM, pp.63-70.
- 1995b "Around a Plantation: the Ethnography of Business in Cameroon." In D. Miller (ed.), *Worlds Apart: Modernity through the Prism of the Local*, London & New York: Routledge, pp.91-109.

Werbner, Richard

- 1990 "South-Central Africa: the Manchester School and After." In R. Fardon (ed.), *Localizing Strategies*, Edinburgh and Washington: Scottish Academic Press & Smithsonian Institution Press, pp.152-181.

Wilhelm, H.

- 1981 "Rapport de synthèse: le commerce précolonial de l'ouest (Plateau bemiléké-grassfield, région bamoun et bafia)." In C. Tardits (ed.), *Contribution de la recherche ethnologique à l'histoire des civilisations du Cameroun / The Contribution of Ethnological Research to the History of Cameroon Cultures. volume 2*. Paris : Centre national de la recherche scientifique, pp.485-501.

和文

ブルデュー, ピエール

- 1993 『資本主義のハビトゥス: アルジェリアの矛盾』 原山哲訳 藤原書店。

端 信行

- 1993 「カメルーン高地農民の経済生活: その変容のメカニズム」 『国立民族学博物館研究報告』 18巻1号、15-45頁。

日野 舜也

- 1983 「アフリカの都市と近代化」 松本重治監修 米山俊直・伊谷純一郎編 『アフリカハンドブック』 講談社 180-197頁。

今村 仁司

- 1994 『貨幣とは何だろうか』 ちくま新書001 筑摩書房。

栗本 英世

- 1996 『民族紛争を生きる人びと: 現代アフリカの国家とマイノリティ』 世界思想社。

マリノフスキー, プロニスロウ

- 1963 『文化変化の動態: アフリカにおける人種関係の研究』 藤井正雄訳 理想社。

松田 素二

- 1985 「アフリカ都市における伝統の非連続性について」 『人文研究』37巻、第2分冊、79-112頁。
- 1996 『都市を飼い慣らす：アフリカの都市人類学』 河出書房新社。
- ミッチェル, J. C. (編)
- 1983 『社会的ネットワーク：アフリカにおける都市の人類学』 三雲正博・福島清紀・進本真文訳 国文社。
- 野元 美佐
- 1996 「カメルーンの頼母子講組織：ヤウンデにおけるバミレケの場合」 『アジア・アフリカ言語文化研究』51号、105-130頁。
- 小田 英郎
- 1986 『アフリカ現代史Ⅲ 中部アフリカ』 山川出版社。
- 小田 亮
- 1996 「ポストモダン人類学の代価：ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」 『国立民族学博物館研究報告』21巻4号、807-875頁。
- 小川 了
- 1998 『可能性としての国家誌：現代アフリカ国家の人と宗教』 世界思想社。
- 清水 昭俊
- 1999 「忘却のかなたのマリノフスキー：1930年代における文化接触研究」 『国立民族学博物館研究報告』23巻3号、543-634頁。
- ジンメル, ゲオルグ
- 1999 『貨幣の哲学（新訳版）』 居安正訳 白水社。
- 高橋泰蔵・増田四郎（編）
- 1984 『体系経済学辞典（第6版）』 東洋経済新報社。
- 富川 盛道
- 1980 「バメンダのオク文化協会の活動と規約：西カメルーン都市の社会調査ノート」 富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開：地域・都市・言語』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 43-85頁。
- 内堀 基光・山下 晋司
- 1986 『死の人類学』 弘文堂。
- 和崎 春日

1984 「バムン族の経済互助結社：カメルーン・西部地域にみられる頼母子講・ブオムシャ＝ヴァー」 『アフリカ研究』24号、22-42頁。

1987a 「現代都市と都市人類学の展開：地域人類学とエスニシティの視覚」 吉原直樹・藤田弘夫編著『都市：社会学と人類学からの接近』 ミネルヴァ書房 -頁。

1987b 「アフリカの王権とイスラム都市」 和田正平編『アフリカ民族学的研究』 同朋舎 147-263頁。

ゾンバルト、ヴェルナー

1990 『ブルジョア：近代経済人の精神史』 金森誠也訳 中央公論社。

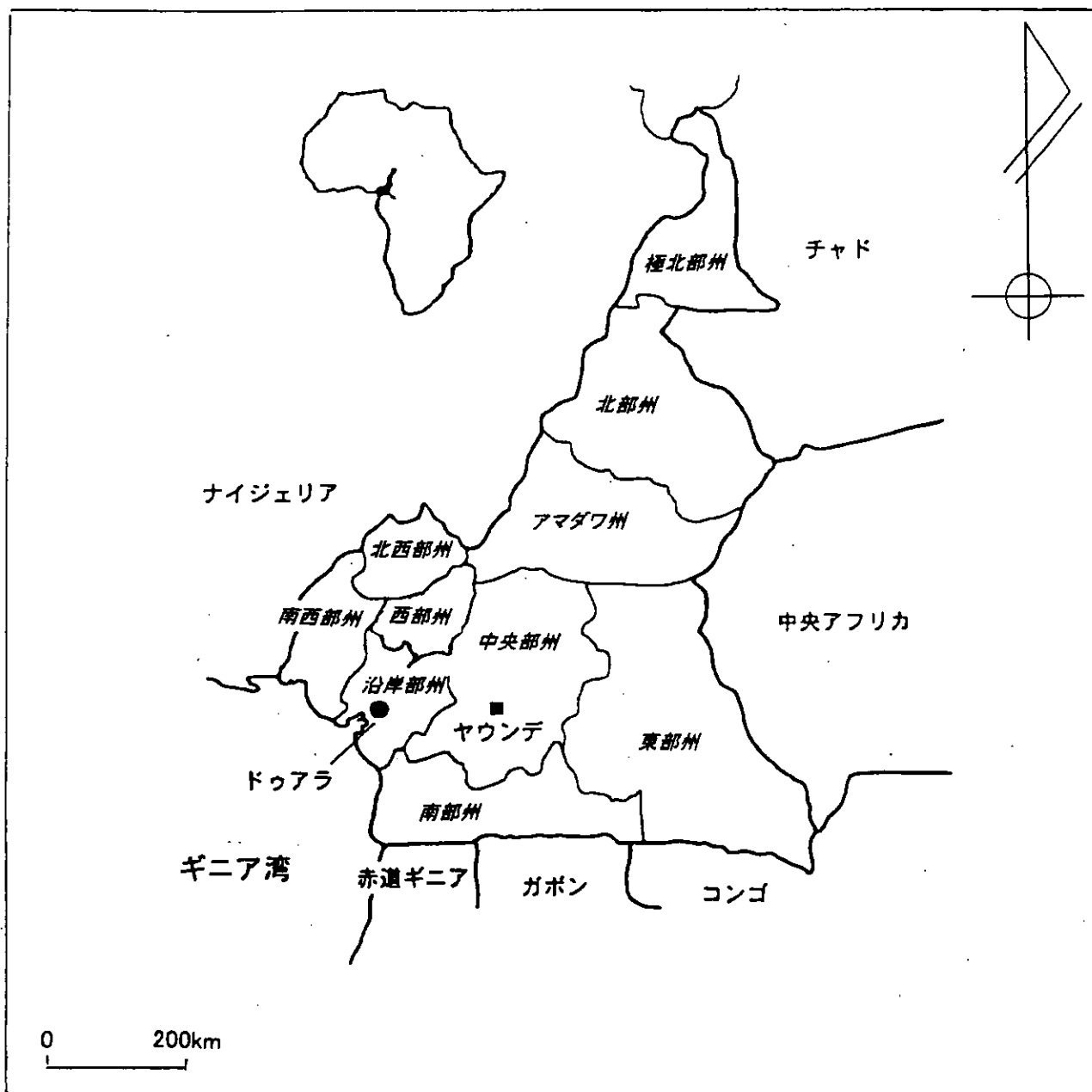


図 1 カメルーン共和国

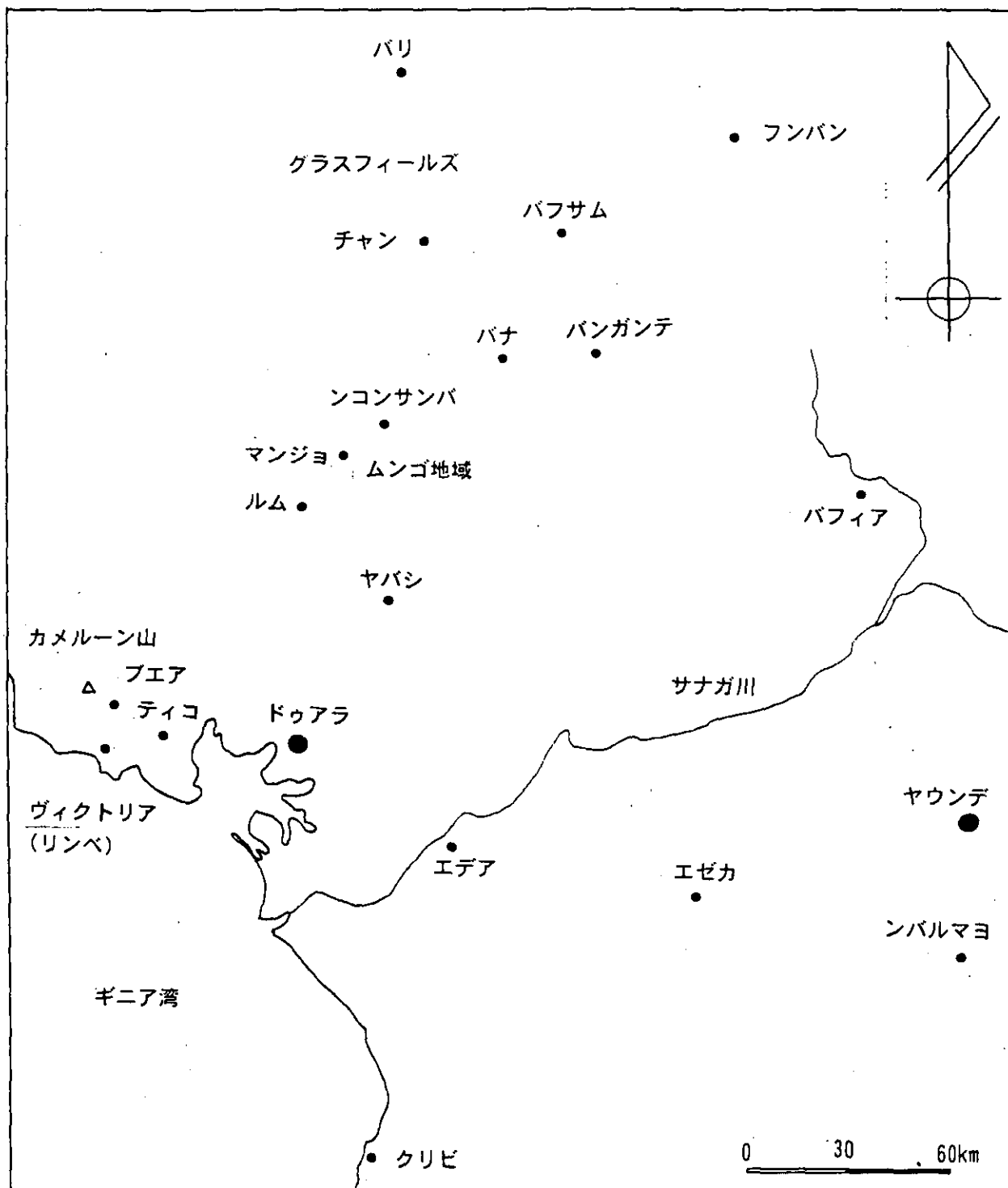
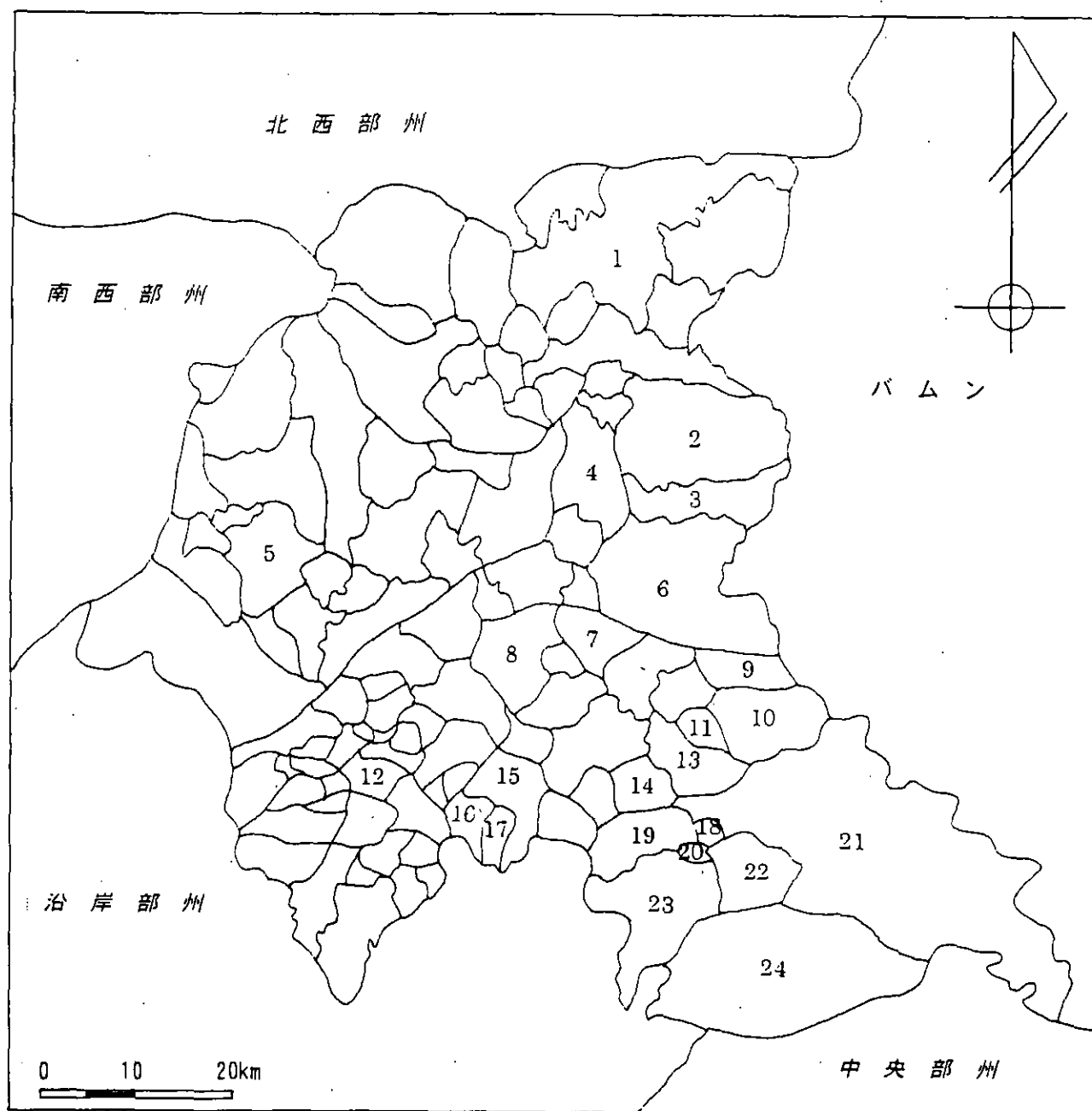


図 2 カメルーン沿岸部と周辺地域



- | | | |
|--------------|--------------|------------|
| 1. バガム | 11. バンドルフアム | 21. バンガンテ |
| 2. バレン | 12. バファン | 22. バングラップ |
| 3. バフサム | 13. バングワ | 23. バズー |
| 4. バムンゲン | 14. バメナ | 24. バッサンバ |
| 5. チャン | 15. バナ | |
| 6. バンジュン | 16. バカッサ | |
| 7. バハム | 17. バンドゥムカッサ | |
| 8. バチエ | 18. バオック | |
| 9. バンガンフォンジ | 19. バレング | |
| 10. バンガンフォカム | 20. バコン | |

図 3 バミレケ・ランドの首長制社会

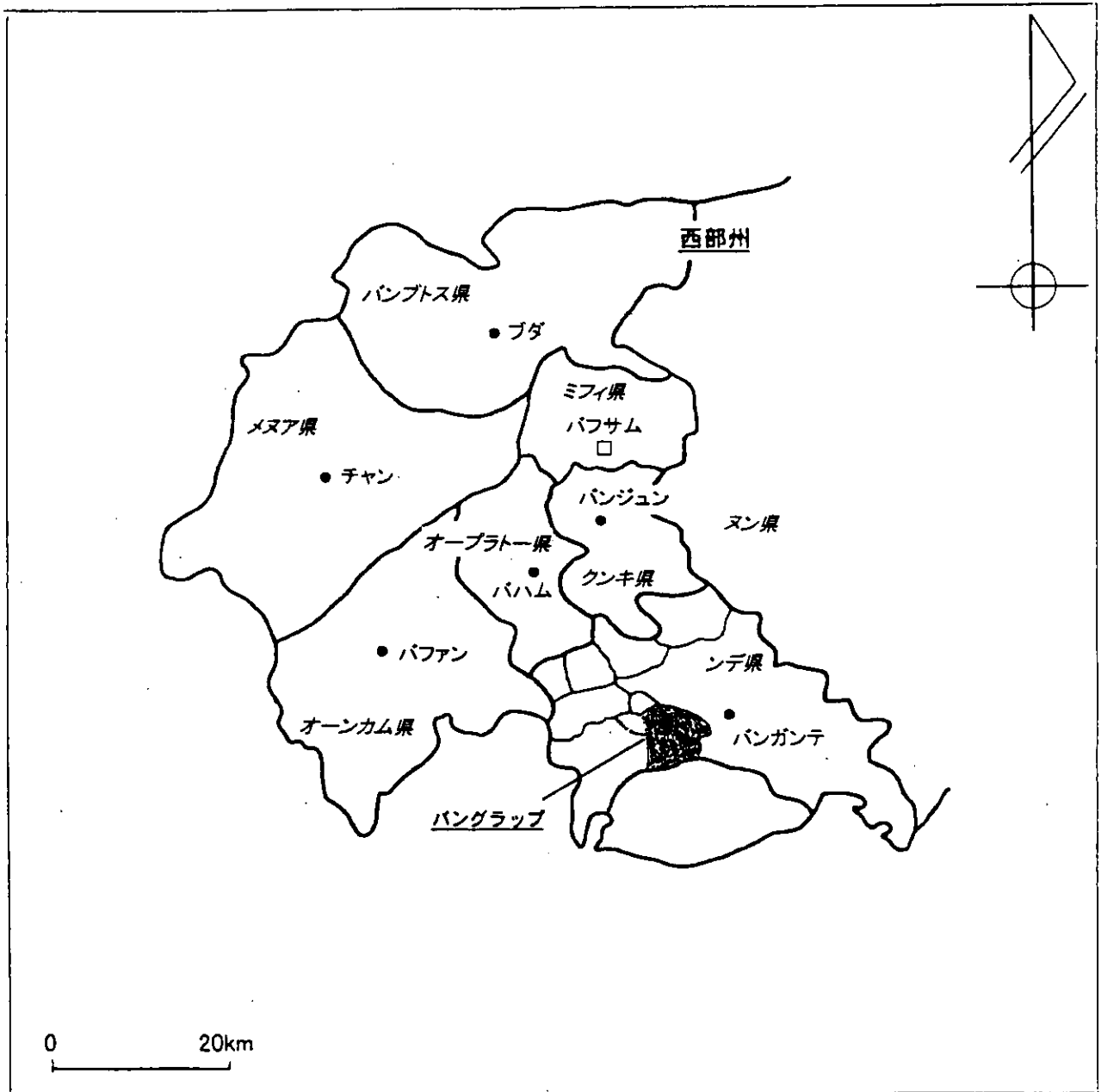
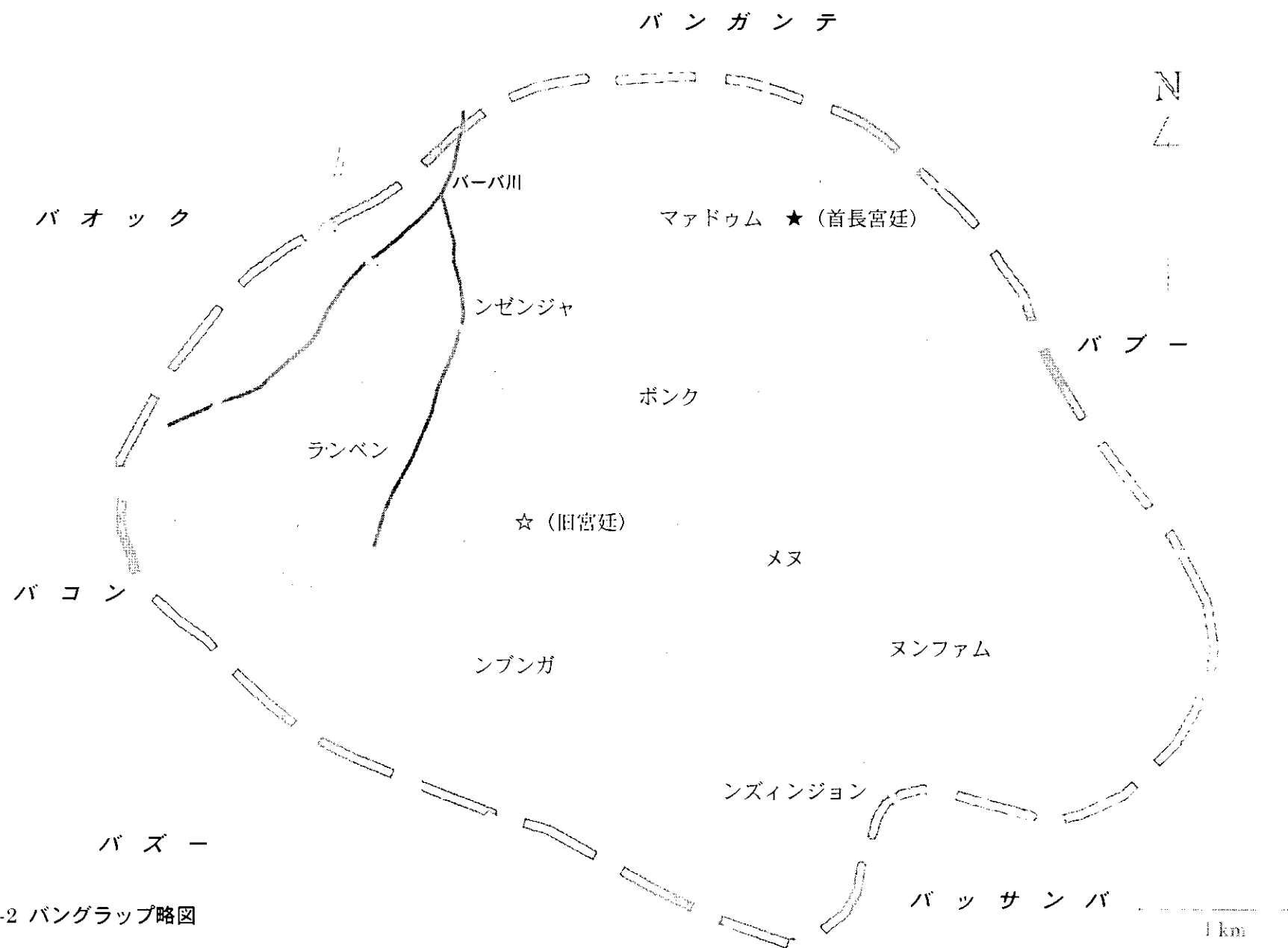
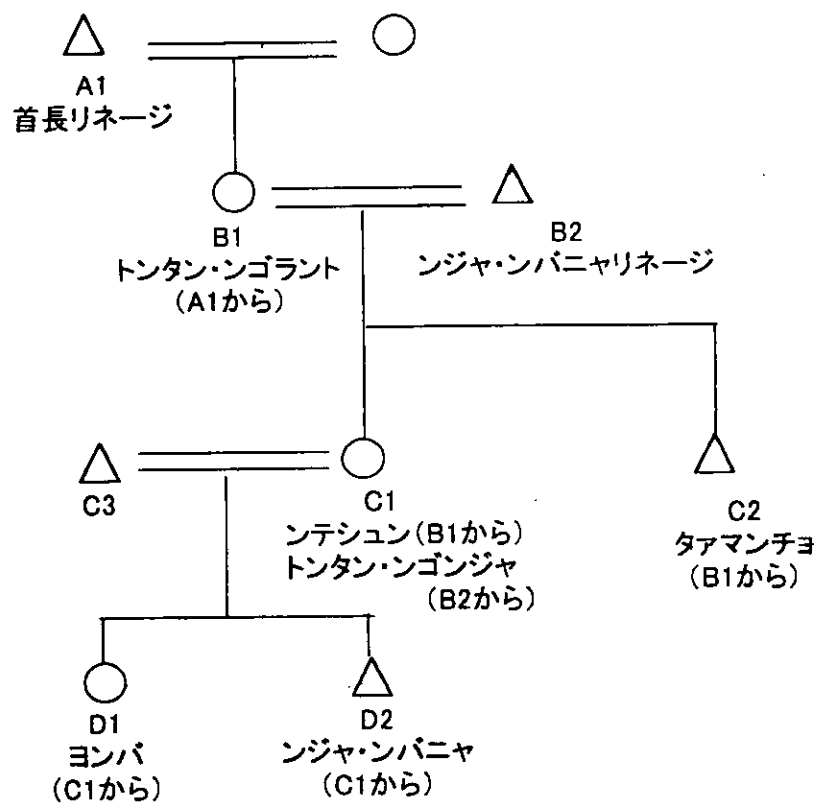


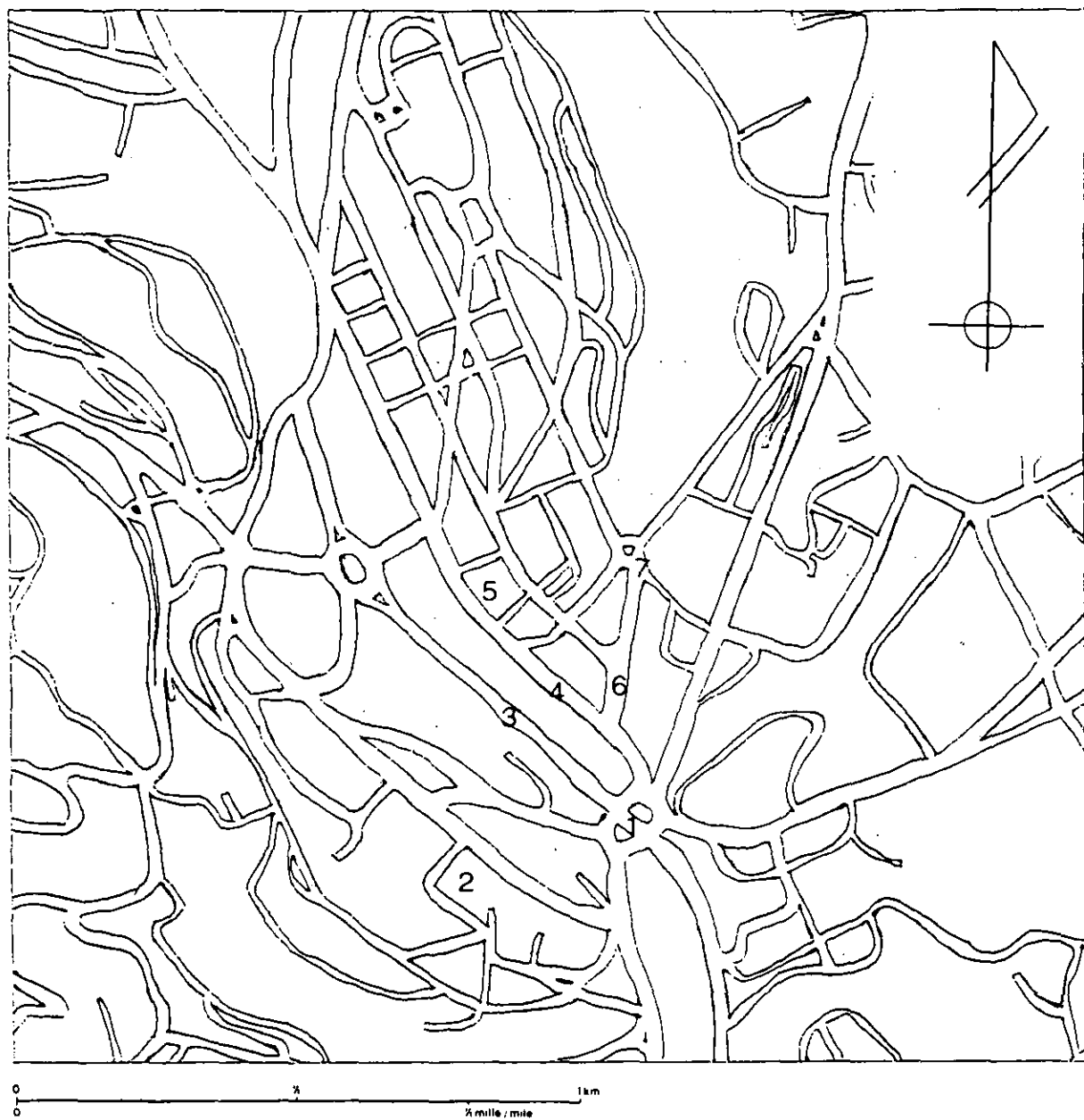
図 1-1 バミレケ・ランドの県とバングラップの位置



図I-2 バングラップ略図

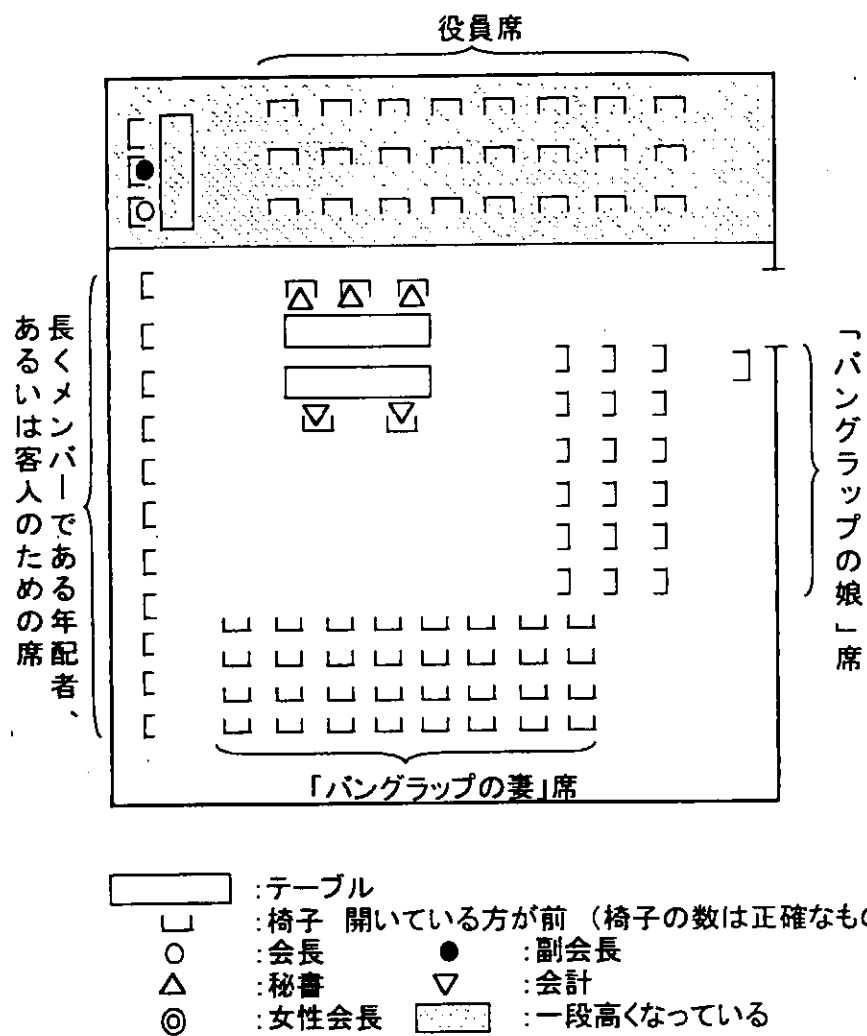


図I-3 尊称のしくみ

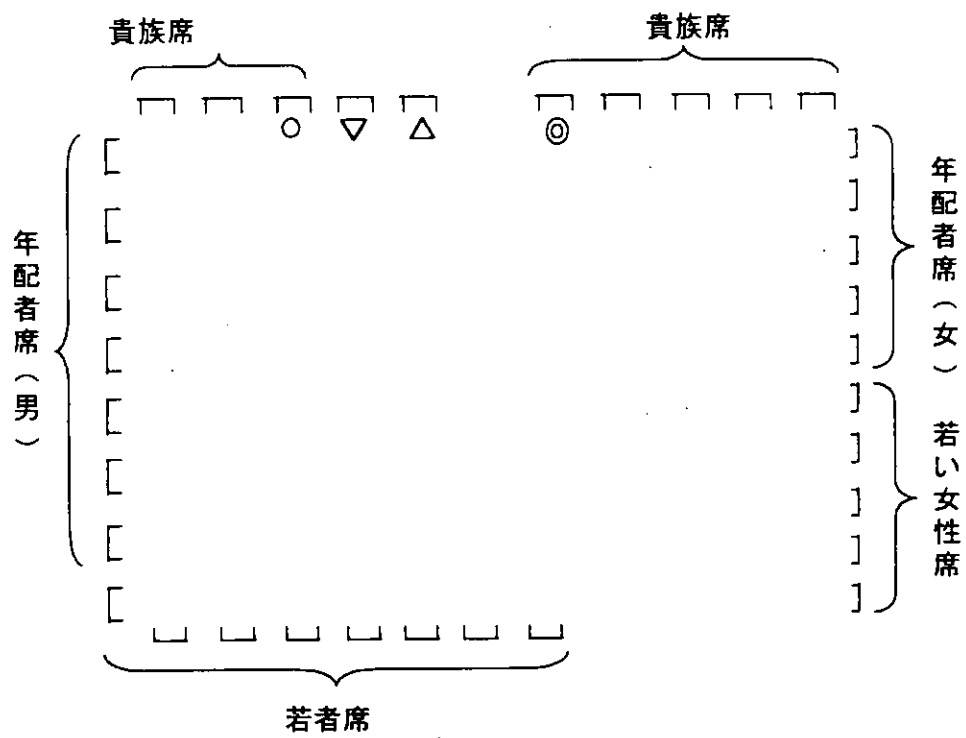


- | | |
|--------------|------------|
| 1. アヒジョ広場 | 5. 中央市場 |
| 2. 官庁街 | 6. ケネディー通り |
| 3. 5月20日大通り | 7. ケネディー広場 |
| 4. アヒジョ大統領通り | |

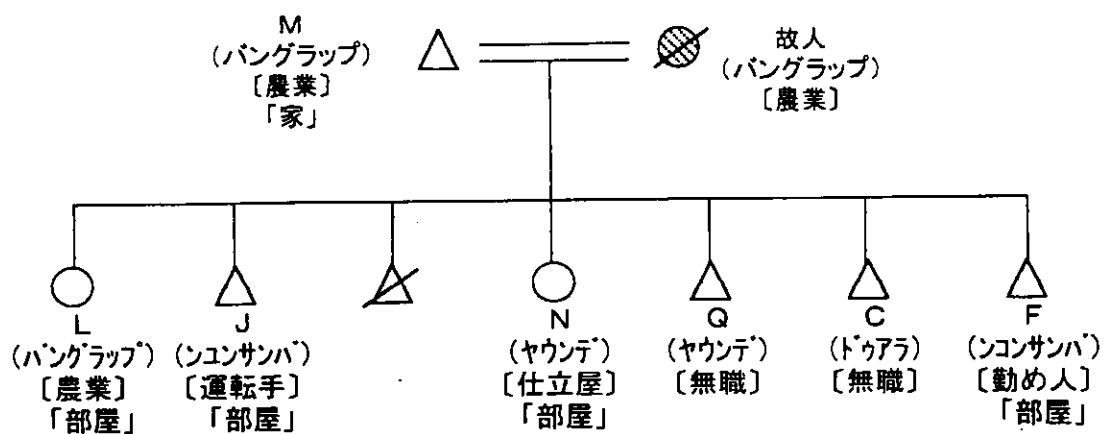
図 II-1 ヤウンデ中心部



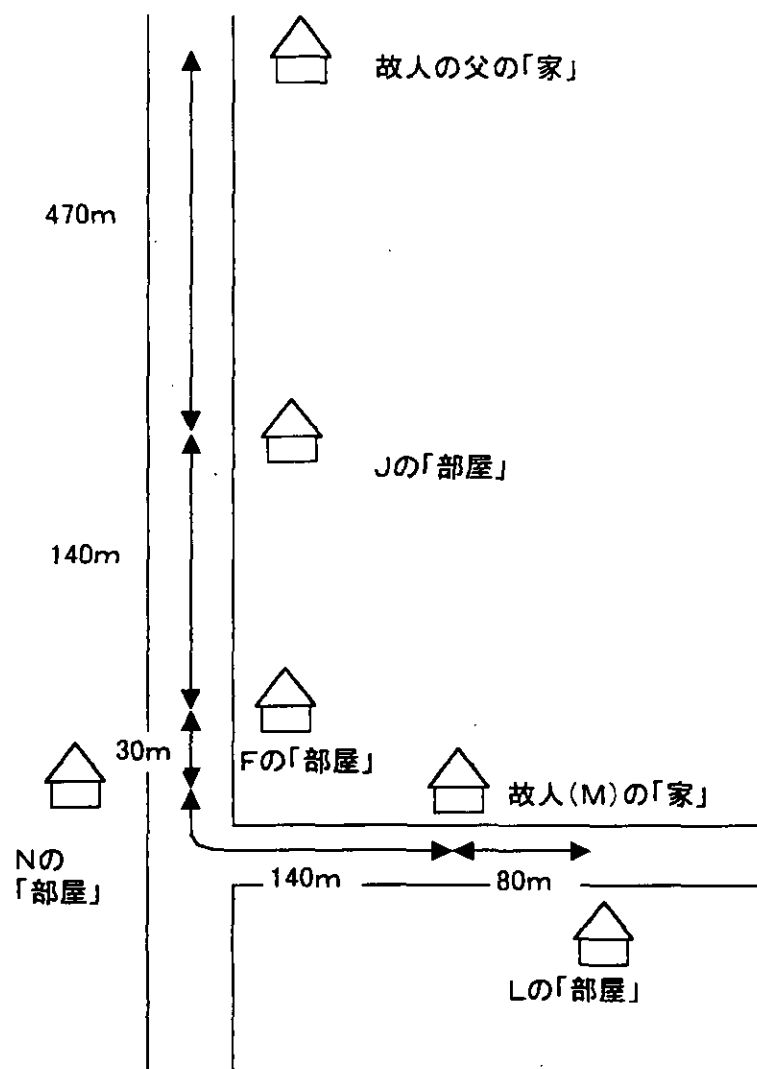
図IV-1: ケナーダ集会の座席配置 (場所: バングラップ集会所1階)



図IV-2: ンターラ集会の座席配置 (場所:ランベン地区長の敷地、屋外)



図V-1 死者祭宴を主催した主な親族



図V-2 死者祭宴の「家」と「部屋」の配置

表 1-1 リネージと尊称一覧

リネージ長	地区名	母の尊称	子の尊称 (男子)	子の尊称 (女子)
ンズアミ (nzwe'mi) * 首長	マアドウム (madume)	トントアン・ンゴラント (tonntane ngòlanto) : 欲張りな娘	タアマンチョ (tâmà'ncò) : 戦争をなす父、男性	ンテシュン (nteshune) : 友情をつくる
ンジャ・ンバニヤ (njâ mbă'nyà)	ンゼンジャ (nzēnja)	トントアン・ンゴンジャ (tonntane ngōnja) : パラフォンの娘	ンジャ・ンバニヤ (njâmbă'nyà) : リネージ長の名前	ヨンバ (yo'mbà') : 壁を塗る
ンジャ・ンガア (njâ ngaha)	ランベン (lâ'mfen)	トントアン・ンゴラム (tonntane ngōlam) : 鍛冶の娘	タアンコンガン (tânkōngane) : 銃弾を作る父、男性	ンシュンバ (nshûnmbà') : 友情を返す
ンブン・ロンズ (mfèn lǒ'nzè) ンブン・シャブ (mfèn shabu)	ンズインジョン (nzwīnjon)	ンゴンテン (ngōntene) : ヤシの娘	ニャンズ (nya'nzè) : 道をゆっくりと歩く	ンジャ・シュナ (njâ shune) : リネージ長の娘の名前
ンブン・ンゾ (mfèn nsò)	ボンク (bōnnkè)	トントアン・ンゴンサジュ (tonntane ngōnsă'ju) : サジュ (という名の水路) の娘	タアテンク (tâtēnkù) : リネージ長の別名	マアホンジャ (mâgho'njà) : ホンジャ (人名) の母
ンブン・タアンコ (mfèn tǎnko)	ヌンファム (nūmfame)	トントアン・ンゴンロトンシ (tonntane ngōnlotōnsi) : 地下水路の娘	テシュンジン (tēcū'nzin) : シュンジンという双子の父	マアチャンチャア (māncamca'α) : 地面に伺いをたてる母、女性
ンブン・ゴンジ (mfèn ghonzi)	メヌ (mēnun)	トントアン・ンゴンブォ (tonntane ngōnmbwō) : カバの歯の娘	タアバシュ (tâbâ'cù') : バシュ (人名) の父	マアンバフオゴ (mām̄ba'foge) : (夫を同じくする) 妻たちの間でのやりとりの母、女性
ンジャ・バメン (njâ bāmēn)	ンブンガ (mfēngà)	ンゴコップ (ngo'kob) : シロアリのいる所	ンカンチョ (nkā'ncò) : 戦争を知らせる	マアバンカマ (mābānkame) : バンカマの母

表 II-1 ヤウンデの人口増加

年	人口(人)
1926	5,865
1933	6,500
1939	9,080
1945	17,311
1952	31,783
1953	36,786
1957	58,099
1962	89,969
1964	109,185
1969	165,810
1976	313,706
1987	649,252
1992*	903,649
1997*	1,137,000
1998*	1,293,000

* は推定

(出所: 1926～1976 年までは Franqueville 1984、1987～1998 年までは Direction national du deuxième recensement général de la population et de l'habitat 1992、Direction de la statistique et de la comptabilité nationale 1999 より)

表 II-2 a ドゥアラ人口におけるエスニック・グループの割合(1976 年)

エスニック・グループ	割合(%)
バミレケ	47.0
バツサ	20.7
ドゥアラ	10.5
ベティ(エウオンド・エトンなど)	9.5
その他	12.3

(Dongmo 1981 vol.2: 25 より筆者作成)

表 II-2 b ヤウンデ人口におけるエスニック・グループの割合(1976 年)

エスニック・グループ	割合(%)
バミレケ	27.8
エウオンド(ベティ)	25.3
エトン(ベティ)	10.0
バツサ	9.4
その他	27.5

(Dongmo 1981 vol.2: 73 より筆者作成)

表 III-1 各種事業主におけるバミレケの割合

各種事業	バミレケの割合(%)
輸入業者	58
市場の小売店主(ドウアラ)	87
市場の小売店主(ンコンサンバ)	94
カカオ買い付け人	75
カメルーン工業製品卸売商(ドウアラ)	47
タクシー総保有量(ヤウンデ・ドウアラ)	80
都市間の旅客バス総保有量	50
ホテル経営(ヤウンデ・ドウアラ)	75
露天商(ヤウンデ)	55
輸送業	44
木工産業	58

(Dongmo 1981 vol.2: 143-245 / Warnier 1993: 19-20 より筆者作成)

表 III-2 ケネディー通り商店主のエスニック・グループ別店舗数(2000 年)

エスニック・グループ	店舗数	店舗の内訳
バミレケ	21	服飾店:6店舗 電気製品店:3店舗 ゲームセンター、バー:各2店舗 眼鏡店、銀行、写真店、結婚用品店、テレブティック、スーパーマーケット、コンピューター用品店、レストラン:各1店舗
韓国	6	写真店:5店舗 スーパーマーケット:1店舗
フランス	3.5*	銀行、タイヤ販売店、レストラン、馬券売場:各1店舗
ベティ	3	写真店、コピーサービス店、服飾店:各1店舗
ギリシア	2	電気製品店、釣具店:各1店舗
ドゥアラ	2	薬局、服飾店:各1店舗
ハウサ	1.5*	クリーニング店、レストラン:各1店舗
カメルーン(国営系)	2	服飾店、ギャラリー:各1店舗
ドイツ	1	文化センター
バッサ	1	送金業
カメルーン英語圏地域	1	写真店
台湾	1	レストラン
空き店舗	6	
不明	5	旅行会社:2店舗 服飾店、テレブティック、洗車場:各1店舗
合計	56	56 店舗

* 1店舗がハウサとフランス人が共同出資
(筆者調べ)

表 V-1 ランベン地区における所有者の居住地別の家屋軒数(1998 年)

所有者の居住地	軒数(%)
バングラupp村	80(61)
都市	48(36): うち空き家 31
不明	4(3)
合計	132(100)

表 V-2 ランベン地区における外壁の種類と所有者別の家屋軒数(1998 年)

壁の種類	村居住者所有軒数	都市居住者所有軒数 (うち貸している家の軒数)
日干し煉瓦	70	27(12)
日干し煉瓦+セメント	10	14(5)
コンクリート・ブロック	0	7(0)
合計(不明の4軒は除く)	80	48(17)

表 V-3 貸し家の所有者と借り主の親族関係

所有者の孫	2 軒
所有者の甥	2 軒
所有者のイトコ	1 軒
所有者の妹	1 軒

表 V-4 ンデ県の 13 人の首長のプロフィール

首長制社会名	首長就任年	就任時年齢	就任決定時の居住地	就任決定時の職業
バンガンテ	1987	30代半ば	ヤウンデ	農業技師
バンガンフォカム	1988	30代半ば	バズー(西部州)	バズー郡長
バコン	1974	30代前半	ンコンサンバ	修理工
バングラップ	1931	13歳頃	リンベ	プランテーション労働者
バメナ	1995	19歳	ヤウンデ	修理工見習い
バレング	1987	10代後半	バンガンテ	高校生
バオック	1984	30歳前後	クセリ(極北部州)	土木技師
バズー	1984	30代半ば	ヤウンデ	商人・裁判所書記
バッシング	1982	17歳	ドゥアラ	木工職人
バグヌン	1990	30代半ば	ンガウन्दル(アダマワ州)	憲兵
バングワ	1977	20代前半	ンコンサンバ	商人
バンドウंगा	1999	42歳	ドゥアラ	商人(企業経営)
バマハ	1939	17歳頃	バマハ	農民

Seance du 20. juan 1998	28. Ketchami	Regine II	500
	Mam. Foulle		

1- Yanga Cellette I	500
2- Ketchami Regine I	500
3- Dagu Harmonie Odette I	500
4- Hounsa Rose	500
5- Wandji Elise	500
6- Kwimi Therese I	500
7- Kwimi Therese II	500
8- Hjihe Esther I	500
9- Hjihe Esther II	500
10- Dampien Danelte	500
11- Tagui Pandya benoit	500
12- Hounken Claudine	500
13- Nana Florence I	500
14- Nana Florence II	500
15- Tankoua Fidèle	500
16- Tonguia Anne	500
17- Magni Fondjam Lydie	500
18- Fondja Joseph	500
19- Nana Tapita I	500
20- Magni Tchoumatat Pauline	500
21- Djamou Berlin	500
22- Wandji Madeleine	500
23- Tonka Jacques	500
24- Ketcha Fambia I	500
25- Ketcha Fambia II	500
26- Sob Pento Jean I	500
27- Sob Pento Jean II	500

28	Kelcham Regine II	500
29	Magnu Foulha Magna Colette I	530
30	Yungu Colette II	500
31	Linu Fride	500
32	Leundja Auge	500
33	Mafum Hjanugua Janette	500
34	Tchapchet Rose	500
35		
36	Magnu Hornu Colette II	500
37	Namolo Nina	500
38	Hgahane Cecile	500
39	Hgatcha Jaqueline I	500
40	Hgatcha Jaqueline II	500
41	Nana Tapita II	500
42	Mafum Tchafa	500
43	Sah Tchafa	500

Using milk frames	2000
LFA	500
	2500

Be'neficiare;

JPN MN 851498

du 19 Fev 69

Retenue: Assurance 100
bourse 80
1050

Famille Balafout de yde
le 10 juin 1948

Carte d'entr-aide

FAMILLE BALAFEN

YAOUNDE

Nom: [REDACTED]

Prénoms: [REDACTED]

No _____

CARTE DE MEMBRE

1998/20/00

Montant 1.000

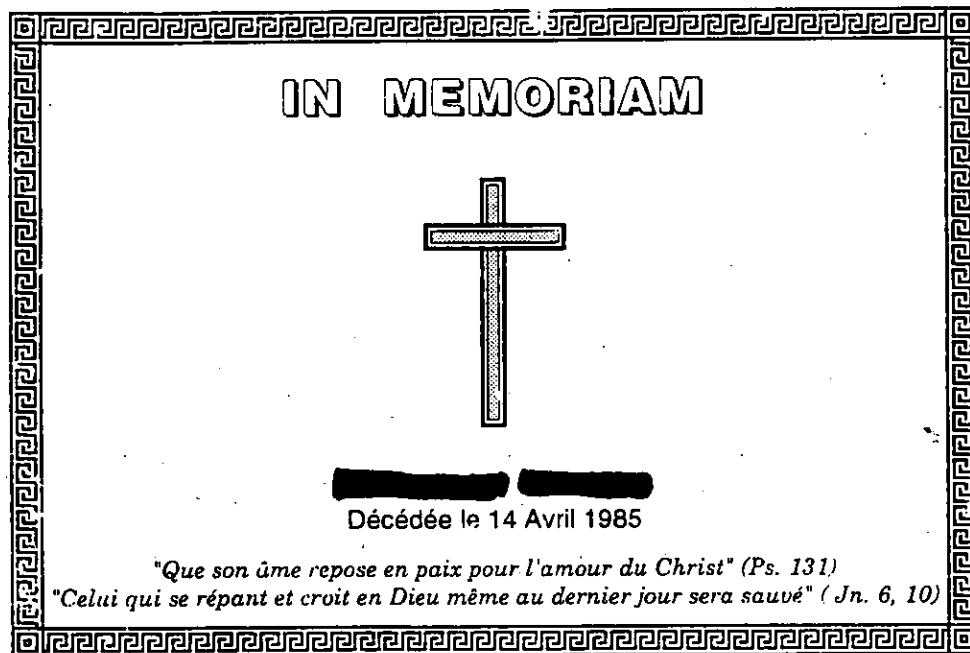
Visa

MBAKI MARCEL

19	Montant	Visa
19	Montant	Visa
19	Montant	Visa
19	Montant	Visa

N.B. Cette Carte n'est valable que si l'année en cours est visée par le Président

資料 IV-2 助け合い(保険)カードのコピー(両面)



資料 V-1 死者祭宴の招待状(表紙)



写真 1-1 村の家屋と畑



写真 1-2 宮廷前広場



写真 I-3 宮廷の柵



写真 I-4 首長の描いた壁画



写真 1-5 首長の描いた壁画



写真 1-6 首長への挨拶



写真 Ⅰ-7 パラソルを持つ臣下と首長

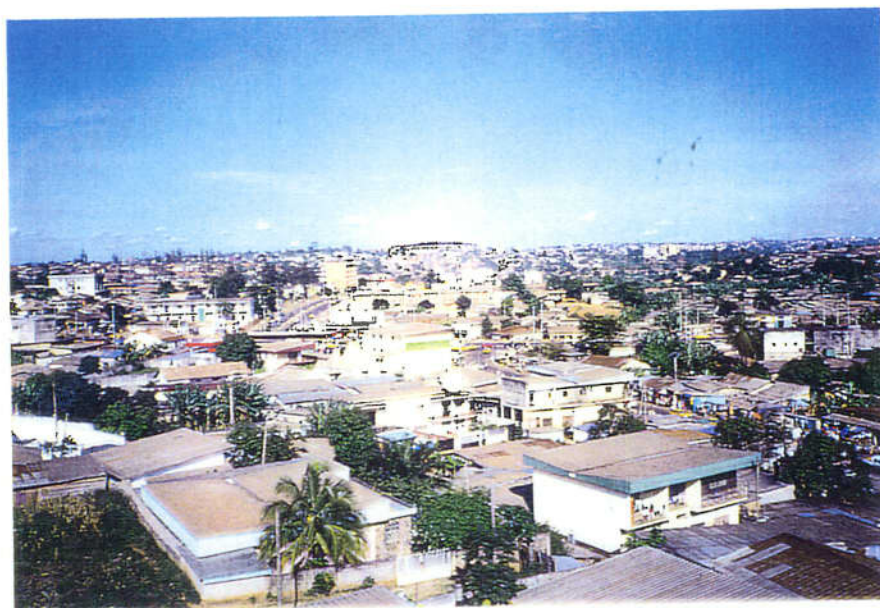


写真 Ⅱ-1 ヤウンデの風景



写真 III-1 タバコ行商をする子ども

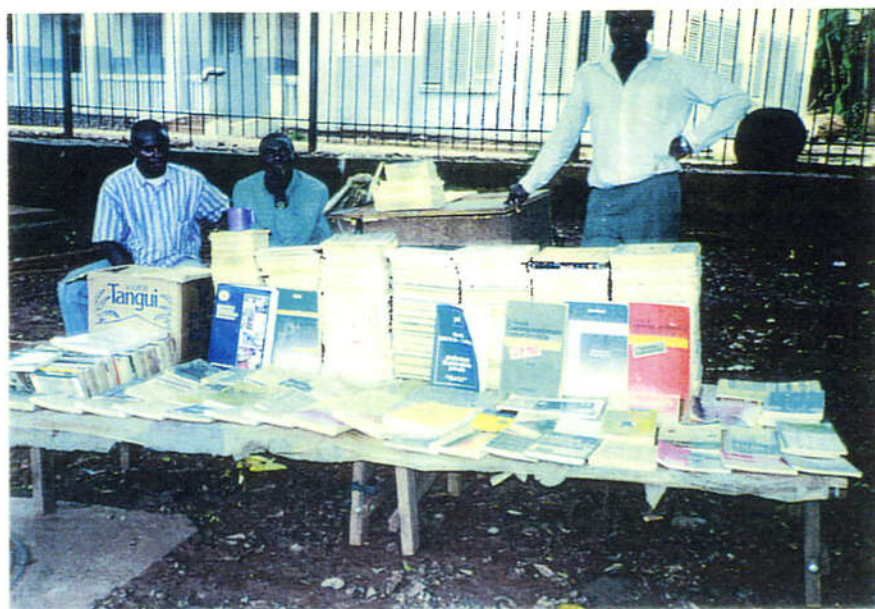


写真 III-2 古本の露店



写真 IV-1 バングラッブ集会所



写真 IV-2 ケナーダ集会で演説するマンジョのメンバー



写真 IV-3 踊るケナーダのメンバー



写真 IV-4 輪になって踊るケナーダのメンバー



写真 IV-5 紙幣を貼りつける



写真 V-1 踊るンターラのメンバー



写真 V-2 塀が張り巡らされた家



写真 V-3 バミレケ・ランドの豪邸



写真 V-4 バミレケ・ランドの豪邸



写真 V-5 バミレケ・ランドの豪邸